

# 奇譚クラブ

新しい風俗文庫誌

5月号



5 - MAY • 1967

奇譚クラブ

昭和四十二年五月号

定価 三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenmeisyō

Osaka Japan



5月号 ¥ 350



緊縛美態代表作品一二〇葉

アルバム△美しき縛しめ▽第十一集完成！

一部一〇〇〇円（千共） 略号「美11」

○美しき縛しめ第十一集「縛られた美女」

212019181716151413121109 8 7 6 5 4 3 2 1

上神高首轉布革全引麗股拷猿後口展黒威初な立  
半妙々校ら團罰裸き身間問や手し示縄大々々が樹に  
身なとめれにの猪回し縛柱つ縛づはなしし目ほり  
るる背のゆ無露宙さ痛りをわでれ素乳きし目ほり  
五縛負裸く理に吊れし入上喘縛縛をを縛緊は縛り  
つしつ身過に縛り入し入上喘縛縛をを縛緊は縛り  
にめたを程路足に女き浴げ身し人い責美男を晒  
くの後きををが首て下般ボるさ麗た形るめ体を晒  
びる手ら惜せを吊悶れ間し奴れわ双のどる燃誘す  
る身縛すくるりゆイ縛ズ縛るし丘美る手ゆうず

木長水山竹須伊川前花川伊四関愛津杉桜四加梨  
村野本路野川吹端本坂端吹方谷川川井方茂田

424140393837363534333231302928272625242322

可水高猿美投黒遊背全両双両亀荒木柔柔豊汚  
懐に々々しげ縄園後裸手丘手甲縄のか肌満惚  
な濡とつきだに地での吊に吊縛が閉きをなを  
を目れ拳わ肌し身に両刺り喰り肌美茂美く緊愛女  
つたつにてをて手背のい片の肌れ肌肌び縛け  
き後たと映縛縛緊首女裸入足緊を隔に切美て前  
で手後まえらだ縛叉股身る拳縛塗の緊を体観手  
に見縛手どうるねわ縛又間も股げ感烈緊が依を縛  
る麻縛う変たるれ縛縛だ開縛の縛縛る縛締す  
女縄り廻縄脚女るりりり縄り美り肌紐りるる美

花梨田田田竹加蘇須山梨川桜梨梨益東桜福  
本花中津原野茂川原花端些谷花田田浦井川

8180797877767574737271706968 6766656463 6261605958 5756555453 5251504948 4746454443

[illegible]

1991011011711511511411711711118109108107106105104103102101100999897969594939291908988878685848382

髻部もち上げて、  
 おりきし脚を授け出す。  
 美らわぬシユミナリズ。  
 破られた裸身を縮める。  
 樹間に全裸身を縮める。  
 逆エビでいたぶる。  
 裸身の肌を黒くする。  
 片足に反る足指。  
 拷問に責められた末。  
 恋人との緊縛のプレイ。  
 三人の緊縛の影風景。  
 木馬奇蹟。うめく刺青山原雲井。  
 カニ舞。這いまわる。  
 陽かな。裸身を誇る。  
 後手前。注ぐ屋上にて。  
 洗器のお桶を全裸女体。  
 赤の腰飾をゆるがむ。  
 Sマニアは男を悩め。  
 セーラー服で縛られる。  
 泥まみれ。情。  
 全裸雨。戸外縛れる女体。  
 猪手つさる。吊るる。  
 女学生に親身される美貌。  
 自越中。裸身スクラ。  
 設けられ白探身縛り。  
 初々しき女体燃ゆる。  
 強烈な探身表ねる。  
 エビ縛りに苦悶の裸身。  
 アクロバティックの洗礼。  
 始めて受けた縄の洗礼。  
 絶妙の悲愁を漂す暴責。  
 春丘花本田原野関谷大塚川端梨川須川梨花津川春丘玉田文井新井松井美木松浦東浦村田梨川桜川館海

アルバム「美しき縛しめ」第十集完成

一部 1000円 (下共) 略号△美10▽

特アート紙ケラビア印刷、女体緊縛百ポーズ写真集  
 「出演モデル」 ○一宮百合子○東浦ひかる○美木乃々子  
 ○増田みゆき○木村洋子○大塚啓子○絹川文代○山原清子  
 ○長野良子○玉田美佐子の十名の美女。

トを、心よりお楽しみ下さい。

◎美しき罇しめ「第十集」責められる美女百態内容◎

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
立木の枝から逆さ吊り(木村)	松樹に晒された奴隷(木村)	脚擦れ美も露わな女体(美木)	瘦身は細にくびれる(木村)	M女性の陶酔の表情(木村)	インナーベルト縛り(増田)	逆さ吊りの緊縛女体(増田)	Pタイルに転がされる(美木)	豊臀を無理に晒される(美木)	剥がされたパンティ(一宮)	少女羞らいの緊縛裸像(一宮)	少ムチ打ちに悶えぬく(東浦)	足首で引回される女(東浦)	縄でくびる豊麗な女身(東浦)	全身緊縛首攻めの場面(東浦)
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
緑の柱に晒された女(玉田)	後手吊りに喘ぐ全裸身(東浦)	片足吊りにあう女体(大塚)	諷刺の若々しい裸身(一宮)	後手縛りの美女裸体(絹川)	柔肌に喰い込む細目(山原)	後手縛りに空ろな表情(山原)	華麗な刺青裸身並縛り(木村)	長髪後手足首連繋縛り(玉田)	全裸後手足首連繋縛り(玉田)	細目と鬚髯にあえぐ(東浦)	鏡に写す縛られた裸身(大塚)	二の腕に喰い込む紐(木村)	全裸後手縛り豊満女体(玉田)	色づいた乳首を晒す(大塚)

65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31

女どレイの品定め（大塚）  
強烈股間縛りに泣く女（東浦）  
切めての縛りに恥じる（一宮）  
隣室に見た驚異の縛り（大塚）  
隣房の巨大なる縛り（山原）  
吊りを嫌がるモデル嬢（玉田）  
真紅の腰巻でポーズす（山原）  
驚つかみにされた黒髪（東浦）  
麻縄縛りにのびた女体（大塚）  
開孔器による鼻責め（大塚）  
エビ責めに耐えぬく女（東浦）  
豊胸を黒帯に托して（長野）  
雪白の美肌を晒す縄目（大塚）  
人身御供の緊縛全裸像（大塚）  
股間縛りに投げ出す脚（一宮）  
エビ縛りに苦悶の表情（大塚）  
伸びやかな二本の脚線（一宮）  
荷車後手吊りの準備（大塚）  
ゆきの素顔と緊縛像（増田）  
竹に拘束された洋子嬢（木村）  
離家の縁に縛られる（大塚）  
裸く白肌を晒す全裸身（絹川）  
身動きできぬ後手縛り（大塚）  
腰巻を剥ぎとられる（木村）  
大の字逆さ吊り女体（増田）  
美しい裸身からむ縄（美木）  
右肌の上すべてを晒して（一宮）  
浴室の股間足首縛り（東浦）  
後手の荒縄縛りにあう（山原）  
股間縛りと腰縄縛り（木村）  
緑蔭の底を背景にして（大塚）  
立木で両手吊りにあう（大塚）  
細の反応とその表情（一宮）  
強烈縛りてなる弓反り（大塚）  
麻縄は豊かな肌を抉る（東浦）

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66

恍惚境のMの表情(山陽) 胡坐縛りでもたえろ(福川) 股間縛り正面で立つ(大塚) ムチ打ちを願うポーズ(木村) 伸びやかな女体の細目(一宮) 貴めゆかれた股間縛り(一宮) 後手滑車吊りにある女(大塚) 縛られて歩かされる(大塚) 電甲縛りと股間縛り(美木) 正坐で放置する縛体(木村) 夫から鼻貴めを受ける(増田) 可愛い小悪魔の表情(一宮) 徐々(に)に吊られる片足(大塚) 強烈縛りで受ける鼻貴(美木) 均斉のとれた美麗縛体(大塚) 室の隅に逃げた女奴隸(美木) 首縄股間縛獲物の表情(美木) 可愛い裸身の鑑賞(木村) セーラー服の後手縛り(大塚) 後手股間縛りで引回し(一宮) 薔老貴めで耐え忍ぶ(木村) エビ縛りの苦悶と戦う(大塚) 台上に晒す緊縛裸身(山原) 火あぶりにあう女囚(大塚) アダラ縛りで頑張る女(大塚) がっちり(と)後手縛りで(東浦) 柱縛りでもか(清子)(山原) 玉椿の上に放置される(玉田) 石打ちに悶える女体(大塚) 猿轡を三面鏡に映す(大塚) 庭園を引き回される(山原) 首縄にあえぐ哀婉表情(大塚) 太腕が柔肌をくびる(大塚) 大の字荒縄ハリツケ(山原)



# ☆「花と蛇」幻想中河恵子嬢強烈緊縛

## 花と蛇静子立縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とむ」

「花と蛇」の静子夫人に傾倒する中河恵子が裸身立縛りで、そのすらと伸びた肢体もあらわに縛り隠しにあって、有様を正面、側面、背面から微細な点まで捕捉した。

## 足挙げ開股羞恥責

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とろ」

花と蛇の羞恥責でもこれ程酷い責められ方はないだろうと思われ、恵子嬢考案の強烈縛り。足の裏が頭の上になるまで高々と開股で縛られた華麗きわまりない姿態。

## 片脚挙で晒す裸身

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とは」

スツールに腰をおろして柱に後手に縛りあげられた全裸の恵子嬢の片脚の足首に縄をかけて、じりじりと上へ引きあげてゆく有様を三葉のフオートによって解明した。

## 強烈エビ縛の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とに」

若々しい全裸の肢体にきびしく掛けられた後手縛りで二つ折りにぎゅ

うきゅう締めつけ、両足首を縛った袖と後手を連結、仰向けに転がすと足首はピンとはねる美しさ。

## 膝頭縛開股竹棒責

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とほ」

両手首が逆十字になる位に背中で高々と縛り、膝尻で膝頭を思いきり締めつけて引き越すと、両足先が市に浮いて八の字に開いてゆく花と蛇式羞恥責の一場面。

## 竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とへ」

竹の棒を使って両足首を大の字に開かせられ、或は開いた足首を背中の後手縛りと連結されて、もがきにもがけば、若肌深く痛が喉い込んで凄惨な表情が出る。

## 股間縛の裸身表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とち」

若麗のように、はっそりとしてしかもビチビチした肌の手首ももげよと締め上げた高小手の股間縛で、じつと強烈な緊縛感を味う恵子嬢の表情を三方面から狙う。

## 菱縄縛猿轡の表情

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号「とり」

瘦型の胸に掛った菱縄は二の腕を恐ろしい程くびって、逆に乳房だけが飛び出したように、むくむくと縄の中から顔を出す猿轡にうるんだ哀憐の表情が美しい。

## 乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とぬ」

腕も手首も麻れ上るほどの厳しい縛りで、あらゆる屈い苛められ方をされた恵子嬢、女の誇りも損なうにじられた可憐な美女は、ぐったり放心して横わっている。

## 菱縄縛で床に喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とる」

菱縄縛りで締めつけただけでも全身がいくつにもくびられたような緊縛感を出すのに、更に床の上に横倒しにして責めつけられれば、凄惨な目に流石の美女もあえぐ。

## 浣腸責の甘い恐怖

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とか」

縛られた裸身は浣腸のポーズをとらされた。静子夫人が受けた幾度かの浣腸が夫人を慕う彼女に対して今まさに施されようとする甘い恐怖の瞬間を捉らえた。

## 浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とま」

お尻を高々と突き出した恰好で大量の浣腸液を注入された美女はあられもなく裸身を身もたえて、只女の羞恥を爆発させないためにその強烈な便意を耐えている。

## 強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とみ」

「花と蛇」で美女責めのテーマとなっている浣腸の姿態を、かくもありなんとフアンの一人恵子嬢の意見もと入れ演じた浣腸マニア垂涎の甘い甘い浣腸のポーズ。

## 浣腸責の美態開陳

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とめ」

このようにして縛り、このようにポーズさせれば、細目の痛さに嫌でも応でも浣腸を易々と受け入れざるを得ない美しくも艶なるポーズが恵子嬢の熟演で展開する。

## 浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とも」

「さあ、もうこうなったら、どこからでも浣腸して」と諦めきった表情で自分だけ犠牲になって悪鬼たちのあくなき嗜虐の手にゆだねようとする、あられもなき姿態。







# ☆新人新趣向悶悦夫人の美態競艶場面

## 若妻の魅力を発揮

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へむ」  
久方ぶりに再登場した関谷夫人は相変らずの若々しさと全身にみなぎる責めムードの甘い媚態の中で、もがき身をくねらせて若妻緊による魅力を一杯にふりまく。

## 後手縛全裸の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へめ」  
固まどりの裸身に肌をくびるように掛けられまま、はつきりと後手縛りの仔細を見せて、すくくと立ち上った全身、豊かな臀部を揺すっての横坐り或は中腰など。

## 猿轡の裸身を悶ゆ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へも」  
肥り肉の全裸身を後手に縛り口には猿ぐつわが厳しく噛まされた関谷夫人は、Mの恍惚の境地に浸りながら強烈なライトをその白肌に浴びて全身をくねらせるのだ。

## ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へさ」  
息つくひまもない激しいムチ打

## 両手吊りで痛める

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へし」  
彼女の限りなきM性が再び暗虐の魔手を求めて、ここに更に激しい責めが展開された。それは両手を高々と吊り上げて、操り、猿ぐつわ、ムチ打ちと悲鳴を求める。

## 後手縛り竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へす」  
ドス黒い麻紐が後手首、二の腕から胸へと蛇のようにまといつき縄と肌との僅かな隙間には、竹の棒が情容赦なく押し込まれて、こじられ、その痛さに泣く照代。

## 強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島照代 略号「へせ」  
高々と後手首を挙げた高手小手縛りで猿ぐつわ。「さあ、脚を開け」と平蜘蛛のように押さえつけ竹の棒を用い、一直線になるくらい両脚開股を強制する責めの手。

## 両手吊りであえぐ

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へゆ」  
両手を懸えて梁から吊られると両脇腹が針で突かれるように痛むが、それにも増して全裸の下半身が無防備のまま晒されることである。そこへ男の視線と魔手が。

## 竹棒強制開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島照代 略号「へた」  
もつと開けもつと開けと強要されながら、逡巡する彼女に対して最後の手段として竹の棒の両端が両方の足首に括りつけられたので淑やかな彼女は顔を真紅にする。

## 厳しき緊縛の正坐

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へち」  
首縄が胸の前でねじられて二の腕を締めつける縄にからみ、女体を小刻みにくびる本縄縛りで新観として正坐した照代夫人の髪を揺んで引据える非情のS男の行為。

## 責めの魔手に屈伏

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へつ」  
高手小手、首縄と身動き出来ない激しい緊縛で締めつけられた女は、耐えきれずにどうと横倒しになったまま、激しい息づかいで床の上でころがり回るのだった。

## 竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へて」  
お尻のあたりに当てられた竹棒は背中に背負った竹の棒と連結されて、ぎゅうぎゅう締めつけられると、瓢箪のようにくびれて喘ぐのを情容赦なく開股させてゆく。

## 竹棒開股胴絞め縛

大手札五枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へと」  
二本の竹の棒で背中と腹部とをくびるように締めつけ、もういやと拒否するのを構わず、更に両足首も竹の棒で開けようとするS男の魔手は休みなく続く。

## 八カ月妊婦革具責

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号「へね」  
八カ月とはいえ普通では臨月と変らぬ大きさの双胎腹に対して、全身を拘束する黒光りの革具が、膨大な腹部を中心にして、ひびしと締めつけてゆく。

## 九カ月妊婦首枷責

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号「への」  
便々たる九カ月の孕み腹をつきだしている妊婦に重い桎梏の首枷かその両手と共にがっちり固定している臨月間近い妊婦に対する非情きわまりない責めの実験。



# 奇クサロ

先日、古本屋で昭和四十年の三月号奇クを手に入れ編集子の「桐一葉」の文拝見し、私自身もSMをめぐる夫婦間のトラブル、裏窓も姿を消したあの頃を思い出し、身の毛もよだつ思いをしました。この三月号にみなぎる、一種のはりつめた悲愴感に胸を打たれました。今、四十二年四月号を拝見して、十八頁の恵須冬一郎氏の文、同感です。

遠く、古代のパピロン王国の遺跡の彫刻にも、後手にいましめられた像があり、インカにも最近解読された始めたエジプトの文のきれぎれにも、縄に打たれるものの文章があるそうです。SMなるものは何もサド氏やマゾッホに始まったわけでもなく、特に日本では、(皮がなかったから鞭が発達しなかった)縄が唯一のものになったと考えます。

いつか、二、三年前の裏窓でしたかの読者のコーナーに、ある老人のしみじみとした、おそれとな

げきの言葉を読み、慄然としました。その方は戦前、今で言うSM雑誌が禁止され、「責め」という言葉までも禁じられ、長い戦いの後、やっとリベラルな時代がきてSM雑誌が再現し、戦後二十年経った今、又圧迫のうき目をみなくてはならないのか、たった一つのSMのたのしみが失われるのには一体私はどうすれば好いのでしょうかという短文でした。

私はその方が、僕らのもう一つ前の世代で、「責め」という言葉を知って居られるのは、斎藤夜居さんが書かれてある昭和初期に、今でいうSM愛好を育てられた方だと思えます。この一人の老人の、戦時中までの長い淋しさ、つらさその孤立感の長さに、私も思わずぞっとします。

私が、戦後始めて、SM雑誌に自分のいこいの場所を見出した事

そして、この老人が「責め」の本を読むたのしさを奪われた様に、SMという言葉を社会から抹殺された時のさびしさを思い、しかし人間に死がある様に、このさびしさはあきらめねばならないのかとこの二、三年苦しみつづけています。ただ、人々の心に、かすかにでも灯がついてる限り、未来に希望をもっています。

必ず人々は何十年か後に又、SM雑誌(言葉はちがってくるでしょう)が復活するでしょう。そして歴史の進化をみれば判るでしょう。今より一層SMは公認されるでしょう。現に今、サド全集がならび

河出から人間の文学として「O嬢の物語」が発禁にもならず、一つの文学として許されている事は人類のエネルギーの強さのあらわれであります。

かつては、サドというだけで、それは禁句で偏見にみちみちていたし、サド氏自身は一生をバスターユ牢獄にうずもれたのでしたが彼の書いたものとはうらはらに、彼自身は気の弱い、実行力の乏し

い、しかし偉大な思想家であった事は、渋谷氏の労作を通じてうかがわれます。ギロチンの公開処刑や江戸時代の密通者のひきまわし女工哀史は文化国家ではかけをひそめました。ただ戦争はベトナムで何が行われているか、その残虐行為については、両方の国が大義名分の名のもとで口をつぐんでおります。一人の殺人はその人間を犯罪人にしても、十万人、五十万人の殺人は、国家のために神として祭られるのです。

願わくば、細く長く、奇クを続けられて、これが一つの生甲斐の私共に、少しでも長生きさせて下さる様、「うしろ手趣味」だけの私のささやかな願いを守って下さい。二児出産、てておやなるもの長女の出産にはころりと参り、何ともかわいくてたまりません。

今、岩波文庫(白帯)フレイザーの「金技篇」全五巻(今三巻まで出ました)を読んでいます。

旧約のエレミヤ書、小予言者集ホセアからマラキ書に至る予言者のいかに人間の苦しみが息づいており、今日の世想にぴったり、彼らの苦しみと民衆のみだれ、戦いのみじめさ、いつの世もかわらぬと知りました。

## この頃感じたこと

黒井珍平



## 雪の中のフォト

綾 研二



ペンは幾度となく執ってはみたのだが、想うことの何百分の一も書くことが出来ない。だから、永い間の奇ク愛読中送ってみたかった原稿は勿論、読者通信への手紙はいつも、くず篋行きに終わってしまっていた。しかし、「重大な決心」をして送った妻の妊婦フォト

が三回にもわたって奇クサロンに載った時は、嬉しいのと、はずかしいのとが一緒になって、キニツと身に沁むものがあった。「何か」それは今にして思うと、私の小さな活路であったようだ。悶々として晴れないMSへの光明が、かすかながら、さし込んでき

たということである。そんなことのあと、奇ク二月号が、郵送されてきた。いつもの通り私はむさぼるように頁を追った。例によって「カメラハント」は美しかったし、須磨氏夫妻のこまやかな愛情の中でのプレーとフォトには、息苦しいような羨望を感じ、更に「孕んだヌードのヴィナス群像」なる高野氏の一文に至って勇氣を与えられた形となって、今日のこの便りとなったのである。そして、お願い出来るなら、読者の皆様の中から綾研二のために、いろいろとお手紙を下さったり、フォトの交換なども考えて下さる理解ある方々のあらわれることを祈っている。

雪と緊縛。勿論野外でのフォトがほしい。それまで私達のプレー写真で外でのものは夜に限られ、ストロボでの結果は期待した写真とならず、妻の苦痛にくらべて、むくいられないフォトの出来から一度は昼間と書いていたのだが、とうとう、その撮影を実現させる







## 「人間ブランコ」

春川ナミオ画

豊満な女性の臀部の下敷きにな

ことが出来ることになった。  
積雪は一メートルを越え、寒さの最もきびしい一月下旬だった。積雪地の道路。それは狭くて歩く必要のない所に道はない。道のある所、即ち人が居るか、人が通る所である。二人だけのプレー、私達は、外にその場所を求めて町を出た。一軒余りも家を離れて私達は実行することのきびしさを知

った。有るものは冷たい風と真白い雪だけである。  
暖かさは体温以外には何一つない雪原での撮影に縄を握ったまま私は迷った。覚悟をきめてついてきた妻ではあったが、その目は、さびしく中止を訴えていた。  
その日、私達はそのまま家に帰った。そして、妻が最高の苦痛をその裸身に加えられることになっ

たのは、それから一週間の後だった。人通りと隣家の気配を耳目に集めて、雪責めの場所は吾が家の庭と決定した。  
折悪しく雪が激しく降りしきる寒い日だった。常用の白い細引きが妻を後手に縛りあげる。細引きの白色が雪の白さで緊縛感がボケるようだ。黒ずんだロープに替えて再び緊縛する。妻の肌は鳥肌だ

## △Mの告白▽

奴隷志願 島根拙男

私は四十才になる十数年前からの愛読者であります。私の夢は女に生れかわり奴隷のようにこき使われ愛玩動物並みにされることでもあります。髪は昔の町人のように月代をそられ、大たぶさに結われ腰には汚れた褌を締めた姿が私にとって最も憧れのスタイルです。  
逃走防止のため、縛られたまま放っておかれるため、全く自由がなく、いつでも男のなぐさみものにされていきます。このような私の夢を満してくれるのが奇クです。  
女の禪スタイルの男髪（昔の人のような髪型）の写真がほしいと

ち、いじらしくふるえていた。  
暗い空、降りしきる雪、うなだれた頭に積る雪は厚さを増し、むき出しの素肌に落ちた雪は、冷たいしずくとなって流れ落ちた。  
ここにお送りする写真は、その時の記録として、雪の中に緊縛の裸身で呻いた、今では私達にとっ

て忘れられない一コマとなった記録である。  
思います。雪崎さんの女相撲の絵にはこれに近いのがありますが、現実にはモデルさんに、このような髪型をして頂くと有難いです。私の妻にも褌をさせたり髪型を昔風に結わせたりしています。本人が嫌がりませんし素人でもありますので仲々思うようにゆきません。  
またプレーについても、適当な相手がありませんので、いつも思っていることですが、私を裸にして他の場所へ送って下さる人はいないだろうか。衣服一切を保管され裸身だけだと逃げるに逃げられず、私は一生懸命、その主人のために働くでしょう。  
こうして私は御主人様の奴隷として、あるひとときを過したいと思っています。どなたか、こんな私を呼び寄せて下さい。



## サジズムショーの主人公

## 秋山夫妻の夫婦愛

鰐 喜 敬 一

すでに、この夫妻のショーを見聞された読者の方も多かろうと思われ、現在、今更私の拙い文章をもって、みなさまの前で云々することなどもなからうにと、自問自答しながらも、二月号の桑田氏、三月号の佐瀬氏の投稿に刺戟されて、私は私なりに感じた俚を述べてみ

たくなった。ショーを通じて一番強く感じた事は、ショーである前に夫婦故に可能なSMプレーを見た。私はSMがなんであるかの本質はまだ判らない。ある人はむつかしい言葉で表現され、又ある人は単刀直入ズバリ語る。私はどの様な表現で



なされようと、その底に流れるものは特に夫婦の場合、セックスに繋がるものを感じる。

須磨氏、増田氏、新田氏の場合にしても、カメラハントの辻村氏の文面の中には、必ずと云っても良い程、夫妻の夫婦としての愛情の交換が語られている。これ等夫婦の愛情の交換を具体的に表現された秋山夫妻のショーを見て、最近特に多くの夫婦の方がSMプレーを体験されつつある時、夫婦間のプレーのあり方を学び取って貰う事は、大変有意義であると思つた。必ずしも夫妻の様な激しいものを学びとれるというのではなくその底に流れるものが何であるかを? である。

よく私の「飼育不足」と表現される方を見る。さてその「飼育」という項目を辞典で繙いてみると「動物を飼育する」とある。勿論、人間も動物の一種に違いないが、動物である前に万物の霊長である事を記憶して戴きたい。自分の趣向の良きパートナーで良き協力者である愛妻、愛人を指して、飼育とは、いささか戴けない気がするのである。

SMプレーには苦痛は付き物と割切れる方は別として、そのなか

## 編集部だより

○ベテラン辻村隆と新進気鋭の山本一章との対談は、まことに両雄相会いするのになさわしく、各々持参のフォトを自慢に、なごやかに行われた。指名の美人仲居の一人が、そのフォトを垣間見たことから、くどき上手の辻村隆が忽ち意気投合して、その美人を縛り上げるという一幕もあった。

○残念なことに、辻村、山本の御両所、千慮の一失でカメラの持参を忘れ、その場面をフィルムに印することは出来なかったが、抜目のない二人が交互にデートを申込んでいたからいずれ何らかの形で登場するかもしれない。

○本場に久方ぶりに、関谷富佐子夫人から便りを貰った。西宮市の松籟荘にお住いとかで、甲東園の駅前で待合わせ、若干の撮影を果すことが出来た。辻村、山本の両氏も関谷夫人には、至って御執心で面会の機会を熱望しているのでカメラ・ハントとカメラ・ルポの共演になる公算が大である。

○愛知葉子さんの妊婦フォト、綾研二氏の雪責めフォトと読者の方





## 新入り女囚入牢

倉 真 砂

若い新入りの女囚というと、牢役人にとっても、又牢内に捕われている年輩の女囚にとっても、まことに興味のある存在であるといえるだろう。これと同じく、私にとっても、新入り女囚の入牢の図というものは、新鮮な魅力に満ち溢れた題材であることには変わりはない。そこでペンを持つと可憐で豊満な新入りの女囚が、全裸にされて身体改めをされた上で、大きなお尻を蹴られながら、牢の入口から放り込まれる有様を描きたくなるのである。私はこの女囚入牢の情態に、限らないロマンチズムの哀愁を感じるのである。

々々から優秀なる写真の提供並に春風春太郎氏の映画スチール提供と御協力を惜しまれないので、お蔭で先月号は豊富な資料で誌面を飾ることが出来て感謝にたえない。

○本誌のモデル募集の広告に応募される女性が増えつつあるのは、まことに喜ばしい。中には遠方のため折角のご希望にそえない向きがあるのは残念である。中河恵子さんの如く、写真ばかりか、文章まで物される方があって、ほんとうに心強い限りである。

○読者通信に投稿される女性の方々も更に勇気を出して密接に連絡下されば幸いである。

○先月号のこの欄で、読者同好者の会合の件について言及したところ、早速賛同のお便り多数を頂いた。差し当り大塚啓子さんにホステスとして依頼したところ、快諾を貰ったので、近い将来、会合を持ちたいと思う。出席御希望の方は編集部宛御一報を乞う。日時、場所、その他詳細はいずれ速達にて連絡する予定なので、返信料実費同封願いたい。

○読む雑誌としての内容を更に充実するため、懸賞入選作品の発表を極力増やしてゆく方針なので奮て応募されるようお願いする。

ら夫婦としての本能的快美の世界に導こうとする主人の努力は当然であると共に、これがあってこそ愛妻の、愛人のSMに対する協力が得られる様に思うのである。

彼女等に潜在するSMの芽を育て上げるもあげないも、主人の愛情如何にある様に感じる。秋山夫妻のショーを見て何よりも強く感じたことであった。

佐瀬氏の結びに「一言激励の言葉をかけてやってほしい」との言葉があった。私自身、終演後余程お会いして慰労の意味の席を持つ

て、語り合いたいと強く感じたが何故かショーの真に迫ったものから二人きりの夫婦愛を感じて、ソツとしておいてあげたいという気持を抱いたのであった。

いずれにしても、良い意味での夫婦愛に発したサジズムショーの極致を印象づけられた。まだ御覧になっていられない方々への参考にもなれば、と特に強い印象を受けた二場面を、感興のうすれないうちにとスケッチしてみた股間責めの二態である。

倉吉市の南恵子さん、浜田市の

志間さんお二方の双方からの呼び掛け、羨ましく拝見しました。さぞ楽しい交歓を得ておいでかと思えます。倉吉市の南恵子さん、十二月号投書の連絡場所に本誌発行十五日以内にお便りいたします。お付合いの可否は問いません。お受取り戴ければ幸いです。同県隣のよしみで、お仲間に加えて戴けましたら幸いです。

より幸せな明るく楽しい生活を送りたいと思います。

八鳥取県・鐔喜敬一V



## サロソ楽我記

辻村 隆

(第三十五回)

山本章氏との往来頻繁である。同じSの仲間として、最近これほど意気投合のした人も珍らしい。過日、キタの料亭で出会った時、相互に諒解の上、二人で対談をやるうという事になって、山本氏の持参した小型のテープを横にして談論にいとまなく、その話は結局私が纏める事になった。運筆の私のことだから、締切りまでに間に合うかどうか疑問だが、話がおよそあけすけだけに、大幅にカットしないと、とても誌上にはのせられないかも知れない。彼の話ではトルコ娘と相当すごいプレイをしたというのだが、その責め方が微に入り細に穿ち、ついつい話にひき込まれてしまう。体毛の濃いのが嫌いな彼、毛抜きを使って一本一本というに到っては、どうなったことやら。毛抜きで抜くと、あとが生えてこないそうである。とすればトルコ娘は今も麻雀の、大三元の一枚ということになる。話しているうちに彼もムズムズし出して、カメラ・ルポに書いて見たいといい出し、私も紹介

してもらってカメラ・ハントに書く気であったから、この勝負どちらが先に発表出来るか。ともあれもともと山本章の彼女である。それを書こうという私の方が少々厚顔しいかも知れないが――。

× × ×

山本章氏が京都の魔子のルポを私に諒解を得てきたので、フォトでは顔も判っきりしないしと思つてOKしたら、昨日マコからえらい権幕で電話かかって来た。発表しないという約束なのに書いたというのだが、それなら辻村にきいてくれなんて山本章に言わなくてよかったのだ。あれじゃ全然誰か分らないじゃないかと突っぱねると、でも見る人が見たらすぐ分るといふ。へえー、君のハダカそんなに誰でも知っているのかいとトボけると黙ってしまった。才女少し先走り過ぎた。見る人が見たらとは、あのフォトから、どこを見るのだろう。じゃじゃ馬を制御しているつもりでも、マコの鼻息はすさまじい。いろいろなだめたら、北海道へ遊びに行きたいから

つれていって欲したらカンニンしたげるだって――。ええい勝手にしやがれた。とはいふものの魔女めいて可愛いところのあるマコに、もう一度馬乗りになられて、押しつぶされてみたい。そんな気持が起るところを見ると私もマコの感化を受けて、彼女にだけはMにしらずしらずなっているらしい。

× × ×

五、六年  
前、清水正二郎氏が、「O嬢の物語」を発表した時には例の清水氏一流の内容で、巷間では彼自身のケッ作をフ랑스文学らしいオブライトにく



僕のイメージ画集「牝犬」 室井亜砂路

るんだのではないかと専らの評判であった。それが前年今度は沢竜彦氏の訳で『O嬢の物語』として出版されてからは、清水氏の(？)の無実の汚名は見事にそがれた。やはりポアリーヌ・レ



## オムツ・マニア

宇都宮 武

転居してからは家も広くなり、  
今度こそは母に見つかからない良い

パイプ利用の方法

千葉青鬼



アージュというSM作家は実存していたのだった。清水氏のいわれなき汚名を洪沢氏が見事そそいだことになるのだが、清水正二郎といい、洪沢竜彦といい、執れも当代きっての所謂有名なるSM翻訳作家。せめて『O嬢の物語』の半

分程度でも奇クヘ堂々とセクシーズムを書けたらと、つくづく溜息が出るのだが、こちらでひとつ、洪沢氏の名訳になる、『悪徳の栄え』の如き熟語を、同好者の間で作成してみても如何であろうか。

に出てくる、(裏門・口器・千鳥・親嘴・裁尾・お若氣・首尾・前門・表門・藥物・花心・契水・菊座・槍先・etc)は何を意味しているのだろうか。全部の単語が理解出来る人は、その人は余程その道の通人といわねばならない。洪沢

氏の場合、江戸時代の粋語や古語に息を吹きかけたものだが、SM仲間でのみ分る新語や隠語が、もうそろそろ、出て来てもいい頃である。例えば神酒・SMというような……。

隠し場所を見つけ、毎夜あてがって寝ていますが、やはり若い女性自分より少し年上の若い女性にあってがわれないと思う気持ちも残っています。医療用品店でも、やはり病人用のおむつカバーを売っているのを見つけ、毎朝どこかい店

を選んで色々な事を聞き出してみます。昨日は東京(二五二)二六五六へかけてみました。相手が男の場合、向うが切るまで黙っています。女店員の時、始めて話をし会話を長く続けるようにします。「もしもし、朝比奈商店です」

期待通り女店員の、しかも若い声でした。

「あの、病人用のおむつカバーありますか？」

「ええ、あります」

「いくら位ですか？」

私の胸は躍るようでした。



## 浣腸とS M

青山一樹

嘗て『内外タイムス』に連載された小説「私は待てない」(有馬綾子作)に、新聞小説にしては珍しい「浣腸とS M」の描写があった。その一部を引用すると……

「……だが打ち据えられ歯をくいしばってこらえたあと、失神寸前に全身をつらぬくあの恍惚感、麻薬の酔いにもまさるとも劣らぬ欲びであると思っている。浣腸の刺激はもっともひどい。大型の浣腸器いっぱい薬液を入れられ下腹がゴボゴボと鳴る。息のとまりそうな程張ってくる腹や胸を男は噛んだりつねったり足でふんずけたりしてくれる。それらのことごとこの恐怖と期待は、まるで処女膜を



破られる直前の様な気持だ。つまり伸枝はドモ辰が「浣腸するぞ」と言うのとふるえ上って恐がり、してくれないと小娘の様に駄々をこねる。「浣腸してよう」「駄目だアムールの星を云わなきゃ」伸枝はついに降参した。ハ中略

「浣腸してくれる」「たっぷりしてやらあ」気遣いじみた情欲の一夜はいつか明け、部屋には明け方の灰色がしのびよっていた。伸枝は尻をふって催促した。「あんたカンチョー」ドモ辰が苦笑しながら病院用の大きな浣腸器をとり上げ伸枝の欲望におすりとさした

有馬綾子がこれだけの心理分析

## 妊娠九カ月の自像

愛知葉子



奇ク四月号を拝見し、私の写真が今月も掲載されているのを見て非常に嬉しく思いました。妊娠八カ月と申しましたが、次頁の綾研二様投稿の六カ月の方が大きく見えるような、私の迫力に欠けた写真を採用して下さったことに感謝いたします。

今月は、もう綾研二様にパトンタッチして、私は下りようかとも思ったのですが、綾様の妊婦写真

撮影の記を読みますと、これは現在のものではないようだし、編集部より激励の言葉もありましたのであわてて九カ月を写して投稿することになりました。

月初めより風邪気味で熱が下らず、体重が2キロ程減って少しお腹が小さくなったように感じるのですが、助産婦さんが子供は完全に下におりてきているし、異常もなく普通だと言われるので月末に





をしているところを見ると、案外伸枝が作者の分身なのかもしれない。それにしても、最近、梶山氏といい、有馬氏といい、一般の紙面に浣腸マニヤの場面が描かれる様になったのは、比較的多くの人にその傾向があるからなのだろうか。私自身「浣腸」という文字はタブーでありながら、その二文字は何故か胸を高ぶらせる。理由はわからない。恥しいと思いつつながらあちこちに同好者を見出す時、心は少しずつ安らぐ。

○ 私は二度きりであるが、外国に一年半程滞在した。アメリカのあちこち（といっても限られているが）の本屋を歩いて浣腸を描いたSM小説がないものかと探したが発見出来なかった。次に出張の時はもう一度探したいと思っている。そうして出来れば同好の諸氏

のために下手な翻訳をつけたいと思う。

外国で一度だけ外人女性に浣腸した事がある。淫売婦であったが「洗ってくれる？」という彼女の言葉に、小型の女性用洗滌器にぬるま湯をいっぱい吸いあげた。一度終ると「ワンスモア」。二度目の時、私はアヌスに押し込んでしまった。「オーノー」と叫び声を挙げる。「ボスマストピークリーンド」との迷英語で黙らせた。すぐにトイレへ走っていったが、帰ると「貴方は裏の方が好きか？」と問う。私はおかま趣味はないので、「ノーアイアムバットイツグッドフォーヘルス」と言ったら「アイノー」と答えやがった。「さまアみる」私は日本語で言っ



なって写真撮影をしました。綾様のように、撮影の記が書ければよいのですが、そのような才能もないので残念です。五月号が出る頃には、もう出産しているのではないかと思います、それま

でに最後の写真を、うつしておきたいと思っています。これから後も、綾様に引続いてどなたか妊婦の写真を投稿下さるよう、心から、お待ちしております。

# △M短歌▽

女主人のうたえる

花原竜子

騎乗して文読みおればドレイ奴が歓喜にふるえ泣きじゃくりおり

エビ折りになりて苦しむ首の上骨も折れよとヒップ責めする責めおえしドレイの首に太ももを巻きて飲ましむあたたかきもの足指の間を舐めていし彼がにわかにがばと土下座して乞う



## 最近の縛り映画から

東山映史



最近の独立プロの作品には、縛り、ベッドシーンが多いが、その中でも白眉は本誌に連載中の「花と蛇」の団鬼六の脚本の「縄と乳房」だろう。

二月号に脚本が載っていたが、映画にも奇譚クラブ連載の「花と蛇」よりと書かれていた。新高恵

子、梶田邦子の女斗美から縛りシーンなど、さすが団鬼六作品だけに迫力があり見たえがあった。サジスチックな旅館の娘新高恵子が養子をいじめるだけでなく、彼の恋人の姉を恋人と間違えて、彼女——梶田邦子を誘拐し、三十分ごとに一枚宛はいでゆき、つい

に全裸にして、ムチ打ち、耳責め、鼻責め、床責めと責め、最後は風呂の中で水責めにして殺してしまう。豊満な梶田の胸を縄、紐でしばりあげ、パートカラーで迫力を十分に出していた。

これには落ちがついていて心臓の悪い新高がショック死する。これに養子と梶田の共謀殺人で皆ひかれてゆくというスリラーもどきもの。これと同じ花巻京太郎の「肉色」これでは「縄と乳房」と逆に、新高恵子が新妻でさらわれやくざに責められる。後手に縛られて連れこまれ、前手縛りでおかされようとする。清純な姿態を見せていた。

「猟奇の果」は、伊藤晴雨好みで島田に長襦袢の山吹さゆりが責絵画家のモデルになり、床柱に縛ら



れ責められる。一寸楽しいシーンがあった。

「通い妻」では、谷口朱里が初恋に破れ、田舎の売春宿で昔の恋人に会い救われようとするが、彼女には悪いヒモがついている。縛られて柱に紐でくくられているシー



## サ ロ ン 展 望 台

## 刺青マニア向の本 目出鯛三

ンなど、きわめてサジスチックなシーンもあった。

「女子学生の裏側、非情のわな」女子学生のコールガールの生態だが、その中の一人が床の上で、乳房、両腕を縛られて、羽根で責められたり、伊達巻姿で打たれたり

サジズム好みの客に相当サービスしていた。これからという時に目覚時計がなり、「お時間どっせ」にはまいった。

東宝作品の北村喜八監督の「殺人狂時代」では、新婚ホヤホヤの団令子が週刊スリラーの婦人記者

で仲代達矢と一緒に探訪しようとするが、殺人グループに捕えられ、その拷問シーンのフィルムを仲代に送るが、それが8ミリフィルム。その中でシュミーズ一枚にされた団令子が両手吊りの責めにあう。ついで床の上に四肢をはり

つけられて責められる。恐怖の表情など、さすがに迫真力があり、うまいものだ。鬼才喜八の楽しい作品だった。

〔映画スチール〕

△春風春太郎提供▽  
日本シネマ作品「変態」より

## 食虫植物に

## 食べられる魚

花原 竜子

女王様、重とうございます。

女王様、お許し下さい。私は溶けてゆきます。

美しい花ひだから分泌する香り高い花蜜に――。

目も口も鼻も、心さえ、ぬれぬれに溶かされて、小さな小さな私になりました。

大きな、大きな、たくましくて美しい女王様。

女王様の下流に住んでいる一匹の魚でございます。

女王様、重とうございます。

死にそうに幸福な私でございます。

女王様の美しい花ひだから分泌する香り高い花蜜に包まれて、私は死にとうございます。

MでありFである僕が、前回にも増して、およそ筋ちがいのお便りを出すことに、少々気がひけぬでもないが、マニアのためにお知らせしよう。

「快楽の女性」女刺青師の刺戟的生活、新刊書の御案内から。というサブタイトルにもまして、表紙のカラーヌードが人の気をいやが上にも引くという、美装ポケットブック。サブタイトルでお判りのことと思うが、全編これ刺青の記事で埋めつくされ、刺青マニアにとっては貴重な一冊です。

ふとしたことから刺青に異常な興味を覚えた著者（オーストラリアの女性）が、如何にして自分の美肌に刺青を施したか、から始ま

り、遂には自動刺青機のセールスにまでなつて、世界を股にかけて駆け回って活躍しているといったいわば自叙伝的好読物です。

△現在、私は手首から肩、胸部、背中一面、それに足の拇指からひざにかけて、ほとんど余すところなく刺青を彫っています▽とあり自身の写真が挿入されていて、一目でその経過が判る仕組みになっている、本文もさることながら、見る人の目を充分に楽しませられる興味ある内容です。

しかも、世界広しといえども、最も芸術的、技術的に優秀なる我が国の伝統ある刺青について、彼女は讚美と賞讃の言葉を忘れていないのです。言ってみれば、その

道の方には、誇高い日本の刺青にも触れており、名人の紹介もされています。

この小冊子によって、或いは刺青に興味のない方でも、オヤツと言わしめる程、美化され芸術化された体験実録が、なんとも妖しい魅力を伴って迫ってくるのではないかと考えます。江戸っ子の心意気、大和魂のシンボルとして全面に施された伝統のある日本の刺青の技術が、如何に類稀なる高度なものであるか、外国の幼稚な、単純な構図のものと対比した時、素人の僕にさえ感謝の拍手を送らずにはいられなくなる位です。

桃源社刊、昭和四十二年一月十五日初版。定価二七〇円。



奴 隷 志 願

花原竜子女王様の

奴隷を志願す

藤原 浩二

貴誌益々御繁栄の段心よりお慶び申し上げます。

さて私、貴誌を初めて手にしてからもう七、八年になりますが、此度貴誌四月号にて花原竜子女王様の奴隷募集の記事を拝見し、今度ばかりは勇気を出して、どんなことがあっても応募しなければ、二度とこんな機会には恵まれないと思い早速筆をとった次第です。私はほんとうに全くの未経験者で未だ奴隷の作法の第一歩さえ知らない未熟者ですが、こんな私でも女王様の奴隷にして頂くことができるでしょうか。

ただ私はどんなに責められても決して途中で弱音をはいたり後悔するようなことは絶対にありません。私は縛り責め、鞭打ち、人間馬はもちろん、足なめ、下着なめ人間便器、あるいは裸踊りを強要されたり、写真に撮られたりして精神的な屈辱を受けること、その

他どんな責めにでも耐えるつもりです。一度でも結構ですから、泣こうが、わめこうが息をつく暇もなしに責め続けられて、ほんとうの奴隷のつらさを身を以て体験させて頂けるならば、私は生涯にそれ以上の喜びはないものと確信しています。どうか花原竜子女王様の奴隷第一号として私を御採用願えますことを、心よりお願い申し上げます。

何卒早急に日時場所などの御指定並びに送金方法など御指示下さいたく宜しく御願い申し上げます。私の方で前以てお送りしなければならぬものなどがございましたら、何なりとお申し付け下さいますよう。なお貴誌については十分安心しておりますが、呉々も秘密は厳重して頂きたい、返信なども密封個人名にてお願い致します。この段念の為宜しくお願い致します。簡単乍らとりあえず御依頼まで、どうか、この哀れなMの願望を叶えて頂きますよう。

二月二十五日

××県○○郡△△町×××

藤原 浩二

編集部御中

☆

志 願 書

「人間サドル」

春川ナオミ画



××県○○郡△△町×××

藤原 浩二

私は

- 一、体重 六〇キロ
- 一、学歴 大学卒
- 一、職業 サラリーマン

〔以上〕

△編集部より▽

花原竜子女王様の奴隷として採用して頂きたく志願致します。奴隷として御採用頂きました上は、女王様の命令に絶対服従し、誠心誠意御奉仕することを、お誓い致します。

- 一、生年月日 昭和15年月日
- 一、身長 一六八センチ

四月号の『奴隷募集』の記事により申込者多数あり、中には会費として一万円を送金された方もありますので、花原竜子様、至急連絡場所を編集部まで御通知して下さい。



## 緊縛映画万歳

春風春太郎

私はときたま東京に出かけた時は、ピンク映画を製作する各映画

会社には、中々好意的に協力して下さるの嬉しいのです。ピンク女優さんとも時たま廊下などで出逢う時があります、その礼儀正しいのには驚かされます。

映画のシーンだけを見ていると、惜しげもなく裸体になったり縛られたり、濃厚なベッドシーンを演じたりする女優さんだから、よほど心臓が強く、あの方もお好きな人達ではないだろうか、一般の人達は、想像するらしいですが、私の見たところでは、服装も地味だし、たいしてお化粧もしてないらしいです。

普通、街でよく見かける、ありふれた娘さんと、ちょっと変りありません。「一寸スタイルがいいなあ」と思うくらいで、監督さんやスタッフの方達の話のうかがっている時の彼女達のまじめな態度や、制作者の社長さんと逢っている時の彼女たちの礼儀正しいのには、さすがの私も

感心してしまいました。

私はそんな、ほほえましい場面を、そ知らぬふりをして遠くから眺めていました。ピンク映画会社はザックパランで話のわかる人達ばかりなので楽しい。私は大のピンク映画ファンで又、ピンク女優さんも大好きです。

さて、最近の緊縛場面のある、映画を挙げてみますと、「牙狼之介」「殺人者を消せ」「ダブル処女」「縄と乳房」「女さかり」「牙狼之介第二部」「結婚詐欺」。洋画では、「獅子王の逆襲」「殺しのビジネス」「殺し屋へ挑戦状」「地獄のランデブー」。

実演では、浅草ロック座、一月下旬から二月上旬にかけて、日舞ショーが上演していました。

踊り子さんが客席に下りてきて幅の広い赤い布地で、お客さんに縛ってもらうという、変わったショーでした。時代劇の衣裳で長襦

袢一枚になって縛られてから、半裸になって舞台に上がるが、もだえるシーンをショー化したものなど出色のものだと思いました。丁度その頃、東京カジバシ座で「拷問」というショーの上演と重なっていました。





# 「早く私を 縛ってくれないかしら」



河森真理子

辻村隆様——

はしたないお手紙をさしあげまして、ごめいわくをおかけし、本当にすまない気持ちで一杯の私でございます。自分ながら、どうしてあの様なあきれ果てたことを長々と書きつらねたのかと悔む心しきりですが、きつとあの時は、辻村様よりお返事をいただいた嬉しさの余り、ついつい取り乱したのだと思います。決してご無理は申し上げません。お暇ができました時点で結構でございますから、真理子

のことをお忘れにならずお声をかけ下さいませ。いついつまでもお待ちいたします。

尼崎市 松岡生様

二月号で呼びかけ下さいまして、本当に心から嬉しく存じました。私のようなものでも、やはり期待していただけるのかと嬉しさで一杯でございます。お約束の一月十六日、午後一時きっかり、ミナミの大劇の、大劇アルバイトサロンの入口近くにたたずんでいましたが、それらしい眼鏡に艶姿の方

方は四、五人おられました、話が話ですから、迷ったままとうとう声をかける勇氣なく一時二十分に立去りました。あの日はスゴく寒い底冷えのする日で、雪もちらついていたので冷えてきたものですから。折角和服とご指定していただいたのですが、私は余り外出着らしい着物をもっておりませんので、グレーのオーバーにスラックスという姿でした。こんな私の姿をアルバイトサロンの前で、見かけられませんでしたでしょうか。お会い出来なかったのは本当に残念でなりません。どうか次からは洋服とおっしゃって下さいませ。いつかきつと松岡様に縛られる日を楽しみにしております。

神戸、前田様——

せっかくご丁寧なお便り拝見しながら、真理子は毎日のお勤めに追われて、お返事をかくのをうっかりし、三月号を手にした時、そのことに気がついて、本当に泣き出した様な情ない気持ちでした。それでも或いはひょっとしてお見えでないかと思ひまして、二月六日の月曜日、方違神社の正面まで参りましたが、兵庫ナンバーのキヤロルは見当らず、がっかりしてすぐ戻りました。御免なさいね。

## 代理部だより

○限定グラビア写真集「日本拷問刑罰特集」略号「美5」は残部僅少のため、現在の在庫分が売切れました。昨後は分譲中止になります。

○先月号にて予告しました「総目録」は、企画立案しましたところ予想外の頁数となり、印刷紙代送料も案外かかることがわかりました。然し、今迄予約下さいました方々には完成次第間違いないお送りいたします。今しばらくお待ち下さいませ。

○好評の現在連載中の団鬼六「花と蛇」は今月号です。に続篇第三十回を迎えておりますが、続篇を取りまとめた「臨時増刊号花と蛇特集号」は若干残部がありますから、未見の方は、お申込下さい。一部送共五〇〇円です。前篇の臨時増刊号についてのお問合せがよくありますが、この方は売切れて在庫はございません。

○本誌のうんと古い号を突然御注文下さる方がございますが、折角御送金頂いても昭和三十八年以前の分の在庫はございません。ましてや十数年以前に発行のものは古



四月三日この場所ではいかがでございましょうか。お返事なくとも近い所ですから、真理子はまいります。服装は今からはっきり言えませんが、黒いサングラスをかけ、女性自身という週刊誌を手にしていますから、遠いところでしようが、お氣が向けばお会い下さいませ。前田様の緊縛には多分たえられないと思いますが、ただ今までに八人も縛られたとのこと、少々空恐ろしい氣もします。お手柔らかにいじめて下さいませよう。お目にかかれたとき、又私の好みなどいろいろ申し上げます。

### 山本一章様——

貴男様のカメラ・ルポ一番楽しく読ませていただいております。私も「この人」の一人になれたらどんなに嬉しいことかと、まだ見ぬ貴男様に恋い焦れる想いでございます。編集部の方で私方の住所おきき下さいまして、一度お便り下さいませれば、本当に嬉しいのですが、デパートに勤めておりますので、月曜日が休みとなりますが、おさしつかえなければ「この人」の一人に、お加え下さいませ。痴人の糧の百合子のような責めでも、セツコのような責めでも

辛抱して、尚、逆吊りの場所さえあれば決していとませせん。山本様に縛っていただけるのなら、何時間縛られていても本望です。若し私の家庭の事情が許すのなら、大山のように、私は山本様に飼われた女として、しばらくはお氣の済むまで一緒に暮して見たいと希っております（丸坊主だけはお許し下さい。それとオシッコも）。本当に氣の多い私だとお笑いでしようが、今の真理子は、誰でもいいから、強く激しく縛られて見たい氣持一杯でございます。どうかよろしく、お願いします。

### 僕のイメージ画集

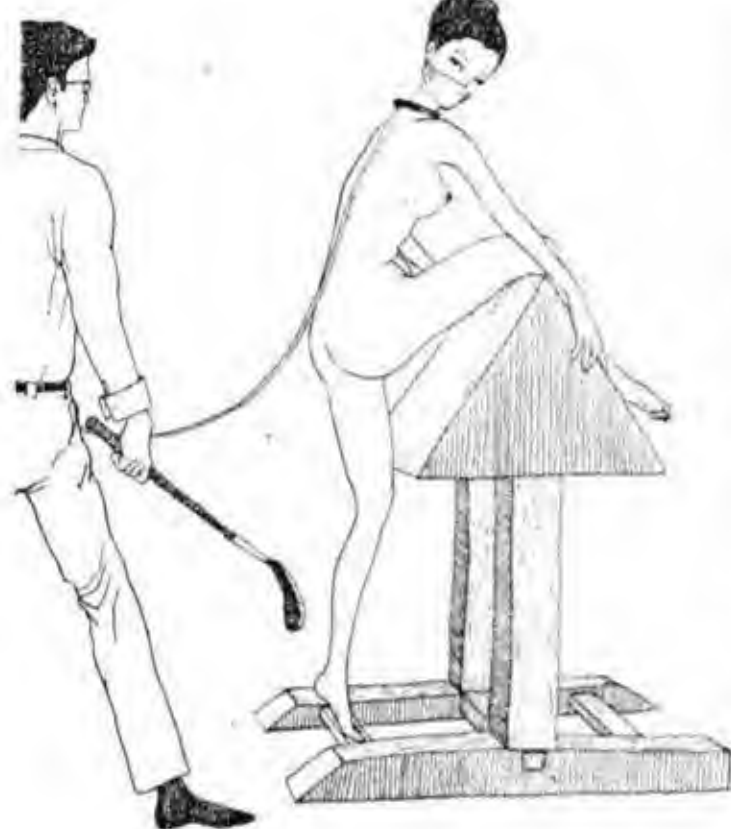
### 「木馬」——新妻教育

室井亜砂路

新妻は夫に命じられたまま、部屋の中央に置かれた三角木馬に跨ろうとしているが、彼女にとって、それは余りにも高すぎた。

あられもないポーズで跨ることをためらった彼女の可愛いお尻に、夫の手にした警察犬調教用の鞭が音を立てて炸裂した。

「さあ、早く跨ぐんだッ」  
彼女は右足を恐る恐る挙げた。



あさむ

本店にても中々入手困難だと聞いております。分譲品その他古いものは御送金下さる前に、往復葉書或は返信料同封にて一応在庫の有無を御照会願えれば幸いです。

○地方都市への本誌の配本が円滑を欠いておりますため、或は休刊になったのではないかとという疑いを持つておられる方も少くないようです。直接購読のお申込みが若干増えつつありますが、まだまだ微々たるものですので、本誌の基礎確立のためにも、事情の許す限り予約お申込みを願います。

○尚、発行所へ直接御予約下さるなくとも、最寄りの書店を通じて御予約下さっても結構です。熱心なる読者からの注文で書店が予約者の分を取りまとめて配本を求めている所も二三出て参りました。

○個人名にての発送御希望者に対しては、阿倍野局私書箱第十四号箕田京二の名にてお送り申し上げます。その他仮空名儀にてもお求めとあれば発送申し上げますが、局留郵便物に限り万一留置期間経過にて返戻になることも考えられますから、仮空名儀は避けたいと思います。尚、局留の郵便局名は通称ではなく、看板に出ている正式の名で願います。



## 「女相撲」の夢と実際



奮斗士好太

先日の週刊誌に大学の相撲部員（もちろん女性のです）が登場していました。

「女性自身」十二月十二日号の、「ただひとりの道を選んだ女性」というグラフ特集にプロ棋士、パイロット教官などの人々と一しょに紹介されていたもので、K大

（KOKUGAKU）相撲部員の彼女（T・Sさん20才）が練習場で同僚の部員と談笑している一コマがのっていました。

マワシ姿もりりしい女力士スタイルは残念ながら拝見できず、マワシ姿は野郎どもだけで、彼女は洋服に身を固めていましたが、

「ほんとうなら相撲をとりたいたんですけど……」

という立派な心がけで、環境さえ許すならばマワシ姿も辞さない意気込みは十分と、見受けられます。

「オイSちゃん、いっちゃうもんでやろうか」

「アラ胸を貸してくれるの？ 嬉しいわね」

「じゃ仕たくしなよ」

「ハダカになるの？」

「そうだよ」

「マワシも？」

「もちろんさ、手伝ってやるよ」

「ウワア、恥かしいわ、でもアタシのマワシがないじゃないの」

「誰かのを貸してもらうさ」

「ひとのフンドシで相撲をとるなんてアタシのプライドが許さないわ、だいいちこんな厚いのなんか女性にはムリよ」

「アアそうか、女性のヤワ肌にはムリかな、じゃSちゃん用に女性むきのを準備しておかなくちゃならないかな」

「おねがいするわ、アタシもせいぜい、同好の士を勧誘しておくから」

などという問答も案外交わされているのではないかと思うし、彼

女も自室では四股ふみや仕切りの型なんかのひとり相撲を楽しんでいるのかも知れない。

文字どおり素ッ裸の男たちの中に立ちまじって部員生活を送る彼女の心境などをインタビューできたら面白いと思うし、女性の目から見た相撲部の生活観察や彼女自身の将来の抱負（女子相撲部の設立などという企画がでてきたらと考えると興奮する）を発表してもらえたら、どんなに興味深いことだろう。

さらに進んで「奇ク部屋」の女力士大塚嬢や東浦嬢らとの取り組みが実現できたら、これは双葉山と大鵬の取り組みが見られるようなもの、女相撲ファンなら涙を流して喜ぶかも知れない。

大塚嬢、東浦嬢にさんざん打ち負かされた彼女が、帰京して同僚の部員からミツチリとけいこをつけてもらい、今度は、両嬢を東京へ呼んで復しゅう戦を試みる——というようなことになったら……小生の「花の女斗美たち」なんかおかしくてとても読めたもんじゃないし、書く方も恥かしい。

この企画いかなものか、編集部あたりで取り上げて見たら、どうでしょう。



# 奇 譚 ク ラ ブ

昭和 42 年 5 月 号

(1967年・5月号<第21巻第5号・通刊第227号>)



## 本誌の信条

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。

一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。

一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。

一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラフィヤ写真と口絵は廃止いたします。

一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



辻村隆・山本一章 対談

「緊縛モデル秘奥談義」

辻村 隆

とき 昭和四十二年二月十八日（土）夜  
ところ 大阪キタ、スーパー料亭K

○緊縛モデルあれこれ

辻「すっかりお株を奪われた恰好ですネ。私のカメラ・ハントも近頃は大分影が薄くなりましたよ」

山「とんでもない。第一キャリアが違いますよ。書いて見てつくづく難かしいものだと思いますネ。大島照代さんの巻でも、三回に亘って撮ったものを、すっかり書きつくす意気込みで始めたのですが、書いているうちに

めんどくさくなってきて、遂に最後の手段で縛り方は、フォトを御覧下さいってなことになってしまいました。よく辻村さんは続きますねえ。淡やましいとも思いますが、書くのが大変でしょう」

辻「あんたの昭和一桁の世代と違って、何しろ私は大正二桁、まあ年にしては六、七才しか違わないが、この六、七才はスタミナの点で相当違いますからね。糖尿をやってから、すっかり根気がなくなりましたよ。山本さんがオーソドックスな、強烈な縛り方をしていのを拝見して、私の十年前ぐらいを見る思

いです。私が緊縛モデル第一号の川端多奈子を縛ったのが昭和二十七年の夏ですから、あれから、もうかれこれ、十五年近く経っている。考えて見りゃ、マンネリズムにもなるわけですよ」

山「辻村さんの手掛けたモデルは五十人ばかりかないでしょう？」

辻「そのくらいは、あるかも知れませんが。しかし、次々と忘れてゆくのでネ。一度ゆっくりした時、調べて見よう」

山「特に記憶に残っているという人は、どんな女性ですか？」



辻「そうね、やっぱり一番は梨花悠紀子でしようね。あの娘は私がすっかり飼育して、Mにしていまいましたからね、どんなことでもやれました。息の長いのでは伊吹真砂子、彼女とは不思議に縁が切れず、今以て未だに何かというとかつぎ出しますからね。しかしあなたの言葉でいう、ショックだったのは矢張り何といっても川端多奈子でしょうね」

山「奇クに現われた緊縛モデル第一号でしたからね。私も彼女のあのフォトを本で見たときは、それこそショック、ショック、大ショックでしたよ。夢にまで見て、川端を若し自分が撮れるものなら、生命以外のすべてを投げ出してもいいとさえ思いましたもの」

辻「もう十五年近くも昔の話ですが、何しろ私にとっても最初に知った緊縛モデルでしたからね。箕田さんに随いていって、あの娘を震える手で縛った時の感激は今も忘れられないですね。小柄な杉芙美という『千一夜』でもモデルをしていた人に、お灸を据えての、一連のシリーズ作、(襲われる女)の時の構成も記憶に灼きついていきます。それに私や箕田さんが、当時売出しのパナポートの浜村美智子によく似ていたのでカリブソと呼んでいた愛川悦子、この人もよく協力してくれま

した。しかし山本さんも僅かな日数の間に、次々とよく撮ったものですね」

山「木村洋子を皮切りに、大島照代、大塚啓子、それに辻村さんに紹介していただいた魔子と、全部で四人ですよ。箕田さんにしきりにせがんでいるのですが、今の処後続つづかずです」

辻「でも編集長はあなたにはスゴク協力していますよ。僅かな日数で、こんなに次々と紹介したのは、おそらく山本さん以外にはないでしょう。ひとつは、あなたの『痴人の糧』の筆力を高く買ったんでしょうね。あれは実際面白いからね」

山「いやあ、もう息切れで青息吐息です」

### ○一章氏トルコ娘にベタ惚のこと

辻「これらのモデルさん以前に撮ったことは一度もないの？」

山「実は一人だけあるのです。辻村さんに白状しますけど、かなり深い関係までいった女性です。トルコ娘なんです、仕事の事で一夕交際い、数人の人と一緒に誘われる俥に行行ったトルコ風呂だったのですが、多少の酔いも手伝って、冗談に紛らわせて口説いたのが見事に成功しましてね。前後四回許りプ

レイしました。しかし撮ったのは僅か一回きりなんです。モデルとして撮る気持より、先に体の方の関係が出来ちゃって」

辻「反って言い出しにくくなった。しかしプレイの本筋の味わいは又格別だったでしょ」

山「連れ込みホテルは逆吊りが余り出来ないので残念でした。いくらでもやれる娘でした——。その代り緊縛だけは強烈そのものでした。謂わば仮死寸前まで持って行きましたからね。これ以上深くなると自分の気持が制しきれず危ないと思って手を切りましたが、あの一時期だけは女房、子供を忘れましたよ」

辻「その彼女との体験を、あなたの小説には使わなかったの？」

山「やはり使っていますね。アケミのくだりにかなり出していますよ。タマゴを使ったなんてこともそうですし、それに体毛を全部……丸坊主にだけは流石にあとが困るのではありませんでしたが——。大体毛深いのは嫌いなタチです」

辻「鞭打ちなんかどう？」

山「力まかせにやれたのは、彼女だけです。何しろ一週間近くも、あざのようになって鞭痕がとれず、二、三日寝込んだくらいですからね。ハダカ稼業のトルコ娘なので、縄跡や

鞭のきずが見えちゃまずいから、しばらく店を休んでいました。相当、金は注ぎこんだですよ」

辻「美人なんでしょ」

山「まあまあ、十人並み以上でしょう。しかし若い娘で、その時十八、九才ですといっても一昨年の四月のことですから、今年ハタチですね」

辻「よく別れましたネ」

山「自分がどうなるか分らなくなってきたのです。プレイの最中、この死んでもいいなんて、女が口走って御覧なさい。夢中になるとやり兼ねませんからね、こちらだって……。そりゃ別れて当分の間は仕事を手につかなかった。私が『痴人の糧』を書く気になったのも、ひとつは葉子と別れた心の空虚を埋める手段として選んだといっても過言じゃないんです」

辻「ヨウコさんていうの、その子？」

山「ああ、つい名前が出てしまいましたネ。

三原葉子の、あの葉子です。苗字は榎本ていうんです」

辻「榎本葉子さんね。ウン、はたちの青春かこりゃいいな、口説く必要がなくて」

山「兎も角、プレイで割切れる間はいいです

よ。それが単なるプレイではなく、限界を越えて深味に入ってゆくと怖いですよ。ズルズルと底なしの泥沼へでもめり込んでゆく見たいに、ここでもいいという際限が、自分でもつかなくなってしまふ」

辻「夜も昼もってわけ」

山「ホテルを出て、メシを喰って、又ホテルなんですネ。三日三晩ホテルを亘り歩いて、どす黒く、眼を渾ませて、魂のぬけた人間のようになって、フラフラと家に戻ったら、家内が驚天しました。狂ったとも思ったんでしょうか」

辻「そりゃ驚いたでしょう、奥さんも」

山「まあそれが峠でしたネ。別れる時、激しく泣きましたが、ホテルを出ると案外ケロッとして、気が向いたら又逢ってネといって、そのくせ、顔をくしゃくしゃにしていました——」

辻「どうしてます、その娘？ 一度会わして欲しいですな」

山「寝てる子を起すようで殺生ですよ」

辻「いや、今の山本さんなら、大分訓練が出来ているから、もう大丈夫ですよ」

山「でしよかネ。しかしいざとなれば分らないですネ。しかし辻村さんには一度紹介す

る義務があるようですね。たしか今名古屋の中区の南園町かにいる筈です。電話番号をしらせてきましたから、帰って調べたら連絡がつくと思います。私が電話すれば、どんなことがあっても飛んでくる娘です。すっかりM型になり切り、強烈な責めに押られていますから、辻村さんとプレイせよと言えば、恐らく嫌とはいわないでしょう」

辻「フォトは勿論いいんでしょうね」

山「一回きりで、これも例の私好みの、顔を滅茶苦茶に縄で縛り上げた、ひん曲った様相のフォトですが、およろしかったら、今度お会いする時に持ってきてきましょう」

辻「カメラハントいいかしら」

山「勿論、構わないでしょう。SMの世界を教えるために、奇クを何冊も読ませておきましたから」

辻「こりゃいい、近々機会があったら是非会わせて下さいよ。都合によっちゃ名古屋へでも出掛けますよ」

山「その代りといっちゃ何ですが、私にも又新らしい人頼みますよ」

○『痴人の糧』をハダカにする

辻「ところで『痴人の糧』はたしか昭和四





(写真) 木村 洋子

十年の夏頃からだったと記憶していますが、それまでは全然書かれなかったのですね」  
山「古いファンでしてね。本の方は今の型に

なって以来ずっと読んで来たのですが、書く方となると余り自信がなかったのですね。ひとつは仕事に追われて、書く暇がなかったのかも知れませんが。生活の方も安定し、暇が出来たものですから、何かの拍子に、自分も一度葉子とのプレイを足掛りにして試しに書いてやろうという気になりました。それである様な形式の、長篇といえはいるし、行詰ってしまえばほどに切上げられるようなものを書き出したのです。しかし、私の持っていた構想というものを、殆んど使い果した感です。辻村さんこそ、奇譚三十九夜物語を延々と九十三話も書かれましたが、よくネタが続くものだと感じていたのですよ。私は家中では、どちらかというと気振りに見せないタチなので、読み終ると、必要記事やグラビアだけをのこして、あっさり焼き捨てているのですが辻村さんの三十九夜物語だけは表紙をつけて、チャンと保存してあるんですよ。焼き捨ててには余りに惜しかったのでネ。こうして知己を得るようになって尚更残しておいてよかったとつくづく思いますよ」  
辻「どうもどうも。私の書きなぐりの雑文を大切にしていたいて有難いことです。

私も『痴人の糧』は、毎号楽しみにして眼を通していますが、相当書き込んでおられますね。唯、一寸気付いたところを申し上げると作中の主人公の大山にしろ、鄭にしろ、また百合子がリンチに逢う場面の特高上りの土建屋の監督にしろ、女性を縛るその縛り方が皆同じなんです。縦縄で股縛りして、横縄を、胸、腹、股とかけてゆくといった、”キの字型”の緊縛をどの男達も等しく使っている。これは山本さん自身、この縛り方が好きなんだなあと考えた。そうでしょう」

山「そう云われると、無意識のうちに、その式の緊縛を使っていますね。相手交れど縛り方交らずですな。葉子のイメージがつきまわっているのかな」

辻「女体の食卓も、たしか三回許り出しましたが、私も以前カメラ・ハントの『みゆきのパースデイ』で、増田さんがあれを試みたのを書きましたよ」

山「幾分辻村さんのヒントにしたかも知れませんが、愉快だと思ひまして……」

辻「登場人物で、女三人たしか、アケミ・セツコ・百合子でしたね。あのうちセツコでしたかね丸坊主にされたのは？ その後彼女の頭に触れていないが、彼女の髪伸びたの？」

山「あれね。あの章で丸坊主にしちゃったけど、あとあとまで尾を引きまして、余りそのことに言及していませんが、小説ではあの坊主にした時から、かなりの時期を経過させていますから、実際としても、もう大分伸びてる筈ですが……」

辻「当今、かなり精巧なかつらがあるから、丸坊主にしても外出には不自由しないけど、セツコの頭にもうちょっと時々は触れて欲しいと思いましたネ。すごく興味をもっただけに、その後どうするのかと、坊主頭に対する責めなど想像していたから——」

山「そんなに御執心でしたら、もう一度クリクリにしましょうか」

辻「いや、それには及びませんよ。しかしあなたの緊縛も大分きついんですね。どのモデルさんのものかなり縄が喰い込んでいて、犇々と縛ってありますが、『痴人の糧』そのままにそのフォートの殆んどが、眼隠し、猿轡になっている。『痴人の糧』に出てくる男共が皆一様にこれをやっていますが、これも山本さんのお好みと見えますね。しかし大塚啓子なんか、折角のいい顔がすっかり隠れてしまっただけに思いましたが、魔子の場合は恰度よかったとしても、少し惜しい気がしますね」

山「どうもあれをやらないと……」

辻「気分が出ないってわけ。これは私の想像なんです。が、あなたは、本当はとても照れ屋じゃないかと思っただけですよ。モデルにまじまじと見つめられていると思ひ切ったことが出来ない。自分のアブ性を見透かされているようで、

それがいやさに、片っ端から眼隠しをして、しかも声を立てられないように猿轡をする。その猿轡にしても、山本さんののは単に口を上から手拭か布で蔽うといったやり方ではなくて、縄を使って、口をあけさせておき、くびれるくらいに深く縄を喰い込ませてある。まああすれば本当に声は立てられませんが、すべてがそのやり方なんです。横縛りの縄は、たすきに掛けたものや、二の腕を何重にも巻いて、締め上げたものがとても多い」

(写真)

大塚啓子



山「よくまあ観察しているんですね。まあ、人、人によって、幾分くせはあるでしょうが私の緊縛は、今辻村さんが仰有った方法が確かに多いと思います。これも言い換れば、私自身、そうした緊縛が好きなんだと思うんです。しかし、私が照れ屋というのは的外れですね。私は緊縛という言葉をもっと広義に解釈しているんです。字面からすれば、きつく縛るという意味で、大体縄で体を縛るのがその意味のようにとられますが、単に体の緊縛



だけではなく、五官のすべてをもちとってやりたい。つまり、見る、言わざる、聞かざるの状態に追いやって、肉体的、精神的の両面から、責めの極限ぎりぎりを追求して、その時の女の被虐の様相を見極めて見たいと思ったのです。辻村さんにはそうした状態におかれた女性を考えたことがないのでですか」

辻「本当はそうあるべきでしょうが、残念ながら過去のモデルには、そうしたことはなかったですネ。ついついプレイという軽い気持が先に立ってしまったって……。それで今言った五官のすべてを奪ったひとがあるの？」

山「木村洋子さんには、それを試みてみました。フォトでは分りませんが、あの人は相当強烈なM女性でしょう。だからやって見たのです。フォトでは眼隠しと猿轡だけのように見えますが、実際は耳にも綿をつめ、鼻孔にもつめまして、辛うじて呼吸出来る状態にしたのです。セロテープや絆創膏を使って、カラダの各部にも栓をしました」

辻「辛抱しましたか」

山「ええ、じっとりと汗ばんでいました。やはり相当苦しかったのではないかと思います——。それを冷徹なまなこで、カメラを通して、女の動きを凝視しているのです。その

刹那の息詰まるようなプレイの味は、それをやったものでないとジーンと来ないと思うのです。思わず動悸の激しくなるような、ハッと息をつめるほどの切迫感があります。このことは私の小説でも書いたんですが」

辻「ウーン、こりゃ凄い。山本さんは私より一枚も二枚もうわてだ。私はそんなことをやったことがない」

山「誰でもO・Kするとは限りませんがね」  
辻「そりゃそうでしょう。木村洋子ならいけるでしょう。今度撮るときは私も是非やってみますよ。そうですか……」

山「緊縛といっても、強い、痛いの許りが能じゃないと思うんですね。精神的な被虐の苦しみをじわじわ味あわせてこそ、真のSとしての味わいがあると思うのですが」

辻「苦痛を快楽に換えないと嘘ですからね。縛られている女も、それを甘受して被虐の悦楽にひたり、縛る男も行為自体に欲こびを覚えなないと本当のSMのプレイとはいえませんからね。お説の通りかも知れません。ここらで、モデル嬢の解剖とゆきますか」

### ○木村洋子は逆吊りが大好き

辻「木村洋子さんの印象はどうですか？」

山「彼女は真からのM女性ですね。私が箕田さんに木村洋子を切望したのは、分譲フォトから見て、彼女の緊縛が最も強烈だったからです。それに吊りが多い」

辻「吊りに耐える女性では、彼女が一番ですね。かつて長田実氏の斡旋で、某氏の別荘の広い庭園で、桐の太木から数人掛けで、高々と逆吊りにしたのですが、その時の時間の長かったことといったら……。何しろ、われもわれもと、あちこちから、もう少しもう少しで撮るのですから、幾ら経っても誰も降そうとしない。十数分に亘りましたが、遂々呻き声ひとつ挙げず我慢しましたよ」

山「ブロックの石抱きの責めも、確かあの時のものだと言いましたが」

辻「そう、あの直後です。石垣のかたい岩石の上に正座させて、ブロックを一枚ずつ順次つんでゆきました。四枚つむと胸より高くなってしまう、あしや太腿の色が変わっていましたが歯を喰いしばって頑張ってるのですね。もう一枚積むと顎につかえちゃう。実際あの時の木村洋子のM性には感服しましたよ」

山「それだけに私は、一度思う存分縛れる女性を相手にしたかったのです。私の印象は大体力メラ・ルポの『この女と』で言い現わし

ていますが、しかし確かに無口な人ですね。いくらきつく縛っても痛いといわないし、むしろ陶醉しているかにすら見えるんです。両脚を拡げて逆吊りしたのなど、随分長かったのですよ。その上、眼かくし、猿轡の上、耳栓、鼻栓なんですよ。五官の感覚をすっかり奪われて吊り下げられているのに、うっとりしたような感じを受けるんです。自分からは降してくれといわなかった」

辻「猿轡で、いわれなかったのじゃない？」  
山「何とか口はモグモグ動かせますものネ。私にとっては緊縛モデル第一号だっただけに

実に身内をつきぬけるような強烈なショックを受けました。辻村さんは彼女を何回撮られました？」

辻「そう、五・六回は撮っているかも知れませんが、せんね」

山「どうして、今迄カメラ・ハントに書かなかったのです」

辻「書きたいと思っていたんですよ。ところが彼女の場合、既にかなり前から撮っていてあの当時は、三十九夜物語にもっぱらでネ。カメラ・ハントは三十九夜物語が終わったあとです。三十九夜当時から、彼女は既に本の分譲フォトになっていたんですよ。とすると、

木村洋子は要するに、私がカメラ・ハントしたのではなくて、奇巧の緊縛モデルの中に列していたという恰好になっていたのです。だから大塚啓子さんだってカメラ・ハントにはないのです。彼女達をハントで書いていたら随分あったな。あの頃は、梨花悠紀子を最初に書いた『鑑賞用緊縛女性』なんていうタイトルの単発でしたからね」

山「東浦ひかるは、『私を責めて下さい』で登場したし、竹野ひろ子は、『おしめカバーガール』でしたネ」

辻「よく覚えてますね。あれらを含めて、現在のカメラ・ハントのはしりなんでしょうね」  
山「木村洋子や大塚啓子を、辻村さんがあとした筆法で、既に発表されていたら、私もとても書く勇気が湧かなかったと思います。幸いにも、木村も大塚も、辻村さんのペンの組上りのついでになかった」

辻「盲点ですね。こんなに手近くあったのなら、何も苦勞しなくとも、チョイチョイと彼女達に出会って、カメラ・ハントのネタに使えばよかったと思いますよ」

山「辻村さんは木村洋子をどう思います？」  
辻「おとなしくていい子ですよ。唯、彼女の場合片通話でネ。こちらからは連絡がつかない。

つかぬこともないが、彼女から言っていない時は、まあダメですね。それだけに一方的で融通がきかないんですネ。ここ三年許り一年に一回、それもきまって天神祭前後なんです。それで私は彼女を『七夕の女』と呼んでいるんですよ。一年に一度天の河で逢うみたいだから。しかし何年経っても、あの子は変らない。未だに独身ですよ」

山「そう独身ということですね。言葉が何か口の中でブツブツ呟やくような喋り方でしょう。だから何を言っているのか少し聞きにくいところがあります。でも、あの凄徹底したM性は貴重ですね」

辻「あんた彼女を叩いて見たの？」

山「構わないかってきたら、黙ってうなずいたから、バンドでかなり強く引っぱたきました。逆吊りしてですよ」

辻「喜こんでいたでしょう」

山「猿轡から洩れる呻きからは、苦痛より悦楽を感じたですネ」

辻「それにスゴく蠟に強い」

山「辻村さんもやったのですか？」

辻「三本ぐらい固めて、それも肌にぐんと近付けてネ。蠟涙は高くから落涙させると、余り熱くないが、体に近々とよせてこぼすと、



さめる間がないから肌をさすように熱い」  
山「どこへコボしました?」  
辻「恐らくあんたと同じところでしょうね。」

(写真)

大島 照代



一番敏感なところといえは察しがつくでしょう」

山「じゃ同じだ」

辻「すっかり蠟涙で蔽われてしまった」

山「私は蠟燭を短くきったやつを、彼女の体に六本許り立てて、勿論それに全部火をつけてとりました。カメラ・ルポに送ったのがあのフォトは、流石に刺激が強いのか、とうとう箕田さん、オミットしてしまった」

辻「それでも私のハントのフォトなんかにくらべると、ずっと大胆、強烈ですよ。フォトの面での相撲では、完全に寄り切られましたよ」

山「辻村さんは最初から、カメラ・ハントを計算して、そのつもりで撮っておられるし、新米の私なんか、とてもその余裕がない。あとで、しまった、こんないいポーズ、二、三枚ぐらい何かでカバーして撮っておくんだっただがと気付くが、その時は夢中です。ついつい露骨なもの許りとしてしまいます」

辻「それが本当でしょう。遮蔽したのなら、高いモデル料をわざわざ払わなくとも、分譲フォトにすごくいいポーズのがワンサとあります。所詮人間本来の欲望なんですよ。しかし山本さんは比較的オーソドックスですよ」

山「要するに木村洋子さんは、私達のSの願望を十二分に堪能させてくれる超M型の稀少価値のある女性です。欠点を強いてあげればアースが少々いただけない」

辻「同感です。七夕の女として、一年に一度ぐらいい撮りたい人でしょう?」

山「その通り、忘れかけた頃に、再びSを満足させてくれる人としては、この人に及ぶ女性はないでしょう」

○天真爛漫笑いこける大塚啓子さん

辻「大塚さんは、どうでした?」

山「思ったより小柄な愛くるしい人ですね。私はもっと大柄のグラマーかと思いました。それに無邪気でよく笑う」

辻「最近又一段と美しくなりました。整形したという噂だけど」

山「数年前の彼女の顔立ちとは確かに違いますね。体がピーンと張り切っていて若々しくて水々しい」

辻「彼女だって緊縛モデルの方じゃベテランに属する方ですからね」

山「それがちっとも年をとらない。むしろ以前の私の持っている分譲フォトより若いんで

すからね」

辻「オッパイなんか、ピンと張り切っていて黒くないでしょう」

山「体全体の線がどこも崩れていないのも驚異ですネ。惜しむらくは、あの娘は木村洋子と違って、真からのMではないですね」

辻「かなりの緊縛にも堪え、何でもこちらの言う通りよくやってくれるが、一寸文句が多い。黙っていられないタチなんですネ。ここが締りすぎたとか、足がゆるんでいるとか、首がしまるとか、手首が痛いとか、いろいろと注文が多い」

山「私の場合、案外素直でしたが、箕田さんや辻村さんなら甘えているのでしょう、それは……。しかしよく笑うので困ります。本当は苦しうに眉をしかめて苦悶の表情をして貰いたいのに、ニコニコしているんです。あれじゃちょっと緊縛感が出ないんですね」

辻「元来が朗らかな陽性の人なんですネ。私は五年許り前、箕田氏と撮って一度えらい失敗したことがあります。あんたも分譲で御存知かも知れませんが、白の囚衣をきせての吊り責め、荒縄縛りをした時なんです、うっかり三五ミリの装填の時、フィルムの端を浅く挟み込んでしまって、三六枚撮り終えても

いくらでもシャッターが廻るんです。呀っと気付いてよく見たら、全部空撮して、最初から一枚も撮れていない。あの時は実際口惜しくて、泣き出したいような切なさでした。フィルムが廻っているかどうか確かめなかったんですネ。それというのが構成の方にすっかり気を奪われていたんです。あの時は残念だったな」

山「分りますネ。私も過去二回許り、家庭の写真でそんなことがありました。空廻し一回と、もう一度はシャッタースピードが千分の一になっていたのを気付かなかったのです。それにMX接点の間違いとか、よくありますね。二度と撮れないチャンスのは、よくよく確かめるべきですね」

辻「大塚啓子は露出を嫌うでしょう」

山「ええ、その点は、木村洋子とすごく対照的ですネ。木村洋子はむしろ自分から進んで体を開けますが、大塚啓子はかたい。少し無理強いしようとする、Hねって笑いで首を振ります。だから開股位のような緊縛はさせません」

辻「そのくせ案外開放的で大胆なんです。東浦ひかるやいれずみの清子とも、白昼堂々女斗美をやったり、東浦ひかるの浣腸を自分の

手でやって見たりするんだから、どうも解らない。自分はされるのはいやだけど、他の女性のされるのには興味があるんです」

山「『花と蛇』にもそんな女性が出てきますが、SMのプレイは好きなんでしょうね」

辻「箕田さんの話ではかなり好きな方です。でも自分は局外者の立場で傍観していたり、自分もやって見たりするのです」

山「とすると、案外S的なものをもっているんじゃないでしょうか」

辻「持っているでしょうね。何しろ長年の間かなりのモデルとも一緒にあって、SMの何たるかは充分知っていますからね。箕田さんが甘やかしたからかも知れませんが」

山「ああいう風に無邪気に天真爛漫に振舞われちゃ、つい可愛いくもなりますからね。箕田さんにとっても、大切なモデルをよく撮らせてもらったものだ、と、すごく感謝しているのです」

辻「私の場合、大塚啓子はいつも箕田さんと一緒に、三、四回ぐらい撮ったかしら。私はいまでも彼女の愉快な言葉を覚えているのですが、小柄なくせに、どう辻村さん、私グラマーでしょう」といった言葉が忘れられないんです。絹川文代が当時、真のグラマーっ



(写真)

魔子



ていう感じでしたので、私は彼女に「自称グラマー」って尊称をつけました。しかし可愛いトランジスタ・グラマーですがね」

山「自称グラマーか、これはいい」

辻「彼女の黒髪が、おしりの辺りまで届くぐらいに伸びていた頃は圧巻でしたよ。乱れ髪の緊縛は最高でした。あの黒髪を惜しげもなくプツリときった時は、まったく他人事乍ら惜しくて仕方なかったですね」

山「その頃の彼女はフォトだけですが、現実

の大塚啓子の短かい髪も、それはそれなりによく似合っていて可愛いですよ」

辻「大塚啓子のいいところは、明朗快活無邪気、はきはきしていて、ちっとも暗いところのないところでしょね」

山「悪いところは露出をきらいなこと」

辻「それは、私もあんたも悪趣味だからさ」

### ○大島照代は緊縛より浣腸責めむき

辻「やっと先日、大島照代さんを撮りましたよ。カメラ・ハントは、あんたの二番煎じになるのもう書きませんよ」

山「お株を奪ったようで悪いですね」

辻「でも私が書いていたら、又ぞろ彼女との出会いから緊縛への顛末を、長々と書きつらねて、肝心のいいところはチョッピリになっ

ていたかも知れせんよ。それにスタミナから考えても、とても山本さん程のフォトはものに出来なかったでしょう。事実、先日だって、緊縛は二ポーズだけ。その代り浣腸をやりましたけどね」

山「えっ、やりましたか。私も余程そのことを言い出そうとしたのですが、彼女、時間を気にしてしましてネ。緊縛フォトで精一杯でした。それで本当にやりましたの」

辻「緊縛はあんたのフォトでもう充分でしたからね。三回に亘るプレイのあれ以上のものは、今の私には到底望めそうにないと思いますよ。最初からそのつもりで、あの日、イルリガートル、エネマ、ポンプなどを持参しました。プレイに対する既成観念はあるし、年配も小娘ではなくて、一応過去に経験のあるような口吻でしたので、改めて口説く必要もなく、その点はラクでした。縛り方も逆吊りも海老縛りも、反転縛りも既にあなたのフォトで拝見済みですから、それ以外のものでは、菱縄の前手縛りと、後手の高小手で、二の腕をぐいと挙げさせて両手を背にうんとあげさせて首から前へ廻し、股に通すやり方のあれです。五、六枚ずつ撮ってあっさり終り、いよいよ浣腸です」

山「浣腸も縛ってやったのですか？」

辻「ええ、これはありきたりの胸縄の後手縛りなんですが、私が持参したビニールの風呂敷をたたみの上に敷き出したものですから、大島照代は不審に思って、何をなさるのと聞いてきました。今に分るよって言って、珍らしく山本流の目隠し、猿轡をはめましてね、仰向けにして、片足の足首に縄をつけ、高々と鴨居に引っ張って吊り下げ、風呂の湯を汲んできたのです」

山「抵抗しませんでしたか？」

辻「変なことなさないでネと、猿轡の下でそれらしい言葉を口にしていましたが、勿論それは判っきり言葉になりませんよ。私は大島照代のM性からすれば、浣腸も許容するのではないかと私なりの判断で考えたのです。

若し嫌がればすぐ中止する腹で、カメラにリリースをとりつけて三脚にのせ、最初はほんの少量をポンプに吸い込んで、挿入して見ました。彼女は自由の片足を固くして少しバタつかせましたが、案外すぐ力を抜きました。ポンプで三回許り注入すると何か猿轡の下で言ってる様でしたが、さして意に介せず、つぎはエネマで六、七回許り注入しました」

山「ウーン、私もやりたかったな。どちらか

というフェミニストで、相手の顔色許り窺がっているから、とても辻村式にはやれそうもありませんが……それで」

辻「ここらもち腹部がふくらんでいた様に思いますが、さあ全部で一リットルぐらいは注入したでしょうかな。吊っていた足の縄をといて抱き起し、眼隠し猿轡の尻トイレへつれてゆきました。私が介錯してトイレの上へ押し上げ、リリースを握っています。流石にいやだったでしょうね、なかなか排出しないんです。五分以上もその儘じっと待っていましたら、とうとうあきらめて元気よく……」

山「私の『痴人の糧』を地でいったみたいですね。でもあとが大変だったでしょ」

辻「始末は私がして、再び座敷へ抱きかかえて連れ帰り、縄や眼隠し猿轡をといいたら、大急ぎでホテルの浴衣を引っ掛けた後、向うをむいてうつむいているんですネ、いつまでも」

山「恥かしかったんでしょう、きっと」

辻「私も黙った後で、カメラや縄をバッグに片付け始めたら、向うをむいた後、『もうお撮りにならないの』と蚊のなくような声で訊ねてきたのです。『ああ、いいよ』って応えと、『でも一時間も経っていませんわ。本当に構いませんの』と、その声は済まなさそ

うな調子なんだナ。『浣腸なんかして怒った？』ってきくと、微かに首を横に振りましてネ。これなら大丈夫と思って、大島さんのそばに近付き、『御免ね、でも一度だけやって見たかったんだよ』ていったら、『いいんです。気になさらないで』という返事です。食事して別れる時に、子供さんへのお土産だといって、バームクーヘンの大箱を押しつけたら、とても喜こんでいましたよ。別れ際に、『箕田さんにも山本さんにも、今日なされたこと内緒にしてね』といわれたが、ここで喋べっちゃまずかったかな」

山「喋べってからでは遅い。まあいいでしょう。彼女の羞恥がそういわせたのだから」

辻「彼女、奇クを読んでは？」

山「らしいですネ。例の彼女についている男性が読ますのじゃないでしょうかネ」

辻「すっかり私のことばかり、お喋りしてしまっただすネ。あんたもどうぞ」

山「私はカメラ・ルポで書いた通りですよ。あれですっかり。あれ以上のことはしてない」

辻「あの人もおとなしいいい人ですネ。木村洋子程のM性はないにしても、兎に角従順ですよ。それに人妻らしい様子から、プレイの



経験はあるとにらんだね」

山「そりゃ、あるでしょうね。私の縛りなど手加減せず相当強くやりましたが、呻きはあげても止してくれとはいわなかった」

辻「家庭の事情が、少しある様な気がしますね。しかし例の男性は何者だろう？」

山「さあ、分りませんね。しかし私も監視つきじゃ、プレイしていてもさっぱり興がのらないから、彼がついてくるのなら、よす氣でいたんです」

辻「私の場合、箕田さんが万事段取りしてくれた上で会ったから、そんなことはなかったが、少々不愉快かも知れませんか」

山「あの人は、こちらのやり方次第で、もっともっと強烈なものが撮れそうな氣もするんですが、ここらあたりが、いいところでしょうか。あの人のいいところは、どんなポーズでも許容することと従順なこと。それに体が割合柔かいこと」

辻「欠点というと、時間を少し気にする。子供さんのこともあるのですが、それに人妻で少し体の線がくずれているくらい」

### ○魔子のじゃじゃ馬ならし

辻「紹介したものの、魔子には大分手を焼か

れたようですね」

山「お察しの通りです。何しろ相手は女王氣取りの氣位の高い娘でしょう。それにどちらかというところと来ているから、大分困りました」

辻「私も彼女の命令で、ウズウズし乍らも、カメラ・ハントにしていけないのですが、実はもう四回許りも撮ってはいるんです。しかし顔を出すのはイヤとダダをこねるので、未だに書かずじまいです」

山「私の場合撮り終って、魔子に書いていいかどうか訊ねたのです。そうしたら、辻村さんに聞いてくれていわれたんです。辻村さんが私のフォトを見て、魔子の顔が、眼隠し猿轡で蔽われているので、差支えないだろうと仰有ったので、書いたのですが、構わなかったのですか」

辻「あのフォトなら、全然誰だか分らないものね。いいでしょう。今度逢ったら山本氏書いたよって言って、あんなのカメラ・ルポ見せてやりますよ。しかし魔子はプレイしてやっているという氣が抜けないから扱いにくいね」

山「散々注文をつけられましたよ。だからフォトでものにしたのはいくらありません。

少々業腹だったもんだから、じゃあマコがSになつてくれというと、途端にいきいきし出して、縄を握るや、いかにも手馴れた様子で私を縛ったんです。それもかなり強い。Mの男性なら本当におあつらえ向きですが、私にも少々M氣はあるとしても、やはりSが勝っているから、真底からはMになり切れず陶酔も出来ませんでした。辻村さんは？」

辻「いつか奇クサロンに書いたでしょ。甘美なる降服って、魔子の神酒も頂戴したし、私の顔の上へ馬乗りにもなった。それはそれでよかったと思うんですよ」

山「そんな点はいいんですが、唯、ベラボウにふっ掛けて来ますね。会社の重役か、馬に喰わせるほどの金がなくちゃ、とても魔子とは長くつき合えない」

辻「それがあの娘の困ったところですが、何しろあれだけの美貌だから、安売りしたくないでしょう。唯、M族にとって見れば、それだけ使った報酬は充分に与えてはくれますがね。まあ、古い引例だが、M族は紺屋高尾でも相手にするような氣でないときき合えません。私にだけは別ですけど」

山「魔子も辻村流の口説きには参っているのですね。しかし、もう一度撮ってみたいです

な。それともフォト抜きで、魔子の臀下に組み敷かれて、Mの陶醉に耽溺してみたいような気がします」

辻「一風変わった、スゴく面白い娘なんですネ。どんなアケスケな口調で、そのものズバリのプレイの話をしても顔色も変えない。若い娘の前で平気でSMプレイの話を出来るのは、あの娘ぐらいのものです。大抵の女性ならいたたまれなくなる様なことを喋べるんですがね」

山「そのうち、あのじゃじゃ馬娘を調教し、飼育出来るような人が出てくると痛快なんです」

辻「魔子のいいところは、プレイをあけすけに喋べれ、Sの女王にさせておけば満点。Mにして緊縛しようとすればとてもじゃない。そんなところですね」

山「魅力ある点は、私の撮ったモデル中一番です。しかし非協力的な点も一番」

### ○彼女達のあとにつづくもの

山「辻村さん、カメラ・ルポは書きませんから、ひとつぐらいお据分けして下さいよ」  
辻「数日前に一人撮りました。カメラ・ハントとして書く予定ですが、この人も大島照代

さんとよく似た境遇の、子供一人ある未亡人ですが、体の柔軟なのに一驚しました」

山「何ていう方ですか？」

辻「笹原八千子。学生時代はヤッチンって愛称で呼ばれたそうですが、彼女からはそんな感じの受けない、淑やかな人妻タイプです。モデル志願の人で、年末に辻村個人の名指しで来たので箕田さんが廻してくれたのです。三重県津市の人で一寸遠いのですが思い切ってやっと出逢い、どうやらものにしました。今迄にない強烈な縛り方ですが、随分M性を持つているらしく大抵の事は我慢しました。股の間に頭を押し込んだ、アクロバットそこ

のけのものを撮ったのは始めてです」  
山「是非紹介して下さい。お願いしますよ」  
辻「あなたの小説のファンであるらしく、ききりに山本一章氏って、どんな方なんて、書いていましたから、あなたに会ってみたい気持ちも充分あるようです。早速手紙を出して連絡してみることにします」

山「愉しみが早速出来ましたよ。ひとつ腕にやりをかけていいものを撮ってみます」  
辻「彼女のことを、もっと詳しく話せばいいんだが、執れこれはカメラ・ハントで書く気でおりますから、ここで喋べると重複するで

しょうからね。まあ精しくはハントの方をどうぞって言うところです」

山「堺市に住んでいる河森真理子さん、あの人はダメなんですか？」

辻「妙なものでネ。やいやい手紙が来て、返事を出して、いつでも出会える態勢をつくっておき乍ら、この魚は逃げないと思うと安心してしまつて、未だに出会っていない。執れ撮ってあげるつもりだけど、ちょっと要望がドギツイのでね。数日前しびれをきらせた彼女から、天星社宛に通信がきて、箕田さんからの電話の模様では、私をあきらめて、あなたに御執心らしい」

山「本当ですか？」

辻「電話なので判っきりしたことは分りませんが、どうせ彼女の通信が本にのるでしょうから分ると思います。何でも、内容の様子では、私にいくら頼んでもダメだから、カメラ・ルポの山本さんをお願いします、と書いてあるそうですな。それが駄目なら、読者の誰でもいいんだって——。どうして、そうせうのかなあ」

山「そう聞いたら黙っておられませんネ。早速編集長に頼んで見ましょう。いや、しかし辻村さんが撮る気なら悪いですネ。その次で



## 新入女囚仕置図

## 倉 真 砂

主家の金をごま化したという、あらぬ疑いをかけられたお篠は、無実の罪によって入牢を申しつけられた。今年十七才になったばかりで生娘の彼女は、生来の勝気な性格と潔癖さから、新入りの牢生活になじむことが出来なかった。

牢役人に対する女囚の屈辱的な礼儀作法も生娘としての羞しさから、とかく無視しがちであったため、牢役人の怒りをかった。むちむちと肉づきのよい小娘を、どのようにしていたぶってやろうかと、役人たちは舌なめずりしていた。先ず第一の仕置として、吟味所

の未亡人と塙の人、くれぐれもお願いしておきますよ」

辻「まあ、まかしといて下さい」

山「これで今年は、私の生涯で最良の年になりそうですな。楽しみですよ」

の板場で首枷をはめられ、ローソク責めにかけられることになった。

中腰のまま、豊満な下半身をむきだしにさ

れたお篠の肌の白さがどす黒く汚れた板の間と鮮やかな対照を見せています。火のついたローソクが目の前にあるので、彼女は自分のあられない恰好に気づきながらも、身動きすることもないので、このような構

辻「じゃあ、この辺でお互いの健康を祝して乾杯といきますか」

(録音テープより取捨選択しました。筆責辻

村隆)

◎挿入フォトは山本一章提供

図で女を責める方法として、外にも種々考えられますが、ローソク立ての替りに便器を置いて排泄を強要されながら耐えているといった設定も面白いでしょう。



# 稿談 性風俗資料入門

戦後篇

斎藤 夜居

## 一、性の開放、始まる

やわらかい芝生に寝ころんで青い空を見あげると、敗戦都市東京の秋空は美しくつめたく澄みわたって、小さな綿雲が二つ三つ浮かんでいる。深い緑と影がよく調和したお濠のむこうに、いままでは庶民の生活から余りにも遠くかけ離れていた神秘なお城があった。その中に住む八人Vのことが、何かと取沙汰されている今日此頃の世のありさま――。

女の髪を愛撫しているのは、青い眼の異邦の兵士で、囁きがやむと、口びるを寄せてきた。氣力を喪失した日本の青年たちと違って

バター、肉、精良なパン、有りあまる豊富な食糧に養われた精力のつよそうなおとこだ。娘は若し、もっと言葉が通じたら、きっとこう言っただろう。

「ここは、天皇さまのお住居にもっとも近い広場で、むかしだったら、おそれ多くて、とても恋人たちの憩いの場所にするなんてなんかできませんでしたわ――と。

だが、戦勝国の兵隊と敗戦日本のムスメさんとの会話は、ややこしいことは一切無用でチューインガム、洋煙草、チョコレート、食糧品、缶詰、そして兵営からくすねて来たレ―ション（軍事携帯食）だってかまわない。それらの品々は飢えきっている日本の娘たち

には万の言語をついやしても果せない目的を人種国籍の相違を転々ととび越え、勝者の猥慾を易々と満したのである。白日下の芝生の松影が野合の場所となろうとは。誰かそのような日を予想し得られたであろうか。昨日のにくしみは何処へ行ったのか……。敗戦の生んだ性風俗の乱れは、もっとも神聖なるべき広場からうまれた。

始め、まだ米軍が神奈川・横浜に進駐した当時は婦女子に対する暴行におびえて、神奈川県当局は各学校へ非常措置として、その地区の女生徒は授業を中止してよいと伝達した。また「米軍と女性・重ねて御注意・眉墨が生む錯誤」と題して、すでに婦女暴行数十件に





「完全なる結婚」表紙

達しているので、女性は外を歩く時はキチンとしたモンペなりズボンなりの服装をするように。どくどくしい口紅頬紅で、しかも浴衣がけで米軍の歩哨線など歩けば、娼婦としか思われぬから不祥の事件に巻き込まれぬようにと注意している（読売報知、昭和20年9月5日）。このころはまだ米軍は東京まで来ていなかった、我こそ東京第一報と青い眼の記者たちが乗り込んで来たのが九月三日であった（朝日新聞）。

私は敗戦の日八月十五日から、その年（昭和20年）の十二月三十一日までの新聞を以前に精読したことがあった。此処では主題と余

りはなれない程度で風俗の変遷と時代と思想の移りかわる様子を書物・雑誌の窓から眺めて見たいと思っているが、当時の新聞の読後の私感を少しだけ述べれば、戦争が終って、いきなり急激に芝居の舞台が回転するように（戦後）が始まるわけではない。いちいち記録を示す必要はないが、分り易く表現すれば敗戦の日からの一日一日というのは、テレビのボクシングなどで、勝負のきまった瞬間をビデオテープのスローモーション撮影を一齣々々再現して行く、あのやり方を見るのと同じだ。確実に毎日々々が変化しているのだ——然かも、それが負けて行く実感の進行なのだから、まったくやりきれぬ、見るのが辛いだから忘却の中に人生の真実を見つめようとした破れかぶれの詩人に、世代の青年たちが共感を持ち続けたことは無意義ではなかったと思う。そのことは風俗出版物の世界に就いても謂える。たとえ一冊の桃色雑誌・カストリ雑誌だって風雪を耐えて来た涙と埃のしみ跡があるからだ。

◇ ◇ ◇

#### 『共学資料』

#### 『肉体芸術—THE PHYSICAL BEAUTY—』

この二誌は今日では真の真接関係者及び研究家の書庫以外には保存されていないと思う私も『共学資料』は三号と六号の二枚、『肉体芸術』は三号一枚だけきり持っていない。共に日本生活心理学会・日本精神分析学会の高橋鉄氏の責任編輯に成るものである。タブロイド新聞型4ページのもの——いま拡げて見ると紙は黄ばみあちこち破れて、印刷・用紙事情が最悪の時期に刊行されたので、披見するたびに痛むので、まるで腫物にさわるような気持である。

この機関紙発行の主旨は「青少年と成人との、性教育綱領」と題して十五の項目を掲げている、次に要約して見よう。

性觀念が歪めば人生が歪む。その為、性教育は、幼児期から老いて棺を蔽ふまでの必須課題と信じる。このことはフロイドから精神肉体医学・人生生物学に至る法則である。性慾は幼児にもあるから、軽蔑し瞞着してはいけない。

「大人」の性教育をまづ行なはねばならない彼等は旧来の陋習により、性に対しては想像以上に無智であり、抑圧的であり、しかも脳と閨房内の犯罪者である。いはば偽

善的な神経症者（文化犯罪人）である者が多い。殊にアカデミックな教育を受けたことのみを唯一の武器として地位を得ている輩は殆んどそうである。昔々地動説や進化論が迫害された如く「断崖」されるのを覚悟しなければ性教育運動は完遂されない——エリス、フロイド、ヒルシュフェルド、サンガー、ストーブスの闘争史を思へ。日本でも、山本宣治、安田徳太郎、小倉清三郎の輝ける苦闘をみよ！

従って、この運動は縁をはみ「大学教授」と称する椅子に恋々たる「先生屋」には出来ない。又、観念的文字を羅列し、哲学の「神秘の霧」で青年を毒する売文先生にも到底期待し得ない。性の実態を知らぬ者は、売文する勿れ！

何物をも恐れぬ「一精神分析士・高橋鉄」が、果敢な一部の良心的学界人及び為政者から支援され、性学者を代表し、幾多の青年の悩みを救っている。

恋愛、結婚、破婚、同性愛、自慰、遺精、夢精、不能症、冷感症、家庭不和その他凡ゆる人々の錯誤を犯させる深因「性」の重荷を一人一人解決しよう。性の啓蒙は厳粛であり、血みどろである。

大要以上の如く述べている。この『共学資料』三号の内容は殆ど高橋鉄一人の執筆編集で、丸木砂土、矢野目源一、武野藤介、原比露志、式場隆三郎、佐藤紅霞などという軟派の文人たちが短章を寄せているだけ。この当時は「高橋鉄」自身の啓蒙宣伝時代で、彼が何処にでも行く先々でばらまいた大型名刺は有名である。その裏面には種々の肩書のほかに、次に記す自己紹介が印刷してあった。

一九〇七年秋、芝仙台邸内に出生せるA B血液性格者、幼にして竜溪矢野文雄先生を敬慕し、そのクントウを受く漸て松本亦太郎先生の実験心理学、芸術心理学の教へをえむと日大心理学教室に入る、後意識心理学の視野狭隘なる袋小路を去りTIP Aに赴き、精神分析学をきわめその見地より論攻を世に問うこと既に廿年、一九三七年フロイド賞を褒叙に授けらる傍ら宣伝技術家協会を率い、諸官庁諸会社の顧問、宣伝部長を歴任し、寸暇に文芸春秋社、新潮社講談社等へ心理小説を、放送局より劇を許多発表せり

彼自身で書いたのだから、まったく間違い

ないものである。この名刺をもらった人は例外なくおどろき入ってしまう、と当時の記録にある。この調子ではたちまち「敵」と「味方」を同時に作ってしまうことは必然の現象で、その師、大槻憲二（註、フロイトの訳業のほか著書多数）とも不和を伝えられた程、その宣伝活動は目ざましいものがあった。書物・雑誌を資料とした戦後性風俗を追究すると、必ずどこかで「高橋鉄」の眼が光っていることに気づく。連隊旗手のように第一線の先頭に立っていたり、あるいは参謀本部の奥にいて表面にその姿を現わさなかったり、出沒変幻をきわめているが、その本質は「性」ジヤ・ナリス、ストである。一つの敬称を捧げれば「不死身の」と冠詞を加えてもいい。性学者ではあるが、性医学者ではない。敗戦後の日本では過去にはなかった新種の人物を各分野で生んだ——この人もそのひとり。『共学資料』のエキスは、後に多数の性啓蒙著書の内容において昇上開花されているので、その種子と耕土を知る興味はあるが、今日の高橋氏を知る者の眼から見れば、何んともいうにいわれぬ痛ましい過去の記録として映る。真実をいうことの啓蒙と宣伝が、官憲との争闘を直ちに意味するのは「セックス」の世界だ



けであろう。この機関紙上で早速に△問題▽を起しているの、その件に就いて……。

もう十余年も前のこと、わたしが機関誌に

### カストリ雑誌の種々相

雨後のタケノコのように、ぞくぞく生れて泡沫のように消えて行った。



「逮捕状」をもって、わたしのところへ某署の係官総勢すぐって乱入して来た。

わたしは、ダ・ヴィンチの解剖図は、まことに科学的な人道主義精神で、精緻に描き出した世界の宝であること、海外では権威をもって公開されていること等々をハッキリ断言し「ワイセツ図画だったと認めてもらえませんか」という警察のカマをつっぱねたのである。勿論、この図は私の斗いによって現在は公認されているが。

（「せっくす・かうんせりんぐ」昭和35年刊より）

と、その著書で述べているが、だがその△公認▽された答の図を函に印刷した「高橋鉄コレクション」（昭和37年、展望社刊、初版）は発禁となった。これと同じようなことは「肉体芸術」三号に掲載した裸体写真でも問題が生じ、警視庁係官は陰毛ではないかといひ高橋氏は陰翳<sup>かげ</sup>だと言張って通してしまつた珍問答を展開、この件などはまだしもユーモアを感じる——。『共学資料』『肉体芸術』共に昭和二十三年度中に発行し、一枚二ツ折で一部五円、十円、という定価で頒布した。拡げればタッタ一枚の紙べら、当時としては眼

をみはる程の高価で、日本一高い新聞といわれた。ご参考までに記すと、朝日新聞を例に取れば、昭和二十三年度には三回も紙代は変更になった——一月から四月までは一ヶ月分二十円、一部売六五銭。これは前年からの引継価格で、五月には一ヶ月二十七円、一部売八五銭。七月は一ヶ月四十二円、一部売一円五十銭。九月になって又々上り一ヶ月四十四円となり一部売二円となった。——ついでに記すと当時は朝刊のみで、夕刊はなかった。夕刊が出るようになったのは昭和二十四年十二月から。

尚、当時よく人々に知られた『サン』写真新聞は一ヶ月四十六円、一部売二円だった。

以上の△新聞▽という私たちの日常生活と密接した物価から考えても、戦後のインフレーションというものが如何にはげしかったかお分かりかと思う。これだけ変る世の中だったら、人心の異常化は避けられない。

『共学資料』と『肉体芸術』は、印刷型式は新聞のかたちだったが、月二回の発行であったから、戦後の気運に乗じた△高橋鉄宣使(紙)▽の第一声だったと見るべきである。

『共学資料』は第六号を以て終り、雑誌『人性美』に变身する。次に資料という意味で同

誌後記の「発送部より」の全文を写す。当時の関連出版物の書名を幾つかひろい出すことができれば。

毎日毎日、全国の会員と客員から寄せられる御報告や御激励、それに、分析指導、相談、入会申込に対して重要な御返事は高橋氏が書かれる『性典研究』『肉体のスタイルブック』『共学資料』一二三、有志の方へ研究会のお知らせ四回、忙しい半年でした。その他、御希望の方へ『異常犯罪の分析診断』『ミス日本審査報告書類』『人間復興』『ヴィナス』『真珠』や、特に御依頼されて斡旋した貴重文献も全部発送済。又、学会維持費お寄せ下さった方に資料写真等を御送呈したりお貸出ししたり。

とにかく、この誌は△性の開放▽という時代の潮流に乗じて、おもしろい程うれた。高橋氏の身辺・周囲には新旧性研究家を自称するあらゆる人材が寄り、性を美術、科学、医学、文芸、風俗、書誌等々あらゆる部門から考究せんとする論客が雲のように集り、開眼させられた△性狂徒▽たち高橋ファンという学会信徒は全国的なひろがりを展開して行く

準備工作が着々進行した時代である。当時を回想して、次のように語ったことがある。

「あの頃は本当におもしろかった。全国的に支部を設置して、発行部数も鰻のぼりで、さてこれからという所で、北海道の支部長をしていた男が、誌代の全額をつかい込みしてト走ってしまったから、これが莫大な赤字になって、共学資料はあっけなくつぶれてしまいました」(昭和41年1月24日談)

◇ ◇ ◇

昭和二十年という年は今日から回顧すればまったく組織・文化共に荒廃に陥った時期で私はこの年の敗戦の日から十二月三十一日迄の一日一日の出来事を書いた△歴史▽があっても良いと思っている。昭和二十一年になると、敗戦第一夜が明けた年で、国民は昨日までのことと、今日からのことを新たに真剣に考え始める。△復興▽などという言葉が矢鱈につかわれ、大正震災後の帝都復興節の流行歌なども思い出されて、悲惨な中にも一条の光明が認められてきた。——此処では戦後史をくり返すのが目的ではないので、次に戦後のベストセラーに就いて眼を向けて見たい。

昭和二十一年は『旋風二十年』から始まり尾崎秀実の『愛情はふる星の如く』が続き、



新生社版の荷風の『腕くらべ』。三木清の『哲学ノート』。そしてサルトルの『嘔吐』の実存主義というのが知識人に受けた。翌二十二年になると板桓書店発行のレマルクの『凱旋門』がじつによく読まれた。それと並んでヴァン・デ・ヴェルデの『完全なる結婚』これは戦後におけるハセックスものVの走りである。相当のご年配の方々もよく読んでいた。——

購合（狭義の性交をも意味します）は、陰茎発禁になれば宣伝効果百パーセントで、かえって売れる儲るとよろこんだ時代は過ぎた。カストリ出版社は発禁処分の経済的打撃に堪えられず、遂には創刊号だけで往生してしまう。思えば、カストリ雑誌は戦

を膣内に挿入することに始まり、両者の快美感に於てその最高点に達し、精液の射出及び受納によってその目的を達し、陰茎が膣を去った時に終わります——などというわかりきった事柄が、明解にハ伏字ナシVで書いてあった。また、活字に飢えた学生たちが列を作った。また、西田幾太郎全集』を手に入れようと毛布持参で岩波書店前で徹夜したのもこの年後日本文化の青春を表象するニキビであった。また、不潔な皮膚に伝染したカイセンだったかもしれない。そう思えば数え切れないその発生の原因も不思議ではなかったと思う。



の七月のことだった、長く後の世までの語り草となろう。昭和二十三年は、太宰治の『斜陽』と、吉川英治の『新書太閤記』がよく売れた記録として残っている。昭和二十四年は永井隆の『この子を残して』三笠書房の『風と共に去りぬ』。谷崎潤一郎の『細雪』。そして吉川英治の『宮本武蔵』ということになっている。——以上が表街道の記録である。さて、では読書裏街道はということになると同じ期間を通じてまるで花火のように咲いて消えたハカストリ雑誌Vがあった。カストリ雑誌に就いては私家版の雑考二冊を発表したのでご参照願いたい。此処では次に私的な挿話めいた事柄を記すだけにとどめる。

——先般こういうことがあった。法政大の学生が卒論にハカストリ雑誌Vをテーマにえらんだ。小田切教授はその学生におもしろいテーマだからやって見なさい、ということである。早速、古本屋、古書展、通信販売古書目録、ついに国会図書館まで、凡そ眼のとどく限り、手と足の及ぶすべての範囲を搜索したがプランだけは樹てては見たものの、現物資料が無く、結局は同教授の紹介状を持参、常盤台の高橋鉄氏を訪問した。（此処ならあるだろう）と眼をつけた訳だ。目的地としては正

しかつたが、高橋氏は、

「この研究所には、性風俗資料として当時のカストリ雑誌を多数所蔵して居りますが、何も彼も一緒にたに、戦後発行の通俗読物雑誌をカストリ雑誌とよぶのは反対です。わたくし達がむかし発行していた雑誌は性研究雑誌です。同色に見る人も居り常々不満におもっています」

と、語られた由。然し当年の桃色雑誌に沢山書き飛ばしたことはいわなかったらしい。この学生さんは拙宅にも来たが、カストリ雑誌を卒論のテーマにすることは私は不適当だと、その時もいったし今でもそう思う。いささか奇をねらい過ぎるが、とにかくカストリ雑誌Vはもう今日では立派な風俗資料になった。

◇ ◇ ◇

愈々主題に入りますが、その前に座談風に、本稿の持つ性質について主観の整理をして見たい。

書物を漁るには、確かになんといってもマニヤ(書痴)にとって古書即売展がいちばん良い。が、町を歩いて古本屋を探して入るのも亦格別の味がある——本屋の棚を見る時は心が騒ぐ。だが其処で、余りにも現代的な世

発禁騒動を起した

「裸者と死者」



相の縮図を発見する。ヌード雑誌、グラマー画報、その他きわどい週刊誌が積んであって「十八才未満の方は手をふれないで下さい」と貼紙がしてあった。更にまた、神保町の表通りや横丁にも「十八才未満の方は入店お断り」と書いて貼紙した、海外画報誌を含めた性的風俗雑誌・画報を主とした図書ばかり販売する古本屋があった。こうした古本屋を私は成人用書房と名づけたい。今更にいっても仕方が無い話だが、書肆がみずからパチンコ屋やヌード劇場なみに格下げするのは感心できないと思った。このことは出版を業とする(著者を含めて)人々にもいえることも知れぬ。

この店では、ヌードと怪奇とお色気のグラフィック雑誌や、エロ本や、プレイ・ボーイを筆頭

に、ジエント、ギャラ、フォリーズ、デュード、モダン・マン、マンツーマン、ジェム、フロリック、等々アメリカ男性雑誌の端までが店内所せましとばかりうす高く積み上げ積み重ねられ、特に高価な稀書・珍籍はビニール袋に入れられ、天井からナチの大量絞首刑よろしく吊り下げられ、その中には悲しい哉、我が師とする人の著作もあったし、大半は現に自蔵し書架にある本や、かつて所有した本や、手にふれた本、記憶にとどめた本で何らかの意味で性臭のある書物ばかりであった——迄はよかったが、ごく少数数発行の拙著も一冊あった。イヤおどろいたの何の、顔から火が吹き出しそうになった。狭い店内はムーと熱気がこもっていて、血走っているような若い眼が、雑誌のヌード写真のグラビヤ



に吸い寄せられて、はかない青春の仇花が飛び散り、むなしい火花は調子の悪いエンジンの排気ガスのように店内に充満して、暑苦しくて、ニキビくさくて、とても長くいるべき場所ではない。——だが、此処には何かがある、考えなくてはいけない。確かに考えなくてはならぬ問題があるんだ、そう思いながら私は店の外に出た。

時代は繰返すというが、終戦後に私は当時流行のカストリ雑誌を夢中になって漁り読んだ。ずいぶん教えられるものが多かったから今でも世の有識者や主婦連のおばさまみたいに、有害不良図書だと断定することはできない。人性Vの世界に、書物・雑誌から入って行くことは不自然ではない。其処から知識としての追究が始り、体験を補い、たしかめて行くことは間違っていないと思っている。田中英光の小説や、ノーマン・メイラーの『裸者と死者』に感動したように、後に述べる『人間探究』や『あまとりあ』などの雑誌から終生ぬぐい去ることができない人間性に就いての大きな問題を得た。私など書物愛好癖のつよいものは、兎角人生の指針までも書物からさぐろうとするが、年々歳々書淫の境地に深入りするばかりだが例えば『裸者と死者』

の次の一節など長く記憶に残っている。この小説は戦場心理と性慾心理の奇妙な交錯をえがいた翻訳ベストセラー。

「なぜか知らんが、僕あ十八か十九の子供だったころは、女についてちがった考えをもっていたもんだ。僕は性のために女が欲しかった。いまでもおぼえているが、よく淫売を買いにいったもんだ。厭な気持ちになるが、一週間くらいすると、またでかけたくなるんだ」彼はちよつと海を見つめていたが、やがて、賢そうに微笑した。「しかし、結婚して見て、僕あ女についていろんなことを理解させられたよ。子供のときに考えたのはまるでちがうんだ。あれや……僕にやよくわからんが、あれや、そんなに重要じゃないんだ。女は」と、彼は厳かにいった。「僕たちのようにあれを好みやしないんだ。女にとっちゃそう大きな意味はないんだね」(上巻76頁、昭和24年改造社、山西英一訳)

書物のなかにある人生からは実に多くのことを教えられた。まるで人書物の恥部Vを嗅ぎまわるような読書からでも、得るものは得

たと思っている。さて、結婚生活に入れば、いわゆる「性の悩み」というのは解決するものだとばかり思っていたが、そうではないことは私のみならず諸氏ご存知の通りである。

古本屋で、内密にコッソリ性風俗文献物など分譲する老人がいて、ある時次のように語ったことがあった。

「若い人でも軟派本など熱心に蒐集して居られますが、そういう方がすな、結婚するとそうですな。一年位はやはり軟かい本からは遠ざかります。宗教書までは読みませんが、美術書とか、民芸の本などに興味を持ったりで、たまにお寄りになっても義理で買うくらい……所が、これが中休みという期間で、又買い始めますよ。男はなんといっても中年の働き盛りには金も自由になりますから、端本でもいいから哥磨が欲しいなんて、淡い趣味になって参ります。とにかく、軟派本の味は一度おぼえたらモウやめられせん。ですから、春本・艶画・怪写真といっても、初心者むき、中年者むき、老人むきとそれぞれ年齢層によって好みもちがって来ます。若い方にはドギツイものが宜しいようで、墨刷本の味がわかるのはもう相当に年期の入ったお年よりにならんか……」

どうもいけない。凡人はいつ迄たっても悟道の境地に達しられないことは、以上の談話で喝破されたようなものである。とにかくハセックスVの哀歓というのは尾頭の判然りしない軟体動物に触る感じで、いつまでも実体を捉えることができない気持である。書物の恥部からハ人生Vにさわって行くことにもなる——で、このことをハツキリいった出版社主もあった。誠に明解なもので、

「出版とは、本というものは、読者の翠丸を握らなければ、売れない」

と、いうのである。この睪丸を握るといふのは、急所を指す。急所とは、つまり弱点である。まったくうまいことをいったものだと感心した——だが急所は握った方が勝ちだと思ふのは早計である。握れば自分の手もよごれるし臭くなる。第一睪丸などというのは自分の物ですら考えると実に厄介な存在なのだから、まして他人の睪丸というものは元来は握ってはいけな場所にある物である。

私は「性的風俗出版物」の存在することを  
以上のように考え、その本質も其処にあると  
思っている。——このことは戦後になって奔  
流のように氾濫した「性出版」のあらゆる部  
門に就いていえる。元来この種の出版物の評

価は発行部数できまるものではない。内容の  
真実と迫真力にある。名実共に我国における  
本当の意味での艶本ルネサンスは敗戦後に始  
まり、そして完成されたのである。昔だっ  
たら当然△会員制度▽少部数発行であり、限定  
版型式の雑誌や単行本であるべきものが、書  
店頭に進出して、エロティシズムや性知識が  
街頭から家庭生活に流入して、おかげで庶民  
の性生活がゆたかになった。山宣が血を流し  
ても達せられなかった目的が安々と何らの障  
害もなく民衆の生活に享け納れられて行った  
勿論、そのことによって先覚者の偉業を偲ぶ  
ことができたのは、ごく少数の性学知識のあ  
る人たちだけだったとしても……。隠蔽され  
たものが、あばかれることによって、真実が  
伝えられ得るとのみはいえないが、敗戦後に  
△性▽を開放したことはあらゆる事柄への真  
相発見の第一着手になったことは事実だっ  
たと思う。

二、四疊半襖の下張

永井荷風は昭和二十二年一月廿二日の断腸亭日乗に、「今の世に生きんとするには、寒気をおそれず重き物を背負ふ体力あらば足る

朝日新聞昭和23・5・7日部分  
潜行出版の「四畳半襖の下張」

工口出版社を摘発

永井荷風氏を参考召喚

ミロフ、エロ、羅ばは、  
林らんし、古蹟にはもろん  
窪田園遊の如きもへんに  
なつて、醫國路ではこれが一類

---

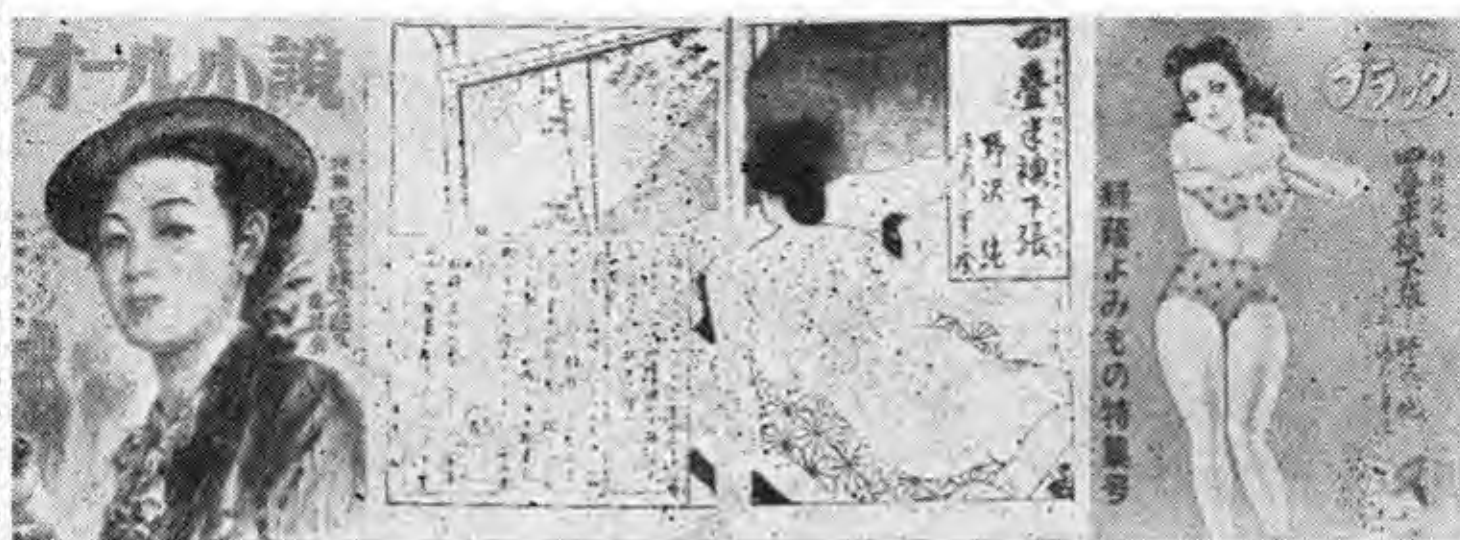
に對する、第三二冊の發賣。原  
村を編輯している年代田區郷  
田、又、三つの島嶼、四條郡  
の地方で、「四條半邊の下流」と題  
した本をエロと云ふべきもの

四疊半襖の下張

なり。つくつく學問道德の無用なるを知る」と云つて戦後の世の無情の有様を悲しんでいる。

その四日前、一月十八日には猪場穀秘密出版と信じた（これは後に誤聞が証明されてい





四畳半問題は早速カストリ出版社の好餌食となってしまった。

る)『四畳半襖の下張』が杉並区高円寺の古本屋雉子書房を経て流布されている噂を探知して、市川警察署に自身で出頭し陳述して来た。然し、『四畳半』問題が表面沙汰になったのは、一般大衆が高名な文人の秘作を知ったのは、おくれて翌昭和二十三年五月七日附朝日新聞に報道されてからであった。荷風は一年前にはじめて扶桑書房主人から往年の戯作、春本襖の下張が秘密裡に印刷されたと聞いた時には、「昨夜憂慮眠るを得ず身心共に疲労す。…何事をもなす能はず」と日記に書いた。その心痛のさまが思いやられる。

この四畳半事件に就いては、雑誌『人間探究』第二号(昭和25年7月、第一出版社)所掲の覆面文人の「四畳半の作者は荷風か」に詳細に述べているが更に「解釈と鑑賞」(昭和39年10月)に、夏川文章の「秘稿、四畳半襖の下張」があり共に筆者は松川建文氏であろう。この人は小西茂也(仏文学者荷風飯寓時代の家主)とも当時往来があり、写本以外の、刊本四畳半の第一回の刊行者であり、勿論この秘本研究では第一人者である。この研究の冒頭において、荷風作品であると断定して稿を進めている点は注目すべきだと思う。また、秋庭太郎氏の『考証、永井荷風』(昭

和41年9月、岩波書店)六八二頁―六八四頁にも別の視角から追究した記録がある。渡辺警部の言葉―「聴取書をさし出すと荷風氏は筆を取りあげたが、その手はブルブルと震えていた。先生のお宅を辞し去る時でも私は『四畳半襖の下張』はたしかに先生の作という確信を抱いたし、さらに押す手はあったが、その時受けた先生のお人柄もあり、それ以上のことはしなかった。云々―」を記載している。

以上は表面的な四畳半で、年代的にいつても当時荷風作の春本というのは絶好の話題で書物愛好者間ではこれを読まない又何だか肩身が狭い気持がしたものである。上野や神田のガード下の闇で、素人作りの挿画入四畳半の謄写版の純春本も多数流布されたりした。戦後の艶本研究には四畳半は絶対に欠かせない資料だ。戦後における艶本復興のためには何より役立ち、鎖された重い鉄の扉を開け放ったような八事件Vでもあった。

尚、夏川氏の研究によれば「四畳半」の版本源流は、金風山人本(三希洞版)と金歩山人本(はちすば書屋版)の二書で、刑事事件になったため広く世の視聴を集め、続々と追随出版者を出し、潜行出版物二十種以上に達

したとの由である。

◇ ◇ ◇

## その梗概

ある処に久しく売家の札が斜めに張り出された待合があった。もとより横丁のことではあるが、その後往来の片側が区画整理で取りひろげになったので、代が替れば二度目の営業許可はむづかしいだろうとの噂で、普請はまったく申分のない家なのに買手がなかなかつかなかった。ところがここに金歩山人という馬鹿の親玉がいて、通りがかりに何心なく内部をのぞき、「家造りの小庭の様子、一目見るなり無闇と惚れこみ、早速買取り、ここかしこ手を入れる折から、母屋から濡縁づたいの四畳半、其の襖の下張り、何やら一面にこまかく書き綴る文反古、いかなる写本のきれはしなると、かかることには目ざとき山人、経師屋が水刷毛奪い取って一枚々剥しながら読みゆくに、これやそも誰が筆のたわむれぞや、(はじめの方はちぎれてなし)」という書出しより始る秘文だが、四百字詰原稿用紙に直せば十九枚位の短篇で、小説というより閨房哲学のエッセイで、描写の合間を縫ってきらめく鋭い皮肉——人間批評——が

この掌篇の骨子を形成していると見るべきである。特別にストーリーという程のものはない。第一人称の主人公と袖子という芸者のオプシーンだけで、作品の山場は袖子との初会で、芸妓と通人がシノギをけずりあう、性愛秘戯の手練手管を述べたくだりだが、さながら女体の神秘を蔽う薄絹を一枚々剥きとって行く露骨さが興味の中心で、それが終われば痛快なエゴイズムの論理が貌を出す。結局サディズムである。鞭打や縄ばかりが△責△ではなくて、男性のエゴが、特定の女性(妻)無視が△心理責△になる。本誌の読者には今更に四畳半の春本場面の描写をばかしてご紹介しても無駄な労力をついやすだけのことなので、雲雨やんで△性△がしだいに荒涼とした地獄相をおびて行くさまを達人の文章よりひろうと、

「女一人我がものになしおほせて床の喜悅も同じ事のみ繰り返す様になりぬれば、又折々別の女ほしくなるは男のくせなり。三度の飯は常食にして佳肴山をなすとも、おやつ時になればお茶菓子も良し。屋台の立喰い、用達の帰り道なぞ忘れがたき味はいあり。」

女房は三度の飯なり、立喰の鮓に舌鼓打て

ばとて三度の飯がいらぬといふ訳あるべからず。家にきまった三度の飯あればこそ間食のせいたくも言えるなり。

この理知らば女房たるもの何んぞ妬くに及ばんや。」

まことに堂々たる男性本位の性論である。更につづけて、わたくしは袖子の床上手に打込んで、懷中の都合のよい時は温泉場めぐりの浴槽の中、海水浴のおりには砂を枕に処きらわず淫らなたのしみに耽ったものの飽きた揚句は浮気沙汰に、切れるの切れないのとお定まりのごたごた騒ぎ。しまいに一人の女では物足らず、二人、三人はだかにして左右に寝かして、女のいやがることばかりして楽しんで、我ながら正気の沙汰ではない、と結んでいる。

(第一回 終)





# 縄なわのある蜜み月づき

## <隣となりの女おんな>

### 千草忠夫



それぞれの離れ屋は、菊などを寄りかから

せた四つ目垣でかこまれているが、その枝折戸を抜けると簡単に崖に面した疎林の中に入られる。崖の下はすぐ海で、初冬という

のに青く深い海の色がいかにも南国らしい暖かみを見せて拡がっている。

新婚旅行の一週間をひとつの場所にとどま  
って過すのはいかにも芸のないやり方のように  
思われるが、猛は敢えてそれをやった。猛  
に言わせれば、一泊してはあわただしく次の  
宿に移るやり方こそ愚の骨頂なのである。旅  
行から帰れば2DKのアパート住いで、こん  
なゆったりとした環境にのんびりしているの  
とはわけが違う。せめて一週間だけでもゆっ  
たりとくつろいだ生活を送ればいいではない  
か、という考えだった。猛の場合は更に、ゆ  
っくり落着いて新妻の責めに打ち込める、と  
いう考えも加わっている。

しかし、三日も四日もたつと、やはり部屋  
の中のこもった空気に飽きて、気分転換がほ  
しくなってくる。離れ屋を囲む疎林は、それ  
にうってつけの場所だった。

猛は淑子を部屋に残して、一人落葉を鳴ら  
して林の中を歩いた。手頃な太さの、まっす  
ぐに伸びた木の幹が目に入ると、妻の白い裸  
体を、そこに縛りつけることを考えてみたり  
する。いつ他人が現れるか知れない場所のこ  
とだから、とても実行は不可能なことだが、  
空想するだけで楽しい。

夜の人工照明の中でのプレイと、昼の光の中でのプレイとが全くおもむきを異にすることを、ここ数日の間に猛は知った。責められる妻の態度が全く違うのである。この違いはプレイが屋外に延長されたなら、更に大きくなるだろうということは、容易に想像できるのだ。ひめやかな夜の闇のはめく明りのもとでさえ羞恥に濡れる肌なのである。それが白昼のもとに晒し出されたら、どのような悶えを見せるか——想像しただけで胸が熱くなってくる。

一糸まとわぬ白裸の肌を後手に緊縛して、素足のまま庭に追い落とし、枯葉を踏んで歩ませるのだ。木の間もれの日の光が、うなだれたうなじや肩先、固く握りしめられた指などを輝かせるだろう。みだらな想い出に充ち張った腰が、あらわな陽光にさらされて、どのような色づくか——

嘆賞してやまない妻のきめこまかな白磁の肌が、白日の下で、どのような輝きを見せるか——そのことが猛を激しい白日夢にさそうのだ。

崖の縁にそうて、やや不細工だが不注意な事故を防ぐためか、頑丈な鉄柵がもうけてある。そこまで来たとき、猛は先客があるのに

気づいた。

華やいだ色彩のスーツから見、淑子より若いかも知れない。やや野暮ったい着こなしだが若さがあふれた感じが猛の眼をひいた。庭下駄を突っかけていることで、ホテルの止宿人、それも多分この離れ屋のどれかに泊っている女と知れた。

女は、猛がわざと足音をたてるようにして近づいても、振り返りもしないで、鉄柵に両手を置いて沖の方を見つめている。

(どうせ新婚の女だろうが、それにしても一人で沖を眺めているというのは妙だな)

猛は自分も妻をつれないでいることを忘れて、そんなことを考えた。新婚旅行なら、いつでも二人が寄りそっているのが常態である筈だった。

「いいお天気ですね。まるでこれから春になるみたいじゃないですか」

猛も柵に寄りながら声かけた。

女は返事をしなかった。猛の方を振り向きもしない。猛は拍子抜けの思いで、女を盗み見た。頬っぺたの赤い、まだ子供供した所の残っている、可愛い顔立ちの女である。猛が心を打たれたのは、そんな愛らしい顔立ちに似合わない思いつめた瞳を、じっと沖の方

に据えていた事だった。ほつれ毛が固い頬にかかって微風になぶられている。

「どうかしたのですか？」

異常を感じ取って、も一度強い声でたずねた。

女の顔が、猛がギョッとした程の強さで、猛の方に向けられた。

「奪って——」

女が叫ぶように口走った。何のことか判らずにボンヤリしていると、再び、

「奪って……めちゃくちゃにして……殺してもいいわ……この崖から突き落してもいいのよ、ね、ね……」

猛はあっけにとられて、女の動く口元を、思いつめたまなざしを、あふれ落ちる涙の粒を、ボンヤリ見つめていた。女はじれったそうに猛の腕を取ってゆさぶった。

「どうしたというんです。落ち着いて話してごらんなさい……」

女はワッと泣き出すと、めちゃくちゃに猛にむしゃぶりついて来た。どうなってもいいとか、めちゃくちゃにして、とか、とぎれとぎれに口走っている。

猛は思いついて腕に力をこめて、女の体を抱きしめた。



「いやッ、いやよッ……」

あれほど言っているながら、今度は両手を突っ張って猛烈に抵抗する。

猛は苦笑して力をゆるめた。

「いったい、どうしたんです？ 話して見ませんか——できる事なら力になってさしあげますよ」

女は猛に背を向けて、両手で顔をおおっている。

「あなたも多分そうだろうと思うんですが、ぼくも新婚旅行なんです。部屋は、そらあそこ離れなんです」

疎林の向うにペランダのあたりが見えている。猛はそこに放置して来た淑子のことを、ふと思った。

「あたし、夫にあきらめられたんです……捨てられたんです……」

女は絶叫するように言った。猛に背を向け鉄柵をしっかりと握りしめて、それは晴れ渡った沖に向かって恨みをブチまけているように見えた。

「ゆうべ、あたしたち始めての夜だったんです……夫は童貞だと云いました……きみも処女だろうねってたずねました……あたし黙ってうなずきました……嘘だったんですけれど

……お床に入ってから、その嘘がバレってしまったんです。おかしい、きみは男を知ってる体じゃないかって……あたし……秀夫さんをとて愛してたんです、それで愛されているうちに、自分のついた嘘を忘れてしま……それが秀夫さんには変に思えたんですわ。あたし、わびたわ……泣いてわびましたわ。でも、それっきり……今朝になって、夫はプイと出ていったきり……」

女の声は、時には調子はずれに高くなり、時には涙でとぎれた。

猛は女から眼をそらして、女の夫という男を追っていた。蒼い顔をして、眼鏡をかけた神経質な、インテリの、サラリーマン——おそらく童貞というのは本当だろう。一度ぐらいはトルコ風呂を経験していながら不潔さのために二度と足ぶみをしなくなったというところがあるかも知れない。後は、週刊誌の拾い読みから直接女の体を知らなくても、知識だけは過ぎるくらい持っているというタイプ。猛はそんな男に激しい憎しみをおぼえた。

「前に男があつたの？」

女は激しく首を横に振った。

「やくざみたいな学生に無理矢理……されたんです……」

猛は胸を突かれる思いだった。この可憐な女が——いや可憐なるが故に、と言った方がいいのかもしれないが——それも一人ではなしに、三人もいたという、精液の匂いがムンムンする薄きたない男のアパートの、けば立った畳の上で——全裸に剥かれた女は猫になぶられる鼠のように、まる一昼夜、なぶられつくしたのだ——

「高校三年の時でしたわ……」

女の涙はすでに乾いていた。

「一時は死のうかと思った——でも死ねなかった。就職して秀夫さんを知り、本当に愛することを知ったわ。体を求めようと思わない秀夫さんこそ、本当に求めていた男性だと思えましたわ。これであたしの汚れた体も清められると……でも、甘かったのね……」

猛は腹が立っていた。女から快楽を引き出すだけの男たちのエゴイズムを憎んだ。

「きみは今でも御主人を愛しているの？」

女は返事をせずに、乾いた頬で沖を見つめていた。それから思いつめたような声で言った。

「秀夫さん……夫が、あたしを憎いのなら、殺してくれたら……と思っています」

猛の中で、何かが大きな音をたてて爆発し



た。  
「ちよっと、ぼくの部屋へこないか」  
猛は女の腕を掴んで言った。

「見せたいものがあるんだ」  
女が恐怖をこめた瞳で猛の顔を凝視した。猛も女の瞳をのぞき込むような視線を返した。

「きみが欲しい——ということとは正直に言っておこう。そんな横暴な御主人から、美しいきみを奪い取ってしまいたいと思う。しかし今ぼくの部屋にこいというのは、そのためじゃない。きみにひとつのチャンスをしらえてあげるためなんだ」

女は悪かれたように首を縦にふった。

二

女はマリと名乗った。姓については旧姓と新姓のどちらにしようかと戸惑っているふうだったが、結局言わなかった。

マリは猛たちの離れ屋に案内されて、そこにあるものを眼にした時、息をのんで立ちすくんでしまった。  
ベランダの肘掛け椅子に、全裸の女が縛り

つけられているのだ。それも普通の恰好ではない。両腕は椅子の背を負うように後ろにまわされ、両脚は肘掛けをまたぐ恰好に拡げられている。

「妻の淑子です」

淑子は二人の姿を認めた瞬間から猿轡を噛ませられた顔をそむけている。おくれ毛のまつわりついた白いうなじに、見る見る羞恥の色がにじんでゆくのがあからさまに見える。「はずかしめるために、こんな恰好をさせているではありません。いつでも使用できるためなんです」

マリも真っ赤になって眼をそらしている。

「こんな夫婦ってのは不潔ですか？」

猛はどてらの帯を解きながら言った。

「淑子も四日まえまでは、真正正銘の生娘だったんですよ。キスさえも経験したことがなかった」

猛はマリの傍を離れて淑子に歩み寄った。髪を掴んで顔を正面に向けさせ、ふるえている睫毛に軽く唇を当てた。

「お連れしたのはお隣りの奥さまだ。初夜に処女じゃないことを御主人に知られて、愛想づかしをされたとおっしゃる」

淑子は猿轡の下で激しく呻き、やたらに顔



を振った。口の中に押し込まれたパンティは十分つばきを吸っているに違いない。

猛は、妻の羞恥に染まった肌を、じっくり観察しにかかった。

「愛しているよ、淑子……」

上下をきつく縄でくびられて異様な形で盛りあがっている乳房の固くふくらんだ頂点を弄びながら、薄桃色に色づいた柔かな耳朶に熱い息吹を吹き込んだ。

極端な姿勢をとらされているために、ふたつに折られた恰好の腹部が、まるでふいこのように激しい喘ぎを見せている。椅子のクッションに、あやうくのっかっている尻が左右ににじり、肘掛けの上で白い下肢が緊張と弛緩を繰り返している。

屈辱の恰好のまま長い間放置された後に、突じょとしておとずれて来たこの刺戟に、淑子の官能は自制を裏切って、あからさまに燃えあがっていた。

淑子は猿轡の奥から絶え入るような悲鳴をもらして、頭をのけぞらした。

マリは、そこにしゃがみ込んで、両手で顔をおおってしまった。猛はそんなマリの様子から眼を離さずに、動作を続けている。

「し、しつれいします——」

喘ぐように言うと、マリがパッと立ちあがった。

「待ちなさい」

淑子から離れて、猛はマリの肩を掴んだ。

「逃げるというのなら、淑子と同じように縛ってしまえますよ」

「どうして……こんなことを、あたしにお見せになるんですの？」

「あんたはさっき、ばくにめちゃくちやにしてほしい、と言った」

「あの時は、どうかしていたのですわ……」

猛の手をふりもぎろうと弱々しく抵抗しながらマリは言った。

「いや、あれはきみの本心だった」

「ちがいますッ」

ピリッと、どこかが裂ける音がした。

「そんなに言うのなら、無理にでも最後まで見てもらわなくちゃならないな」

猛は、マリの左腕をねじりあげてベランダに引いたてた。

「な、なにをなさるの……」

「きみは可愛い女だ。そんな女性が新婚の第一日から不幸になっているのを、ばくはゆるせない」

猛は手なれた縄さばきで、そこに落ちていた紐を使ってマリを後ろ手に縛りあげると、もう一脚の椅子に押し倒した。

「タイトスカートじゃ都合が悪いな」

マリは悲鳴をあげて椅子の中であばれる。「いやッ、やめてッ……あ、あなたッ……」

スカートを脱ぎ取られると、マリは泣き声になって夫を呼んだ。

「御主人がここできみを助けに現れたら最高なんだがね……」

からかいながら、ふと猛は面白い計画に思い当たった。

（こりゃ、やって見る価値がありそうだぞ……）

思いながら、手は器用にマリの両肢を肘掛けの上に割り開けて縛りつけてゆく。スリッパが太腿の根元までめくれあがり、むっちりとした下腹に食い込んでいる愛らしいピンクのパンティがあらわになった。

マリはあまりの羞ずかしめに、半ば失神したように、グッタリとなっていた。

「愛する御主人のことでも考えて、よく見ていたまえ」

猛は淑子の椅子をマリがよく見えるように動かしてから、再び淑子の体にもどった。このちょっとした幕間劇の間に、淑子は更に燃

えあがったようだった。

はじめのうち、マリは固く眼をつぶって顔をそむけるようにしていたが淑子の呻きが次第に高くなってゆくにつれて、かすみのかかったような瞳を、開けるようになっていった。そして、淑子と一身体であるかのように、悩ましげに縛られた体をゆすり、唇の力を抜いて小鼻にしわを寄せ、切なげな声をたてはじめたのだ――。

やがて、淑子が椅子をガタガタ揺すらせて絶え入るのを確かめてから、猛はそのままの姿でマリの前に立った。

「下宿で学生にまわされた時、きみもこうだったんじゃないのかり、まる一昼夜というのは長い時間だからな」

猛は笑いながら、ナイロンの汚れを指さした。マリは上気した頬を更に燃えたたしうなだれた。

淑子のいましめを解いて、体を洗いにやらせてから、猛は更に言った。

「今の妻を見たらう。きみもああされて悦ぶ素質がある、とぼくはにらんだ。それにしても御主人はあまりにもマジメ人間に過ぎるよ。うだな。できることならぼくがきみのパトロンのになりたいくらいだが、それも不可能だ。」

ぼくもそれほどドンファンじゃない」

猛は身をかがめて、羞恥のあまりグツタリしているマリの唇を吸った。反応は積極的だった。

「きみにしても、御主人は愛していても、体の方から崩れるタイプのようだ。で、あることを思いついたんだが、それが成功すれば、きみは幸福をつかみ取ることができるかも知れない」

猛はマリのブラウスを押し拡げ、ブラジャーのあわいに指をすべりこましながら、しゃべり続ける。マリの抵抗は全くない。

「きみが御主人のようにカタくなれないとすれば、御主人をやわらかくする必要がある。きみはめっちゃくちゃにされたい、と言っただけ、御主人にめっちゃくちゃにされたら、しあわせと思うかい？」

マリは、はつきりうなずいた。

「それできました。今夜、御主人が帰られる前に、ぼくが暴漢をよそおって、きみの部屋に侵入する。きみを縛りあげて、あわやという所を演出兼主演する。そこへ帰ってきた御主人がその舞台を見て、どんな行動をとるか――もしダメだったら、さっさと離婚するんだな」

淑子が風呂から上って来た時、マリはいましめを解かれ身づくろいを正していた。二人の女は視線をかわして、お互いに顔をあからめた。

「淑子、奥さんを部屋までお送りしてあげてくれないか」

淑子がマリを送って帰ってくると、猛は今夜の計画を話した。

「マリさんも大へん乗り気なようでしたわ」送ってゆく途中で、猛と淑子夫婦のあり方を口をきわめてはめていたという。

「若いけれど、大変な体験をしている。それだけにフランクなんだな。あんな経験をしてあれだけ純な心を持てる女というのも珍らしいが――」

「いいかたですわね――ほんとうに旦那さまを愛してらっしゃるのですわ」

「そういうことだな」

そう言って猛は、また一段と美しくなったような妻の顔を見た。

「ひとついいことをしたことになるかな？」

夫の優しい笑顔をまぶしげに見ながら、淑子は吸いつけられるように猛の方に上体を倒していった。

「でも……ひとに見られるのは嫌……」



睫毛をふかぶかと閉して仰向けに唇を寄せてくるのを、いとしげに抱きしめながら、

「あんなに燃えていたくせに」

猛は再び燃えあがるものを感じながら、うっとりとした唇に唇を寄せた。

### 三

マリたち夫妻の離れ屋も、猛たちのそれと全く同じ造りだった。椅子の色と床の間の掛け物がわずかに違っている。

六時過ぎだった。

「もういくらなんでも、お帰えりになるでしょう」

猛は、そこに箸もつられずに並らべてある食事に眼をやりながら言った。猛も男だからマリの主人のスネた気持ちが続く限度はわかっていて、いくらスネて見せても、今夜、宿をあけて女を買う勇気などないことはわかっている。

「そろそろ用意しておきましょうか」

「はい……」

マリは固い表情でうなずいた。

昼のままのスーツの上衣を取り、スカートを脱ぎ、ブラウスを取って、スリップだけになった。

「それでいいでしょう」

猛はマリの脱いだものを、そこらあたりに散らかして、しごきを手に取った。

「少しきつく縛るけれど、我慢してくださいよ」

背を向け、むき出しの両腕を背中中に組んだマリの姿を、しばらく、うつとりと眺めてから、猛は念入りに縛りあげていった。

マリは所要所にひもがきつく食い込むたびに軽く呻いて、睫毛の先端をそよがせる。

乳房の上下を締めあげ、後ろ手の両腕を吊り上げるようにして縄止めすると、マリは全身の力を抜いて、猛にもたれかかって来た。

猛はもう桜色になっていくうなじに軽く唇を押し当てて、

「このまま、ぼくのものにしちやおうか？」と、からがい半分にささやいた。

返事はなかったが、抱きかかえられた体に抵抗の動きが起らないのが、承認のしるしだった。

猛は手荒らにスリップの肩紐をはずし、音をたてて裂けるのもかまわずに、ブラジャーがあらわになるまで剥ぎおろした。ブラジャーのホックをはずして、片方の乳房をあらわにする。

「ぼくも学生たちの一人だったと思うよ」

白桃のような乳房の頂点の紅に魅せられて猛はあらぬことを口走った。

「嫌……はずかしい……」

マリは猛の腕の中で身悶える。むき出しのうなじからまるい肩先、胸へかけて、そそるような羞恥の色が走り、甘い香りが鼻をくすぐる。

「まともな男なら、誰だって可愛い女をものにしたいという夢を持っているものなんだ」

猛は腕の中に、妻とは違った身悶えを楽しんでいる。

猛はらかなシャツスタイルに濃いサンングラスをかけて、人相をかくしていた。そんな服装がかえって芝居らしい気持ちに誘う。

「パンティを、少しさげておいた方がいいかな」

言葉より早く手が動いて、スリップをめくりあげ、パンティをスレスレの所まで引き降ろした。パンティは昼のと違って浅黄色だった。愛らしいフリルがついている。

「このまま御主人がいつまでも現れないとなると、冗談じやなしに、変な気分になってしまいそうだ」

猛は正直に言った。

マリは体を彼にあずけたまま眼をつむっている。

「あたし、主人を愛しているのか……わからなくなっちゃいそう……」

ひとりごとのようにつぶやく。

「愛してるって思わなくちゃいけないよ。でなきや、女学生時代のあのことと同じことになっちゃう」

「そうね……」

しばらくたってから、マリはまた口を開いた。

「奥さまは、おしあわせな方だと思うわ」

猛は黙っていた。フツと聞きなれたメロデイが頭の片すみをよぎった。

（しあわせってなんだろうな）

しあわせって、いいことさ……

ブランコがユラリ、ユラリとゆれていく……

淑子の白い笑顔が、いとおしむように近づいたり遠のいたり……

「あー、帰ってきたようすわ……」

マリが小さく叫んだ。猛は夢からさめたように耳をすました。

わざとらしい荒々しい靴音が敷石を踏んで近づいてくる。

猛はゆるめていた腕に力をこめて、畳の上にマリの体をおさえつけた。

「さあ、頑張るんだ」

マリは本当におびえた瞳をあげた。

「嫌よ……ああ、嫌……たすけて……」

猛はスリッパをゆっくりあげ、白い腹に指をはわした。あばれてクルリとうつむくと、半ばあらわな尻が眼に入る。

「ああされた時のように、あばれるんだ」

猛の手が両脚にかかって、容赦なく押しひろげにかかる。

「た、たすけて……あなたっ……」

戸が開く音がした。

「だれだ、お前は」

「あなたっ……あなたっ」

猛はマリの体を押さえ込んだまま顔をあげて、声の方をふり返った。想像通りの男が、そこに立っていた。眼鏡、細いあご……

「き、きさま……」

靴をはね飛ばすように脱いで、飛びかかってくる。

猛はマリの体をはなして、ベランダの方に逃げた。

マリは畳の上をころげまわりながら、さかんに夫の名を呼んでいる。それが安堵の泣き

声に変わった。

二人の男はマリを間にして、一瞬向いあった。マリの夫の顔は蒼白になって怒りにビクビクふるえている。

「新婚の奥さんを一人ぼっちにしておくなんて酷だぜ。もっと可愛がってあげな」

サングラスの陰で嘲笑うと、猛はベランダから庭に逃げた。

「待て……」

背中に男の声を聞きながら、猛は暗い疎林の中に走りこんだ。

「あなた……待って……追わないで……」

マリが哀願する声が聞えた。男は追ってこなかった。

十分ばかり疎林の中をブラブラしてから、猛は足音をしのばせて、元の離れ屋に近か寄った。さっきまで開いていたベランダのカーテンが閉じられている。

「え、正直に言ったら、どうなんだ」

男の甲高い声が耳に飛び込んできた。猛は垣を越えてベランダのガラス戸に近か寄り、カーテンのすき間からのぞき込んだ。

男はドッカとあぐらをかいている。その前にさっきと同じ姿のマリが横たわっている。

「ゆるして……でも、何もさ、何もされやし



なかったわ……」

それはマリのパンティが脱がされていない  
ことでも判る筈だった。

「こんなことになるのは、お前にスキがある  
からだ」

「だって……一日中、あなたがいらっしや  
らないんですもの……淋しくて……ほんやりし  
ていたんです……」

「本当に何でもなかったんだな？」

ワツと泣き出すマリ。

「あたし……どうにかされていた方がよかつ  
たんだわ……あなたにきらわれて……捨てら  
れて……めちやくちやにされた方が、いっそ  
よかったんだわ……」

演出前の猛も、マリの演技の真迫的なのに  
は舌を巻いた。しかし、これがマリの本音か  
もしれないのだ。

「ばかなことを言うんじゃない」

「いいえ、あなたに捨てられたら、あたし死  
んでしまうわ……こんな悪いあたしを信じて  
愛してくださったあなたを……裏切ったよう  
なものですもの……」

「マリ……」

男の声は興奮にうわずっている。

「いけないあたしを、もっと苦しめて……あ

なたのお気のすむまで、責めてちょうだい……  
ね、ね……そして……ゆるして……」

「マリ……」

男は真っ赤になって、ガタガタふるえてい  
る。事ここにいたるまで妻のいましめを解い  
てやらないでいる。というところに、この男  
の無意識の欲望が働いている、と猛は見てい  
た。ただ問題は、男の自意識が欲望にくつが  
えされるか否かだ。

マリは縛られた体を畳の上にくねらせて泣  
き悶えている。遂に男の欲望が勝を制した。

「よし、それほどに言うのなら、責めて責め  
て、一度とほくに反抗できない体にしてやる」

男は立ちあがると、マリの体をおさえこむ  
ようにして、スリッパを裂き、ブラジャーを  
むしり取り、パンティを剥ぎ取った。

「ああ……ひどいことは、しないで……」

「バカ、お前からすすんで望んでいたことじ  
やないか」

男は完全に燃えあがっていた。下着をむし  
り取られて、ほとんど全裸にされてしまった  
マリの肩を掴んで立ちあがらせると、桃色に  
染まった尻を平手でたたいて隣の寝室に引き  
立ててゆく。

二人の姿がふすまの陰に消るえのを見とど

けて、猛はガラス戸から離れた。無意識のう  
ちに、安堵とも落胆ともつかない吐息が口か  
ら出た。

疎林の中は、四の光で明かるかった。淑子  
が途中まで出迎えていた。

二人は肩を並べて崖縁の鉄棚により、月光  
に照らしだされた、おだやかな海を眺めた。

「飛び込んできた旦那の顔を見て、これは、  
うまくゆきそうだ、と思ったよ」

「よかったですね」

南国といっても夜はかなり冷える。二人の  
吐く息が白く流れた。

「淑子」

「はい……」

「愛している」

結婚の前にも後にも、愛という言葉を使っ  
たのは、これがはじめてだった。猛は、愛と  
いう言葉が、すなおに口から出たのに、我な  
がら驚いていた。しかし、すがすがしい気分  
だった。

淑子は何も言わずに、そっと猛に寄りそっ  
てきた。

はるか沖合に、いさり火がちかちかとまた  
たいている。

(未完)

# 久ひさ男おの結けつ婚こん

禪と、女相撲にまつわるその思い出

海 野 三 津 男

- (1) 少年の日  
(2) 相撲とふんどし  
(3) 女相撲のショック  
(4) 初恋を破ったその夢  
(5) 悔恨の日々

## (1) 少年の日

山本久男は、昭和五年、九州の下市に生れた。酒造会社に勤める父と、その五つ年下の母は夫婦仲も良く、身体も健康で、生計も苦しくなかった。彼はすくすくと育った。

小学校四年の夏休み、久男は三つ年上の姉

和子といっしょに、母に連れられて、その故郷の南九州の漁港K町に遊びに行った。

母の実家は、そこで網元をしていた。亡くなった祖父のあとを継いでいる母の兄の波夫おじ、その妻の幸子おば、その息子で中学一年の幸夫と、妹の小学校三年の美代子、それに祖母フミの五人の一家は、久男親子を心から歓迎した。

久男は、浜に育って、父よりも色の黒い母から、小学校二年の時泳ぎを習って、四、五十米は泳げるようになっていたが、母は、「幸夫さんから泳ぎを習って、うんと上手になんない」と言った。

翌朝、朝食が終ると、久男は、「俺、泳いでくる」と言っただけで水着をつけ、一人で庭先から浜に飛び出した。近所の子供たち七、八人が泳いでいた。

久男は海に飛びこんだ。しばらくして海から上ってくると、その子供たちが一斉に彼をよしたてた。言葉が良くわからなかった。彼はキョトンとしていたが、よく聞いてみると、「オナゴンのような恰好だ！」と言っ

ては、彼は最初、その意味がわからなかったが、その子たちはみな禪をしめているのに、彼だけが水着であることに気づいて、顔を真赤に





して家へ走りこんだ。

泳きたくなるのをけんめいにこらえて、彼は庭先につっ立っていた。

縁に坐っていた母と幸夫が「どうした？」と近づいてきた。

彼はくると二人に背を向けて、何と尋ねられても黙っていた。

こらえていた涙があふれてきた。

母はそれを見て、「男が涙なんか出して、母ちゃんは知らん」と、縁の方へ行きかけたが、「そうかノなるほど、水着を着ていたから冷やかされたんだろ？ね、そうだろう？母ちゃんが悪かった。ごめん。町じゃみな水着だけど田舎はみな褌だもんね。それを忘れと

った」と、久男の肩に手をやった。

久男はコクンとうなずいた。

幸夫が、「じゃ、俺のを締めたらい」と家の中に走りこんで、自分の白いさらしの褌を持って来た。

母は、「さあ、締めてあげるから水着を脱ぎなさい」と言った。

久男は、はじめて締める褌に、恥かしいような気がしてためらったが、「これで、あの子たちと同じになれる」と思って、水着を思い切って脱いだ。

母は、手際よく褌を締めてくれた。締め上ると、母は、「さあノ元気に相撲でも取っておいで」と言って彼の肩を押した。

股間に痛いほど締められた褌の感覚は、何とも言えないものだった。久男には、何か一人前になったような誇らしい感じも湧いてきた。

幸夫が、「よしノ俺もいっしょに浜へ出てやろう」と言っただけで、急いで仕度をして出てきた。まっ黒の肌に真白のさらしが、浮き立つように見える幸夫の姿を、久男は羨やま

しく思い、「ようし、俺も真黒になってみせるんだ」と思った。

浜へ出ると、幸夫が先刻の子供たちに「集れ！」と言った。子供たちは、冷やかした相手が幸夫といっしょにいるのを見てコソコソしていたが、「何しとる、こっちへ来んか」と言われて、集まってきた。幸夫は砂浜に円を描き、相撲をとれと言った。

はじめ、一年と二年の子供三人が取っ組んだ。久男もよく校庭で相撲を取ったが、田舎の子供たちの相撲は、はげしかった。

「よし今度は三年と四年だ。久男も入れ」と幸夫の声がした。

三年と四年の子は、久男を含めて四人だった。その子たちはみな久男より小さかったが筋肉はもりもりしていた。彼は、「町の学校じゃ強い方だが、負けるかもしれん」と一瞬思ったが、すぐ、「何くそ！」という気持ちに変わった。

四人は、ジャンケンをして最初の相手を決めた。彼の相手は、幸い一番小さい子であった。

久男は、エイノと言って組みつき、得意の左を入れると、いきなり上手投げを打った。学校で相撲を取ってわかっていたが、彼は左

四つが得意で、右四つになると、どうしてもうまくいかなかった。その子は、久男の上手投げに、簡単に倒れた。

別の二人は、けんかのようにして突っ張り合っていたが、大きい方の子が寄り倒して勝った。

その子の力は強かった。一発ドンと突いておいてパッと左を入れて、ぐんぐん押してきた。得意の左四つであったが、幾らがんばってもこらえきれなかった。つかまれてぐいぐい引かれた禪が股に喰いでん痛かった。久男もぐいと相手の禪を引いてこらえたが、たまらず寄り倒されてしまった。

久男は、その子たちと毎日のように相撲を取った。

ズボンをはいたままの相撲や、運動パンツでの相撲は、禪を締めての相撲に比べると全く中途半端なものに思えた。

泳いでは相撲を取る毎日の生活で、久男の肌はたちまち黒くなり、力も強くなったような気がした。

風呂へ入ると、禪のあとがクッキリと白く残っていた。久男はそれが誇らしくて、自分の身体を眺めるのだった。

或る日、風呂場の中でそうしている。とこ

ろへ、姉がヒョイと覗いて、「アア、まだふんどし締めてるみたいだね」と言った。

姉の方へ身体の正面を向けていた彼は、恥かしいような気持がして、くるりと向きを変えたが、そう言われたことは嬉しかった。

五年生の夏休みにも、その町へ行った。今度は久男一人であった。

待ち焦がれていただけに、その夏は前の年の夏より楽しいような気がした。

久男は、夏休みのギリギリいっぱいまでその町に居て、子供たちと思い切りあばれた。下市に帰ったとき、両親は、「久男もたくましくなったねえ」とほめてくれた。

その年の冬、太平洋戦争が始まった。

六年生の夏休みは、K町に行くことができなかった。

臨海学校で、二週間、水泳や相撲や、軍事教練のまねごとのようなことをさせられた。

そのほかの日も、始終登校させられて、訓練のようなものを聞かされたり、掃除をさせられたりした。

K町に行けないのは本当に残念だった。

しかし、臨海学校で相撲を取らせたことが救いであった。

町の子供たちも、禪をしめて水泳や相撲を

やるようになっていたわけだが、彼は、学校で決めた赤い禪が、どうしても好きになれなかった。

だが、禪は禪であり、それを締めて相撲を取るができるのだからと、彼は急い切つてあばれた。

田舎で鍛えていただけに、相撲ではいつも上位になった。

## (2) 相撲とふんどしと

久男の成績は割に良かった。

だから担任の先生や両親は、下市で一番いいと言われていたS中に入るようすすめた。

しかし彼は、F中に入りたかった。

S中では、軍事教練と柔剣道が重視されて陸上競技や球技などともに相撲部が廃止されていたが、F中では、特に相撲部が盛んで土俵も二つ持ち、多くの生徒がまわしを締めて元気よく相撲を取っていた。久男は、ただ相撲部に入りたいだけの理由でF中に行きたいと思っていたのだった。

しかし、それは理由として両親や担任にはどうしても言えなかった。

彼は、仕方なくS中に入學した。

しばらくは彼はF中に行けなかったことを



悔やみ、あきらめきれなかった。

しかし、戦局が急迫して、緊迫感が身のまわりを押し包むようになるとともに、彼は、相撲への愛着を少しづつ忘れていった。

二年生になると、ほとんど授業らしい授業はできなくなっていた。農繁期には農村へ、そうでない時は軍需工場へという勤労動員の日が続いた。

久男は、ただ戦争に勝つことだけを考えるようになっていた。けんめいに働き、そして家に帰ると倒れるように眠った。

だが彼の、相撲への愛着は、心の中に健在していたのだった。

或る晩、彼は、まわしを締めて相撲を取る夢を見た。相手は、田舎のK町に行った時、一番の仲好しで、相撲も勝ったり負けたりした。浩二であった。

浩二は、夢の中で、彼よりずっと大きな身体になっていた。

何度ぶつかっても突き倒され、押し出され投げ飛ばされた。

ようやく左四つに組み、上手、下手を取る事ができた彼は、浩二を寄り倒そうと、全力をふりしぼって押した。全身がビッシヨリ汗に濡れた。浩二の肌も汗まみれだった。

がつぶり組み、まわしを深く引き合ったその体勢は、ずいぶん長いこと続いたようであった。だが、浩二がエイノと叫び、猛烈に寄って出た。久男の身体は弓なりになった。

ドーと倒れた瞬間、目が覚めた。

九月の半ばの、まだ暑い晩であった。

汗で、全身が濡れていた。

彼は起き上り、タンスからタオルを取り出して、その汗を拭いた。

フト、彼はタンスの方を見た。そして、二段目をあけると、その奥からさらしの六尺を取り出した。

久男は、だいたい長いこと、それを締めていないことを思いだした。

なつかしように、それを手にとった彼は、久しぶりに締めてみようと思った。

彼は、二階の六畳に一人で寝ていたから、両親や姉に気づかれる心配はなかった。

パンツを脱ぎ捨てると、彼は六尺褌をゆっくりと締めていった。

久しぶりに締めたその褌の感触が、なぜか小学生の頃とはちがったものであることに久男は気づいた。

彼は、褌を締めた自分の姿を、障子のガラスに映してみた。障子のガラスは狭く、全身

は映らなかったが、前から横から、自分の姿を眺め、仕切りの型をしてみたり、伸脚をしてみたりした。

彼は、褌の感触が、何となくちがうことだけだけでなく、そうやって自分の褌姿を映し見ることに、何か不思議な快よさも感じていた。

その日から、彼は、毎晩のように褌を締め、その姿に見入るようになっていた。

そのうち、久男は、六尺ではなく、まわしを締めてみたくなった。

だが、まわしを買う金を自分が持っているでもなく、母に言うわけには、もちろんいかなかった。

彼は仕方なく、和服の帯を締めてみたり、敷布を折りたたんであてがってみたりしたが、どれももうまういかなかった。

あきらめた久男は、六尺褌を締めては相撲の型をあこれとやってみたりすることで満足していた。

中学三年の春、姉が女学校を卒業した直後の或る晩、彼の家は空襲で焼けた。

母が、疎開の準備にK町へ行っているときであった。だから、すべてが灰になってしまった。



しかし、父は少しも悔やまなかった。そして、姉と久男と母とをK町に疎開させ自分は一人で、勤め先の酒造会社の社長宅に移った。その社長宅は町外れにあったので焼け残っていた。

父は、その離れに住むことになった。父を社長は片腕のように思っていたから、そうしてくれたのだった。

### (3) 女相撲のショック

母と姉と彼は、波夫おじさんの世話で、浜辺

めていたのだった。

特に軍人になりたいと思ったわけではなかったが、海が好きだったこと、兵学校生徒の姿にあこがれたこと、そしてもうひとつ、小説や映画で見て、兵学校では必ず相撲が取れることを知ったからだった。

彼は勉強に励んだ。

だが、その年の夏、戦争は終わった。

久男は、その頃の若者の誰もがそうであったように、戦争に負けたことがひどく口惜しかった。そして悲しかった。

の小さな家を借りることができた。

久男は、K町の中学校へ転校した。S中を続けたという気持ちもあったが、自分の努力次第だと心に決めていた。彼は、

海軍兵学校に行く決意を固

海軍に行けなくなったことも口惜しく、彼は、二、三日誰とも口をきかなかった。

しかし、復員してくる軍人の姿を見かけるようになってから、彼のそのくやしきは別の感情になっていた。

復員軍人の姿は、どこかうらぶれていた。生気もなかったし、すさんでもいた。彼は、『チクショウ！こんな連中が、俺のあこがれた軍人だったのか』と思った。

二カ月、三カ月経つうち、その気持は、あきらめにかわり、敗戦のショックはうすれていった。

彼は、生きていくことが何より大事なことになる。亡くなった人は、だから気の毒なのだ、と話す波夫おじの気持がわかるような気がしてきた。

彼はもう余計なことは考えまい、生き抜いていくこと、立派に生きることだけを考えようと決心した。

そうになると、思い切り相撲が取りたいと思うようになった。

K町には、小学生の頃いっしょにあばれた連中がほとんど残っていた。浩二もその中にいた。夢の中のそれよりだいぶ小さい浩二をK中に転校した日に発見したとき、彼は思わ



ずとびついていったものだった。

久男は、その浩二と、中学校に相撲部を復活してもらおうと話合った。

体操の教師に話すと、「ちょうどそれを考えていたところだった」と言った。相撲部はすぐに復活した。

漁港らしく、もとから相撲が盛んであったから、部員はそれぞれ、どこからか相撲まわしを調達してきた。

久男のものは、幸夫が探してきてくれた。

幸夫は、予科練から復員し、波夫おじの良き後継ぎとなるべく、けんめいに家業に精を出していた。

生れてはじめて締める相撲まわしは、六尺揮では得られない、一層引きしまった感触があった。

彼は、授業が終ると直ぐにまわしを締め、誰よりも早く土俵に上って、兎飛びをしたり四股を踏んだりした。

そして、誰彼となくぶつかり、疲れ果てるまで自分を鍛えた。彼はみるみる強くなっていった。

旧制中学は高校に変わり、卒業は一年延期という形になった。

彼も、海軍という目標を失なった以上、何

を専門にするかを決め、受験勉強をしなければならなかった。

彼は、どちらかというと対人関係の多い仕事には、自分は向かないような気がしたし、自然が好きであることから、農業か水産関係を選ぶことにした。父も母も賛成した。

彼の受験勉強が始まった。しかし彼は、相撲部もやめなかったし夜更かしも決してしなかった。彼は、不健康なことは全くしたくなかった。

終戦の次の年、その町の漁願相撲が復活した。

遠洋漁業に出ていた船は一斉に帰港し、昔からの習慣で、嫁入り修業のために他県に女中奉公に出かけている娘たちも一斉に帰郷して、町を上げて楽しむその漁願相撲は有名であった。

彼は、部落対抗の選手を決める予選に出場をすすめられた。彼は、「学生だから」と遠慮したが、すでに一六八センチの身長を持ち体重は六七キロに達して大人なみの身体をしている彼は、青年たちにムリヤリ出場させられてしまった。

漁船乗組みの青年たちは、さすがに強かつ

た。彼は、何度か倒された。しかし、彼は部落代表の五人の選手の一人に選ばれていた。大会は、朝から開かれた。

青年代表の土俵入りのあと、部落対抗が始まった。S部落がT部落に勝ち、彼のO部落がK部落と対戦することになった。

彼は、最初に土俵に上った。相手は船員らしく、たくましい赤銅色の肌をしていた。

立ち上り、いきなり相手は彼の頬を張ってきた。パンと音がして目から光が出たように思えた。

彼は、くそつとばかりぶつかって、左四つになろうとした。相手の腕と自分の腕が争い合ったが、彼は左をぐいと入れることができた。

相手はよほど気の早い人間と見えて、続げざまに技をかけてきた。その力は強かった。彼も、ヨシノとばかり攻勢に出た。

得意の上手投げを二回、三回とかけると、相手は思わず体勢をくずされよろめいたが、立ち直り、まわしをぐいと引いて寄って出てきた。彼は、それを吊りでこらえようとし、あらん限りの力で相手のまわしを引き吊り上げにかかった。

それは成功した。相手が自分より軽かったこともあった。パタパタと足を動かし、何とかして逃れようとする相手を、彼は見事に吊り出していた。一斉に拍手が起った。

しかし、彼の部落は三対二で敗れた。

昼食が、あちこちで始まっていた。

彼は母と重箱を開き、御馳走を腹いっぱい食べた。

便所に行き、人ごみをかきわけて部落の自分の席に戻ったとき、彼はハッとした。

「ただいまから、女相撲を行ないます」というアナウンスが入った。スピーカーは続けて「戦争のため長いこと中止されていた女相撲に、ぜひ御声援をおねがいいたします」と言った。

彼は自分の耳を疑った。この世の中に女の相撲があったのかと、そのショックは大きかった。

母は、その町の出身でありながら、そのことを教えてくれなかったし、誰も今日までその話をしなかった。

彼の身体は熱くなっていた。土俵の方を見るのが恐ろしいような恥かしいような気持ちが生じていた。

しかし、彼は、土俵の方を穴のあくほど見

つめていた。

やがて花道から、十二、三人のおばさんたちが入ってきた。白いシャツに化粧まわしという姿であった。

彼は、それがおばさんたちであることにホッとした。だが、女は女である。彼の胸はまたときめいた。

四十代の主婦たちであろう。どの人も堂々たる身体をしていた。

やがて土俵入りが始まった。

四股を踏むたびに、観衆が一斉にヨイショとかけ声をかけた。

見ると、彼の母も大きな声でヨイショノと言っていた。その顔はいかにも嬉しそうであった。

土俵の上のおばさんたちも、ニコニコして楽しそうだった。

彼のショックは、全体のそうした空気で、だんだんとなごんでいった。

だが、円陣になっておばさんたちが彼の方の後ろ姿を見せたとき、彼は再び、身体の熱くなるのを覚えた。

正面からは見えなかったが、おばさんたちはみな、白いパンツの上から、真紅のまわしを締めていたからだだった。彼は、横に張った

女の臀に食いこむそのまわしを、息をのんで見つめていた。

土俵入りが終わると、取組みが始まった。

たいていの取組みが、ニコニコしながらの四つ相撲で、倒れる時なども注意しながら尻をついたりするので、それは相撲とはいえなかった。久男の緊張感は少しづつ解けかかっていた。

だが、中ごろで、一番若いと見られる二人の相撲は、彼にまたショックを与えていた。

その二人は、切仕る時から真剣な表情をしていた。彼の後ろに坐っていた年寄りが、隣の席に、「あの二人は始めて相撲取るんじゃない」と話しかけていた。彼は、なるほどと思った。恐らくそれで緊張しているんだろうと、彼自身も身を固くしていた。

立ち上り、二人はしばらくどちらからもぶつかっていかなかった。

一番年寄りと見えるおばさんの行司が、ハッケヨイノと声をかけたとき、二人はドンとぶつかった。

そのまましばらくまわしも取らず、揉み合っていたが、一方がぐいと右を入れると同時に片方も右を入れ、上手下手をとっての四つ相撲になった。



二人とも相手のまわしをぐいぐいと引いていた。観衆の中からどよめきが始まった。

二人は、何もかも忘れていたようだった。ただ夢中で、力いっぱい取組んでいた。太いももにピリピリと筋が見え、ふくらはぎの肉が盛り上って、二人が精いっぱい力を入れていることがわかった。

技も知らぬ二人は、ただそうして、ひたすら押し合い揉み合った。

久男はその二人の姿に、女を感じていた。もう、おばさんなどと感ずることができなくなっていたのだった。彼は、思わず全身に力をこめていた。

二人のまわしは、乳の下までズレあがっていた。あまりきちんと締めていなかったのか一方のまわしの三ツ目がパラッと解けてしまった。

だが二人とも、そんなことには全く気付かなかった。

行司が二人の肩をポンと叩き、まわしを締め直そうとしたが、二人はそれを感じがいがいした。早く勝負をつけろという合図と思ったのだらう、三ツ目の解けた方が、猛烈に寄って出た。

しかし、もう一方は土俵際で弓なりになっ

てそれをこらえた。

今にも寄り倒されようとした瞬間、その人はぎゅうと身体をねじって打っちゃった。

観衆は一瞬しーんと静まったが、次の瞬間それは、どよめきと拍手に変わった。

彼は、二、三日眠れなかった。

うとうとすると、その時の二人の「女」の四つに組んだ姿が目について、ハッと目を覚ますのだった。

相撲は男のものとはかり思いこんでいたところへ、突然女の相撲を見せられたこともあったが、四つに組む女の肉体が、彼にショックを与えたのだった。

その上、母から、母の若い頃は娘の中にも土俵に上る者がいたと聞かされ、驚きは更に大きくなった。

或る晩、彼は、誰かわからないが、若い美しい娘が、まわしを締めて彼に向ってくる夢を見た。彼は、『これほど女の相撲にこだわって夢にまでみるのは、自分がどこか異常なせいではないか』と悩むようになった。

しかし、母が急病に倒れ、死線をさまよった時、その看病に夢中になっていくうちに、そのことを忘れるようになっていた。

姉の和子は、その春嫁いでF市に戻っていたから、彼が、看病から炊事まで一切をしなければならなかった。父は、母が病に倒れてから、毎月二、三回はF市から訪ねてきた。父はその度に、久男に向かって「すまぬ」と言った。

しかし、母思いの久男は、全てを看病に捧げた。

相撲部からも遠のき、最低の受験勉強をするだけが、彼の日課になった。

いよいよ受験という日に、母は都合よく床を離れるまでに回復した。

女相撲からのショックと、異常なのでは？という悩みも、半年以上のそんな生活の中でほとんど忘れていた。

彼は、今ではそれを、女性に関心を持ち始めていた自分の年頃のせいだと思ふようになっていた。

#### (4) 初恋を破ったその夢

昭和二十四年の春、彼はF市の大学の理学部を受験するために、F市の父のもとに行った。試験の十日前であった。

半年以上の母の看護のため、彼は受験勉強が十分にはできなかった。だから彼は、第二



次の志望をM市の大学の農学部を選んでおいた。

父はまだ、社長宅の離れにいた。

食事も、社長の一家の厚意で、社長宅から運んでもらっていた。

二、三日経った、或る暖かい晴れた日であった。

彼が一人で勉強していると、「お昼のごはんを持ってきました」と、縁先で聞き慣れない、若い娘の声がした。それまで、食事は社長宅のばあやが持ってきていた。

彼は、「ハイ」と言うと、縁側の障子をあげた。

そこには、高校の制服を着た、美しい娘がお膳を持って立っていた。

久男は、その美しさに、声も出ることができなかった。

美しいという表現では言いあらわすことができない

ほど、彼にとって、その娘はすべてであった。

美しいという表現は、顔が美しい、身体の均斉がとれている、目がきれいだというような、一面的なものではないようだ。

彼女は、久男にとってすべてであった。

人が見ればどうだったかわからない。しかし、彼にとっては、息がつまるほど、彼女はすべてノであった。

久男は、中腰になったまま、じっと彼女を見つめていた。彼女も……あとで思い当たったのだが、じっと彼を見つめていた。

時間も、ピタッと止まったようだった。

久男はハッと我に帰った。

「どうも、ありがとう」と、やっと言ってお膳を受けとった。

娘は、くるっと後ろを向くと、母家の方へ駆けだして行った。

久男は、しばらくぼんやりして、箸も取らなかった。

美しく澄んだ瞳、きゅっと結んだ唇。細面のようできて、ふっくらと紅潮した頬。比較的、背の高い方ではあったが、痩せ型ではない豊かな肉付きの身体。気持よく小麦色に灼けたその肌。おしとやかとはいえないが、しかし、謙虚なその身のこなし。

久男は、胸の動悸さえ覚えていた。

彼は、ひたすら夕食の時間を待った。しかし、夕食は、いつものばあやが持ってきた。

夕食をとりながら、彼は父に聞いた。父は

「あの人は、社長の二女で、高校二年の和子さんと言う人だ」と、その名を覚えてくれ、

「何かあったのか？」と尋ねた。彼は、「いや、昼めしを持って来てくれたんだ」とだけ言った。

「和子さんはなかなか活ばつな子でね、水泳の選手らしいよ」と、父は付け加えた。



久男は、口の中で、「和子さんか！そうか、和子と言うのか！」と、その名をくりかえし言ってみた。

その夜、八時頃だった。

和子は、「今晚は」と言っ、突然障子をあけた。そして、「お風呂にどうぞ」と言った。

父は、古い考えから、社長一家が入り終えなければ風呂はもらわないことにしていた。

恐らく、和子が一番最後に入ったのであろう。湯上りのユカタ姿の和子は一層美しかった。漆黒の髪が濡れ、二、三本、それが頬に張りついていた。

彼女はニコツと笑い、くると向きを変えて駆け戻っていった。ちらっと、ひるがえった裾からすねが見えた。

その夜、彼は、全く勉強が身につかなかった。

試験の日まで、そんな状態が続いた。

試験のことなど、どうでもよいというような気持さえ起っていた。

彼は、「これが恋というもののなのか」と思った。

試験の日の朝。出かける彼を、彼女は門の

外で待っていた。そして、「がんばってネ」と言うと、サツと身をひるがえして門の中へ駆けこんでいった。

試験の間も、彼はしばしば彼女のことを思っていた。

大切な英語と数学に、とても自信の持てる解答ができなかったので、彼は、恐らくダメだと思った。

M市の大学の入試には自信があった。

しかし彼は、F大に入れないければ和子と付き合うことはできないと思い、ひたすらF大に合格していることを祈っていた。

F大の発表は、よほど見まいと思ったが、彼はF市の父のもとへ帰った。和子に合いたい、それだけがねがいであったようだった。

F大には、やはり受かっていなかった。

久男は、F市をあてもなく歩き廻った。帰ったのは、十時を過ぎていた。

門の前に、和子がいた。

そして、

「試験の結果、どうでしたか？」と聞いた。

彼は、嬉しかった。

まさか和子が、彼を、待っていてくれるなどとは夢にも思っていなかったからだった。

だがその喜びは、一瞬、苦しみになった。受かっていれば胸も張っていただろう。しかし、落ちていたのだ。彼は、だまって下を向いたまま首を横に振った。

和子は、「がっかりしないで！次の学校はきっと大丈夫だから」と言ってくれた。

だが彼は、顔を真赤にして、彼女の前を駆け抜けていた。

その夜、久男は夢を見た。

その夢が、和子から久男を離す決定的なものになった。

夢に、始まりはなかった。

久男の昔住んでいた。空襲で焼けた二階がその舞台であった。

彼は、白いさらしの褌を締めて、その姿を障子に映していた。

すべてが、中学時代の頃と同じであった。そこへ、突然、湯上りの和子が入ってきて彼に武者振りついてきた。

ユカタ姿のままの和子の頬が、彼の胸に押し当てられ、その手は、彼の褌をつかんでいた。彼は、無我夢中で彼女と揉み合った。和子の足がからまって、二人は同体我倒れた。

和子の、熱い息を感じた時、彼は、乱暴に

その帯をほどき、ユカタをはぎとるようにして、すっかり裸にしてしまっていた。

和子は抵抗しなかった。

彼は、その豊かな肉体に、白いさらしを締めさせていた。和子は、彼のするなりになっていた。

そして、真直ぐ正面を向いて立つと、いきなり彼に組みついてきた。

何とも言えぬ熱っぽいものが、和子の肌から彼の全身に伝わり、走った。

彼は目を覚ました。

彼は、しばらく茫然としていた。

『何というバカな夢を見たのだろう。あの人を、あの純粋な娘を……どうして裸になんかして、しかも裸など締めさせて……』

と、彼は奥歯をかみしめていた。

久男にとって、その夢は、和子に対する決定的な冒瀆に思えた。

彼は、ひと晩じゅう眠れなかった。

夜が明けると、彼は、ソツとフトンを抜けだし、父が起きないように静かに仕度をし、門を飛び出した。そして、一目散に駅に向って走った。

## (5) 悔恨の日々

それから四年経ち、彼はM大の農学部を卒業して、母の田舎のあるK県の農業試験場に入った。

大学時代、彼は、あれほど好きであった相撲を全くやめていた。

相撲という言葉聞いただけで彼は和子のことを思い出し、その、いまわしい夢を悔やむのだった。

彼は勉強に専念した。

しかし、和子のことを忘れることはできなかった。

それを忘れるために、彼は更に勉強に熱中した。だが、なかなか和子を忘れ去ることは困難であった。

何も事情を知らぬ父は、月一回彼に寄越す手紙には、二回に一回は社長一家の消息を書いてきた。彼は、それをやめてほしかったが父にそのことを書き送る勇氣はなかったし、心のどこかで、和子の消息を知りたいという氣持があったから、とうとうそれを書き送らなかった。

母はそのうち元気になり、彼が二年生になった時、父が新しい家を建てると同時に、父のもとに帰った。

それまで、彼は、夏や冬の休暇に、遂に父

の住む、和子のいる家には帰らず、母のもとにしか行かなかった。

母が父と、F市の新しい家に住むようになってしばらくして、父から、和子が短大に入学したという手紙が来た。

しかし、それ以後、父も母も和子の話をしなかった。彼は、F市の父母のもとに帰省しても、和子の家の近くには絶対に行こうとしなかった。また、彼女が入っている短大の付近にも行かなかった。

和子の消息は、その後、彼には全くわからなかった。父母が、なぜ彼女の話を話さないのかわからなかったが、それを聞きただす勇氣もなかった。

農業試験場に入ってから彼は、甘藷の研究に没頭した。

たちまち三年が過ぎ、彼は二五才になっていた。

彼に、父母からの、始めての結婚話が持ちこまれた。

しかし彼は、それを断わった。和子以外の多くの女を友だちとして持ったが、和子以上の女はともに見出せなかったし、女を見れば彼は和子のことを思い出すのだった。

彼は、ひとつ年下の彼女は、もう、とうに



結婚しているのではないかと思った。だが、それでも彼女を忘れることはできなかった。更に三年が経ち、彼は二十八才になっていた。

父母は、もう待ち切れないようで、度々、彼に結婚をすすめてきた。

確かに彼もさびしかった。

二十七才になっているはずの和子は、それこそ独身でいるはずはないと思って、彼は、何度か結婚を考えようとした。

和子のことは、しかし、どうしても忘れられなかった。

久男は、父に、思い切って和子の消息を聞くことにした。聞いて必ずガッカリするだろうとは思いつながら、彼は思い切って手紙を出した。

返事には、こう書いてあった。

『お前が結婚しない理由が、何だかわかったような気がする。お前が、俺にもだまって、入学試験に落ちた日の翌朝突然行ってしまった理由もわかった。恐らくお前は和子さんが好きだったのだろう。』

和子さんは、だが、二年前、俺が退職した翌年の春、結婚した。東京の、或る大会社の重役の息子とだ。

だからお前は、和子さんをあきらめなければならぬ。早く気づけば良かったが、それにしても今まで好きでいたとは、お前もどうかしていると思う。打明けもせず、一人だまって思っていて、それであきらめきれないとしたら、全く男らしくない。

きっぱりと気持を決めて、出直せ。俺はお前の選ぶ娘に文句は一切言わない。母さんもそう言っている……』

久男は、父の言うとおりであることはわかっていた。自分だけで彼女を想い、気持を話もせず、そしていつまでも悩むなど、全く男らしくないことはわかっていた。女の場合でもそうだろうと思っていた。

だが、あんな夢を見た限り、打明けるもくそもなかったのだ。彼は、未だに、その夢は彼女への冒瀆だと思っていた。

彼は父の手紙以後、何とかして彼女をあきらめようとした。

しかし、それはどうしてもできなかった。彼は遂に、神経衰弱のようになり、それを押して働いているうちに、胃痛が起って寝込んでしまった。

医者は、細かく診断してくれたが、潰瘍もないし、胃が下垂しているわけでもない。疲

労からの胃けいれんだろうから、思い切って温泉にでも行って来いと言った。

同僚もそれをすすめてくれた。六年も勤めて一度も休暇を取っていない彼を、同僚は無理やり温泉に行かせる手配をしまっていた。黙々と働く久男は、職場ではみなに尊敬もされ、親しまれていた。

彼は、同僚の好意を受けることにした。その温泉は、K県の火山地帯にある、眺めのよいところだった。

彼は、同僚が手配してくれた、その温泉でも一番高級なHホテルに泊った。二週間の予定だった。

ただでさえ眺望の良いそのあたりであったが、そのホテルの三階の部屋からの眺めは特別良かった。

秋であつたので、いっそう空気も澄み、紅葉も美しく、一日ただけで彼の気分はずいぶん爽快になっていた。

彼は、毎朝、日の出とともに起きて、そのあたりの山道を散歩し、夕方また、同じように散歩した。

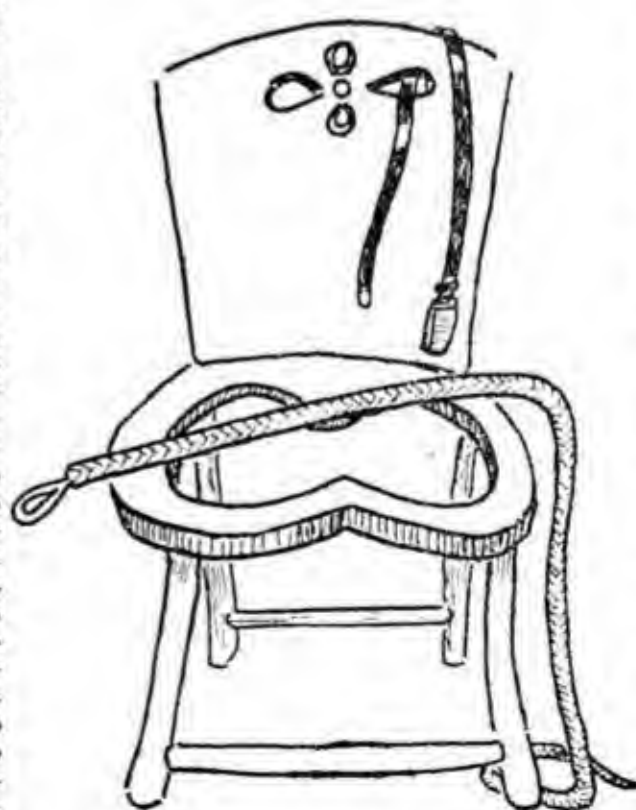
胸の傷心に耐えながら……。

(おわり)

# 心傷<sup>こころ</sup>たむ<sup>い</sup>遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>

△第二十九章 女囚ミシユリーヌ (九) ▽

## 西 条 操



ブリジットとフロレンスが眼を丸くした。

「ああやって働かせるの？ 無茶だわ」

「あら、当然よ。あなたたち、囚人に後ろ足で砂かけられて平気？ 大丈夫よ。なんならいざって這えばいいんだわ」

オッセン夫人も、めっきり強硬になったものだ。

「あら、思い出したわ。あれ、たしか出戻り女囚よ。見おぼえあるわよ」

「出戻りって、なあに？」

「折角仮釈放してやったのに、またぞろ送り返されて来た不心得者のことよ」

「まあ!! そんなのがいるのね」

「そうですとも。ほんと腹が立ってよ。だから、冷たいようでもきびしくしなきゃ」

クリスチーナは呻きながら鍬をふりあげ、ミシユリーヌはホツとした。委員たちの手前があるのだろう、連帯責任とやらない無理尽な習慣は、この際無視されたのだった。

「そういうものかしらねえ？」

「そうよ、ブリジット。とはいうものの、従順なものもあるわ。全部が全部にこんな腰鎖つけなくても、いいんじゃないませんか？」

「馬鹿お云い、フロレンス。あなたもまだ甘

チャンね。いいこと？ 鎖つけてあるのは一種の象徴なのよ。身分の断絶を示すシンボルってとこね。分った？」

三七二号あたりが、ヤケ気味に手錠を鳴らし、いと無念げに盗み見た。世を拗ねて、ひがみ切っている眸だった。

「ホラ、あの二人なんか手錠入れられてるわよ。粗暴な振舞いがあったのね、きつと」

「ほんと。でも、凄い体格。女レスラーね。こんなの、こうしとかなきゃ、怖くってそばを通れないわ。あらまあ、あすこの二人、脚に鎖ぶら下げちゃって。よろよろしてるじゃ



ない？ こっち睨んでるわ。あら、看守さんに撲られてる。頬べたなんか撲っていいのかしら？」

行刑審査委員のお歴々を前にして、堂々とピンタ喰わせて見せたのは、娑婆の干渉をいともうるさがっているベルディーヌだ。

「でも、小気味のいい者だこと。恐れ入って働き出したわ。凄いい鎖ね、重そうだこと」

「うん、思い出したよ」

と、シュバリエ夫人が足を停めた。

「あれはたしか、えーと、この正月だったかしら。ホラ、却下してやったじゃない？」

オッセン夫人も手を打った。

「そうでしたわね。あれ、ヤンキー女よ。両脚に鎖の方は」

「そうでしたわね。がさつなヤンキー女にはあれでちょうどいいのよ。ちっとは淑やかになるわ。ほんと、ヤンキーのやることは」

シュバリエ夫人は人種的偏見を披瀝した。

「あら。外人は一監に収容するんじゃないありませんの？」

「そう聞いたわ。一監に七、八人いたんじゃない？ 有色人種が。あれ三人はアルジェリアの半黒だけど、あとはベトナムの女ね」

お歴々は、午前中には一監と二監を見て回

ったのだ。ブリジットは、初めて踏み入れた獄舎の雰囲気のアガったらしく、一監での説明を聞き洩らしていた。一監には、七人の有色人種のほかに、白人種の外人女囚が英独伊露西とり混ぜて十名ほど繋がれている。そして、ベトナム女は間違いで、その二人はジャポネの女性だ。言葉も不自由な異国での圜圉の身は、さぞかし悲哀に満ちたものだろう。

「あら、それは原則なのよ、ブリジット。あの脚鎖のヤンキー女、えーと、マーサとかマージとか——あの女はこの国の男と一緒にだったのよ。だから。言葉だってペラペラ」

委員会のお歴々は中央道を端まで行き、ゆっくりと引き返して来た。

「ね、ね、ねええ。ホラ、ときどきマスコミが書いてるでしょ、無実の罪を叫ぶ女囚とかって。あのひと、たしかこの三監でしたわねえ。どれかしら？」

「探して見たら？ フロレンス」

「だって——。何番だったかしら？」

「さあ。興味ないわ」

「ずい分と御冷淡なのね、マダム・シュバリエ。可哀想じゃありません？ 会って見たいですわ。ねええ、ブリジット」

「あのね、申しあげておきますけど、そんな

ことは私たちの管掌外なのよ。安っぽい世論なんかには惑わされちゃ駄目。私たちは、嘆願書が来てから取り上げりゃいいの」

「そう。そして、著るしく苛酷な処遇があれば改善させるのよ、著るしく、よ」

と、オッセン夫人も貧乏女には冷淡だ。その三二三号はずっと離れたあたりで背をこちらに向け、黙々と畝をすいている。そして、その細い後ろ首のあたりを、マジョーリが見守っていた。この女囚は、残した子供三人をより貧しくするに忍びずして、勝目少なく金のかかる上告を諦めたのだが、再審をという段になったいま、一審で服罪したということが障害になっているのだ。それを薄々知っている三二三号は、仮釈放の方便とはいえず、罪を認めて悔い改めようとはしない。なにしろ彼女に云わせれば、悔い改めるべき罪なんかないのだから——。

マジョーリは、やり切れない気持でじっと見守るのだった。

マーサがヤケ気味に脚鎖を膝に蹴って激しく鳴らし、三〇八号が鍬をいきなりほうり出した。ときどきは自ら進んで懲罰を受けたがるマゾ女の金髪女囚だ。三〇八号は、通り過ぎるお歴々に突進した。忽ち腹鎖がピンと張

り、くびる鎖に腰を取られて、腳踏みもだえる。鎖相手の三一二号が顔をしかめ、引き摺られながらも踏み止まった。

「おねがいです。ここから出してッ——」

中央道から数米——三〇八号は畠に四ッ這い、土にしがみついて身もだえした。

「——もう、決して悪いことなんかいたしません。誓います。この——この鎖を解いて」

三〇八号は両手を合わせて声をふるわせ、委員会の男女は顔見合わせて立ち止まった。

泣いてひれ伏し、両手合わせて哀願されるのは、優越の立場にある人間にとって、決して悪い気持ではない。

モレシエンヌ婦人看守が飛んで来て、女囚の利腕をねじあげた。

「お黙リッ。馬鹿ねッ。静かにするのよ、これッ」

三〇八号は苦痛の呻きを洩らしつつ、二人の男性をトロンと見上げた。後手錠が喰い込み、マゾ女囚は哀れっぽくヒーと泣き、肌掴まれて引き戻される。

遠く眺めて身構えたベルディーヌあたりが番号布を読んで、アホらしいと横を向いた。ポカポカして来た陽気の加減で、しばらく出なかったマゾ女囚の虫が、またぞろ鎌首をも

たげたのだろう。あんなお芝居半分のお遊びごとなんか、モレシエンヌ一人で沢山だ。

保安課スカートが眼を光らせ、ジョアンヌ女史がその耳に囁やいた。

「へーえ、そうかい。ここにもいるんだね」保安課スカートは苦笑した。

「あんなの、いったいどうなってるんだろ。あんなところはあれ一人かい？ 四監には二人いてさ、一人は同性愛が混っちゃってるのよ。

ミシェルがボヤいてるわ。相手が女でも感度上々ってんだものね。アホらしいったら」

そのことについては、ジョアンヌもミシェルから茶飲み話に聞いている。世の中には、いろんな女がいるもんだ。あの三〇八号なんかは、相手が女性だと先ずはゾツとしない気味だから、まだ始末がいい。

「あんなのは精神病院へほうり込むべきね」

「そうかもね、ジョアンヌ。いっぺん、泥を吹くまで骨をギシギシいわせておやりよ」

三〇八号は引き摺られつつ身をもだえ、ことさらに引張る後手錠が陽にキラめいた。

「——い、いたい。かんにんして——」

「おとなしくしなさいッ。撲りたいの？」

「撲ってよ、あたしが悪かったんですから」

聞いて真に受けたブリジットあたりが哀れ

をそそられ、美しい眉をひそめた。

「無理ないわね、可哀想。出して欲しくて堪まらないのよ。ねえ、フロレンス」

「そうね。撲ってくれてまでいってるんだから、ゆるしてやって解いてやったら」

モレシエンヌはお尻をバシッと打ち、容赦なく引き立てた。三〇八号は男性二人から未練気に眼を離し、こんどは、いきなり跪まず

いてモレシエンヌを見上げた。興奮にうるんだ眸だった。

「担当さま、おねがい。用使させて下さいましッ」と、大声で叫ぶ。

男たちが眼を丸くし、モレシエンヌはためらった。全く、仕様もない女囚だ。好きこのんで恥かしい思いをしたいというのだ。

ジョアンヌ看守長女史が何思ったか

「許可しておやり」とモレシエンヌにいう。

女史にして見れば、女囚の自虐趣味を満足させてやるアホらしさと、用使を制限して人権蹂躪云々といわれる忌々しさを天秤にかけたのだ。ことに、新委員たちは初手で同情的だし、用便場の構造は規則によるものだ。

モレシエンヌは後手錠を解いてやり、手首

揉む三〇八号に用便紙一枚を手渡した。

跪まずいて受け取った女囚が押し戴き、大



声でお礼を叫び、またもブリジットが感に耐える。

「まあ!! あんな紙の一枚だって自由には出来ないのよねえ。あたりまえだけど——」

三〇八号は畠の隅へ追われ、同じ鎖の三二二号が舌打ちして従い、鍬捨てた両手を忌々しげに背に組んだ。

婦人刑務所の実態を知る古顔男性委員が新米男を小突く。

「いささか興味ある光景ですよ。私も初めてなんだが、見ないふりをする方がいいでしょう。うな。しかし、相変らず美人は少ないなあ」

新米の男性委員は何か呟いて咳払いし、上気した頬を撫でた。一監から二監、そして此の監舎外労役場と、男性に飢えた女囚群の眼襖に執念深く曝され通しなのだから、初老を過ぎた彼とはいえ、ポーッとうろたえ気味なのも無理はない。

「また虫が起ったわよ、あの奇天烈女の妙ちきりんな虫が」

あばずれたちが囁やき合って肩すくめる。「フフフ。だけどサ、ムシヨ向きにお誂えてタチだね。羨やましいくらいのもんだ」

「出たら弟子入りしてサ、いっちゃん修行する? こわいものなしの姐御になれるね。で

もサ、いくらなんだってさア、あんときの恰好を殿御に見てもらおうたアねえ——」

奇天烈女囚の三〇八号は用便穴の踏み板の上で、鼻など嚙って見せた。

穴のまわりには囲いがあるはずもなく、二十センチ離して二枚の踏み板が野天に渡してあるだけだ。

モレシエンヌ婦人看守は、しゃがみ込む女囚の姿を、娑婆の人々から身を以て遮ぎってやりたかった。しかし、踏み板は中央道と平行だし、正面から監視するのが規則なのだ。モレシエンヌは眉をひそめて、三二二号に命じた。

「こっちへ回りなさい」

三二二号は横領女、裁判を恨み、世を拗ねて、ミシユリーヌあたりの爪の垢でも煎じて飲ませたいほどの女囚だ。自分と同罪だと思いついて入っている男が上告審で執行猶予になり、その男を寝取っていた女が無罪になったと知ってからは、ふてくされ果てている。

三二二号はそのそと反対側へ回り、娑婆の男女を凄じい眼で睨みつつ、腰の鎖を意地悪く引張った。踏み板にしゃがむ女囚が悲鳴をあげ、モレシエンヌは溜息をおさえる。

「意地悪しないでッ」

「だって、後ろに眼はありませんもの。背を向けてるのが規則でしょ? 担当サマ。私だって、あんな苦勞知らずの御立派なお方々に顔を向けたくはありませんわよ」

「お黙リッ。もすこし右へ寄るのよ」

「お心使い、勿体ないくらいね。まだア?」  
踏み板の上の女囚の背後には、裏門の上の監視塔が遠くそびえている。三〇八号は例によって必要以上にたくしあげ、腰のあたりをくねらせて永い。監視塔には保安課男性が常駐している。その視線を想像して、心ひそかに楽しむ三〇八号だった。

七名のお歴々は、眺めて眼をそらせた。三二二号の奴はわざと体をずらせて立ち、しかも鎖一杯に離れているので、遮蔽物の役には全然立たない。もっとも、鎖を張り気味にするのは、鎖が汚れるのを防ぐため、そうするのが規則だ。

いつものことながら、モレシエンヌは胸を痛めた。ことに今日は、社会の人々の眼を感じて、他人事ながら我が頬が赤くなる。

「あんな風にしてさせちゃうのねえ」

と、ブリジットがびっくり仰天した。

「驚ろいちゃった。話には聞いてたけど、まのあたりに見ると——。哀れなものねえ。ど

んな気持かしら？」

「よっぽど我慢できなかったのよね、フロレンス。それだなきゃ——」

「たまげることではなくってよ、当然です」

シュバリエ夫人が事もなげに云い、盗み見る男性二人に肩をすくめ、再び歩き出す。

「ここは刑務所なのよ。囚人は、一瞬といえども監視の眼を離れることは許されないの。看守さんの方こそ御苦労だわ」

男性二人も瘦せ我慢を示して歩き出し、とさらに反対側の畠を眺めた。

「ちきしょう」と、三一二号が歯がみする。

「ぶらぶらと帰って行くわ。見物するだけして、さよならってわけ。ピカピカの車が待ってやがるんだ」

「これッ、なにをブツブツ云ってるの？ お前もどう？ え？ 三一二号」

「結構でございますわ、モレシェンヌさま。

冗談じゃないわよ、頭に來てンだから」

「なんだったって!! おや、もう済んだんでしょ



う？ 早く身仕舞いしなさいッ」

「ふん。いっぺん、自分がこんな風にしてやって見たら？」

三一二号が足摺りして呟いたが、モレシェンヌは聞えぬふりをしたのだった。

またしても、女囚の一人が叫んだ。三〇八号と同じことを願ひあげたのだ。ベルディーヌが飛んで来て、えらい見幕で叱りつけた。

「だって担当さま。三〇八号は許して頂いたじゃございません？」

「バカタレ。ひとはひと、お前はお前だよ。

穴ぼこは三〇八号でちょうど一杯さ。御視察

が済んだら穴を掘らせてやるわ。それからのことだよッ。辛抱して待ってな」

「用便穴は一人ごとに土をかぶせて行くのだから、次々と新しいのを掘る。現に三〇八号が哀れっぽい仕草で土を落とし込んでいて

「あらまあまるで犬みたい」と、ブリジットが笑ったところだ。しかし穴が一杯だというのはベルディーヌの嘘だった。この三四六号は女盛りの

の元看護婦で、麻薬を盗んで五年なのだが、それはともかく、この女囚は「ベルト」装着中なのだ。恥かしいことを、この際願ひあげた狙いは、ベルディーヌには読めている。新しい委員に股手錠を見せつけ、あわよくばその憂き目から逃がれようという魂胆にちがいない。綺麗ごとしか御存知ない方々しらいから、そんな戒具や縛り方は残虐だとか何とか、おっしゃって下さるかも知れないというわけだろう。

一喝された三四六号はよろよろと立ち、囚衣の膝の上を払った。相手がベルディーヌと



来ては仕方がない。不公平は刑務所の常であるし、拒絶されて元々の話だ。新米委員の三人や五人が擁護してくれたところで、伝統に満ちたこの懲罰が廃止されるわけでもあるまい。三四六号は再び鋤を握り、ひとしきり腰を激しく振り、かなたの人々に聞えよとばかりに、囚衣の裾の中で手錠の音を立てて見せた。

「このひとたち、みんな、ここを出して欲しいのよね。あの眼で見られると胸が痛むわ」  
「そうね、ブリジット。私は寒むけがしちゃう。あらッ」

フロレンスが答え、あわててドレスを押えた。一陣の春風が労役場を吹き抜けたのだ。九監房のあばずれの一人、三六八号の奴も裾を押え、押えるふりをしてたくし上げた。そして、大袈裟に悲鳴なんかあげて見せる。

この三六八号の赤毛も「ベルト」組の一人だ。忽ちキャスリーヌが飛んで来て、警棒の一撃をむき出しのお尻に見舞った。あばずれたちをマークしていたキャスリーヌの行動は敏速で、軽金属製の警棒をあらかじめ伸ばして握っている。常日頃御厄介になっている革ロープの鞭にくらべれば、この警棒の方がましだとはいえ、素肌に喰ってはやはり痛い。

それにキャスリーヌ婦人看守は力一杯に打ち据えたのだ。小気味よい音が肉にはじけ、赤毛女囚は飛び上がった。

「——ヒーツ。ウ、ウツ、いたい——」  
「撲ってくれてむき出したんじゃないの？ 痛けりゃ、さっさとドレスを下ろすのよッ。もう二、三発欲しい？」

警棒でお尻を打ち据えるのは、婦人看守に与えられている大びらな権限だ。キャスリーヌはショルダーバッグゆすりあげて、楽しそうにきめつけた。お歴々の御視察に備えてフオンティーンヌの指示により、キャスリーヌとイヴェットとはショルダーバッグを肩に吊っている。その中には、嵌口具と手錠の類が詰め込まれているのだが、その重いバッグを持たされて口とがらせていたキャスリーヌに見れば、うつぶん晴らしとして恰好の目標だったわけだ。

「——す、すみません。風が吹いたもので」  
赤毛は顔しかめて詫び、のろのろと裾をおろしつつ、両脚ひろげて腰を振る。間にぶら下がる手錠が触れ合い、その後ろ姿を眺める委員たちの眼に「ベルト」の革と金具と、音立てる手錠とが焼きついてしまった。

「風だって？ バカ」

キャスリーヌの警棒が、まだ掩われない太腿に飛び、赤毛は身をよじった。早いと裾をおろし切らないと、この手の早い娘看守の警棒が、むき出しの部分を狙って降って来るのだ。裾の窮屈な労役衣は布地もごわごわだし、たくし上げるとおろすのに手間取る。もちろん、風で舞いあげられたなんてウソっぱちもいいところで、やはり「ベルト」の中世紀風を知って貰いたいのが故だ。

ブリジットとフロレンスは眼を丸くし、新米男は口をあげ、それぞれ驚きの声をあげた。失敗ったねえ——と、ジョアンヌ女史は舌打ちする。先刻からの様子を観ているに、態度のよくないのが多過ぎるのだ。

一監や二監の女たちは神妙だったんだろうねえ。やっぱり、事前に警告して脅かしておくんだったわ。マルタ課長でなくってよかったこと——。

女史はそっと保安課スカートを盗み見て後悔し、保安課の女丈夫は、タルンでるわ、という面持ちであたりを睨み回した。

「あれは、いったいなあに？」

「新モードのパンティよ、ブリジット」  
オッセン夫人がそう答えて笑った。

「冗談いわないで。ねええ、フロレンス」

「ええ。よくは見えなかったけど革製よ。スゴク喰い入ってたし、鍵がかかってたわ。角張った環は鉄ね、とっても痛そう。それに、真下にぶら下ってたの、手錠みたい」

それだけ観察していて、よく見えなかったものものだ。新米の男性もうなずき

「ありゃ、貞操帯ですな」

と、肩をすくめた。古顔の男が耳に囁き、二人は声立てて笑い合った。どうせ、碌でもないことを囁き合ったのだろう。

してやったり、あばずれたたちが眼配せし合い、ニンマリと笑み合った。

「アッパレだったわね、あの赤毛。風のせいにするなんてウマイじゃないか」

「フフフ、やんごとなき方々もタマげてる。ザマ見れてんだ」

内々のヤキ入れはどうせ免がれないだろうが、正規の懲罰にはかけられないだろう。風のせいにされては、忌々しいが仕方ない。

してやられた、と保安課スカートは苦笑いした。保安課にシヨ引くのは、このくらいのことの場合なら、タイミングと気合いが肝要だ。

「でも、何故あんなものをかけとくの？」ブリジットが、遠くへ追いやられる赤毛を

見送って、誰へともなく訊ねた。

「トボけないで。あれは貞操帯なのよ、分った？」

「だって、殿方はいないんでしょ？」

「不埒な行為に対する罰と予防です。不潔で汚らしい行為」

シュバリエ未亡人が吐き捨てるように云って、かなたのミシュリーヌを眺めやった。

「不埒な行為って？」

「あなた、行刑審査委員の資格なしよ、ブリジット。でも、あすこの手錠は傑作ね」

フロレンスは想像してクスクス笑った。

「ねえ、あんなの締められてたの、一監や二監には居なかったわね？」

「坐ってたから分らなかっただけ。いない筈ないわ、春だもの。でも、いまの赤毛さん、なかなか勇氣あること。出来ないことだわ」

「オッセン奥さまったら、妙なこと感心しちゃって。だけど、いくら締めたって横から指ぐらい入っちゃうんじゃないかしら」

「ああ、ブリジットったら、やっぱり分ってるんじゃないの、ホホホ」

そうとも——。いくらやんごとなき貴婦人だって、止むにやまれずして、やんごとある所業に耽けることもある。

「ねえ、革かなんかのグローブを嵌めといった方が完全なんじゃないかしら？ あれじゃ痛いわよ、摺れちゃって」

「馬鹿なこと云うもんじゃありませんよ。グローブ嵌めといて、お仕事させられて？」

とシュバリエ未亡人がふり向く。

「常に禁制を意識させておくには、抑制具を四六時中まわらせておくのが一番ですよ。こんなところへ来るような女には、ズバリの直接手段でなきゃ利き目ありゃしない。性に関する事柄は、すべて御法度です。当然よ」

女盛りの二人は肩をすくめ、男たちは苦笑いした。元ダンサーが隙を見てポーズ取り、腰くねらせて色眼を送る。男二人は咳払いしつつ、満更でもなさそうだ。これだから、資格の如何を問わず、男性の見学は禁止しなければ困る。制服が迫り、女囚は最後のウインクを残して腰を屈めた。

「でも、考えて見ると可哀想。一週間や二週間の辛抱じゃないんだもん」

「そうね、ブリジット。いくら食べ物粗末だからって云ってもねええ」

「そんなこと云ってたら、ケジメってものがつきませんよ。いいこと？ 刑罰なのよ」

シュバリエ老夫人が再び噛みつき、耳にし



たあばずれたちが齒ぎしりした。

「ちきしょう。そりや、あんたみたいにアガっちゃってるのは平気だろうさ」

「そうとも。こう見えたって、あたしゃまだハタチを十五しか過ぎてないんだ。刑罰だ、懲役だ、とホザきやがって。あのおジイちゃんでもいいわ、抱きついてやろうかしら」

ミシユリーヌのすぐそばで、エドウィージュも土を蹴る。

「自分のものを自分でいじって何がいけないのサ。減るもんじゃあるまいし。台付きの抜身を相手にしたってわけじゃないんだ。誰に迷惑かけるわけでもないのにさァ——」

毒ずいて呟きながら、エドウィージュにしては何故か元気がなく、人々の眼を恥じる風情だ。それもその筈で、彼女は恥かしい赤札を首につけている。

「ま、性に関する事柄は、あまりほじくらない方がいいわ。ハッキリさせない方がいいのよ。そんなことは世の中に沢山あってよ」

オッセン夫人が小声で結着をつけ、シユバリエ老夫人は深くうなずいたのだった。

「そりやまあ『ベルト』とか貞操帯なんかはいいとしてもよ」

とブリジットが喰い下がる。

「ホラ、あの赤い札——。あれはどう考えてもひどいわ。精神的虐待よ、ねええ」

「あれは便宜上の問題です。適確にしてスムーズな運営がすべてに優先するの。それに、当然の生理現象じゃないの。恥かしいなんて世間一般のことよ。そのくらい辛抱しなやね。昔風に云えば懲役女たちだもの」

シユバリエ夫人は若手委員たちをたしなめた。男性二人が見渡して話し合う。

「見たところ、あんまり綺麗なのはおりませんな。女盛りのが殆んどだというのに」

年寄り女がいないのは当然で、五十才以上は原則として一監に收容される。虚弱な女とか、妊婦とかも一監だし、眼鏡の要する女囚や外人女もそうだ。

「いや御同感。化粧を考えに入れても標準以下です。しかし、顔を見せないのがかなりいますな。あの中には十人並みの女も——」

クリスチーヌが足錠につまづいて膝を落とし、苦痛の呻きを洩らした。いつものミシユリーヌだったら扶け起してやるのだが、いまの彼女はそれどころではなく、人々に背を向けて顔伏せるのに精一杯だ。これも御同様のシモーヌが、背後からフィリス婦人看守に掘り残しを指摘され、びくりとふるえて後退り

に二、三步、そして、つまづいてひっくり返った。フィリスが笑って腕掴みあげ、意地悪く中央道に向かせた。シモーヌの片手が顔を掩い、ひきはがされて肩がわななき、腰が深々と折り曲げられた。

ずっと向うの方では、マゾ女囚の一组が二三号の組と並んで、マジョーリに見守られている。用便穴からの帰途、マジョーリがモレシエンヌに合図して連れて来させ、やさしい腕の中に収め取ったのだ。無実を訴える三二三号は、マジョーリに慰められて諦めたか、黙々と精を出していた。マゾ女囚がまたも虫を起し、マジョーリを見上げた。

「担当さま。さっきの罰はどうなりまして？ 縛って下さいまし。きつく捕縄かけて頂いてあの人たちのとこへ連れてって下さらないかしら？ お詫びしなきゃ——ねえ」

マジョーリは黙って女囚を見下ろした。病人を見やるまなざしだった。ベルディーヌあたりが常々いうように、一度こっぴどく逆療法してやる方がいいかも知れない。

「あらまあ、あすこにもいたわ、おしめカバ——の女囚が、もうひとり——」

フロレンスの声はよく透る。ミルドレーヌが全身を硬張らせ、深々と伏せた顔を染め、

鎖仲間のルーシーまでも息を詰めた。我が姿の浅間しさに恥じ入り、人々の視線を恐れおののくこの二人は、歟ふる手も縮こまり勝ちだ。そんな二人の手が、なおも鈍った。忽ちフィリスが土を蹴立て、大声で番号を喚鳴って叱りつける。二人は期せずして吸りあげ、死物狂いで歟をふり上げた。腰の鎖が音立てて鳴り、ルーシーは涙をこぼす。

「怠けちゃ駄目よッ。回れ右させるわよ」

フィリスは泣き所を抉って去り、ルーシーは膝をガクガクさせた。

「顔見られるくらいなら死んだ方がましよ」

と、呻くようにミルドレーヌへ訴える。

「レニエ夫人がいるのよ。パーティで何度も逢ったわ。とうとう助けてくれなかった人なのよ。ああ、牢へ戻りたいわ——。でも、面接のときには、どうせ——」

ルーシーは切れ切れに泣き、中央道に近い持ち場を恨む。視察に備えて、道の両側附近には、おおむね良質の女囚を配置してある。

ルーシーがその眼を怖れるレニエ夫人は口数少なく、物静かな裡にも凛とした中年女性だ。夫人の弟は警察官で、ルーシーの嫌き逃げ事件についての便宜を乞われたのだった。しかし、レニエ夫人は凛然と拒絶し、弟のギ

ヤパン警部へ話を通じなかったのだ。女囚ルーシーにとっては恨めしくも呪わしい婦人、ルーシーがその眼を憚り恐れるのは無理もないことだった。

「あの看守さん。あすこにばかり立ってるわね。足癖の悪いのには足枷かけちゃったんだから大丈夫なのにねえ」

ブリジットが云うとおり、イヴェットはミシュリーヌのそばに立っている。先刻、フィリスが飛んで来てクリスチーヌに足錠カマセたとき、これ幸いと遅ればせに駆け寄って来て、それからずっとへばりついているのだ。

イヴェットはさりげなく動いて、ミシュリーヌを庇ってやり、シュバリエ夫人は舌打ちして忌々しがる。イヴェットの制服に隠れて、よく見えないのだ。

「怠けちゃ駄目よッ」

とイヴェットは叫んだ。近付く人々の手前をつくらったのだ。そして、心を鬼にして二人の背を警棒で軽く打ち据えた。

「そうそう、思い出したわ」

フロレンスが声をあげた。

「ホラ、去年の暮だったかしら、例の女囚連れ出し事件。あの女囚はどこ？この中にいないのかしら。調べておくんだったわ」

「そうね、そんなことあったわね。相当な美人だっていうじゃない？」

ブリジットの声はミシュリーヌにも聞こえ、女囚は全身を硬張らせてわなないた。美人と聞いて二人の男はあたりに眼を配り、シュバリエ夫人は危うく指さすばかりだった。

「ね、ここにはいません？ 何号かしら」

「さあ」と、保安課スカートは白くれる。

「そんな事件がありました？」

「なにしろ、こんな手合いの女を扱ってますと、毎日々々が事件ばかりですよ、ホホ」  
ジョアンヌ女史も同調してトボけた。平常は、何のかんのお互い同士で張り合っている警察屋ではあるが、部外の人々に対しては互いに底い合って、ボロを隠してやるのが仁義だ。その「美德」のお陰でミシュリーヌは助かり、シュバリエ夫人は失望した。

「あら」とブリジットが胸を押え、フロレンスの手を引っ張って道端へ寄った。寄り過ぎで足が道から落ち、脱げたハイヒールが畠に飛んで、走り寄ったイヴェットが拾いあげてやった。

「ありがと。でも、ホラ、凄く顔してるんだもの、あの二人ったら——」

中央道の向う側で、三七二号と三七三号の



女レスラー級がこつちを睨みながら、齒がみせんばかりの見幕で鍬を打ち込んでいる。

眺めやったジョアンヌ女史が眉を寄せた。あんなあばずれ二匹を、どうしてこんなところにおいといたんだろ。うっかりしてたわね。でも、手錠はかけてあるし——。

三監切つての武骨女三七二号が一きわ激しく鍬を打ち込み、太い双腕をもだえて手錠をガチャつかせ、岩のような腰振り立てて連鎖を音高く鳴らせた。

娑婆の人々の視線を沿びて、二人はさらに齒ざしりし、申し合せたように太く吠え、キヤスリーヌとベルディーヌが駆け寄った。

「ど、どうしてここに居ちゃいけないの？」

「文句いわないで向うへ行きなッ」

警棒の一撃を喰って、あばずれ二人は身を揉んだ。

「ああ、安心したわ。でも、鍬なんか持つてゐるんですもの。ねえ、フロレンス」

「ホントよ。まるで男みたい。だけど、看守さんて大したもんだわ。鍬ふりあげてても平気なのね」

小突かれつつ追われる三七二号がふり向いてビンタを喰い、三七三号が矢庭に坐り込んだ。道に向いて両手を合わせ

「出しておくれよう——もう悪いことしないから。ここから出しておくれよお——」

と、体に似合わぬ泣き声をあげた。三七二号のビンタを終えたキヤスリーヌが身を蹴えし、坐り込む襟首を掴みあげる。

「あんなのが撲られてても平気ね」

「そうね、ブリジット。でも、坐り込んで両手合わされると、何だか哀れをそそられちゃう。だけど、出してくれたって無理だわ」

三七三号はなおも泣き叫び、キヤスリーヌがショルダーバッグに手を突込んだ。折角持っている嵌口具だから、こんなときに使わねば甲斐がない。ベルディーヌも再び駆け寄って来て、二人がかりで押えつけ、あらがう女囚に嵌口具を装着した。峻厳派二人のやることだから、その手荒で鮮かなこと、三七三号の喚きは忽ち笛のようになった。

あばずれ二人はしたたかに突き飛ばされ、畠に両手両膝めり込ませ、立ち上ったところを再び突き転がされ、這うようにして追い立てられた。

見送ったブリジットが胸から手を離し、見事な金髪に帽子をかぶり直す。

「あの二人、なにをやったのかしら？」

「さあ、どうせ強盗か傷害よ。あんなのこそ

仮釈放なんかするべきじゃないわね。ところで、この最高の何年でしたっけ？」

「二十五年ですわ、マダム・フロレンス」

答えたジョアンヌ女史が眼を光らせた。またも一人が畠に坐り込み、鍬ほうり出して手を合わせたのだ。

「お願いでございますッ。仮釈放して下さいまし。嘆願書は出してございますッ」

端正な頬に涙を流し、必死に身を揉むのは三四〇号だった。

「——も、もう、絶対に悪いことは致しません。おねがいですッ。おねがい——」

「いうことは決まっちゃってるのよねえ」

と、オッセン夫人がうるさげだ。

「でも、なんだか必死の思いじゃありません？ それに、あのひとは割合と——」

「そうね、フロレンス。あばずれじゃないって感じ。あらまあ、あのひとも赤札よ」

身もだえる女囚の首の赤札が、隠す術もなく激しく揺れていた。セレスト工業の秘書課長だった三四〇号はインテリ女性だ。その彼女がこのザマを晒して泣き叫ぶのも、赤札が示す生理のなせるわざだろう。

マリー婦人看守が眉ひそめて駆け寄り、腕を扼して引き立てた。

「三四〇号ね。うん、嘆願書は出てるわ」

「よく憶えてらっしゃるのね、マダム・オッセンは。じゃ、この次あたりに面接なのね」

シュバリエ夫人はおだてて云い、なおもふり返って、女囚ミシュリーヌを残念そうに見やった。

「ホホホ。IBMあたりから文句が来ますかしら。でも、委員会手当を頂戴してるんですもの。あの三四〇号なんか、まるまる勤めたって二年半ですよ。あと一年ほどのこと辛抱できないのかしら」

「ね、ね、いったい何をしましたの？」

「会社の機密を売った女です」

社長夫人のマダム・オッセンは吐き捨てるように云った。この社長夫人が委員にいて、さらになお今のような仕儀では、三四〇号は満期まで勤めさせられることだろう。

三四〇号はマリー婦人看守の手をふりもぎ、死物狂いで突進し、忽ち腰連鎖にせかれ、てよろめき、なおも身もだえて哀願を叫ぶ。

おっとり型のマリー婦人看守も流石に眉をあげた。女囚の利腕をしたたかにねじり、背に押しつけて腰を探ぐる。女囚は悲鳴を洩らし、ねじりあげられるままに爪先立ち、片手ふり回して赦しを乞うた。眸をキラキラさせ

てキャスリーヌが駆けつけ、矢庭にその足を靴で払った。女囚は悲鳴とともに膝を落とすし、折角ねじあげた腕をマリーが放す。委細構わずキャスリーヌが取って代り、しごき取った双腕を背にねじあげ、両手首掴んで荒々しく押しつけ、苦痛の呻きとともに背が水平になった。ショルダーバッグをゆすりあげて、キャスリーヌはマリーを促がす。

「——かんにんして——」

しかし、マリー婦人看守の手錠が後ろ手にガッチリと喰い込んだ。

「なにかというと、すぐにああやって手錠かけられちゃうのねえ。可哀想」

「あたりまえのことよ。ブリジットは、二言

目には「可哀想」と来るのね」

マダム・オッセンは冷やかにライターを鳴らせ、キャスリーヌが楽しげにショルダーバッグを開いた。嵌口具と知って、三四〇号は激しく頭をふり立てる。

「かんにんして——おゆるし下さいまし」

「なに云ってんのよ。起してよ、マリー。

髪を掴んだらいいのに。耳でもいいわ」

土に顔伏せて拒む女囚だったが、後手錠の身は制服二人に抗すべくもない。キャスリーヌが念入りに革具を締めあげ、女囚は太く呻

いて涙をこぼした。

「きつ過ぎやしない？ キャスリーヌ。このひと、赤札なのよ」

マリー婦人看守はその日の気分次第で、愛情派にもなるし、峻厳派にもなる。キャスリーヌは肩をすくめ、警棒の一撃をお尻に与えた。赤札女囚はよろめいて立ち、さらに一発を喰って腰をよじった。婦人刑務所で女囚に与える生理用品はお粗末なものだ。察したマリーが眉をひそめた。

「ねえ、フロレンス」

とブリジットも眉をひそめる。

「さっきのアマゾン女とちがって、あのひとは可哀想じゃない？ もう騒がないって誓ってるのに——」

「そうねえ。よっぽど辛らいのよ。刑が骨身にこたえてるんだわ。一日でも早く出して貰いたくって堪まらないのね」

「思い余って泣き出したのよ。あんなにまだしなくてもいいと思うんだけど——」

「ちょっと、あなたがた——」

口数少ないレニエ夫人が、キツパリと口を出した。

「弱い立場にある者には同情し勝ちのものだわ。でも、それは本末転倒よ」



「そう。弱い者が常に正しいなんて、大間違いの錯覚だわ」

マダム・オッセンの夫は、目下、会社の労組と格闘中だ。

「そうですとも。この女たちは皆犯罪者なのよ。犯罪者を捕まえるのに、警察官たちがどんなに苦勞してることか。それを思えば、あだやおろそかに仮釈放なんて出来ないわ」

レニエ夫人の弟ギャバン警部は、サンシール事件の責任を取って飛ばされたメグレ警部の跡を襲い、パリ警視庁の捜査課に栄転したばかりだ。

「それに、裁判だって相当な手数と費用よ」  
オッセン夫人は紫煙とともに云い、こちらに背を向けて立ちすくむ三四〇号の姿を冷たく眺めたのだった。

「二十五年のが居るってお話だったわね？」  
と、フロレンス若奥様がむし返した。

「どれなの？ あれっていつても分らないわよ、三六〇号ですって？ 番号読めないわ」

ジョアンヌ女史と保安課スカートとはうなずき合い、手近かのフィリスに合図した。

遠くの方から一組が連れて来られた。ふてくされた態度の若い女囚が三六〇号、その鎖仲間の三五八号はおどおどと恥じ入って神妙

だ。イヴェットも動員され、道から少し離れたところで女囚二人は立ち止まった。

「鉄をそこへおいて。手をお出し」

女囚たち二人の両手には、鉄の代りに手錠が与えられた。イヴェットは、おずおずとそろえる三五八号の両手に静かに嵌めてやり、若い女囚の肩が哀しくふるえた。この三五八号は三十娘、秋風吹かせ初めた恋人に迫って無理心中を計り、自分だけ死に切れずに殺人罪で五年——同じく恋人に裏切られた傷を胸に残すイヴェットとしては、哀れをそそられて、ときどき胸が痛くなる。

フィリス婦人看守は三六〇号を待たせたまま、手錠に革ロープを結びつけていた。

「早くしてよ。いつものフィリスさまに似合わないじゃないの」

三六〇号は唄うようにいい、道に立ち並ぶ男女をジロジロと臆せず見返し、そろえた両手を打ち振って腳踏み替える。

「お黙りッ」

左の頬に平手打ちが飛び、三六〇号は眉一つ動かさずに、今度は右頬を斜めに突き出した。

「こっちは？ あら、もうおしまい？」

二十五年の長期刑ともなれば、ヤケクソで

度胸も据わり、どうでもしやがれと虚無的な三六〇号だ。舌打ちしたフィリスは手錠を鮮やかに叩き込んだ。女囚は肩をゆすり、膝でヨタって後ろ向く。革ロープが腰にくびれ込み、後ろ腰で結ばれた。犯歴と服役態度から見て、このくらしいの処置は必要だ。

「そんなに心配ならさア、足にもカマセといたら？ ふん。いったい何をシャベらせようっての？ 十年経たなきゃ、あのひとたちに御用はないんだってば、あたしには——」

「曳かれ者の小唄はおよしッ。さ、お訊ねになったらお答えするのよ、丁寧ねッ。ネをあげるまで暗房住まいさせようか？」

フィリスは伝家の宝刀を抜いて脅かし、背中を小突いた。三六〇号がのそのそと歩けば三五八号も引かれて進む。二人は道路のそばに並んで立ち、フィリスが腰縄を短かく握った。一段高い道に立つ人々が見下ろし、三六〇号は精一杯にふてくされ、三五八号は両手で顔を掩う。イヴェットのかけ方がゆるいで、銀色の環がかなりずり落ちた。

「こうやってすぐに縛っちゃうのねえ」

「きびし過ぎやしないかしら——」

「見当違いのことをいうもんじゃないわよ」と、シュバリエ夫人が若奥様方を叱った。

「縛ってやるのは大きな慈悲です。手錠も鎖も、この女たちを悪の道から守って引き戻してやるための道具なのよ」

理屈というものはどうにでもつけられるものだ。ブリジットたち二人は肩をすくめた。

「どっちかしら？ 二十五年なんてのは」

「見て分らない？ フロレンス」

三六〇号は横を向き、あくびなどした。

「あ、た、し。この大株主よ。で、なんの御用？ 買物のお供しろったって無理よ」

お尻に縄尻が鳴った。

「お黙りッ。お訊ねになってないわよ」

三六〇号は鼻を寄せ、ふん、と云う顔だ。

「ちょっと訊ねるんだけど、お前、まだ礼拝に行かないようだね、え？」

シュバリエ夫人が威厳を見せて声をかけ、

ベテラン委員ぶりを披露した。

「礼拝？ 冗談いわないで、おばアさま」

三六〇号は平然と云い放ち、肩をゆする。

どうせ、この老夫人の御厄介になる気使いはない三六〇号だ。

「あたしがどこでパクられたと思ってんの？ 礼拝堂のステージの上よ。ああ——」

三六〇号は突然身を揉み、狂おしく身悶えた。フィリスが腰縄を引き絞る。

「結婚式の真最中だったんだよ。せめて三日でも待ってくれたっていいじゃないか。神さまなんてあるものか、ちきしょう——」

眼を丸くするブリジットに、オッセン夫人が囁いて教える。

この三六〇号は殺人罪だ。ライバルの女性を毒殺して消し、いとしい男と天下晴れての

結婚式を挙げる段に漕ぎつけたのだったが、

その式場を襲われて逮捕されたのだった。

「あ、思い出したわ。そう、たしか三、四年前に問題になったわね、教会の中で逮捕したって」

ブリジットとフロレンスは、女囚をおそる

おそる眺めやった。当然の報いとはいえ、天にも昇る心地の嬉しい結婚式のさ中、ウェディングドレスのまま手錠をかけられたのだ。

「あのときの女刑事の奴——出たら殺してやるから。それまで生きてておくれ。血も涙もない女——」

三六〇号は歯ぎしりして呪うのだった。この女囚が常々呪っている婦人刑事とは、ほかならぬレイモンドのことだ。レイモンドはそのときのことを今でも悔んでいるが、彼女に云わせればそうするしかなかったのだ。なにしろ、ヴェールかなぐり捨てて手向いし、男

のそばを一步だに離れようとはしなかった三六〇号なのだった。純白のウェディングドレスも所々破れ、泣き喚きつつ式場から拉し去られた姿は、いまでもレイモンドの睨に焼きついて離れない。ローブの裾を蹴り乱して踏張り、一夜でいいからと荒れ狂った未練のほどは、いまでもレイモンドの腕に生ま生ましく残って消えないのだった——。

「まだ逆恨みしてるらしいね」

と、オッセン夫人も冷たい。

「反省なんてしたことないんだわ。そんなこと口走ってるんじゃない」

「ね、ブリジットもフロレンスも、そうそうムッシュウ・クレマンソーも、よく覚えておいて頂戴。こんなのもいるのよ。人殺しし

といて悪いとも思わないんだから」

「なんだって!! くそッ」

三六〇号は立ち直り、涙を払いのけた。

「あんなたちなんか分って堪まるもんか。あたしはね、野良犬みたいにされて大きくな

ったんだよ。やっと捉まえた男を横取りされそうになったんだ。あたしと同じ身になって

見るがいい。ああするよりほかあるもんか」

「お黙りッ。それが罪人のいう言葉？」

フィリス婦人看守は縄尻を振り回し、叱り



つけながらも内心タマげた。年ごとに度性骨が据って行く三六〇号ではあるが、保安課スカートを前にしての放言ぶりには舌を巻く。保安課スカートは毒気を抜かれたか、黙っていた。或いは、度し難いあばずれの好例だから、心ゆくまで憎まれ口叩かせて、自分たちの苦勞のほどを委員たちに納得させようというつもりかも知れない。それにしても、この三六〇号はまだ三年余の女囚だ。こんな調子であと十五年の二十年のと相成れば、いずれはツーロンの生地獄へ送り込んでやらねばならないだろう。

「ふん。ひとのことを罪人々々で、大きな顔しないでよ」

と、こんどはフィリスに囁付く。

「ここで苛められたのがもとでさ、出てから病気で死んだ女がいらないとは云わせないよ」  
さすがのブリジットたちも顔見合わせ、イヴェットも腹を立てた。

「ずい分と不心得なのもいるのよね」

「そうねえ。やっぱり鉄格子と鎖は要るわ」

「おや、利いた風なこと云うわねえ、正義の権化になってホヤホヤの奥さまたち。それとも、まだ男を捉まえられなくて、お嬢さまかしら——」

若いマダムたちの眉がキリリと吊った。

「ともかく、こうやって鎖つけてぶち込んでおけば御安心でしょ？ 泥棒女、スリ、火つけ、人殺し——ま、ここにいる間は御迷惑かけないからねえ。正義は守られてることよ。正義って大好きでしょ？ あたしは大嫌い」  
フロレンスが怒りを浮べ、ブリジットは目標を変えた。

「そっちのは？」

「お答え申しあげるんだよッ」

ジョアンヌ女史にきめつけられ、三五八号は肩ふるわせた。

「——殺人罪、五年——でございます——」

両手の指から洩れる声は蚊の音だ。

「これッ。手をおろして」

「いいじゃありません？ でもまあ、このひとも殺人なのね」

「殺人罪といったって、いろいろとあって差があるわ、ブリジット」

「そうね。深い事情があったのね、このひとは。三五八号——調べて見ましよう」

「さ、もう行かないこと？ くたびれたわ」

「あら、もうお帰り？ 善良なひとたちに伝えといてね、正義はちゃんと行なわれてますって」

三六〇号は、去り行く人々に叫んだ。

「あたし、革鞭の二ダースは請け合いよ。ついでに見物して行ったらどう？ ちょっと、お綺麗な若後家さま、お帽子は白の方がお似合いじゃないかしら。裾も、もう半インチ長い方がよくってよ。ウ、ウッ——」

警棒の一撃が力まかせに鳴り、三六〇号は息を詰めた。

労役場を立ち去って行く男女の姿に、女囚たちの眸が一斉に注がれる。いいようもない悲哀に満ちた眸だった。

ミシュリーヌはシュバリエ夫人に気付かず仕舞い、ホツと体をゆるめて吐息をつき、腰のあたりを押えて頬を染める。

「洩れたのかい？ おミシュちゃん。ああ、行っちゃまいやがった。ちきしょう。娑婆に出たいねえ。あたしはドン百姓の生まれじゃないんだってば。土いじりはウンザリだわ」

クリスチーヌはボヤいて鍬をふりあげ、婦人看守たちは手馴れの革ロープを再び取り出して、ピューと打ち振ったのだった。

(未完)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

# 告白 陰花植物の雌蕊<sup>めしべ</sup>

小田島 行 男

## 一

ぼくのこれから告白しようとすることは、ごくつまらぬ些細なことなのです。

しかし、ぼくにとっては、これはどうしようもなく抑え難い感情であり、また語らずにはいられぬことなのです。

ぼくが婦人物の下着を秘かに身につけることを覚えたのは、確か高校に入って間もない頃でした。

むろん、それまで女装に対する全般的な憧れはもっていましたが、なにしろ父母とも固

い会社で共稼ぎをやっておりましたので、そうした家の風習からいっても、家族のいる前でたとえふざけたとしても、女のスーツを身にまとうなどということは許されぬ事だったに違いありません。

女の服装を試してみたい。女の下着を身につけたいとは願っても、それまではほとんど想像するのみで、そこからの域は脱しようもありませんでした。

三人の姉をもつ末っ子に育ったぼくは、小さい時分から化粧品臭い、三面鏡、女の下着、スーツなどにふんだんに囲まれながら育

ってきましたので、本来ならばそうしたものにさほど興味も感じない男性であってもいいわけです。

ところが、ぼくが中学を卒業し高校に入る頃になると女装への憧れは昂まるばかりで、なんとか高校生らしくグラウンドを駆けまわることや山に登ることに自分を仕向けようと努力しても、なかなかその憧れの感情は強いものでぼくをとらえて離さないのでした。

自分は男性的でない、女性的要素の面がひょっとしたら強いのではないかしら——こうした疑いは日々を追うに従って強まる





ばかりで、ある雑誌の中で男女両性器を体内に共有していた一青年の記事など読むと、思わず自分の体を眺めまわしてみたり致しました。

ぼくも何千万に一人という、その青年と同じ体ではないのだろうか。まさかとそう悩む自分を笑ってみながらも、ある一方では、どうしようもない不安に襲われていたことも事

実でした。

そして、その恐れを増すような事実直面したのは、高校に入って初めての夏休みのことでした。

数少ない友の中で最も親しい同級のKがぼくの家遊びに来て、帰り際に母のすすめでぼくとその友は一緒に風呂に入ることになりました。ぼくは先に立って風呂場に入ると、裸になって湯舟に浸ろうとしている

のに、友は裸になっているのにもかかわらず、タオルで体の前を窺ったまま、さもぼつが悪そうに離れた所で立ちつくしているのです。

そして、しばらくたって、ぼくが湯につかのをみはからってから、きまり悪そうな笑いを浮かべながらKはいいました。

「俺の方が発達しているな」

「何が？」

「いや、あらゆる面でさ」

「……………」

ぼくはKが何のことをいっているのか、わかりませんでした。しかし、その直後タオルの間からみえた彼の前をみて、ぼくは思わずその意味を

解することが出来ました。

彼のそこには男性として当然ともいふべき黒々とした恥毛が茂っていたのです。

僕はKのその部分と、気配すらない妙に白々しく陰りのない滑らかな自分のその部分とを見較べて思わず顔がほてってきました。

ぼくとて成人した男性が、そうしたものを具えることを知らなかったわけではありません。しかしそれは文字通り成人した男性にはじめて具わるものであって高校に入りたてのぼくなどには、まだまだ遠い先のことのように思っていたのです。

あくる日から、僕はますます自分の体に疑いをもつようになったのです。

その頃です。ぼくは家族のいない時を見計らって部屋の三面鏡の前で裸になり自分の姿を心ゆくまで眺めるようになったのは。

父母は共稼ぎでしたし、三人の姉もすでに勤めに出ておりましたので、玄関の鍵をあけるのは学校から帰ったぼくがいつも一番でした。姉の帰る一、二時間の時間がぼくにとっては秘密の時間だったといえるでしょう。

ぼくは鏡に映じた自分の体を、まるで検察官のように鋭い観察と疑いの眼でみやったのです。高校生ともなると一段と筋力が増し、

遅ましくなるはずなのに、ぼくの体はそういう兆候さえみえず、それどころか女性の体に似ていくような気さえするのでした。

そういえば体全体が母や姉にうけついで色白で変に肌がしっとりしているように感じられます。バーベルを持たせれば静脈を浮き出ながら一段とふくれ上りそうな二頭膊筋も、ぼくの腕だけは妙にむっちり肉がついて、間違ってもバーベルを握って似あうとはいえないようです。

肩のあたりは力強く荒々しい男の手で抱かれたら僅かなくぼみをみせるだろうと思われ、柔かく丸味を帯びていました。

ぼくは、いつのまにか自分の肩を両手でかかえ込むと男に抱かれた女がみせるに違いな、いと思われ、恍惚とした表情をつくって身をくねらせてみました。

ぼくの心は次第に昂ぶって、しまいにすっかり身につけたものを脱ぎすてると、手足を不自然に絡みあわせてみたり、体全体を痛くなるほど曲げてみたり、あらゆるポーズを鏡の前で演じたのです。

一度楽しみの味を覚えると授業中も、ほとんどその事で頭を奪われ、家に帰りつき、部屋に入るやいなや、窓のカーテンを覆い錠を

下ろし、再びその楽しみにふけったのです。

今までは女性的な自分をいやなもの、出来そこないと嫌悪して常に遅いもの、強いものに憧れ、なんとかぼくもヘラクレスのようになれないものだろうかと思ひ事が多かったのですが、そうした楽しみを知ってからというものは、いつのまにか男性的な憧れは消え去っていきました。

そして同時に、もっと女らしくなってしまう、もっと女のようになってしまえと願うようになりました。そうなると思ひ議なもので道を歩いていても露わにされた腕だけみても毛深さを察することの出来る男性をみると、まるで不潔なものを感じて来たのです。

ぼくは誰よりも女らしくなりたいと本気で思うようになってからのことです。それはもう夏が終り秋にさしかかろうとする頃のことです。

皮肉なことに、ぼくにもようやく遅ればせながら恥毛の気配がみえてきたのです。

それは身をかかめて伺ってみなければわからないほど僅かなものでしたが、ぼくにとつては大切なものでした。下着を取り替えるときなど、そっとそこへ手を伸ばして、その微かな手ざわりを楽しみました。

それから二カ月もすると、占める範囲は僅かでしたが、やや認められるように整ってきただけです。

そして、ある日のことです。僕はいつものように家族の居ない時を選んで全裸のまま鏡の前に立っていました。ようやく鬚りをつくりはじめたものをみているうちに、ふと、そうしたものを思いきって省いてやりたい衝動に駆られました。

女らしい体を願っていたぼくにとって、そうしたものが生え伸び、あの不潔な体になりにくくなったのです。

ぼくは抽出しから剃刀を取り出しました。ひやりとした感触、動かす度に小さな悲鳴をあげながら、そり取られてゆくのをみて、ぼくはいいようなない歓喜に浸ることが出来ました。

こんな馬鹿なことにはすまい、高校生ならもう少し学生らしい——例えば毎朝行き交う女学生に慕うなどということであっていいはずではないか。

ぼくの歪んだともいえる欲望は、どう処理していいのか見当もつきませんでした。



それから一カ月間位は、同様の高校生の交りのない生活を送りました。下校してから街をぶらつき映画館に入り、喫茶店で時間を過ごすというありきたりのことでした。

ぼくが頻繁に街へ出るようになったのは一人で部屋に閉じ込めていて、あの欲望が噴き出してくるのを恐れていたからなのです。

ぼくは努めて外へ出て多くの友と交りあい語りあうように自分をしむけていきました。

確かにそうした努力に違いないものは多少報いられたとみえて、あの欲望は以前と比較にならぬ程、影をひそめたのです。

しかしながら友達となんの気なしに入った映画のあるシーンで——多くはアクションや西部劇のようなものでしたが——女が悪玉に捕えられて縛られるシーンや、情婦が暴力団の掟に背いて私刑をうける場面などをみますと、それまで影をひそめていたはずの欲望は、たちまち火がつけられたように体内でうずきはじめるのです。

そうした想いをした日などは、寝つく前にどれほど理性を働かせるのに苦労したことでしょう。

ぼくもあの映画の中の女と同じように半裸に剥かれ椅子に縛られてなぶってもらえたら

どんなに欲びが高まることでしょう。寝ても覚めても、そうしたことを願ひ続けました。

しかし学生で、しかも両親の眼の届く家にいたのでは、人に縛ってもらうなどということは、とても不可能なことで、場所も時間もプレイの相手の人をみつけ出すこともすべて無理なことでした。

ぼくはサド・マゾの愛好者ばかりのクラブ員が街中でいきなり知り逢え、旅館の一室できまった時間内にプレイが交され、名を告げずにお互いに別れるというわりきった組織が存在したら、どれ程素晴らしいことだと空想に耽るようになったのです。

いくら願っても不可能に近い果たせられぬものは、自分自身でなんとか誤魔化し、なだめるより他ないでしょう。自分の体を自分の手で縛るという行為に駆られたとしても、それは当然すぎるくらいのことといえます。

再びぼくは下校すると同時に真直ぐ家に向い部屋に閉じこもることが多くなりました。

一方ではそんな自分を、とうとうまともに打ちなおすことは出来なかったという情ない心と、一方ではますますそうした世界の極致に入っていく好奇の念とが入り混って複雑な心境になりました。

ともかく、ぼくは部屋の中に閉じ込めると服を脱ぎ捨てた上で、家中の中のすべてと思われる紐類を用意して、それで鏡に映しながら自分の体に紐を巻きつけたのです。

この遊びに耽けっている最中でも、突然の来訪者や、なにかの事情でいつもより早く家の玄関をあけるようになった時の姉のことなど考えて、少ない時間で紐を解き、衣服をまとい、なにも気取られぬ必要がありませんので十分な用心はしていたつもりです。

幸いにしてぼくのこの遊びの最中には誰一人として、それを中断させたり妨げたりするものはなかったもので、この遊びはますます増長していったのです。

紐は主に皮バンドや、電気のコード、それから母が和服を着るとき使用すると思われる肌ざわりのよい細紐でした。ぼくはなるたけ感覚が鋭敏で最も人目に触れぬ部分を荒々しく厳しく縛りつけたのです。

これが股間縛りというものでしょうか。とにかく下腹から太腿にかけて幾筋もの縄目を肌に食い込ませました。

そのままじっとしていますと、いいようのない欲喜が襲ってきて、たちまちぼくの男性は喜びに耐えられず反応を明らかにみせはじ

めるのです。

しかし、縄目はゆるむわけもありませんか、自然そのもたげ上ってくるものをしめつけ、不自然に歪ませることになるわけです。痛められれば痛められる程、その反応は大きくなり、より締め上げられるのです。

ぼくはついに、この喜びに耐えられず微かに腰を震わせました。ぼくは今までに、これ以上の歓びがあったでしょうか。

それからの僕というものは坂をころげ落ちるような激しさで、その奇怪な自縛癖に落ち込んでいったのです。

### 三

それから幾日も経たないある日、僕はいつものように家族のいない時に姉のタンスの中を探りました。

女の下着が欲しかったのです。それも新しいものではなく女性の垢で汚れ、女性の汗がしみついているもので、汚れていればいるほど、ぼくには好ましいものだったのです。

なにしろ探るといっても、空巢のようにやたらにかきまわすわけにもいきません。すぐに察しられてしまうからです。僕は子供の頃から人一倍臆病で用心深い性格でしたから、

こういう事を意外と完璧にやりこなすことが出来るようでした。

やがてタンスの抽出しの隅にあった一袋の紙包みを探り当てました。ぼくはなにか大事ななものでもあつかうように、そっと引き出すと紙包みの中をあばきました。

それはぼくの予期していた通り姉の使い古した直接肌にまとった下着だったのです。

こうしたものは捨てるに捨てられず、そうかといって売り払うわけにもいかないものでしょうから、いずれたまっけてしまってから、まとめてどうにか処分しようと思っていたのでしよう。

ぼくは何枚かのうちから、最も汚れといったもののひどいのを一枚とりだすと、まえたように紙をくるみそっと戻しておきました。タンスの抽出しを元のように戻した瞬間、あの犯罪者が犯行をなんのそつもなくやってのけた時、襲われるに違いない疲れとも安堵ともいえぬものが体を押し包みました。

ぼくは下着を手にとると、先ずその引き伸ばせば際限なく伸びそうな柔かな布地と、どんな肌のくぼみも見逃さず、ぴったりと吸いつくような伸縮自在な繊維を心ゆくまで手のひらで愛撫しました。

よく見ると、女の股が当ると思われる部分は、分泌物のためでしょうか、やや布地に黄色っぽいしみを残し、そしてそこだけ生地がボロボロになっているのです。

ぼくは雑誌で知りえた女の生理、体の図解の知識を総動員して、この現象をなんとか理解しようと思いました。

そしてぼくは、それを大事に自分のタンスの奥の方へ、そっとしまい込みました。

夜になると、次々と家族たちが玄関の戸を叩き夕食になりました。

何も知らぬ姉は、いつものように平気で喋りまくり、忙しそうに台所の手伝いをしていきます。ぼくの秘密を知っているものは一人もいないのです。被害者と思える姉さえも知らぬのです。ぼくは不思議な快感にとらわれました。姉と視線があう度に、ともすればやや頬ばりがちな表情を無理矢理平然に装わせ、そして心の中で叫びました。

誰も知っちゃあいない、誰も知っちゃあいないノ——と、

### 四

ぼくはその晩、故意に風呂を最後に入ることにしました。もちろん、あの下着を身につ



け、ゆっくり楽しむためには、どうしても最後でなければいけません。

そしてぼく以外の者が全部入浴し終り、着換えてもう床につこうとする頃、ぼくは着換えの下着をだすついでに、昼間隠したものを引き出しタオルに包み込むと、なに食わぬ顔で家族の前を横切り風呂場に向いました。

風呂場の内鍵をかけるやいなや、やや震えがちな手でタオルの中からそれを取り出し、自分の今まで身につけていたものを、まるで汚らしいもののように脱ぎすてると、それとはき換えました。

まずぼくを嬉しがらせたのは、今までずっと、姉の腰に使用されていたに違いないものが、ぼくの体にも（しかも男という体にも）なんの不自然もなく実にぴったりと肌に密着したことです。

なぜ男性の下着は、これと較べて布地の厚い不粋なものなのでしょう。

ぼくはしばらくの間、その場で何回となく足踏みしたり、脚をひろげたり腰をくねらせて、その肌ざわりのよさを確かめました。

そして、それを十分味わってから湯の中へそのまま静かに身を沈めていきました。

下着をつけたまま湯に入るなど、なんと不

快で気持の悪いものだろうかと思うかも知れません。しかしながらそうではないのです。

薄い布地を通して泌み入ってくる湯の温かさを感じたとき、ぼくの全身は、なにかいいような不快よさを感じました。そして再び湯から身をあげた時、そうでなくとも密着していたその布地は、水分を十分に含んでぼくの肌の一部であるかのようにびったり吸いついているではありませんか。もうこうなっては肌着をつけていてもいなくても同じくらいぼくのすべては透けて見えてしまうのです。

またしても僕の男性は反応を示しはじめました。水分を含んでやや重くなった布地は、びったりと肌にはりついて、柔かく妨げ抑えつけています。

ぼくは不意に、思いきり締め上げ打ち倒してやりたい衝動にかられました。

風呂の隅に丁度手ごろと思われるビニールパイプが眼につきました。（それは水道工事に使われた時の端し切れのパイプでしたが）

それを脇腹の下の方の骨盤の張ったあたりに、肌と、そこに密着していた下着との間に差し込みました。そして太腿の方に突き出た下端と上体にある上端をもつと徐々に回転させていったのです。当然布地は引き締まられていき

ますので、腰部全体がなにか強力なものでじわじわと押しつけられていく様です。

ぼくはこの痛みをこらえながら、もっと痛めつけてやれ、もっと痛めつけてやれと歯をくいしばりながら、この苛酷な拷問を続けました。きりきりと締られる足のつけ根、次第に感覚が失われていくような、完全に血の通うことが許されなくなった肌は今や色を失っていきます。

そして失神してもいい、肌がさけてもいいと尚も力を加えた瞬間です。その下着は、音と共にひきさけてしまったのです。

ぼくはしばらくの間、あえぐ呼吸と高なる鼓動を感じながら、放心したようにじっと風呂場に仰向けに倒れていました。数分してからようやく感覚が戻ったとみえて足のつけ根のあたりが、ひりひりと痛みはじめました。

しかしこれでぼくは疲れきり満足といったというわけにはいきません。なおも痛めつける必要があるのです。ぼくはなに者かに強いられるように、まだまだ苦痛の残っている自分の身体を起こしました。次の責めを考えても何の用意もしてきませんでしたので、どうしてよいかしばらく迷っていました。都合のいい事には、停電した時などの用心にいつも棚

の上にろうそくが置いてありましたので、僕はそれをとって風呂場のかまどから芯に火をつけました。

ようやく血の色の蘇えってきた肌に向って大きな炎をゆらがせながら燃えているろうそくを傾けました。溶けていたろうは、またたく間に僕の下腹に落ち大腿部に落ちました。突然焼けつくような熱さに思わずぼくは手にもったろうそくをとり落しそうになった程

です。ぼくはろうが一しずく垂れる度に歯を食いしばり腹を波打たせて、その熱さに耐えました。先程までは色を失っていた肌が今は逆に熱さのために充血して赤くなっているではありませんか。

ぼくは激しい責めに、ただ腰をふるわせ身をもがだけでした。

僕が風呂場を出たのは、なんと一時間も経ってからのことです。部屋に入ってきたぼく

をみて母が身を起こしました。「ゆっくりしていたようだったね。いいお風呂だったかい」

「実にいい風呂だったよ」

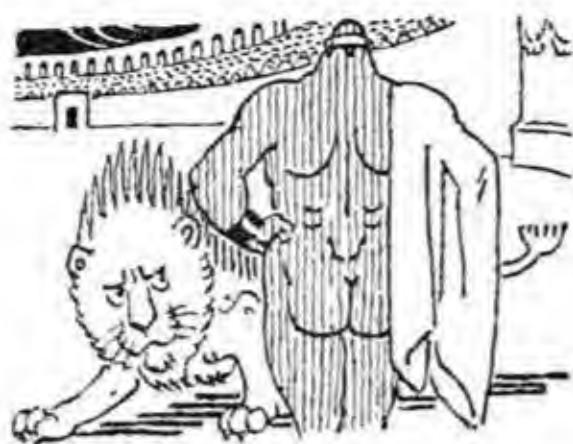
ぼくは答えました。タオルで体の水気をぬぐいながら、破れたパンティを火の中に叩き込んで始末し、ろうの垂れ固まったものも十分な湯で流してきたことを想いおこして、ぼくは静かに床に入るのです。(了)

## 告白

### 女のドレイとなるまで

花原 竜子

A 号 奴 隷



自己紹介しますと、私は竜子さまの大学時代のバレー部のコーチでした。ある日、部屋の整頓を視察するつもりで部屋に入りました

ところ、竜子さまのボックスに、まだ生あたたかく汗じみたショートパンツが、そのままの形で脱ぎすててありました。

元来、部屋などへ男性の入ることはないのですが、狭い部屋が女くささでムンムンしている上、女性には案外だらしない人が多いもので、時々小言を言わないと余計きたなくなるので、コーチだけは別になんとも思われずに出入りしていたわけです。

平素から竜子さまの美しさ、グラマーぶりに心を動かされていた私は、恥しいお話ですが、思わずそのショートパンツに顔を埋め、そこに残っている竜子さまの移り香に恍惚としたのでした。それから後、私は足しげく部屋をのぞくようになったのは、いうまでもありません。しかし、用心深い性質の私は決して人目につくようなことはしませんでした。



でも争われぬもので、そんな行為をしてからというものは、竜子さまの美しい勝気な瞳で見られると、どうしても抗し得ぬ不思議な力に引き据えられるような気持ちになって、命令することが、できなくなってしまったのです。これではコーチャーはつとまりません。そんなことから、いつとはなしに私の行為が竜子さまに感ずかれていたのです。

その頃から、ショートパンツばかりでなくいろんなものが置かれるようになりました。主にストッキング、汗じみたパンティなどでしたが、どれにも、快い香料がたきこめられたような匂いがこもっていました。それが竜子さまの香りと信じたのですが、実は私を釣るための計略だったのです。こうして、あたかも飼犬に餌を与えて手なづけるように、私にいろんな餌を与えました。

そして或る日、試験管にまぎれもない小水が十五グラムばかり入れて置いてあるのを見つけました。ふるえる手でだきしめ、拝むようにして約五グラムばかり飲み干し、そっともとへ置いておきました。馬鹿な私は竜子さまは何にも知らないと思っていたが、全部竜子さまの餌だったのです。それから試験管は毎日置いてあり、私は毎日飲みました。

次第に大胆になって半分以上飲むようになりました。

竜子さまに言わせると、先生が自分の小水を飲んでいいると考えると、わくわくするようなおののきが、全身を貫くような思いがしたそうです。こうした暗黙の中に二人の感覚は発達していったのです。その頃の会話に、こんなことがありました。

「先生、わたし、この頃、腎ぞうが悪いんじゃないかと思って心配してるんですけど、大丈夫かしら。少し薬を入れると濁るようなんですけど」

「いや、あれだったら大丈夫。健康さ」

「先生、あれって何に？」

思わず正直に言ってしまった私は、からかうような、いどむような美しい瞳でにらめると、どきまぎしてしまうのでした。

そして或る日、今度は試験管でなくて、尿瓶に一リットルばかりも入れたものが置いてあるのです。よるこんで一飲みしますと、それはなんと、小水の色に似せたレモンジュースなのでした。その時、ガラリとドアが開いてショーパン姿の竜子さまが、すっくと立っていました。

「先生、私のが、そんなにおいしいの。じゃ

今ちようどいいわ、いらっしやい」

そう言うのと竜子さまは、先に立ってずんずんシャワー室へ行きました。私はもう夢心地で、その後についてゆきました。

「シャツをぬいで、そこへ寝るのよ」

強い口調で言うのと、竜子さまは私を動けぬようにしてしまいました。限りなく出る、そんな感じでした。飲ませ方の巧みさは竜子さまが北海道の牧場主の娘で乳しほりに熟練していることにもよるのでした。

その後、シャワーの踏み台にされ、全身濡れねずみになって、やっと許して貰ったのでした。思えばこれが洗礼だったわけで、こうして私は、花原竜子さまのA号ドレイになったのでした。



## 「この女と」

## 大塚啓子の巻

大塚啓子——本誌の読者で、この名前を知らない人はいないだろうと思う。恐らく現在活躍中のモデルでは最古参に違いない。私も一読者として彼女の姿態を誌上に見出してから長い歳月が経っている。だから、その大塚さんと逢えるかもしれないと箕田氏から連絡を受けた私は、グラビアだけを綴じ合わせた冊子を引摺り出して見直した。十冊に余るそれは私の人生の秘められた断面で、私のその時々境遇をも思い起させる懐しい記録でもある。

昭和二十七年に登場した川端多奈子嬢の思切った緊縛は今尚通用するばかりか、もし

彼女が現在に登場したとしても読者を魅了するに充分だと思える。当時学生だった私の彼女のグラビアへの憧れは、今も尚、私の心に残っているようだ。しかし冷酷な歳月は彼女を誌上から消して古典的な存在にさえしようとしている。その後を継いで一時期を画したのが伊吹真佐子嬢で、私は彼女のフオートに対しても血をたぎらせた記憶が残っている。

(辻村氏の「カメラ・ハント」によれば、彼女は、今も尚、辻村氏と交信があるらしいので、このカメラ・ルポに登場して貰える機会があればと願っているが……)その他、杉美美、中富綾子、村田那美子、坂口利子、萩

千恵子嬢らの懐しいグラビアが現われてくるが、川端嬢から伊吹嬢へと二つの大きな山があったことは否定できないようだ。モデル論を書くのが目的ではないので先に進もう。伊吹嬢の後に大塚啓子さんの登場となる。

昭和三十三年二月号の「ニューガールの緊縛模様(その二)」の中に一葉、翌三月号の同表題(その三)に四葉と大塚さんの若い姿態が見出される。誌上に掲載されたのは、それが最初のようなだから、大塚さんが誌上にデビューしたのは、もう九年も前のことなのだ。おぼろげな記憶では、カメラ・ハントとこそ題されてはいなかったが、その頃既に辻村氏





が彼女の紹介記事を書いておられたように思う。

以来彼女のフォトは、グラビアが廃止されるまで消えることはなかった。そのベテラン中のベテランともいふべき大塚啓子さんと逢

えるかもしれないというので、私はわくわくしながらも一抹の不安を感じていた。九年間という歳月は、若い女性には決して短いものではない。張り切った彼女の肉体が、現実には、大きく変化して、まっではいないだろうか。かつてU誌のモデルにもなった彼女は、いわゆるプロの女性の荒れた心の持主ではないだろうか。大柄で肉づきの良い、そして我儉そうな女——それがフォトから描いた大塚啓子さんへのイメージなのだが。

正直云って、私は誌上に登場した大塚さんを、梨花悠紀子嬢や山原清子嬢程も評価していなかったことを、告白して置かねばならない。彼女のフォトに悲愴味が少なかったせいであろうか？

「やあー」

箕田氏は相変わらず形式ばらない。手持ち無沙汰から車に刷毛を掛けていた私の前に彼が現われたのは、約束の午後一時より少し早かった。彼の車の助手席に乗っていた若い女性も彼の後にいる。小柄で凄く美人だ。私には彼女と大塚さんとは全く繋がらなかった。

三人は喫茶店に入る。彼女は遠慮しているのか、カウンターに向って坐った箕田氏の横

に椅子を一つ空けて坐る。私は彼女の反対側箕田氏の横に腰を降ろす。その位置からは覗き込むようにしないと彼女が見えないのが残念だったが、私は箕田氏と雑談しながら隙を見つけては彼女に目をやる。若そうで綺麗な人だ。彼女がうつ向いているので顔がよく見えないが、私の第一印象はとてもモデルになるように思えない清潔な感じだった。だから雑誌やフォトのことなどを箕田氏と喋ってはいるものの、私はうわの空だったことを白状しよう。箕田氏は落着かない私の心中を見破ったのかにっこりすると云った。

「ああ、紹介しときましょう。大塚さんですよ。こちら山本さん」

彼女は顔を上げると私の方を向いて微笑する。可愛い笑顔だ。私は大塚さんへのイメージが全く見当違いだったことを感謝した。とてもモデル歴九年とは思えない若さだし、その体も小柄で均整がとれている。私は胸をときめかしながら頭を下げた。

今までに誌上に載った彼女のフォトは、彼女の良さを出し切っていなかったのに違いがい——私は勝手な断定を降して勇気百倍である。或いは最近になって、彼女が急に女らしい美しくしさを増して来たのかも知れないのだ



が、過去の実物を知らない私には比較すべくもない。

この人なら二番煎じでないものが撮れる。かつて彼女のトレードマークとなっていた長い髪は短くカットされ、ウェーブした数本が左の額に降り掛って妖艶ささえ見せている。「彼女は露出を好まないで、全部とるかどうかわかりませんよ。まあよく話をする人だから話し合ってやられたらいいでしょう」箕田氏が声をひそめて私の耳許で囁く。周囲には客がいるのだ。私は黙って頷く。

分に云い聞かす。リバイバルだって構わないではないか。

「一緒に、どうですか？」  
「いや今から四、五軒廻わらなければならないうで暇がないんですよ。まあ一人で腕をふるいなさいよ」  
事実、彼は多忙なんだろうが、私はこの言葉をお私への好意的な配慮と受取った。  
「箕田さんも一緒にじゃないんですの？」  
大塚さんは、ちょっと意外そうな表情である。考えてみれば初めて逢った素姓のわから

「それから、記事にして下さいよ」

念を押されなくとも、私はそのつもりである。既に無数のフォトや記事で紹介され尽くした大塚さんではあるが、私は私

ない男と二人で、緊縛をやるうというのだから、彼女の不安も当然である。箕田氏は彼女に「一こと二こと何か云うと席を立った。私への箕田氏の信用を感謝しなければならぬ。喫茶店の前で箕田氏と別れる。私が車のドアを開けて会釈すると、大塚さんは悪びれずに後のシートに乗り込んだ。この美しい女性が私の縄をまとうのだ——私は思わず顔をほころばしていた。

「やっと逢えましたわね」

運転している後から彼女が話しかける。

「夏だったかしら、山本さんのことを聞いていましたのよ。でも、うまく連絡がつかなくて……」

大阪の街は相変わらず車が雑踏してスムーズに走れないのだが、その停滞も苦にならない程私の心は弾んでいた。彼女は快活に喋る。喫茶店での沈黙が嘘のようだ。

「こんなことをしていると、いろんな経験がありますのよ。もう十年になりますものね。でも女があまり知り過ぎるといけないかしら」  
「悪くはないでしょう。じゃ最初はティンエージャだったの？」

「ええ。その時はとても憧れてモデルになったんですの。でも、まさかこんなことをする



なんて思わなかったわ。ロープのことよ」

彼女は次々と喋ったのだが、私はその内容を、はっきり覚えていない。確かにあがっていた私だが、彼女の口から出たロープという言葉が妙に刺戟的だった。曇った午後のことである。

○

部屋にくつろいだ私達は、やぐら炬燵に足を突込んで向い合った。正面から見ても魅力的な人だ。

「お医者さんじゃありませんか？」

「いいや、そうじゃないね」

「でもお医者さんのように見えるわ。お医者さんで好きな人多いんでしょう？」

「そうかなあ」

大塚さんは喋りながら私を観察しているようである。私は元来不干涉主義なので、こうした話題を好まない。特に身元調査のようなことは今の私達には何の意味もないことだ。現在の存在——フォートを撮ろうとする男とそのモデルになる女とがいるということだけで充分ではないか。蛇足かも知れないが私は男女の愛情についても同じ考え方を持っている。

私はバッグからカメラを取り出してストロボを取り附ける。大塚さんはそれを見ながら

茶菓子を頬ばった。どうも見られているとバッグの底にある縄を取り出しにくい。

「お風呂に入ったら？」

「そうね」

大塚さんが入浴している間に、私は準備を進める。ビニールの袋に入れた縄を取り出したが、どうも場違いのような感じがする。愛人とのデートのような雰囲気である。ふと気がついた私は、部屋から出てドアの鍵を掛けようとしたら既に鍵は掛っていた。彼女が掛けたらしいのを知った私は思わず苦笑した。

彼女は私より慣れているのであろうか。ベテランモデルの有難さでもある。

大塚さんの使う湯の音とガラス越しに、ほのかに動いて見える彼女の白い体に私は男を意識しながら部屋に戻った。

入浴を済ませた大塚さんは、バス

タオルを胸から腰へ巻いた姿で鏡の前に坐って化粧を直す。

「化粧はいいよ。余り顔は写さないからね」私は内心ウズウズしている。早く彼女の裸身を見たい。それなのに彼女、くると私の方に背を向けるとバスタオルをずらしてセーターを頭からかぶり、パンツをはく。

嗚呼！ 私は諦らめて背もたれに上体を預ける。もう少し待てばいい。我ながら辛抱強いことである。炬燵に入ってきた大塚さんを前にして、私は悠々と落着いている態度をと



った。

「ポートレートを撮ってあげようか？」

「そうね、このままでいいかしら？ ポートレートは外の方がいいんでしょう？」

彼女、セーターを着ているが腕を通していない。カメラを向けると澄ました顔になる。

「こわい顔やなあ。見合写真を撮るわけじゃないんだからね。こわい、こわい」

ちよっとおどけてみたら大塚さんはゲラゲラ笑い出した。そこを一発。それが写真(1)である。彼女の話しは尽きそうにない。

「さあ、始めていい？」

「ええ、勿論パンツは着けるんでしょう？」

ここで妥協してはいけない。私の信条はオール、オア、ナッシングである。パンツを着けたヌードは反って卑わいな感じだし、私の好みではない。

「ない方がいいな」

「Hね。余り取ったことないのよ。タイツを持ってきているんだけど……」

「じゃ最初はタイツを着けて貰おうか。後で脱いで貰うけど」

大塚さんは、いいとも悪いとも云わずにセーターを頭から脱ぐと、立ち上って黒いタイツに足を通した。勿論その下にはパンツが残

っている。

「このタイツ、よく働いてくれたわ。雑誌に載ったでしょう？」

「そうだね」

気のない返事である。胸の近くまでタイツを引き上げた彼女は、ゴムの音をパチンとさせた。それにしても美事な上半身である。彼女腰に両手を当てがうと胸を張った。にくらしいデモンストレーションである。私はうーんと心の中で唸った。滑らかな肌の感じも、盛り上った胸の膨らみも、適度の肉づきも、すべてが理想的である。その女体は若々しく疲れが見えない。

「いい体だなあ」

「ウフフ」

彼女の自尊心が微笑を作った。私は坐ったまま、その裸身に圧倒されていた。しかし、いつまでも感心している場合ではない。この美しい女体にロープをプラスして、責めの味つけをしなくてはいいけない。

私は彼女の前に立って手首を前に交叉させた。縄を巻きつける。綺麗な人だけに何か痛々しい感じがして力が入らず、私の手はぎこちない動きをした。何度か巻き直して、やっ

た姿から行くことにする。一度坐らせたり横にすると畳の型が肌に模様を作るからだ。

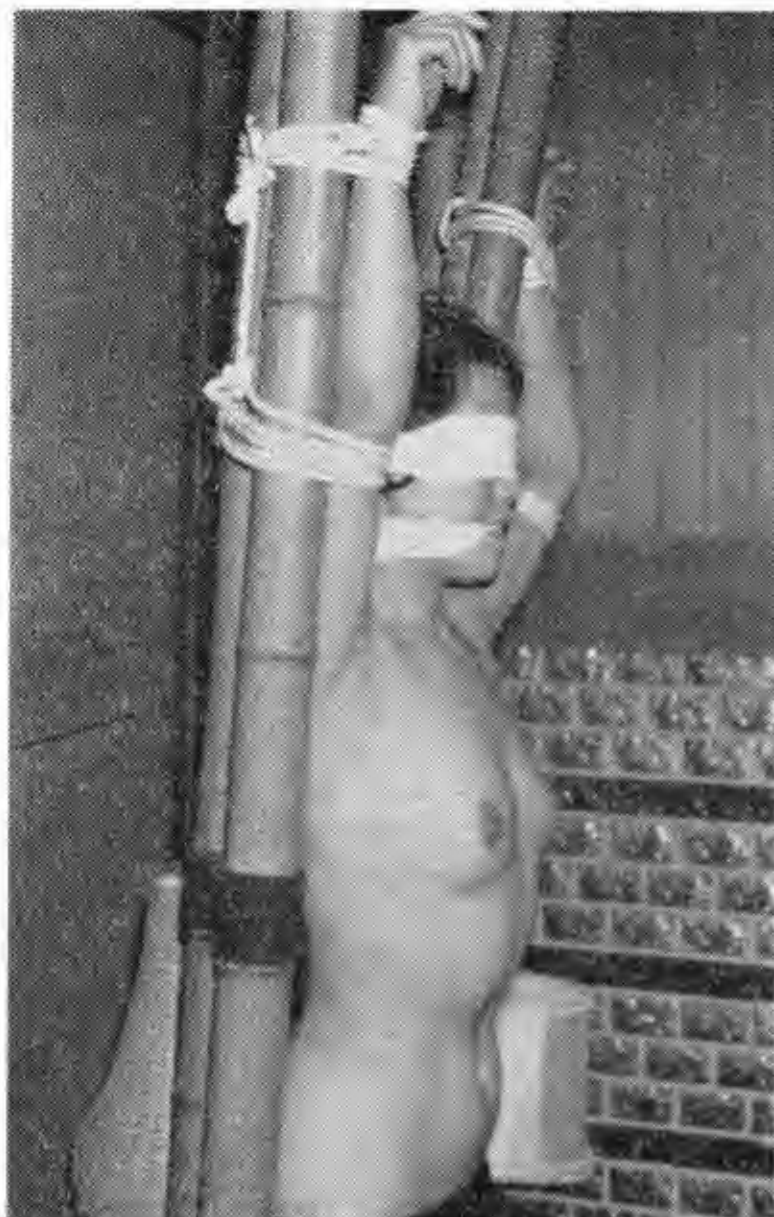
手首を縛った縄尻を襖の棧に廻わして引き上げる。大塚さんは背伸びまでしてくれて協力的である。縄が固定して半吊りの姿が出来上ると、私は細手の赤い紐を口に咬ませることにした。紐を口の前に持って行くと、私の意図を察して彼女は口を開いてくれた。経験者はやり易い。歯の間を割った紐を後頭部で結ぶ。いい姿になった。ファインダーを通して半吊りの大塚さんの体をゆっくり観賞し、ストロボを光らせる。しかし、どうも黒いタイツが邪魔である。私は数枚シャッターを押してから彼女の傍に寄ってタイツの縁に指を掛ける。

「少し下げるよ。いいだろう？」

大塚さんは、ちよっと肯ずく。私の指は黒い邪魔物を膝下まで一気に降ろした。背面は臀部の下まで下げる。大塚さんは少し腰を引いて羞恥の動きを見せる。私は指先で滑らかな胸の膨らみを軽く突ついてみた。柔らかな感触が快い。再びカメラを構えた私は、その女体に閃光を走らせた。その中の一枚が(2)である。

私の好きな写真である。グラビアにして貰





えないのが残念であるが、これを見られた読者の方には、今までの大塚さんのものとは異なった緊縛美を認めていただけるのではないかと自惚れている。タイツを全部降ろしてしまいたかったが、最初なので一応遠慮する。

(気の弱いこと)

手首の縄を解いて手を降ろさせると大塚さんは黙ってタイツを少し上げた。そのまま休まず柱の前に立たせる。傍で見ると大塚さんのウエストは適度にくびれていい線をしている。

私はそのウエストに縄を何重にも巻いて締めつけた。二分された肌が緊張してセクシーな感じである。柱の後に手首を廻わさせて縛り、首から両腋へ、縄をたすき掛けにしてから、乳房の上を縄が重ならないように揃えて縛る。それから二の腕に腕を後へ絞るようにして縄を掛け、下腹部はタイツの上から後の柱と一緒に縄を巻く。足首も揃えさせて、柱に縛りつけた。最後の仕上げは繃帯の目かくし。その時の写真が(8)である。

紐を咬んだ大塚さんの美しい歯並びが、

果して印刷に出るかどうか？ 彼女の美しい体の線が、この一枚で察していただけるのではないかと思うが、画面では彼女の肌が少し暗く出ているが、それは彼女の肌の色の黒さからではなくて印画仕上げのせいであることを断っておく。それは後

出のフォートと比較していただければわかることである。

私は、この美しい肉体に何か嫉妬のような感情を持った。言い換えれば私にサジステイックな意慾を沸き立たせる程美しく均整のとれた大塚さんであった。私は腰と足首の縄だけを解くと、黒い布きれを一気に足許まで降り降ろした。

「ウウン！」

甘えるような困惑するような呻きが、大塚さんの紐を咬んだ口から洩れた。しかし、それ以上拒むような様子は見えない。私のカメラは大塚さんの全容をフィルムに刻んだ。私の秘蔵分として。

大塚さんの体のすべては調和がとれて美しく、減点の対象となるものが何一つなかったことだけを報告して置こう。

口の紐と目かくしを解いてから、私は体の縄を弛めにかかった。すると大塚さんは片膝を少し曲げて羞恥の姿勢を示した。その僅かな仕草が私の官能を強く刺激した。女の色気というものは、本来そういうものらしい。露出的な姿勢よりも、ほんの僅かなはじらいの所作が反って性を誇張するようだ。

観念的には理解しているつもり私ではあ

ったが、大塚さんの動作によって、私は女の官能美を現実のものとして更めて確認させられた。逆に云えば、女の無意識の羞恥行動が男の性を挑発するのである。私は何故か、慌てて縄を解いた。禁断の実は摘んではならない。

「山本さんは脱がすのが好き？」

大塚さんは、私の迷いを知らないかのように話しかけながら、足許のタイツを引き上げた。怒っているようでもないので内心ほっとする。何たるフェミニストぶりか。浴衣を羽織った大塚さんは炬燵にもぐり込む。そして布団から顔だけ出して陽気に話し出した。少しも気にしていないようである。

今までグラビアになった大塚さんの写真で全裸のものが極く稀であることは先刻御承知であろうと思う。箕田氏からも予告されていただけに、私の感激は大きく顔がきっかけとほてっていた。彼女の話題は麻雀からパチンコへ移った。パチンコが孤独な遊びだということで見解が一致すると彼女は嬉しそうに笑った。全くかげのない明るい人だ。彼女と話していると人生が楽しくなってくる。寒いとき少し神経痛が出るからと云って大塚さんは再び入浴した。時計を見るともう四時を過ぎて



いる。時間の経つのが早い。その割にフィルムを消化していないのに、ちょっと焦りを感じる。急がなければならない。

湯上りの大塚さんは、再び黒いタイツをは

く。私としては、それは不要なのだが仕方がない。

部屋の隅に数本の竹が立っていたので、その前に大塚さんを立たせる。磔つけをやりたいのだが、十字架にするものがないので、その竹で辛抱する外はない。かつて彼女の十字架磔つけでグラビアに出たものがあった。私の好きなフォトである。

脇道にそれるが、私の悲願は吊りと磔つけの傑作をものしたいということだ。その二つは、実行がなかなか難しいし、今まで奇くでも、その傑作は余り見られなかったように思う。吊りも大島照代さんや、木村洋子さんに試みはしたものの、未だ納得できるものが出て来ない。磔つけについてはまだまだである。いずれそれらの傑作をものしたら諸兄に一覧願うこともあるかと思う。

両腕を上にも万歳の恰好をさせ、縦に走っている竹にそれぞれ手首と腕を縛りつける。足も開かせて縛りたいのだが、竹は下の方が狭まっているもので、それが出来ない。私の意図からすれば頗るなまぬるいものだが、致し方ない。目かくしと猿ぐつわの両方とも縋帯にする。その姿を横から撮ったのが、(4)である。



乳房から腹部にかけての曲線が、惚れ惚れする程美しいのが、見ていただけだろう。腋の下が綺麗にされているのも、清潔感があったいいと思う。後で剃っているのかと聞いたら、大塚さんは抜いちやうのと云っていたが――。

この姿のまま、私は再び黒いタイツを下げた。諦めたのか彼女は逆らいはしなかった。片足ずつ持ち上げて今度は、その邪魔物を抜き取ってしまったのだが、大塚さんは、それをも拒まなかった。



竹から解いた私は、大塚さんを立たせたままで後に縄を掛けた。目かくしと猿ぐつわはそのままなので彼女は黙ったままである。首縄から縦に縄を降ろして体を割り後手へ。乳房の上下とウエストに縦縄を押えるように横に縄を掛けてから、両肘の下と二の腕にぐるぐると縄を巻く。下腹部にも横縄を掛ける。それは露出を遮る意図である。両足首を揃えて縛ると、彼女の体は安定を失ってぐらぐら揺れた。それを抱きかかえて畳の上に横たえる。最初は俯伏せ。それから仰向け。それが

(5)である。

縛ったまま転がしている内に腹部に巻いた縄がずれて弛んでしまったので、この写真では、それが欠点となったようである。しかし考え方によれば、その縄の弛みが他の連想に繋がって反って効果があるかもしれない。

「わたし縦は好きじゃないの。体の自由がきかないでしょう」

後で彼女が云った言葉だが、それだからこそ縦縛りは魅力があるといえよう。もっとも立たせたまま縄を掛けて、そのまま横たえさせると、必要以上の締め方をするものらしいし、体を曲げさせることも苦痛が烈しいようであるから、フォトリだけが目的なら目的の姿勢にさせてから縦縄を掛けた方がいいのかもしれない。私はこの姿の大塚さんを何回か横にしたり俯伏せにしたりして動かした。彼女の腕と手が、どす黒くうっ血しているのを承知しながら。

「手が痺れた？」

縄を解いてから尋ねると、大塚さんは笑って肯ずいた。裸のままの大塚さんを炬燵に入らせて、斑になった縄の跡を撫でてやる。彼女は黙ったまま私に体を委ねている。

「疲れた？」

「少しね。しばらくロープをやっていないから」

「もう今日は止そうか」

時計は五時を指している。

大塚さんはバスタオルを肩から掛けると立ち上った。



「山本さんも入らない？」  
「そうだな。一緒でもいいの？」  
「わたしは構わないわ」

私は思い切って裸になり浴室に入った。二人のためには浴槽は狭い。

「抱かしてくれる？」

大塚さんは、にっこり笑うと体を湯の中で浮かして私の膝の上に乗っかって来た。柔らかな肌私の官能をゆさぶる。私はその女体を力一ぱい抱き締めた。大塚さんはククツツと笑いながらその全身を私に委ねる。しかし

それ以上進行するムードは到来しなかった。

いつも鳥の行水に慣れている私は、顔中汗みずくになりながら彼女を抱いている内に息切れがし出したからである。のぼせ上った私は彼女を放して浴槽から上った。体を拭き終った時、大塚さんも上って来たので、タオルで彼女の体も拭いてやる。彼女は最初、ちょっと遠慮するような仕草をしたが拒み切ることはせずに私に体を預けて立っていた。セツセと蒸された女体を拭きながら、私は自分のフェミニストぶりに苦笑していた。拭き終った私は彼女を抱き上げて浴室を出た。

「重いでしょう？」

「大丈夫」

足で戸を開けようとしたら、大塚さんが私の腕の中から手を伸ばして開けてくれる。蒸された肌の臭いが私の鼻を快く刺戟する。そ

のまま部屋に戻った私は彼女を高く差し上げた。

「うわっ、可愛い！」

大塚さんは笑いながら、裸身をすくめた。私は自分の年令が、十才以上も若返ったような気持になって戯れ続けた。

大塚さんは私の腕から降りると下着をつけ始めた。それを見ながら、私はこのまま終わってしまうのが無性に惜しくなった。背後から抱きつく。

「もう一度、縛らしてくれない？」

「好きねえ。もう遅いでしょう？」

大塚さんはあきれたような顔をして振返った。その返事をOKと受取った私は、縄を彼女の両手首に別々に巻きつけた。目かくしをしてから襖の棧に縄を掛けて引き上げる。万歳の半吊りである。パンツを少し下げたから私は畳の上に腰を降ろして、しばらく、その素晴らしい女体を鑑賞した。

美事な体だ。正直云って、私はその裸身に恋心のようなものを感じていた。これもフィルムに撮っておかなくては。ストロボの位置をカメラから離してねらう。それが、(6)である。この後、私は再び彼女を生まれたままの姿にした。そして縄を解いてから柱の前に立



たせると、大塚さんは、頭を振りながら云った。

「もう止して！ 疲れたわ」

私の意慾は、その嘆願を無視する。両手を上に柱の後で交叉させ、上膊部にも縄を掛けて後に絞るように縛る。胸が張り上体がそり気味になる。足にはわざと縄を掛けず少し開かせる。この姿では無防備感が強い。

「きついわ」

大塚さんは、ちょっと不気嫌そうである。

その時の(7)である。しかし光線がいいムードを作っているようである。私はその前に膝をついて、彼女の腰を抱いた。暖い体温が私の頬に伝ってくる。

「いや、いや、もうほめて！」

大塚さんが悲鳴を挙げる。もう辛抱の限界にきているらしい。私は、その声に慌てて縄を解いた。彼女を怒らしたくない、嫌われたくないという私のフェミニストが彼女を慰める。殆んど休みなく縛り続けて、もう五時間近く経っているのだ。食欲な私のやり方に、さすがのベテランも疲れ果てたようだった。

「山本さんてタフね。参ったわ」

縄の跡を撫でている私に彼女は甘えたように云った。気嫌が直ったようだった。

「ビールでも飲む？」

「そうね。山本さんも飲むんでしよう？」

「いや僕は酒はやらないんでね。構わないから飲みなさいよ」

私は冷蔵庫からビールを出して栓を抜く。

彼女は喉が乾いていたのか一気にコップを空にした。

「悪いわね。わたし、酔うととてもお喋りになるのよ」

「ああ構わないよ」

私は彼女のコップにビールを注ぐ。サジストは一変してホストである。何回かコップが空になる内に彼女の体に酔いが廻って来たようだった。愉快で明るい酔い方である。彼女の饒舌が益々冴えてくる。楽しい限りである。炬燵の中で伸ばした、彼女の足を私は握る。彼女は拒まずに喋り続ける。

「食事をとろうか？」

「そうね、でも、気の毒だわ」

「遠慮することはないよ。僕も遠慮せずに縛ったんだから。どう、もう一回だけ、おとなしいのをやらしてくれる？」

「もうカンニンして。また今度にしたら、いいでしょう」

私は諦めてカメラを片付けにかかる。

ふとカメラを見ると、未だフィルムが三枚程残っているようである。このまま現像してもいいのだが、できれば、そこに大塚さんを更に刻みたい。それでわざと困ったような顔をして云った。

「ああ、まだ二、三枚フィルムが残っているな。撮らしてよ」

「仕方ないわね。じゃ余りきつくしないで」大塚さんはしぶしぶ炬燵から立ち上る。勿論、裸のままである。同じ縄を掛けるのなら、私は丹念に縛った。目かくしと猿轡も省略しなかった。それが(8)である。さすが、この時は、私も気がひけて写真を撮ると直ぐに解く。

「ああ疲れたわ。明日は頭が上らないかもしれないわよ」

大塚さんは今度は直ぐに服を着た。裸でいたら際限なく縛られると思ったのであろう。私も縄やカメラを片付ける。それから電話をして食事を注文した。

向い合って食事をしている間に、彼女は再び快活に喋り始める。

「こんなに連続してロープを掛けられたのは初めてよ。ひどい人だわ」

「もう、こりこり？」

「フフフ。そうでもないわ。でも山本さんって優しい人ね。それだけに断り切れなくなってしまうのよ」

或いは私のやり方は、ずるいやり方かもしれない。

「しかし、初めてだというのによく頑張ってくれたね。感謝感激、雨あられ」

大塚さんは声を出して大きく笑った。私は彼女の人柄が好きになった。最初に書いたように、誌上のフォト等から描いていた大塚啓子へのイメージと全く異質の存在を私は彼女の中に見出していたのである。

外はもう暗かった。御堂筋を走らせながら私は大塚さんの膝を軽く抓ってみた。

「こうしていると、恋人同志みたいだね」  
我ながらキザな言葉である。

「フフン」

大塚さんは微笑する。しかし、万更でもないようである。車から降りる時、彼女の顔は一瞬素顔に戻って改った口調で云った。

「今日は有難うございました。また連絡をお待ちしています」

私はその言葉の空々しさを淋しく思いながらも、折目正しい彼女の性格を好ましくも感じていた。



## 告白

# 揉 り 責 め

斉 藤 和 久

私は揉り責めに異常な程の興味を持っています。しかし、揉り責めといっても、私は女王様とドレイとか、その反対もそうですが、そういうのは余り好きではありません。二人で揉りっこのようなものをして、相手の一番揉ったがる場所を見つけあったり、揉りについて、お互いの意見を話し合ったりして明るいムードでやってゆきたいと思っています。

揉った場所といっても、私の場合は、やはり腋の下、太腿部の内側、それに脇腹の順です。女性の場合、なんといっても、腋の下には毛が生えている方が魅力があります。又、私は女性のパンティにも興味を持っています。ピンク、黒、赤、いろいろあるでしょうが、どなたか一回でもいいですから、使用したものを分けて下さいま

せんか。それから、私は浣腸責めを女性にしてみたいと思っています。こう書くと、「こいつ、いろんな興味を持っている」とお思いになるかもしれませんが、あくまでも私は、揉り責めが第一に好きです。

浣腸は病気で入院した時、若い看護婦さんに一回やられただけでした。看護婦さんの方も私が若いので、多少興味本意でやったのかもしれませんが。一日便意がなかっただけなのに、個室でしたが二人がかりで浣腸をやられました。二人とも意地わるく、わざと蒲団を全部とり、あお向けに寝かせてパジャマのズボンとパンツを全部とりなさいと言いました。

その時の羞しかったこと、今でも忘れることが出来ません。そして、赤ちゃんがオムツをとりかえるときのような恰好に足を



「それでは又、いずれ」

私も言葉を改めてそう答えると、車の脇に立って彼女の後姿を見送った。

彼女ともっと一緒にいたいという心残りの気持は、今も変りはないのだが、いかんせん、ここは駐車禁止の車道である。車を離れることは出来ない。私は車を徐行させながら歩道を歩いている大塚さんの横まで行った。彼女は気づいて顧ると、可愛い笑顔を見せて、私に軽く会釈した。

やがて交叉点にきた。私の対面の信号は赤である。信号待ちの間、大塚さんは車の窓からのぞき込んでいる。今日始めて逢ったとは思えぬ親しみのある態度である。青信号になって発進した私の車のバックミラーに、雑踏にもまれながら横断する彼女の姿が見えた。

大塚さんと別れてみると、さすがの私にもどっと疲労が襲って来た。半日にして百数十回シャッターを押した計算である。それに調子に乗って彼女を抱き上げたりしたのが、こたえてきたようだ。しかし、私は充ち足りた気持だった。

ベテラン大塚啓子が、いつまでも奇ク読者のアイドルであることを、願わずにはいられない。

(おわり)

両方とも上にあげさせ、その両足を看護婦の一人がおさえました。ガラスの冷たい感触が、思わず私を身ぶるいさせました。注人も殊更ゆっくりやっていると思われしました。五分間で早くも便意を催し、そして十分間、やっと便器が与えられました。私は恥も外聞もなく、すぐ排泄しました。二人の看護婦さんは、カーテンを閉めて後片づけをしているようでしたが、のぞかれていますかもしれません。こんな恥しい思いをしたのは初めてでした。

この恥しさを、私は若い女性に与えたいのです。操り責めをさせて下さる若い女性の方、浣腸責めをしてもらいたいという若い女性の方、パンティを分けて下さる若い女性の方。どうか、三つの条件がそろっていなくても、その中のどれか一つでも結構ですから、私と一緒にプレーして頂けませんか。

女性の体温や体臭のまだ抜けきっていないような生々しい下着、殊に直接肌につけているズロースやパンティといったものに、関心を持っているのは、私が若い女性に対して神秘的な魅力を抱いているからなので

しょう。私が女性というものを知りつくしてしまったら、この下着に対する魅力もうすれてゆくかもしれません。

操り責めについては、今までの本誌にも余り載っていない、又これについて言及しておられる方も少いようで残念です。先にも申しましたように、私の好みは操り責めといっても、操りあいのようなもので、これも責め的一种というよりも、女性の性感帯の探求といった意味をもったプレイということがいえると思います。

身体の中で最も操りたい場所を操られた若い女性は、一体どのような反応を示すのでしょうか。私のような未経験者にとっては非常に興味があるところです。私は理解のある女性と実験を兼ねてプレイがしてみたのです。今のところ、私はMであるのかSであるのかわかりません。或はそのいずれでもないかもしれません。しかし、この世の中に、男性と女性としか存在していないのですから、そのお互いがMであれSであれ、楽しいプレイのひとつときを持つということは、有意義なことではないかと、秘かに思うわけです。

## 懸賞入選作品

妖<sup>よう</sup>紅<sup>こう</sup>記<sup>き</sup>秤<sup>はかり</sup>蕩<sup>とう</sup>也<sup>や</sup>

## 起の章

反町伸治は、「採用者」名を列記した黒い皮表紙の台帳を繰りながら、ドアの前で立ちどまった。

十数本の真新しい白の綿ロープを、輪にして肩にかけてジョルが、急いでドアの把手を廻した。

薄暗い部屋の中央に、古い円型のテーブルがただ一つ。

かなりの広さなのだが他には何ひとつ置物とてない、殺風景な部屋だ。いや、むしろ、

周囲のしみだらけの壁が、この部屋をいかにも魔屋然とさせていた。

天井近くにある小さな窓からながれてむ明かりが、奥の方にひとかたまりとなって待っていた「採用者」達を、スポットライトのよな感じで浮きたたせていた。

伸治は、テーブルのところまで、ずかずかはいつて行くと、ジョルを従えて、仁王立ちとなった。

ざわめきがピタリとやんだ。

伸治はゆっくりと黒眼鏡をはずした。

それから、無意識のように台帳の端を人差し指ではじいた。しかし、そうしながらも停

どまりのない視線が、「採用者」達の頭数を数えた。

ジョルはその視線を遮ぎらぬようにして、肩のロープをどきりとテーブルの上へ投げ出した。とたんにテーブルから白っぽい埃がまいた。あがり、不快そうな伸治の舌打ちが鳴ったので、ジョルは恐縮して肩をすぼめ、この若い会長にペコリと禿頭を下げた。

——と。

「ジョル」

パスの利いた重い声が、その長身からひびいた。

「はい！」

「これはどうしたことなんだ。——確か、十



人となっていたはずだぞ。今此処に居るのは十一人。わけを言え」

瞬間的にジョルは、その意味に気がついていた。(しまった!)——びっくりし、同時にちぢみあがってしまった。

何の感情もこめられていそうにない口調なのに、こんな場合の伸治をよく知る彼にしては、本能を持つかぎり斯うならざるを得なかったのである。

「ジョル」

「は、はい。こ、これは全く——私のミスでございます。お許しください。実は、その、たった今しがた第四外交班のほうから連絡が参りまして、大至急それを貴方へ伝えるよう

指示を受けておりながら、つ、ついすっかりと私めがド忘れしてしまいましたもので——はい。この事は全く私めのミスで——」

「どうしたことだ、と聞いているのだ」

大きな身体で見栄もなく、しどろもどろでべそをかくジョルに、同じ叱責がとんだ。

「はい! そ、それが、最初は全員十名、その通りでございましたものが、集合時間寸前になりまして外交班から、そのう、み、美衣さんとか言います応募者のお友達とかで、あの、さゆりとか申します人が、なんでも是非自分もこの募集に応じたいと強つての希望でございましたらしく、はい。もちろん第四外交班は充分な調査を済ませました由で、そ、

その結果、これならよろしかろうとかで今夜の組に含み入れるようしましたと——このように連絡が……」

懸命に弁解するジョルに、このとき、伸治は皆まで聞かずその場から横なぐりに一発、彼のテンプルへ拳を入れた。

この痛烈なフックの一撃に、ジョルは怪鳥のような悲鳴をあげて不様に吹っとなだ。

「交渉と調査は外交班に任せてあるが、最初の指名と最終の決定をするのはこのおれだ」

「は、はい」

「おれのチェックがなくては、どんな奴等だつて、絶対に勝手な行動は許されんのだ。絶対、にだ!」

「はい。そ、その通りでございます」

真正面から壁へたたきつけられて、ジョルは鼻血を垂らし顔をいびつに歪めた。

反町伸治と言うこの若者が、彼にとってはその言葉通りの絶対な支配者であるのだ。反抗などとても許されたものではなかった。

この「忠実なる部下」は、とうとう本当の泣き顔になってしまった。

部屋の隅から、この有様を見ていた「採用者」達は、この突然の悲鳴にびっくりして身を寄せ合った。



「さゆりさんとか。ここへ出てください」  
全然変らぬ口調が命令して、手の台帳が音たてて閉じられた。

十数人が、同時に息を詰めてしまったかのような、苦しい程の沈黙が、この部屋全体を庄しはじめた。

そうして、それは今にも固定してしまいそうに、沈滞していった。

すべてが静止し、秒刻みのような時間がながれた。

ジョルや「採用者」達には、かなりと思われる程のときが過ったところ――

伸治がかかる踏み鳴らした靴音で、この、いつまでつづいてしまうのだろうかと思った沈黙が破られた。

「早く、出なさい」

申し合わせたように、ホッと、吐息をつく「採用者」達の端のほうで、ゆるやかに動いて、やがて怯えきった様子の女が、淡い明かりの輪の中に浮かびあがった。

濡れたようなへアに乳白色のリボンを震わせて、大柄な花模様のワンピースのウエストあたりをしっかりと握りしめた彼女は、まるで獅子の前へ突きだされた小雀のように怯えていた。相手を曳きずるような声と、その全

身から漂う重圧とに打ちのめされて、顔を上げる余裕なんかとてもないのだろう、俯向いたきりでその豊かな胸も大きく喘いでいた。

この様な彼女を、伸治の眼が冷たく見おろした。

彼女の方は、よく見れば整いすぎるくらいの容貌を思わせるのに、その凝視はするどく光る針先のような感じである。

敏感な肉体はその針先をまともに受けて、ますます震えていった。

「顔を、見せてください」

伸治の靴先が再び鳴った。

「見せなさい、と言ってるんだ」

するとこの時、さっきから倒れたままの恰好で壁にへばりついていていたジョルが、主人の意を汲んだ、番犬のような素早さで起きあがり、彼女の傍へかけ寄ると、その頤に節くれた指をかけて邪慳にしゃくり上げた。彼にとつてこれは主人に対する勢いっぱいの追従であつたかも知れぬ。

人並み以上のごつぱい手に顔を持ち上げられて、彼女の細い身体は浮き立った。

「――！」

ところが。

こんな雰囲気だというのに、ジョルの表情

にみるみる驚きの色がうかび――そのまま息を呑んだ形で停止してしまつたのである。

そうして、禿頭の五十男だというのに、やがて少年のような精気と紅潮をさえその表情に旺盛させはじめた――。

そこに、思いもかけず、生れて初めて眼にするような「美貌」を発見したからである。

いや、笑い話ではない。

女体を手掛けて数十年、斯道にはちょっと知られているはずの彼でも、こんなに（美しい女の顔）は未だ取り扱つたこともないし、間近かに見たことさえなかったのだから一概にムリとは言えない。

絹にも似てかがやくような皮膚、長い睫のむこうでけぶる黒い瞳、そうして最高の創造を感じさせる鼻梁、はじけたような容の紅唇――。いや、彼にこんな表現を求めても駄目だろう。何故なら彼は既に惚けてしまつたような眼になつていたからだ。

ハッと我れにかえり、あわてて伸治の方を振り向いたのは、この様に間の抜けたような時間がしばらく経ってからであつた。

ジョルは急に優し気な手付きで、この「美貌」を伸治の前へ「提出」した。

やはり、伸治の眼にも、微妙な一瞬の動揺



が走った。たとえそれが一瞬とは言え、女の顔をみて動揺するなんて、ついぞなかったことなのに――。

彼はなぜかあわてて視線をそらした。

「よし、今回だけは奴等やお前を許すとしよう。ジョル、くどくは言わん。今度だけだ。わかったな」

なんとなくさっきまでの凄味が消えているようだ。念を押されたジョルは、まだ彼女の横顔にとりつかれたまま彼にしては多分に誠意のない一礼をかえした。

伸治は改った仕草で台帳を持ち直すと

「みんな、あそこへ並んでください」

と窓に向った壁の方を差した。

やっともとの締まりのない顔にかえったジョルが、「採用者」達を片端から追い立てて一列に並ばせ始める。

いったいどんなことになってしまうのだろうかと、音もなく見つめていた十人の「採用者」達は、意外と何事もなく済んだので、ホッとしながら、漸く動きらしい動きを見せて立ち並びはじめた。

すると、この灰色の部屋には全然不釣合な派手で若々しいドレスや和服が、まるで大輪の花が揺らぐように見えた。

十一人。すべて若い女性である。

そうして、彼女達それぞれの美しさは、この薄暗い部屋にもかかわらず、際立って浮かび、映えていたのだった。

さすが、伸治が三カ月もかけて探し求めた「美女」ばかりであった。

彼はチラリと腕時計をのぞくと、並び終った列の右端に立った。

やがて、一人一人の前に立って、台帳の記載文字と、一定の大きさに貼りつけられてある写真とで、「確認」が始められた。

「美衣。二十五才」

「ゆかり。二十」

「田津子。十九」

「浅代。二十六」

「洋子。二十」

「千秋。二十三」

「みづみ。二十二」

「あや子。十八」

「千草。二十四」

「清美。二十五」

――ぱたん、と台帳を閉じると、

「さゆりさん、あんたのことは未だこれに記載されていない。もちろんこれは会のほうのミスであんたには関係のない事だ。しかしこ

れでは正式に採用だとは言えない。だから特別のオーケーと言う意味で、ついでに年令とお勤め先の名を私に言って貰いましょうか」  
そのとき右端に立っていた、淡いブルーの服の襟元に金糸を散らしたワンピース姿の美衣が、よくすきとおるきれいな声で、  
「あのう、あたしのお店と一緒にすわ。いちばんのお友達なんです」

さゆりのほうは、蚊の鳴くような声で、はたち、と答えただけだ。

伸治はかるく頷くと、背広の胸からハンカチを抜きとり口元をゆっくり押さえながら言った。

「では、これから私が話すことをよく聞いていただきます」

――窓から差しこんでいる明かりは、すでに今日の残光となりつつあった。

彼は、彼女達には逆光線となる位置を計って立った。

「貴女方が、今夜の会に参加されることにつき以前、貴女方と当会との間で契約を取り交しましたことは、今でもよく覚えていらっしゃると思います。もちろん、これは無形の契約ではありますが、この契約とは、その事を完了することを目的として、その初めに相互

間で約束し取り交されるべきものなのです。

今回、広く募集を行いました当会も、またそれに交渉を受けてその会の趣旨のすべてを承諾し採用となられた貴女方も、この相互間の契約を守るためには、是非、今夜これからのことをよく理解し体得されて完全な終了を果たさなければいけないのです。まず、一言で要約しますと、これからの七時間、貴女方は今夜の会の『演出』係を勤めるこの私の指示及び注意をよく守り、そのためには貴女方にとって存外の自由は一切認められないと言うことなのです。私が『演出』家ならば、貴女方は『演技』者なのです。その『演技者』である貴女方は、この七時間の『演技』をよく演じられて終幕となったとき、ここで契約にもとずいての報酬金を受けとり、そのまま自由となる、と斯ういうわけなのです。わかっていただけますか」

彼は一人一人の顔へ視線をながした。

棒読みのような口調ではあったが、それでも彼女達は熱心に聞き入る。

「繰り返になりますが、貴女方が、今夜の会の趣旨をよく納得されてよく『演技』を終了されたときは——」

と列の四番目に並ぶ浅代を見て、

「浅代さん、あなたは今回が二度目のはずでしたね。これは勿論あなたの『演技』が前回に優秀だったから特例に認められたのです。」

——この彼女に尋ねて貰ったらくわかると思います、貴女達めいめいが求めているらしい収入は確実に手渡されるのです。そうしてまた、この『演技』により以上の努力をされた方、特に今夜のお客様にいちばん喜んで戴き、マークされた人は、次回の募集では浅代さんのごとく無条件で再び採用されるというシステムになっているのです。今度の募集に採用されましたとき、ひと通りの説明は述べたはずですから理解されていらっしゃると思います、この『演技者』であると言うことを最後まで忘れずに覚えていてほしいと思います。よろしいですね。では——詳しい説明やら注意なりは、また後程その折り折りに、述べますから、ええと——今から十分間。その時間の間に、よく化粧などを直したりしておいて貰います。そして十分が過ぎたら、私が読みあげます順でこのテーブルの処まで来て貰います。そうして貴女方全員の準備が——私達はこれを『お化粧』と言っておりますが、これが済んだら一緒に、表に待たせてある車に乗って、さる処へと、出発しま

す。さる処とは今夜、貴女方が『演技』される花道となり舞台となる所なのです。それでは、今日貴女方が充分承知で来られた『お化粧』に取りかかる前に十分間、休憩いたしますから自由にしていして下さい」

彼女達が頷いて、列が乱れた。

彼はそれぞれの化粧直しやらにざわめく彼女達をぐるりと見廻すと、満足そうに、ゆっくりと煙草をとりだし啜えた。

それからちょっと考える風を見せたが、そのまま静かに部屋を出て行った。

すると、それまで神妙な顔つきで控えていたジョルが、テーブルの上のローブをとり、手馴れた捌きを見せて解きはじめた。

## 花の章

表に待たせてある車に、出発は一時間後だと告げて帰って来た伸治は、先程の位置で台帳をひろげ、最初の人の名を読みあげた。

「千秋さん」

朱の波柄にピンクの小花を配した和服姿の千秋が、言われた通り、テーブルの前まで進み出た。

待機していた彼女達は、この呼び出しを聞



くと異様な緊張の色を浮かべて、一せいに千秋の方を注視した。

相当長く揃えて断たれてあるロープの輪から一本、手にしてジョルが彼女に近づく。

伸治が、微かに眼で頷いた。

ジョルはそれを窺い見ると素早く彼女の後へ廻り、やにわにその両手首をつかむと容赦なく背中へねじまげる。そして手首を帯の上で高く交叉させてロープの端で二巻きして縛る――。

「あっ！」

彼女は顔をふるわせて天井を仰いだ。その眼元がみるみる紅くなる。

ジョルの蒼黒い頬がピクリと痙攣する。

ロープは乳房のあたりを上下四廻りし、帯の下で一廻りしてきつく締めると、前から横ロープの中央を連結しながら肩越しに後の手首をとらえてぐっと引きしぼると反対の肩から戻って上の横ロープでとめた。

彼女は美しい苦悶の表情もあらわに、よろよろとよろけた。

「いいだろう」

あっと言う間のロープ捌きに、またその美しき被縛者の表情にも満足したのか、伸治の口元がふと綻びたのであった。

縛りあげられた千秋は、みんなとは反対側のほうへ追いたてられた。その姿は極彩色の絵の中にあるようだった。

ジョルは戻ってくるなり、すぐ次のロープを手にする。

「次、千草さん」

いくら言い含められ、自分もそれを承諾した上のことだとはいえ、まのあたりにこれを見てはさすがにポカーンと立ちつくす彼女達の、いちばん奥の方から、濃紫色のフレッシュなワンピースを着た千草が迷ったような表情でおそおそと進み出た。

その伏し眼がちな睫が何かに軽く触れられているかのように震えていた。

今度はもう伸治の合図を待たずしてジョルは作業にとりかかる。普段の日の彼とは別人のような活き活きとした動きである。

いきなり上腕にロープをかけて、揺するようには絞ると関節まで重なり合った下腕部に五巻きもして、首へかけると後からウエストを喰いこまんばかりにして縛り、それを前へ廻して苦しそうな首のロープへ通して戻り、左右の上膊部のロープにかけてまた元の首のロープでとめる。――まるで手当り次第のような縛り方なのだが、濃色の洋服の上からのせ

いか、出来上って見るとよくマッチし一種新鮮な緊縛姿となった。

彼女は、首へロープが掛かったときは、びっくりして息もつまるかと思っただが、縛られ終わったときには見た眼程にはなく呼吸の困難さは感じられない。しかし縛られた手のほうは全然下ろすことができないので、幾分前傾姿勢になるのがつらかった。

ジョルは自分の手掛けたその新鮮な被縛者の肩先を、いとしげに撫でると、ポンとたたいた。

彼女は元気？ に、自分から千秋の立っている処まで歩いて行った。

次に、この彼女達のなかで、いちばんグラマーなゆかりが呼び出されて、黄と黒の格子模様のツーピースの上からキリキリと亀甲型を作って縛りあげられた。

さっき、さゆりの友達だと言った美衣は、淡いブルーのワンピースの上から俵掛けのような縛り方。

続いてミルク色のアンサンブルスーツを着た洋子は、その襟やら大きなボタンのあるデザインのために、案外に簡単な縛りかたでただ手首だけをたかく固定されて胸の横ロープは二本だけ。

見ているとことごとくその縛りかたが違  
うのだが、それはジョル自身のその場その  
場の感覚が大きく作用して形成されている  
ものらしかった。

彼の手に捌かれると、ロープは生きもの  
のようにとびつき、絡み、それはまるで透  
明の曲管を走る液体みたいな速さで、妖し  
い拘束を仕上げた。

まず、順番を待つ彼女達を見よう。

この美女達は、眼の前で縛りあげられて  
いく同僚たちに、初めは、複雑な心の動揺  
を覚えながら、徐々に――、その瞳をうる  
ませ、紅唇をなかば開いたまま、いつしか  
模糊とした感覚のなかに自失していたので  
あった。

縛り終えられた彼女達を見よう。

この美女達は、真中へ呼び出されて、ロ  
ープをかけられている間、多分に他の眼を  
意識して、耳朶まで深紅に染めて、ただ羞  
恥の極にいるかのような、姿態であったの  
が、部屋の一隅に追いやられたあとは、自  
分の胸に喰いこむ白いロープを熱っぽくまじ  
まじと見つめるもの。身悶えして、焦点定ま  
らぬ瞳で宙を仰ぐもの。この緊縛から逃れよ  
うとでもするかのように、眼を閉じて、いや



いやをしながら身をよじらせるもの――。  
そこには、すでに羞恥を越えた、ある雰囲気  
を、生じはじめさせていたのを果たして知  
っていただろうか。

ともあれ。

この様に、強烈で、おぼろで、名状しがた  
いものを、この部屋の中いっばいに充満させ  
て伸治の言う『お化粧』は何の渋滞もなく施  
されていったのである。

その伸治は、終始眼を細めて、眺めている  
だけであった。

田津子は、――背中にファスナを押さえて  
くるみボタンを羅列させた、光沢のあるドレ  
スの上から、その美しい肢体を明確に誇張さ  
せ、印象づけさせるような縛り方。

ロールカラーの青銅色をしたワンピースの  
みづみは、その襟を利用して首から後手首を  
直接連結しそれから上膊を後へ引き絞ったの  
み。

真紅のジャンパーに、純白のスカートのあ  
や子は、幾重にもロープをかけて、それこそ  
がんじがらめといった縛り方。

ロングヘアの清美は、濃みどりと若草色と  
でスマートなワンピースの、胸の横ロープの  
腋に結び目を作って、肩からと腹部から引い  
て、そのポリウムある見事な乳房を、大いに  
遊ばせるといった縛り方。

もう一人の和服姿の、今回が二度目だと言  
う浅代は、胸に菱形を作って二の腕もあらわ



に、しかし丹念に縛りあげられた。

そうして、最後にさゆりが呼び出された。

容貌も肢体も並以上に美しい彼女達のなか  
にあって、特に眼立つこの美女を、さてどの  
ように縛ろうかと、しばしジョルの手が停ま  
った。

すでに部屋の中は暗くなりつつある。

とくに観念はしていたのであろうか、こ  
の美女は、案外平然として、自分から両手を  
後へ廻してジョルに背を向けた。

「ジョル、何をしている」

伸治の叱咤がとんだ。

「はいっ」

ジョルは顔から汗の玉を散らすと、バネに  
弾かれたように、あわててその細い手首にロ  
ープをかけた。

心頭を滅して何の滞りもなく縛りつづけて  
きた彼は、初めてここで乱れを見せたのであ  
る。

「うっ！」

と、さゆりの微かな呻きと、身の上じりに  
も、すっかり狼狽して手許を狂わせ、先程ま  
での見事な「流れ」は消えた。

加減も出来ず、異常に力がいって、手首  
が背中へくくりつけられたとき、それまで齒

をかみしめて我慢していたさゆりは、思わず  
足をもつれさせた。

するとジョルは、ロープを放り出し、彼女  
の身体を両手で抱きしめ、やっと、彼女が安  
定すると、ハッと我れにかえって腕をはなし  
いかにも氣遣わし気に見つめるのだった。

「どうしたんだ、ジョル！」

彼は首をかしげた。調子の狂いは自分でも  
わかった。

彼にしてはもたもたと、縛っている彼の方  
がくるしそうに——やがて、漸く彼女の縛り  
が済んだ。

何のことはない。

出来上ったのを見ると、彼女達のうちでは  
いちばん簡単な縛り方だ。

だのにジョルは、いつになく大きな吐息を  
ついていたのだった。

「みんな、こちらへ——」

気の急く身振りで、伸治が言った。

両手を背中にくくりつけられた彼女達は、  
そろそろと彼の囲りに集った。

「これで、『お化粧』は終わりました。これか  
ら車で出掛けます。痛くて歩きにくいと思い  
ますが、辛抱して貰います。それから、向う  
に着いたら、一列になって、前の人との間隔

を充分とって、ゆっくりと歩いてください。

先頭に立つのはあの男です。後尾には、私と  
他の者がつきます。貴女方は、あわてること  
はない。しとやかに——そう、なよなよと歩  
けばよいのです。ただし、縄目の苦しみなど  
は少しも隠さなくてもいいから、いや、うん  
と顔に出して構わない。もちろんこれも、優  
雅に、しとやかにですよ。いいですか」

がんじがらめのあや子が、ちょっと茶目っ  
気に言った。

「あたし、もう、しびれちゃってるわ」

周囲に苦しそうな笑いが起った。

「うん、それを顔にだせばいいんだ」

伸治はこともなげに言って

「ジョル」

と呼んだ。

ジョルは隅の方へ身を寄せて、しきりに汗  
を、徳利セーターの袖で拭いていたが、あわ  
ててドアの処へ走った。

やがて。

色とりどりに、この妖しく緊縛された一行  
は、あるものは弱々しくよろめき、あるもの  
はいかにも若い女性らしく活潑に？ 縛れ合  
いながら、この部屋を出て行った。

——すると、急にがらんとしてしまったこ

の部屋に、みるみる闇がながれこみ、ついで耳鳴りのするような静寂が、訪れた。

また六時間後に開かれることを約束されながら、そのドアは、反町伸治の手によって、重く閉じられたのであった――。

## 儀の章

車は車でも、一トン積トラックのバンで、おまけにテントまで被せたのへ押しこめられてきたのだから、いったい、此処が何処なのか、彼女達是一向にわからない。

降ろされたのは、余程広大と思われる邸宅の前だった。

ハンティングらしいのを目深にかぶった男が開いた門をはいると、夜目にも広荘な庭園である。

そこから白い砂利道が、ゆるいカーヴを作って――正面の洋館の方へつづいていっているらしかった。

暗い空にすかして見ると、館の背後は、林か森のようでもあった。

遠い四囲の様子は、すっかり闇に溶けこんではいたが、池まであるらしく、耳を澄ませば魚の跳ねる水音がしきりにする。

一行は、先頭のジョルの持つ懐中電灯に、案内と言うより、曳きずられるかのように、白い砂利を踏んで進んだ。

ともすれば、心細さのあまり、前を行く者との距離をつめようとする、いつのまに廻ってくるのか、伸治とは違う、低く鋭い叱責がとんできた。

彼女達の中には、不自由な身体と喰い入る縄目の痛さに、半分泣きだしているものもいた。

しかし、これはいくら泣いても、此処まで来た以上許されるものではないだろう。

ただ、必死に歯をくいしばって歩くより仕方なかったのだ。

――一行は、ゆっくりと進んだ。

闇ばかりでなく、あたりも建物も深閑として、みんなの踏む足音だけがたわひびくのだった。

こんな十一人の影を、夜の空から呑みこまんばかりにして正面の館が見下ろしている。

高窓から一つだけ、ぼんやりと明かりが洩れて、それは何か巨大な怪物の眼に見える。

やがて先頭に立ったジョルは、夜目にも立派そうな玄関に着くと、停まることなくその扉を押した。

すると、内部の何処かで、微かに風鈴に似た音のするのが聞えた。

ジョルは、忍びこむかのような恰好で、音も立てず静かに中へはいった。

中へはいるとすぐ眼についたのは、獅子が咆哮するのを像どった灯台に、数本の蠟燭が小さな炎を揺らめかせて、宙に浮いていたことだった。

その炎の揺らぎに合わせて、周囲の影が、壁に天井に不気味に蠢いている。

右手に階段があった。

その中途と、上の踊り場あたりにも古風然とした型の台があって、チロチロと仄かな舌を吐いている。

ジョルは、ためらうことなく階段をのぼった。

そのすぐ後から、亀甲型に縛られたゆかりが、外見だけかも知れぬが、意外と物怯じせずにつづいた。

異様な邸内に、化石のごとく立ち竦んでしまったのは二番目の田津子であった。

「――！」

気味悪い明かりに、美しく光沢を放つドレスへ、ロープを喰いこませて、彼女は全身で喘いだ。ちょっと押せばそのまま倒れてしま



いそうであった。

その時、

「行くんだ——」

不意に、開けられたままの扉の向うから声がした。

びっくりなんてものじゃない。

彼女は、声にならない声を上げて——その意とは全く反対に、まるで暗示にかけられたように、ふらふら歩きはじめた。

ゆかりは既に踊り場に達している。

ジョルの方は、ゆっくりと、同じ速度で、踊り場から右へ折れて続いている階段をのぼっている。

彼におくれじと、不自由な身で吐く息も荒く、ゆかりがつづく。ちよつと気を抜けば、瞬間に転げ落ちてしまいそうな気持だった。

さすがの彼女も、そんな思いで長い階段をやつとのぼりつめた。

眼の前に廊下があり、灯りを持ったジョルはもう大分向うを歩いていていた。

息切れして苦しかったが、彼女はあわてて後を追おうとした。

この時、

ぎよつとして立ち止った。

何者かの——それも自分に間近かに視線を

感じたからであった。

(誰か居る。しかも、すぐ横に！)

彼女はいっばいにひらいた眼で、右を見、左を見た。

居た。両側の暗闇に全身真黒な、微かにそれとわかる人影が——しかも、一人や二人じゃない。瞬きをくりかえして眼を凝らすとまた一人、その向うにも。

(誰。だれなの——！)

恐しかった。このまま消えてしまいたい程の恐怖心が肉体を硬直させた。

絶叫しようにも、声がでない。

——と、突然。

頭上から強烈なスポットライトが浴びせられた。その光輪が彼女の全身をとらえる。

彼女はたまらず眼を閉じた。

(な、何をするのよ！)

その時、彼女の耳許で変な日本語が囁いたのである。

「マッスグ、イッテクダサイ」

彼女は気が遠くなりかかった。

「サ、——ハヤク」

一、二分の時間が過ぎた。

齒をキリキリ鳴らして、ふらつく足を、やつとのことで踏み出す。

やがて、よたよたと歩き始めた彼女を、スポットライトの輪が執拗にとらえて動いた。

両側に並んだ、黒マント黒覆面の、そこだけむき出しの眼がギラギラ光り、無残な彼女の歩行をじつと見つめる。

片側に五部屋程の、たったそれだけの廊下を、彼女は百キロの道を往く想いで歩いた。

手首のしびれも、肌に喰い入る縄目も不思議と感じられなかったが——。

そうして、いちばん奥の部屋のドアを開けて待っていたジョルの処へ、くずれるようにしてたどり着いた時、それまで彼女をとらえて離さなかったスポットライトが、一瞬反転

し、次に、声もなく立ち辣む田津子の、綺羅

びやかな緊縛姿をとらえた。

「サ、コンドハアナタ。イキナサイ」

さっきと同じアクセントが、彼女に耳打ちした。

彼女は夢うつつに、光の輪に送られて一步を踏み出した。

こうして。

みづみ、洋子、千秋——と、スポットライトの反転が繰り返されて、彼女達は次々と奥の一室へ送りこまれて行ったのであった。

最後の美衣が、よろめきつつその部屋へ吸

いこまれて行つたとき、廊下の黒影は音もなく、ひらりとマンツの裾をひるがえして、かき消えていた。

スポットライトも消され、廊下にはもう人の気配もなく静寂がきた。

『敬虔なる歓迎の儀式』は終つたのだ。そうして。

ただ一カ所、明かりを洩らして、秘かなざわめきを起す一室では――。

今しも大忙しのジョルが、片っ端から彼女達のロープを解き放つていた。

「さア、縄をほどいた人は、今から二十分間の休憩がありますから、よく身体をやすめてくださいよ。さあ、さあ」

手際よく自由にしてやると、片隅に並べてあるソファの方へ、景気よく押しやる。

「あら、また三十分したら縛られちゃうんですかア」

しびれた胸や腕をさすりながら、千草が情けなさそうな声で言った。

「違います。二十分です。時間厳守。これがこの会の、えーと、モットーなのでございますよ。それに、何を言ってるんですか。お縛りの方は、これからが、本命で、へへへ、さあ、覚悟して一ぶくしてください」

「あら、覚悟して休憩なんて、ちょっとおかしくなァい？」

千草は、今さっきの恐怖心もどこへやら、場違いのような明かるい声で、隣りに坐つていた千秋に言った。

含み笑いが起つた。

まだ縛られたままで、順番を待っていた者も、この千草の言葉で笑いを浮かべた。

「それに、お縛りだなんてのも、おかしいわァ」

みづみが言った。

含み笑いが、ただの笑い声に変わった。

びっくりしたのは、ジョルである。

「駄目です！ いけませんよ。こ、こんなところで笑わないでくださいよ」

あわてて壁を塗るような手付をしている。

「そんなこと、言つたつて、ねエ」

「やめてくださいよ。本当に。お願いしますから――」

「あたし達が笑つたら、あんた、またあの人がぶつとばされちゃうんですか」

あの気味悪い感じの伸治と違って、このジョルならと、また直接自分達を縛つた張本人だと言うウラミなのは知らないが、彼女達はめいめいに、意地悪く、困り抜いてる彼を

からかい始めた。

彼は真赤な顔になって、

「ねエ、静かに願いますよ」

「なに言つてんのよ。あんたのなぐり倒されっぷりが、あんまりお上手なものだから、もう一度位見たくなると言うのも、人情じゃありませんこと？」

「かんにんしてくださいよ」

「あら、それとも、今度はあんたがあの人をぶつとばす番でございますかア」

送り言葉でやられて、多勢に一人、しまいにはジョル、土下座をしてしまった。

## 間の章

遙か夜の彼方に、豆電球を散らしたような灯が浮かんでいる。

見つめているうちに、ふと此処は、郊外と言うよりも、ひょっとしたら辺びな山奥ではないのだろうか――と何かしら不安になってくる。

この邸の囲りには何があり、いったいどの街に近いのだろうか。想いは同じだ。

美衣とさゆりは肩を寄せ合つて、ひしひしと夜のきびしさを感じさせる暗黒の外界を、



窓辺から眺めていた。

ふと美衣が、さゆりの手首に這っている、生々しいロープのあとをいたわりながら、そっと囁いた。

「ごめんなさい。あたしが誘ったりなんかしたから、こんなひどい目に逢ってしまった」

「あら、あたしはいいのよ」

さゆりは、寂しそうに笑って見せた。

「だって随分と痛かったでしょう」

「それは。でも、あなただって」

「あたしは、自分から好きこのんで承知しちゃったんだから、これ位の辛さは覚悟していたわ。それより、こんな会だなんてよく知らなかったあんたは大変だったと思うわ」

「いえ、あたしだって知っていたわよ。だからすぐに覚悟して頼んだの。どうしても、是非今夜のお金がほしかったの」

「ふーん、でもあたしね。今頃になって言うのも変だけど、あの時、この会の者だと言う男から誘われたとき、やっぱり断っておけばよかったと思っているの。だってさゆりちゃん、この手首の縄のあと、あんまりひどいじゃない？」

「ひどいわ。でも、美衣さん、あたしは我慢するわ。それにもう、いくら考えても、こん

な処へ来ちゃったあとだもの。こうなったらあたし最後までがんばるつもりよ。そのかわり、あの約束通りのお金はきっちり、いただいて帰る。今のあたしが考えていることはこれだけ」

「へえ、さゆりちゃんって驚いちゃった。思ったより強いね。じゃ、あたしも見習ってそうするか。——ふふ、だいたいあたしってね、ずっと前から、一度ひとに縛られて見たいって思っていたもんだから、つい——、あら、笑っちゃだめよ」

「笑ってなんかいいわ」

「——とっていたんだけど、今度こんな会があつて、しかもすごいアルバイトにもなるって聞いたもんだから、あたし、これは一石二鳥だと、ろくろく考えもしないで、応募しちゃったのよ。だから、あたし本来の希望なら、縛られて、此処まで連れられて来る位で充分すぎるんだもの。それなのにあの男ったら、まだこれからが、本番だって口振でしょ、おじけづいちゃったのよ」

「でも、これだけじゃ、あんな大金になるはずはないでしょう」

「あんた、お金のことばかり、言ってるのね。——でもあたし、これからの事を想像す

ると、心配だわ」

「だけど、別に取って喰おうってわけじゃないんでしょ」

「あらあんた。そんな美しい顔して、言うことは凄いのね。——それに、さっきの変な奴ら、なによ、あんな恰好して」

「あれが、お客様らしいわね」

「そうだと思うけど、そのお客様の中へ、あたし縛られて放りこまれるんじゃないでしゅうね」

「そんなに心配なの？」

「あたり前じゃないの」

「それじゃ美衣さん、あの男が言っていたでしょう。浅代さんって人。あの人に一度尋ねて見たらどうなの」

「？」

「今度が二回目だと、言ってたじゃないの、ね」

「あ、ほんとだ。そうしゅうか」

「でもね美衣さん。あの浅代さんって人、始めから、何だかあたし達を軽蔑しているような感じだったわ」

「何が軽蔑よ。自分だって、みんなと一緒に縛られて連れられて来たくせに。——あ、そうか。そう言えば、あの人、最初縛られた時

に、何だかこう、ボーッとしちゃって、そう  
だわ、夢でも見てるような顔して、あたし達  
痛くって苦しんでいるのに、あの人だけ、何  
だが楽しくって嬉しくってたまらないって感  
じだったわね。ふーん」

「ふふ、自分で頷いたりして。そんな事はあ  
の人だけじゃなかったわ」

「へ、あんた、そんなの見ていたの。震えて  
ばかりいたじゃないの？」

「ふふ」

「いやだわ、笑ったりなんかして」

「でもないんだけど」

「——すると彼女は今や、忘我の境ってわけ  
ね。わかる、わかる。その気持——。でもさ  
ゆりちゃん、見てみなさいよ。随分と、みん  
な、美人振ってるじゃないの」

「——」

「あんなに美人振ってるくせに、こんな会だ  
と聞くと、バタバタ集っちゃったりして——」

「そうでもないんでしょうけど」

「あら、そうよ。決まってるわ。でもね、あ  
の人達も、さゆりちゃん、あんたの傍へ来る  
と、月とスッポンもいいところだわよ」

「いやよ」

「ほんと。ガタ落ちで、ペッシャンコだわ。」

わかってるのかしら、あの人達」

「やめてよ」

「だのにねえ、さゆりちゃんみたいな子が縛  
られて、あんな男達の中へ、ねえ」

「——」

「あの野郎達、あんたを見て、眼をつぶしち  
やえばいいのに」

「だめよ美衣さん。未だお給料いただいてな  
いお客様に、そんなこと言ったりしちゃ」

「あ、そうだった。これはうっかりだわ。要  
心々々——じゃ、今の続きは、そのお給料と  
やらをいただいてからにしましょう」

二人は窓硝子に映る、お互いの姿を見合っ  
て、肩をすくめた。

そうして、ぶっと吹き出そうとした——そ  
の時、硝子を微かに震わせてドアが開いた。  
とたんに、部屋の喧噪が、ぴたりと止む。

——視線が一せいに注がれた、其処に。

黒の背広に黒い皮表紙の台帳を持ち、夜だ  
と言うのに黒眼鏡までかけた、反町伸治が、  
例の一種独特なものを漂わせながら、その長  
身を現したのである。

何かしら夢中であったジョルが、起立の姿  
をとり、ぴよこんと頭を下げた。

## 裂 の 章

遠い想い出ではあったが、波岡治郎は、あ  
の時のことを今でもよく覚えていた。

——八歳の時である。

一方の親分格となって、近所のわんぱく共  
を集めて、ギャングごっこをして遊んでいた  
彼は、その時敵方の親分に、情婦役の女の子  
が二人も居るのを、児分のスパイが発見して  
来て報告したので、びっくりしてしまった。

しかも、そのチビ情婦の一人が、彼の口頃  
からの仲の良い女友達と聞かされ、さすがガ  
キ大将で親分の彼も、ものすごいショックを  
受けたのである。

「おやぶん、なにモタモタしてんの。早く指  
揮しなきゃア、おいら達の根城は、爆破され  
ちゃうじゃないの！」

鼻ったれ参謀で、一の児分であるのが、シ  
ョックでくさる親分の尻を、棒切れでひっぱ  
たいだが、返事もない始末である。

前方に、爆弾のつもりの砂塊を持って、チ  
ロチロと迫ってくる敵を見ても、このませた  
親分はヤキモチで大いにくさきっていた。

ところが、その敵組の後方に、問題の彼女



の姿をチラリと見た瞬間、我れに返った怪親分、突然キイキイ声で、

「あのヤロウ、バカ違う、あのくそったれ女を引っ捕まえろオ」

とずり落ちそうなズボンをしっかり押さえ、怒鳴り、喚いた。

突如的なこの親分の命令に、鼻水を服の袖口で塗りひろげながら待機していた児分たちは、尻に灸をされたかのように吹っ飛んで行った。

ついに大爆弾戦数分。

味方の必死の攻撃はついに実を結び、無残にも泥だらけとなった情婦を捕えて、せいぜい言いながら帰って来た。

「よし、こっちのこの女、ひっくくって、あそこの杭に縛りつけろ」

この間見た映画のセリフにあったなアと思出しながら、この親分治郎は、齒を剥いて号令した。

その見事に女の子、いや情婦はびっくりして、つぶらな瞳をいっぱいに見開いた。

多勢のギャングによって紐や縄がかき集められた。

一の児分が情婦を後手に、むちゃくちゃに縛りあげて、杭につなぐ。

まさかと思ったのが、本当に縛られてしまったので、この情婦は泣きべそをかいてしまった。

「治郎ちゃん、ひどいわ」

彼は勢いっぱいに、肩を怒らせた。

「ふん、お前は敵方についてたじゃないか」

「あんたが、こっちの組だと知らなかったもん」

「それを曳かれものの長唄って言うんだ。わかったか」

「ふんだ、それも言うなら、小唄って言うのよ」

「——」

「バカ」

「なに！」

「そうじゃないの」

親分はキリキリと齒を鳴らした。

彼女の肩を押して背中中の杭へ押しつけた。

彼女は泣きべそをやめると、勝気な性分を丸出しにして可愛い眼元を吊り上げた。

治郎は、日頃の友達なので力まかせにはできず、猫がねずみをいたぶるように、彼女を責めた。必死に身悶えるのも構わずに。

——波岡治郎が、その人生において、初めて、妖しい媚薬にも似た、不思議な欲びを感じ

じ芽生えさせたのは、まさに、この時であったと思える。

縄目の痛みに、必死にこらえるこの時の少女の様子が、以来脳裏にやきついて離れなかった。その時よりも日の経つにつれ、子供心にもそれがだんだんと強くなって行くのだ。

一ト月もしてから、二人はやっと仲直りをした。——その日、

「いやよ。あの時だって、あとがみみずばれしちゃって痛くてたまらなかったわ」

と、ぐずつく彼女を、人の来ぬ野原の、土管の中で三拝九拝、散々に口説き落して、とうとうこの一ト月、夢にまで見た（縛り）を果たしたのであった。

それが、幼稚な、単なる後手縛りだったとはいえ、その時の興奮と言うか、高まりと言うか、眼頭に火花が交錯する思いがしたこと覚えてる。

一回が数回となり、やがて彼女の母親の見つけるところとなって、治郎は母に、電線コードで荷物の如く縛り上げられ、押し入れへ放り込まれたが、彼は泣きべそもかかず、まして後悔すらなかったのである。

いや、自分が縛られたことによって、以来成長していても、この妖しい感覚の渦から

逃れ去ることが出来なかったのだった。

そのことへの探求心は膨脹し、そうして根深く沈滞していったのだ。

ふとした動機で、この会へ身を投じ、それと同時に通称を反町伸治と名乗って、間もなく彼性来の、その抜群のアイデアを駆けめぐらし、それまでの会長が脳溢血で亡くなるや今や斯界のピカ一存在を表面に押し出し、いつのまにやら会長の椅子に位置していたのであった。

会の客達にとっては、彼の存在は、自分達の感覚を彩る『絵筆』となっていた。

半年前より、彼は数日かけて、美しく若い女性を、大金を積むことによって誘致し、その夜の『演じ物』に登場させた。

一年程前から暖めていたプランである。実現にあつて支払われた彼の努力は大きかった。

だが、彼が、いつのまにやら（この事）に没入している自分の囲りに、蝙蝠の如く散乱する『金』と言うものに気がついた時、そのときどれ程己れが惨めに思えたことであろうか。嫌悪したことであろうか。

これはただの生活手段ではない。  
（暴利だ）

はつきりした意識を抱いた時、彼は奈落に突きおとされた思いがしたのだった。

しかし、彼の引退は、客が許さなかった。実力者の彼を失うことは、自分の夢を断ちきられるかの様に思ったのだ。

伸治は、いつしか自分を嫌悪することを、忘れていった。

そうして、その表情も心も、無感動なのが常のようになり果てていたのである。

このようになってから、手掛けたのが、今度の会であつた。

彼は、彼自身に、負けたのである。

そのかわり、ビジネスとしての腕の回転はフルに発揮され始めた。

第二回の今夜には、斯道に熱心な外人客まで増えて——、成功したのである。

だが。

このように成功した会だと言うのに。

今夜の治郎、いや、伸治はいつもと違っていた。

そのつめたいはずの胸に、内部から、異常にゆさぶるものを感じて、それが、際限のない動揺となつて、今まですっぱり被っていた『無感動』のマスクが、いま微妙な亀裂を生じていたのである。

彼は狼狽した。

そうして、永い間忘れていた熱いものが、五体中を浮遊しはじめるのを知ると、その原因を、その意味を、懸命にさがした。

（——あ、あの女だ。あの、瞳が原因だ——）

（確か、年は、二十二とか言った）

（だから！、だから、あの彼女ではないはずだ）

（——が、あの瞳は、まさしく、あの彼女の瞳のものだ。これは——）

何度となく、くり返し、——怖れた。

もしも、彼女であつたとしたら、その責任は——このおれにあるのだ。

いくら大金を約束されたとは言つても、このような会の趣旨を聞いて、すぐにウンと承諾する娘が、そうさらに居るはずはない。

あの、小さい頃の、あの遊びが影響して——

！。

（いや、そんなはずはない。彼女であるはずはないんだ）

伸治は、その部屋の前まで来たとき、ふと手を震わせながら——黒眼鏡をかけたのであつた。



## 揺 の 章

反町伸治の、最後の説明が始った。

「この会の、お客様は、すべて紳士であります。特に厳選された方ばかりであることを保証いたします。間もなく、それは貴女方によって実証されると思います。」

さて、——これまでのことは、言わば、貴女達にとっては『花道』を通っただけのこと、これからが、いよいよ本舞台に掛かると言ったところなのです。

今夜の『演技者』である貴女方に、私は要求します。——と言っても、別に変ったことでもありません。

このお邸へ着いてから今までの間に、体得されたことで、充分この会の目的はお察し願えたとは思いますが、今からなお、これをよく反芻して、貴女方の自由な『演技』を、勢いっぱいの工夫で、こなしてほしいと言うことなのです。

これ以上の細部に至ることは、申しあげません。

なぜなら、必要以上に詳しい指示は、かえって、貴女達の（新鮮な）ムードをなくして

しまう恐れがあるからです。

よろしいですね。

それから、この本舞台のことですが、背景が、全部で十景あります。

よく聞いてくださいよ。

つまり、十の部屋があるわけですね。この部屋に、次の様な場面が設置されています。

まず、鏡の間。

それからお仕置の場。

折檻の森。

テーブルと花。

荷造り発送の場。

深夜のロッカー。

陳列窓。

蛇と跳躍。

網と女。

そうして、最後は——。

これは、説明はしますが、希望者のみの場合だけ入室します。もし、この場面を希望しない人は、一向に構いませんから、今読みあげた、部屋を一巡して九番目の、「網と女」の場できりあげてこの部屋へ帰ってきてください。一人一部屋には、五分から十分の間が規則となっております。ところがその十番目の部屋だけは二十分以下と言うことになって

居ります。

さて、この十番目の場面ですが、題して、  
△地獄の水車責め▽。——いえ、題は大層ですが大した事ではありません。

つまり、全裸になっていただいて、水に打たれると言うことです。他の場面に比べるとある程度の苦痛がありますが、だがそれでも構わないと言う人は、一応そこで縄を解きますから、準備していただいて、また、縛られてください。

これの希望者で、もし一景目から裸体でもよいと言う人が居たら、申し出てください。もちろん、これ等の人の報酬は特別として一、八倍額になります。その場面のみの方は一、四倍。一から九景までの人は、契約通りです。——わかりますね。

それから——部屋ごとには、一人ずつのお客様が貴女達を、待っております。

適当な照明がされて、カメラが据えられてあります。これで貴女方の『演技』が撮影されるわけです。さっきの五分から十分と言うのは、これに使用される時間のことです。

中には全然、シャッターを押さない方もいるでしょうし、何回となく写される方もあると思いますが、短時間のことで、充分お

お客様の期待に添えてあげてください。

各部屋は、防音となっています。素直に、呻きや悲鳴をあげても結構です。特に表情に気をつけてください。

縄も、ここへ来るまでよりも、もっともつと、きつく縛ります。もちろん、あざも残るでしょう。

『演技』の終わった人は、この部屋へ帰って来て、この男に縄を解いて貰って、身支度して待っていてください。

——質問はありませんか？

なかったら、今から始めます。」

そのとき、

「あの、ちょっと」

和服姿のあや子が、迷ったような表情で、

端の方から言った。

「——今の、カメラのお話しなんですけど」

伶俐な伸治は、皆まで言わず、

「大丈夫です。絶対、他にながれ出ることはありません。——初めに言った通り、お客様は紳士であるのです。だから、この会の規則には絶対服従をなさいます。貴女がここまで会を信じて来られたように、これから信じても貰うより他ありません。」

万が一、いや百万が一、もしこの会の規則

を破られた方は——お客様はそれを充分、知っておられますから。

信じて、くれますね？」

「——はい」

ジョルは、黒眼鏡の奥の伸治の眼が、チラリと自分に走ったように思った。

「では、始めます！」

彼は、例の活き活きとした眼つきに一変すると、ロープをかんた。

そうして、待たなしで、身近かにいた清美の手首をつかんで背中へねじあげて、今度は慎重に、縛りはじめる。

すると、彼女の隣りにいた洋子が、何も言わずに、そのミルク色のアンサンブルを、脱ぎすて始めた。

彼女達に、入り組んだ動揺が起った。

だが、洋子にならって、着物を脱ぐものはさすがにいない。色こもごもの視線が、平然とした顔つきの洋子に注がれる。

——複雑な、幾何学的なロープの交叉で、清美は縛りあげられた。

出来上った品物を点検するように見た伸治はドアのほうへ行くと、たたいて合図した。ドアが開いて細長い顔の男が首を出した。伸治が小声で何かを命じる。

蒼白となった清美は、その男に曳かれて、部屋を出て行った。

ジョルは、別に着ている者と変りない顔つきで、裸の洋子を取り扱っている。

七、八分して、この洋子も引き立てられて行った。

十分して、またひとり。

——そうして、またひとり。

『演技者』の出番は、こうしてスムーズに進行していった。

やがて。

この部屋に残ったのは、すでに縛られ終わって、ぐったりとソファの端にもたれて、次の出番を待っているゆかりと、幾分苦しげに前かがみとなっているさゆりと——伸治の三人だけとなってしまった。

伸治は、眼鏡の間に人差し指をあてて、凝っと立っている。

二人はソファの端へ離れ合って、身動きもしない。どちらも眼を閉じている。

伸治は、ふと、思いきったように、その人のところへ近づいて行った。

「——」

その人が、ゆっくりと、彼の足許を見た。

「あんたは——」



そこで少し、絶句して、

「その、今度の募集で——交渉の折り、一度で承知なさったんですね」

言って、穴のあく程見つめる。

不意に話しかけられて、その人は唇をひらきかけて、——ふと自分の浅ましい姿を恥じたのであろうか、そのまま黙って俯向いてしまった。

伸治は、ふうっと大きく溜息をついて、視線を宙へむけると、その人の前を、のそのそと往復しはじめた。

「ちょっと、昔のことを聞きたいのだが、いかな？——」

びっくりしたように、その人は彼を見上げた。

他のもう一人は、何も聞えていない風に、依然眼を閉じて動かない。

「それにしても、まず、自分の方から言わなければいけないな。——そうだ。これを言ったら、もしか、何かを想い出して貰えるかも知れない」

意味がわからず、その人は顔を伏せた。

「それは、じろう……治郎と言う名前なんだが——」

効果を確かめるように、足を停めて、じつと見る。

と。その人の肩先がびくりとして、やがてそろそろと瞳をいっばいに見ひらいた顔が、あげられた。

「この名が、あんたの過去の記憶の中に、ありましたか——」

その人は伸治の顔を、瞬きもせずに見つめた。明きらかに、動揺の色が、あった。

「——め、眼鏡を、とって」  
初めて、彼に言った。

「や、やっぱりそうだったのか！祐、祐子、いや祐子ちゃんなんだな」

「治郎ちゃんね！」  
みるみるその人は頬を紅潮させた。蒼白かったその頬を。

伸治、いや治郎は、微笑んだ。それはたとえ唇のあたりだけだったとはいえ、人間らしい感情の色を含ませていた。自然に、手が眼鏡にかかる。何か張りつめたものが、二人の間にいっばいに満ちた。

その時。

ドアが開いて、至極のんびりしたジョルの顔がのぞきこんだ。

「はい、ひとり帰って来ますウ。次の人、来

てくださーい」

治郎は、瞬間に伸治の顔になって、眼を開けたもう一人の方へ、顎をしゃくった。

ジョルが手を貸して、彼女を連れて行く。

治郎は、そっと眼鏡はずした。

さっきこの部屋の前に立ったときに心配した、たじろぎも、弱さもなく、彼の瞳は、まっすぐにその人を見た。

「——」

(何から、何を話せばいいのだ)

遠く十二歳の時に、彼の父の転勤が因で、それっきり別れてしまったこの人、見事に成長した祐子に——。

二人は、同時に、共に違った意味の熱い吐息をついた。

治郎は、つと視線をそらすと、窓辺に寄りカーテンをはねた。

——遙か、美しくきらめいていた街のあかりも、すでに消えようとしている。

この邸の廻りを徘徊する、班員達の照らす電灯が、時々小さな光を放った。

彼は、それを、ぼんやりと眺めていた。

(完)

## ある浣腸マニヤの手記

## 見果てぬ夢

菅野弘

としちゃんと呼ぶと、私と同年配の様ですが、彼は父の郷里の山陰の田舎から来た遠縁の娘さんで、私が小学校の上級生の頃、としちゃんはすでに女学校を出てすぐ家事見習と花嫁修業のため上京し私の家の二階に寄寓していました。

私は当時、もうそろそろ中学校の入学試験の準備をしなければならぬ頃でしたが、体が弱い方で学校はよく休み勉強の補習や宿題等は、専ら彼女の受持になっていました。

二階二間の内、私の勉強部屋の四帖半の襖を距てた六帖でとしちゃんは寝起きしていました。田舎訛を気にしてあまり人前に出た

り外出するのを嫌い、何時もこの部屋で婦人雑誌や小説を読み耽っていました。彼女は母がいくら勧めても都会風な髪型や断髪をしないで長い髪を無造作に引き結んで束ね、何時も和服をきちんと着ていたのが、近所の同年配の娘さん達と違った印象を受けました。当時割合早熟だった私は、そうした彼女を子供心にも非常に美しく思い秘かに憧れていたようでした。

毎日、勉強を見て貰うのを口実に彼女の部屋に入り浸っていました。傍に寄ると感じる化粧クリームと彼女の体臭の混った甘酸っぱい香がたまらなく懐しく思われました。

冬、炬燵に入っている時など、小柄な私は時々甘えて彼女の柔かい膝の上に腰かけたり或る時は悪戯にとしちゃんの内懐に手を入れたりしましたが彼女は別に怒りもせず、反って私の手を一旦引き出し今度は直に乳房に触れる様に深く押し込ませたりしました。

こんなことがあってから、勉強中に母が持ってきてくれる紅茶を口移しで飲ませてくれたり、時々ぎゅっときつく抱き締めてくれたりすることがあり、初めての経験から幼い気持ちの中で益々彼女に対する慕情を募らせてきました。しかし芽生え始めた異性に対する関心を目醒めさせ、としちゃんが、私の忘れら



れない最初の女性になった動機は、その後の事でした。

何時も丈夫なとしちゃんが、如何な病気が知りませんが、体の工合が悪く二三日床につきました。母は私にとしちゃんは病気だからお部屋に行っていけませんと云いつけて、かかりつけのお医者さんを呼びました。夜になって先生が二階に上って来ると、彼女の寝ている部屋に這入りました。私は隣に行けない淋しさから寝つけないでいましたが、こちらの部屋は電灯を消しているのを幸に、境の襖を極く細目にあけて、そこから隣室を熱心に覗きました。としちゃんは青い朝顔の模様の浴衣に赤い細帯を締めて床の上に起き上って座り、先生は彼女の胸をあけて聴診器を当てていました。今度は彼女を横にして帯を解き前を払げると先生は手で彼女のお腹を押し乍ら何か話していましたが、としちゃんは頭を振ったり頷いたりすると先生は何か云い残して帰って行きました。

彼女の部屋の灯りが消えないので、何か心配になり眠れないでいますと、三十分程たって今度は私もよく知つてゐる先生のところの看護婦さんが上って来て、としちゃんの部屋に入りました。又好奇心から襖の隙間に目を

当てて覗いて見ますと、看護婦さんは彼女の枕元に座って何か云いきかせていましたが、としちゃんが頷くと看護婦さんは彼女の掛蒲団を裾の方におろし、浴衣の裾に手をかけ、お尻を腰の上位まで捲り上げパンツを膝まで引き下げて、お尻を丸出しにして仕舞いました。彼女はむこうを向いて浴衣の袖で顔を仰えている様でしたが、耳が真赤になっているのが判りました。

私は思ひもかけない光景に胸を躍らせて見つめていみると、更に驚いたことには注射嫌いの私が思わずぞっとする様な今まで見たことのない大きな注射器をとり出すと薬を中一杯吸い上げ、上を向けて電灯にかざしていました。よく見ると注射針のところが針でなく先がふくらんだ鉛筆位のガラスの管が続いていました。

私ははっとして猶も一心に見ていみると、看護婦さんは太い管をゆっくり押しして中の薬を皆注ぎ込んで仕舞うと、管を抜き脱脂綿で手早く抑えました。としちゃんは枕に顔をつけて、大きく肩で息をしていましたが、しばらくたって顔を上げ一言二言看護婦さんと話すと起き上って急いで階下の洗面所に降りて行きました。

私は何時迄も胸がどきどきして、仲々眠れませんでした。それから間もなくとしちゃんも治って元気になりましたが、数日たった或る晩、夜中に私がふと目を覚すと隣に灯がついていしますので、そっと覗いてみますと、どうでしょう。としちゃんは蒲団の上で体を折り曲げ、片手で浣腸器の管を押しているところでした。薬が全部這入って仕舞うと、しばらくじっとしていましたが、やがて起き上ると浣腸器を持って階下に降りて行きました。今度上ってくると、そのガラスの筒を丁寧に拭き、大切そうに筆筒に藏って灯を消してしまいました。私は何か今の奇妙な行動が気になって仕方がありませんでした。

数日後、彼女が、珍らしく外出したのを幸い、としちゃんの部屋に入り、そっと筆筒の抽出をあけると隅の方にガーゼに包んだ例の浣腸器が藏ってありました。取り出して見ますと青いガラスの筒は中の筒を動かすと空気が出入し看護婦さんや彼女が使っていた場面を思い出しました。

しばらくその道具を弄んでいますと急に後の襖があき彼女が帰って来しました。私は周章でそれを隠そうとしましたが、もう間に合いません。部屋の中央にそれを持ったまま顔を

赤らめて立っていますと、としちゃんは驚いたような顔をして「弘ちゃん何しているの、あつ、それ何するものか知っているの？」とたたみかけて聞くと私を抱く様に、その場に座らせ、もう一度「何か知っているの？」と聞きます。私が頷きますと「何時、なぜ」と詰問するので「見たよ。看護婦さんがしているのを」と答えますと、彼女はぱっと顔を赤らめ「悪い児ね」と云って私を何時かの様に抱き締めると小さな声で「弘ちゃんにもして上げましょうか？」と聞くので周章で「嫌だ！」と云うと、又私の耳許で「じやあ姉さんにしてね」と囁いて押入れから大きな広口瓶を取り出すと中の薬を浣腸器に一杯吸上げ横に置き、自分は座蒲団の上に膝をつき四つ這いになりました。

その後も、何度か夜中に起きて同じことをさせられましたが、これがお腹の中を綺麗にする為に行う浣腸というものだということもわかりました。丁度その頃、彼女の郷里の方で縁談があり、帰ることになりました。

その時の私のショックは、大変なものでした。恥かしいので、ただ黙っていますと、その晩又夜中に私はとしちゃんにゆり起され、彼女に浣腸をさせられましたが、それが済ん

で彼女が階下の手洗から上ってくるまで、私はぼんやり、彼女の寝床の傍に坐っていました。上って来たとしちゃんは、私を強く抱き締めると自分の寝床の中に引き入れました。その数日後、としちゃんはスーツケースを一つ提げて郷里に帰って行きました。幼い私の心の中は急に空虚になった様な感じで、勉強も手につかず間もなく受験した府立中学は見事落ちて仕舞い、私立の二流校に入学しました。私が性的な悪癖を覚えたのも、その頃でした。

半年程たって、突然としちゃんは結婚した相手の男性と上京し私の家にも挨拶に来ましたが、田舎の農協に勤めているという肩幅の広い青年に私は初めて嫉妬と云った感情を体験させられました。見違える程綺麗なお化粧をしたとしちゃんを見ると、何度か眺めた彼女の白いお尻を想い出し、胸が痛むようでした。

このとしちゃんとの事以来、二度目に体験した忘れられない出来事は、大分たってからのことで、中学卒業も近いニキビ盛りの頃、兄嫁が腎臓を悪くして入院したので病院に見舞に行った時のことです。

街の小さな総合病院で兄嫁は二人部屋に入

っていました。兄嫁の隣のベッドには顔色の蒼白い中年の美しい婦人が寝ていました。兄嫁は今日は又精密検査を受ける日で体の中に色々な機械や薬を入れられて随分恥かしい痛い想いをさせられるのだと憂鬱な顔をしていました。やがて看護婦が迎えに来て一緒に部屋を出て行きました。

私は手持無沙汰で坐ったまま雑誌を眺めて兄嫁の帰ってくるのを待っていました。ドアがあいて別の看護婦が何か薬の一杯入った大きなガラスの容器に長いゴム管のついたものをさげて入って来ました。それを隣のベッドの側の壁に高く吊り兄嫁のベッドとの中間のカーテンを引き、こちらから見えなくすると、その患者さんと何か低い声で話しておりました。しばらくすると静かになり、かすかに衣摺れの音と軽くベッドが軋む音が聞えるだけで何かが始まった様な気配がカーテンを透して感じられました。

私は好奇心も手伝って椅子から立って窓際により見るともなく壁とカーテンの隙間から中を覗くと、思わずはっと息を詰めました。隣の美しい婦人は両脚を立てて開きお尻の下に黒いゴム布を敷き看護婦は先程壁際に吊ったガラスの容器から続いた長いゴム管を患者



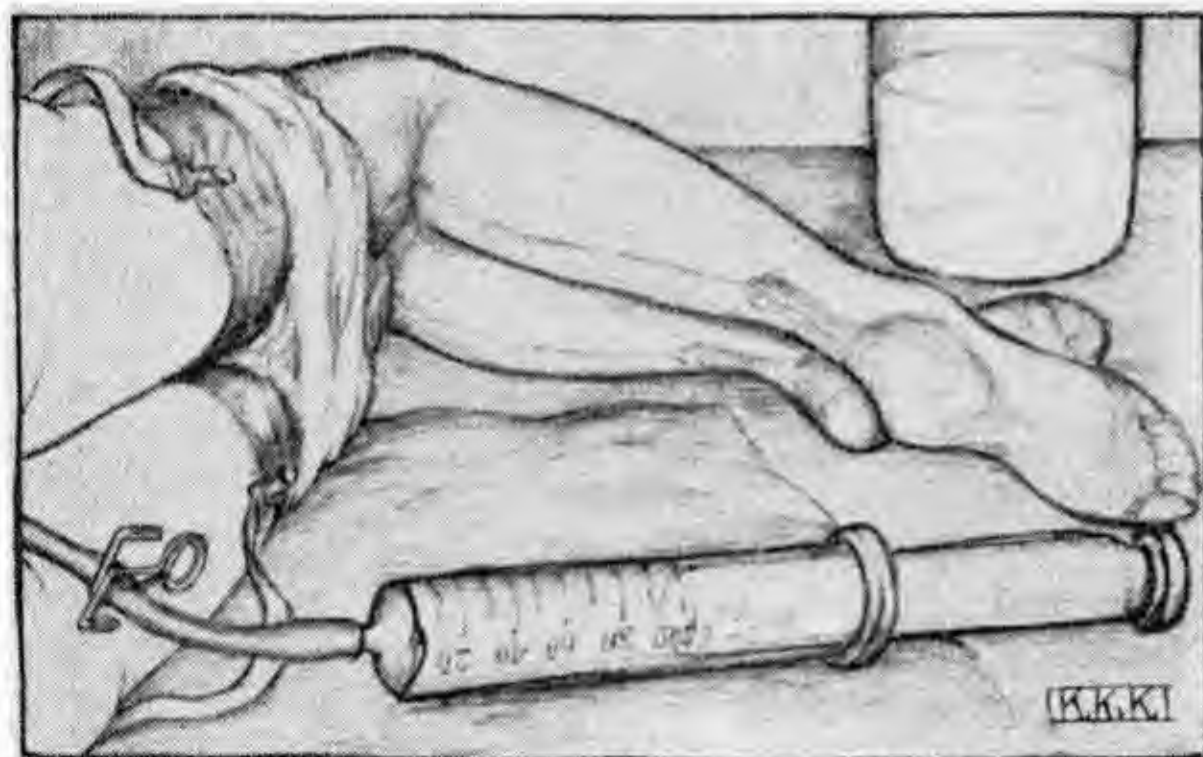
さんのお尻に挿し込んでいるところでした。

その婦人は美しい顔に眉を寄せて頬を僅かに紅潮させ、口を半ば開いて上を向いています。看護婦は私の方に背を向けているのを幸いしばらく覗き続けていますと看護婦はゴムの止め金を外し薬の注入を始めました。驚いたことには一升瓶位もある大きな容器に半分以上も入っている液が、見る見るうちに減って行きました。

患者さんが苦しそうに何か云うと、看護婦が振り返りベッドの下から便器を取り出そうとしましたので周章で目を離しました。その後、隣にいる私を意識して、こちらを随分気にしていたでしょうが、静かな病室なのであの美しい弱々しい感じの婦人とは思えない様な烈しい排泄の音と微かに呻く様な荒い息使いがカーテンを透し手にとる様に、はっきり聞えてきました。

やがて看護婦はカーテンを元通り引き明けて両手に浣腸器と便器を持って出て行きました。その婦人は何もなかった様に前の通り蒲団をかけ壁の方に顔を向けて横になっていた。幸い視線は合いませんでしたが、余程興奮したらしく耳まで赤くしていました。

本人は知る由もありませんが、私は大変な



場面を覗き見してしまった手前、何かそこにいるのが悪い様な気がして部屋を出ようとする。丁度兄嫁が部屋に入ってきて来ました。

思いがけなく幼い日のとしちゃんとの行為

以来の大きなショックでした。短い時間でしたが、この光景は強く私の脳裡に焼付けられ其後私は異常に浣腸に強い興味をもつ様になった一つの大きな動機になりました。

その後の私は平凡に私立大学を出ると親の光で一応名の通った商事会社に入り悪所通いの味も覚え、のんびりプレーボーイ振りを発揮していますが、幼い頃、としちゃんから受けた強い刺激とふと病院で垣間見た光景からの衝動が忘れられず、ありきたりの行為だけでは満足出来なくなり、次々に交渉を持つ様になった花柳界や酒場の女達から「随分交っているのねえ」など云われて嫌われ乍らも、車のトランクの隅に例の道具を隠して持ち歩き嫌がる女に無理に浣腸し白いお尻の饗宴に酔い痴れるようになりました。

関係が出来た女でも最初にこの話を持ちかけると極端に恥しがったり何か変わった異常行為だと思ひ込み仲々応じませんが、無理に口説き落して強引に浣腸をしても、この女性の羞恥心を無視した異様な行為に一度で懲りて寄りつかなくなつて仕舞った女もいます。

この異常な行為を試みた何人かの女性の中には、無理に繰返し浣腸されている内に浣腸の醍醐味がわかつてくると口にこそ出しませ

んが、秘かに私に浣腸されることを期待する様になる者もありました。一応は恥らしいの色を見せますが、結局は進んでポーズをとり、私の手で浣腸されるのを待つ迄になった女性も幾らかいました。

中でも驚く程熱心なマニヤになって仕舞った一人に、割合若い写真のモデルでアルバイトにバー勤めをしているグラマーな娘がいました。その娘は最初は浣腸されることを極端に恥しがり毛嫌いしていたのに、何時とはなく慣れるに従って可成り積極的になった頃、私が彼女のアパートを訪れ例の通り充分浣腸して帰る時、恥しそうに云い出しそびれていました。がドアのところで思い切って私の耳許で「あなたが来てくれない時、私独りで使える浣腸器を買って下さらない」と甘え声でささやきました。その次に訪れる時、途中でエネマシリンジとネラトン氏管を買って持って行ってやりました。

何時も使う浣腸器と形が全然違うので気味悪がっていました。幸い丁度風呂が沸いていましたので、早速彼女をトイレ兼用の小さいタイル張りの浴室に連れ込み、暖かい石鹸水を注入し乍らゴム球の握り方で液量も圧力も自由に調節出来る手加減を教えてやると如

何にも満足そうに自分でもゴム球を押していました。可成り注入したところで一度排泄させた後、今度は初めから自分でやらせて見ました。

その後、数回訪問しましたが、何時もトイレの隅に大切そうにかけてあったところを見るとずっと愛用している様でした。それでも私が来ると私の手で浣腸されることに別の心理的な刺激を感じるらしく、どんな器具の使用でも又どんな恰好でも新鮮な羞らひを見せ乍らも必ず私の云う通りになり、自分も満足しているようでした。

この娘とは、こんな奇妙な関係が彼女が平凡な結婚をするまで続きましたが、こんな例は極めて稀でその後も新しい女と交渉を持つ度に、そっと道具を部屋に持ち込み新鮮な刺激を求めて強引に浣腸を行いひとりで楽しんでおりますが、何か昔の幼い日のとしちゃんの時の様な感激は味わえず物足りなく満足出来ない心境です。

考えて見ますと、確かに異常な趣味とは思いますが、又考え様によつては、こんな強烈な刺激を体験しない人達を気の毒に思うこともあります。一方長い間、随分苦心して、この趣味に関連のある文献雑誌等のスクラップ

や、絵画写真の類のコレクションをして来ましたが、これはと思う様なものは仲々入手出来ません。

一度友人が海外で手に入れたブルーフィルムの中に黒人の下僕が白人の婦人に浣腸している内に次第に欲情し行為に及ぶという珍らしい筋ののを見ました。又ヨーロッパの古い版画の宮廷風俗の中に豪華な天蓋から綴帳の下った寝台の上で若い貴婦人が大きなお尻を出して横わり侍女が後から古風な浣腸器を挿し込もうとしている珍品を見たことがあります。外国では古くから案外この同好者がいるらしくドイツでは、この場面の写真や絵画が随分あるとこのことを聞きましたので、外遊する悪友にこの方面の珍らしい資料の入手を依頼しましたが、得意になって持って帰って来たのは女体の後方を犯す秘画や女性自身の異物挿入や、ホモのグロテスクなものばかりで、中には二人の男が一人の女性の前後を同時に犯している様な、変ったものもありましたが、遂に期待した浣腸そのものずばりの写真、絵画は手に入りませんでした。

読者の同好者の方々の中で珍らしいコレクションをお持ちの方と私の手持のものと交換出来る機会を持ち度いものと思っています。



## アルバム／美しき縛しめ／第九集

女性刑罰拷問特集／「西洋篇」 略号／美9

## 革具に拘束される女

一部 一〇〇〇円 (千共)

むんむんする革の臭気にもせかえった革の緊縛女体集  
 「革具に拘束された美女の媚態七十二葉の豪華版」

「女性刑罰拷問特集」日本篇「略号美5」の姉妹篇として、待望の「革具に拘束される女」特集のグラフィック印刷写真集を、ここに完成いたしました。真白で豊かな肉づきの女体が、黒光りのする革具、或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられたさまを七十二枚の大小の鮮明なるフォトによって、とつくりとごらんに入れます。

## 内容

○T型に磔られた女正面像（くさり、尾錠付革具使用）／三葉  
 ○皮張椅子に拘束された女（手枷革具くさり付、首、胸、胴、脚、脛、足首固定革具使用）／二葉  
 ○革製猿ぐつわを噛まされ全身ガシガシに緊縛された女性（全身縄緊縛、革箱口具使用）／二葉  
 ○皮張椅子に固定仰臥させられた女体のアップ／三葉  
 ○黒覆面（革製）並に黒革褌（チャック付）着用、両前手錠及び黒革褌単独着用の女／四葉

○黒革猿ぐつわ、首絞め股間括り両手、膝、足首拘束／五葉  
 ○電気椅子に固定された女死刑囚／四葉  
 ○口腔強制検査／三葉  
 ○女死刑囚の生体実験／一葉  
 ○黒革覆面貞操帯着用にて前手錠立姿の女／一葉  
 ○並に同じ姿にての各種ポーズをとる女／五葉  
 ○革製猿ぐつわ、首輪、股間並に膝固定立柱括り前手錠／二葉  
 ○全身革具に固定される女の正面背面、仰臥姿勢各種／十二葉  
 ○貞操帯着用にて黒革製長椅子に仰臥固定される女の股間／四葉  
 ○牛革製箱口具、股絞め、股間固定絞全身拘束に呻く女／五葉  
 ○首枷、両手枷、両足枷を鎖で繋かれた女の全身裸像／一葉  
 ○牛革具に拘束された女性の正面背面、側面、各種姿勢／七葉  
 ○首輪、両手枷、両足枷に鎖をつけられて引回される女／三葉  
 ○貞操帯を着けた女／二葉  
 モデル—美木乃々子—大塚 啓子

## 限定版グラビア印刷M結集版アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円（送共） 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真集

## 内容

○絹川女王様の足台になって奉仕しているマゾ男（扉一頁一葉）  
 ○山原女王様に縛られ人間馬にされてムチ打たれる男（四葉）  
 ○大塚女王様に後手高小手に縛られ浣腸を施される男（四葉）  
 ○山原女王様の足の指に挟んだお菓子を食せられる男（四葉）  
 ○大塚女王様の使用されたチリ紙を足の指に挟んで与えられ、それをムシヤムシヤ食べる男（六葉）  
 ○山原女王様を背中にお乗せして乗り潰され喘いでいる男（四葉）  
 ○大塚女王様の激しいムチ打ちに歓喜の身をふるわせる男（四葉）  
 ○山原女王様の手によって次第に後手に縛られてゆく男（八葉）  
 ○絹川女王様のハイヒールで手錠の手首を踏まれる男（三葉）  
 ○山原女王様の按摩をしながら足の指をしゃぶる男（三葉）  
 ○縛られて身動き出来ぬ身を山原女王様の手で鼻責め（一葉）  
 ○サジスチン宮井美佐子の乗馬スタイルとムチ打ちポーズ（八葉）  
 ○山原女王様と鈴木晃子女王様に縛られムチ打たれる男（三葉）  
 ○鈴木晃子女王様の馬にされ裸の尻をムチ打たれる男（一葉）  
 ○絹川女王様のハイヒールで顔を蹴弄されている男（三葉）  
 ○絹川女王様からローソク責めにされている男（二葉）  
 ○大塚女王様の足の踵で鼻責めにあう男（一葉）  
 ○お化粧をする絹川女王様のスツールになって奉仕する男（一葉）  
 ○山原女王様の激しいムチ打ちにのびてしまった男（一葉）  
 ○絹川女王様の真白い足の裏で顔をびったり踏まれた男（一葉）  
 ○絹川女王様のはいたスリッパの先をくわえる犬男（一葉）  
 ○絹川女王様の脱いだばかりのパンティをかぶせられた男（一葉）  
 ○絹川女王様に麻縄で後手高小手に縛り上げられる男（一葉）  
 ○大塚女王様の足の指を舐めさせられていた男（二葉）  
 ○絹川女王様の足の指をおいしうに舐めている犬男（一葉）  
 ○山原女王様の足の指を無理矢理舐めさせられている犬男（一葉）  
 ○後手に縛りあげられ大塚女王様に浣腸させられている男（二葉）

美女の切腹と緊縛と……………

“ 文<sup>ふみ</sup> 代<sup>よ</sup> 嬢<sup>じょう</sup> 夢<sup>む</sup> 魔<sup>ま</sup> ”

麒 麟 児 久

一、美女と画家

屋根裏の部屋で、画家はパイプをくゆらせながら夢想にふけていた。彼は、ある腸<sup>ろう</sup>たけた美人のことを想っている。窓の外は雨だった。

ある日、画家は古本屋で買った雑誌の中から、色白で面長なその美人を発見した。雑誌のなかには、誰が置き忘れたのか、二葉の写真が挟まれてあった。二葉ともはだかになった女切腹の無惨絵巻だった。

何んとも異様な、妖しい血の匂いを嗅ぐよ

な写真だった。

身に拖うものは、ふっくらとした胸乳までたれた長い黒髪と、小さい白布のふんどしだけだった。キユウと艶めかしく臍窩<sup>へしわ</sup>がくぼんだふくよかな下腹部をしたたかに切りひらいて、ねっとり血汐をふき出している。南画風な掛軸のある床の間の前で――。

一枚は膝立ちの姿勢をして、眼をカッと見開いた苦悶の表情をしている。もう一枚は膝がくずれて、悶絶寸前の軀を床柱にもたせかけている。長い乱れ髪のひとつさを花びらのような唇にくわえて、苦しみもだえ、左手は髪のかきむしっているが、顔の表情はう

っとり睨をとして、恍惚と酔い痴れているかのようなだ。二枚とも白紙でくるんだ本物の切腹刃がふかぶかと突き刺っていた。目鼻立ちもあでやかな、顔も身体もふるいつきたくなるような美人だけに、画家は模擬写真と知りながらも、こんな若くていい女が勿体ないことをすると、胸をかきむしられるような哀惜の念を覚えた。

何より、世にも美しい世にもたおやかな女の艶姿が、画家の審美感に触れた。画家には自虐の昂奮も陶酔もよく判らなかつたが、頬につける紅白粉も美しいひとだけを美しくするよう、女のハラキリも美しい女でなけれ



ばならないと思った。

その日から、画家は、その二葉の写真と一緒に暮らした。

じつとながめていると、二枚の写真は体じゅうに甘美な秘密をひそめて、妖しいさまざまな歓楽を画家に囁きかけてくる。

臆たけて阿娜っぱい、男をそそのかす顔。

人魚のようにしなやかな肢体には、胸にも腹にもお臀にも、むせびかえるような色情の匂



いがした。全体が何んと罪つくりで、因果な美しさであろうか。画家はその軀全体の美しい調和が、あまりにも見事なので、何に魅入らされたか、判らなかつた。

鏡の中で恍惚と見蕩れる美女——それこそ彼女にふさわしいと画家は思った。

画家は、美女のなやみの絵すがたを空想した。彼女は鏡の中の乳房に口づけする処女になり、未知の誘惑に両頬を薔薇色にあからめ

る処女の孤独な遊戯図になり、寝室で悶々として愛猫を寵愛する貴婦人にもなった。

しかし彼女の肉体の艶美もいつか鏡の中で色褪せるかと思うと、画家は美人のために泣きかかった。子を生んで乳房がしなび、なめらかにひき緊った腹に

醜い皺がよるかと思うと、いたたまれない気持ちになった。

画家は切腹の写真を眺めた。この奇異で残酷な自殺方法——それにしても何んと妖しくも美しい死顔。何んと恍惚とした死のポーズであろうか。

画家は、美人を讃仰するあまり、刹那的な気持ちに、耽美的な感情におそわれた。

画家は膝の上にスケッチ・ブックをひろげて、美人の裸体画をえがいた。湯浴みした麗人が等身大の鏡の前に立っていた。艶々とした濡羽色の洗い髪が乳房にからみつき、画家の絵筆は、全身をなやましい薄もも色にぬつた。

——裸体画の顔も身体も、まぎれもない絹川文代嬢のものだった。画家の幻想は絵筆にたくして、果しなくひろがっていく……。

## 二、鏡と文代嬢

全身から立昇る湯気が、鏡をくもらせた。赤いマニキヤをした指が、鏡をなげた。ひとなげするたびに、文代嬢は鏡の中で裸になっ

ていく。  
文代嬢は、鏡にうっとり微笑みかけた。

首をひとひねりして、あごをつきあげ、ちらばった髪をかきあげ、背中ですとまとめた拍子に、体がねじれて自分でもハッとするほどなやましいポーズになった。横向きになった体には、胸から脇腹にかけて、淫らなほどなまなましい曲線が書き出されて、顔をおおいたくなるほどだった。

文代嬢はあるファンレターを思い出した。

……あなたの白ふんどし姿の切腹写真に、見えてはならないものが、ほんのちよっぴり覗いていました。それは真っ白なお腹の膚に目に泌みるようでした。おかげでぼくは、その日一晩眠られず、その次の日も、また次の日も睨にちらついて、ぼくは何度も自分をけがしました……。

鏡の顔が妖しく笑った。ゆがんだ両頬は慙笑とも、好奇心のひきつりとも見えた。

文代嬢は男の孤独な行為を想像した。ひとりで顔が赤くなった。文代嬢の知るとのポーズとも似ていなかったが、そこまで男を誘発した自分の魅力を想うと、恍惚とした優越感を覚えないわけにはいかなかった。

限きりない自己愛の陶醉に文代嬢はつつまされた。同時に、未知な男の行為が、彼女自身をも煽情した。文代嬢はせつなげに息をはず

ませて、両手は胸を抱きしめていた。

もう真夜中に近かった。家の中はしんと寝静まりかえっている。誰も居ない密室であることが、文代嬢を大胆にしたのか。それとも自己愛の陶醉が彼女を錯乱させたのか。文代嬢は、想像もできないようなみだらで、はしたない言動をした。

文代嬢は両手でなぜたりもんだりしていた乳房を前にさし出すようなポーズをして、鏡に向って話し掛けた。

「文代はひとりぼっち、孤独なのよ。文代のお乳は殿方を愛してさしあげるほどグラマーではないけれど、殿方から愛してもらえないほど薄い胸ではないわ。殿方の手がにぎりしめて、もてあそぶには手頃な大きさよ。こんなにやわらわくて、にぎりしめると熱くて、しこしこしてるわ。乳首も小さくて、あわい紅色よ。どう、文代のお乳いじめたくない。文代、奇クの特写撮影のときには、本物の吹矢で、このお乳を射られましたのよ。女の一番感じやすいところでしょう。もう痛くて痛くて、文代泣いてしまいましたわ」

そのときの哀歎がよみがえって、胸が疼いた。文代嬢は縛られもせず、十センチはあるチクチクに尖った吹矢の的にされた。かな

しげなうめき声をあげてころがりまわる彼女の下腹めがけてもう一発の吹き矢が撃ちこまれた。文代嬢は矢が突き刺ったままの体で、つきつきと命じられるポーズをしなければならなかった。自分がひどく残酷なことをされていると思うと、文代嬢は不思議なよろこびに全身が顫えた。涙ぐむほどの甘美な陶醉の眼で、彼女は出血する胸と腹を眺めていた。血のついた吹き矢が抜きとられても、文代嬢は穴のあいた乳房をもみしだいて、鮮血をしぼるような真似までした。

体じゅうに縄模様の痣が薄っすらちらばって、お腹の皮がむけていた。昼間奇クの撮影があつたのである。

「ホラ、ここにすりむいた切腹の創があるでしょう。これ撮影のとき、あんまり熱演して小道具の刃で疵をつけてしまったのよ」

文代嬢は、眸をうるませて鏡の腹に見入った。ひとりで手は無我夢中になって、あらわな腹をなぜさすっていた。ぬくもってねっとり指にからまりつく、得もいわれぬ快感は、指先がとろとろと、とろけてしまいくらいだった。文代嬢は、自分ひとりだけの腹であることが勿体ないような、くちおしいような気持だった。できれば自ずから唇を押しあて





て接吻したいほど、愛としかった。その反対に、いとしいと思えば思うだけ、なやましいと心もそぞろになればなるだけ、つきあげてくる自虐の衝動も激烈だった。

文代嬢はナルチシズムの快楽に酔いしびれてしまっていた。

そういうとき、文代嬢は鏡の前での遊戯をより濃厚に、より感動的にするために、自身をヒロインにした淫らで残酷なストーリー

ーを空想するのが習慣だった。

或るとき文代嬢は、うめき声がほとばしり出るほどの股間縛りにされて、目隠しをされ、うしろ手縛りにされて、多勢の男たちに眺められていた。或るときは、切腹寸前のポーズをして、涙を流していた。くつろげた腹には布切一つなく、彼女が切り開こうとしている腹は、男たちの汗と手垢にまみれて、たらい回しにもてあそばれた直後のものだった。

そしてみずからの幻想に、ひとり涙ぐむのだった。

その夜の文代嬢は、多勢の観客を前にして彼女の切腹を見せ物にされる空想をした。催眠術師の妖術にかかって、なぶり殺しも同様の切腹をさせられる場面だった。

### 三、切腹の前戯

舞台上、木の香も匂う柩が一つ置かれてあった。棺桶のふたが、はねのけられた。

棺の中で文代嬢はこんこんと睡っていた。息がつまるほど、妖しくも美しい寝顔だった。白無垢の単衣ものに、胸高に結んだ白い帯、白い足袋——白ずくめの死装束だった。やさしい曲線でかこまれた両頬は、バラ色に上気し、睫毛の翳がびっくりするほど長かった。ふさふさとした黒髪は、顔をつつんで白無垢の襟もとまで埋め、伽羅の香水がたきこまれてあった。

「これから世にも妖奇な美女の自殺ショーを御覧に供します。自殺者は、奇譚クラブの絹川文代嬢——胡蝶のごとくたおやかで華麗な絶世の美女。嗚呼！美しき人魚の嘆きを誰か知る。文代嬢は鏡の中であでやかな色香が褪せていくのを眺めるよりは、おしまれて女盛りの妙齡で死にたい。なめらかに緊った肉を短剣の生簀にささげたいと申されるのであります。残酷にして凄艶、苦痛にして恍惚、文代嬢は人間として最も苦しい切腹を自殺方法として選ばれました。文代嬢は、十文字に

開腹して、はらわたを掻き出し、生皮を剥いで生存中のあで姿をそのまま、美女の剥製をつくるように遺言されています。生きながらえて大理石の墓石の下に眠るより、花の盛りに惜しまれて死にたい。剥製の墓地になつて永遠に若く美しく生きながらえたいと申されるのであります」

そう前口上を述べたのは、モーニングに山高帽子、顔にも手にも繻帯を巻いて眼と口だけ出した男だった。男は、世界一の催眠術師ミスターXと自己紹介した。

舞台の下には、男女の見物人が詰めかけていた。男は黒の、女は赤のマントを着て、その下は男女とも素肌だった。

生あたたかい夜風に、よろい戸の窓がギイギーとなり、室内に青い月光がさしこんでいた。室内の照明は、燭台のローソクだけだった。夏の虫がローソクの炎に舞い狂って焼け死に、床に映った男女の影が、さまざまの姿態にからまりあって、ゆらめいていた。女たちの半分は、首や胴に鎖をつながれていた。触れ合うグラスの音。大仰にきしむクッション。鞭と鎖が鳴り、たまりかねた男女のうめきや、あえぎが加わって、客席は乱痴気さわぎの最中だった。

一瞬、にえたぎるような呻きやあえぎが途絶え、さまざまのポーズと動作をしていた男女が離れて、いっせいに舞台を眺めた。

催眠術師が、文代嬢の両腕を開いて、言葉をかけた。

「文代嬢——さあ、お望み通り、切腹死を与え、美しい剥製人間をつくってあげよう」

X氏は、翡翠の珠を掌にのせて、文代嬢の眼の前でぐるぐる回した。文代嬢は、ものうげな放心の眼で、きらめく緑色を見つめた。催眠術にあやつられて、文代嬢は棺の中からすうーと音もなく立ちあがると、舞台の中央まで歩いた。

「さあ、文代嬢、自決の立会人である皆さま方に、御挨拶をなささい」

文代嬢は、見物人の男女にしとやかに一礼しながら、白い歯をこぼして阿娜っぽく微笑かけた。あの心をときめかす罪つくりなほど妖艶な眼で、ありったけの秋波をおくった。舞台に向って、まばゆいばかりのライトが放たれた。

「それでは、皆様方に、お別れの言葉を申し上げます」

腹話術でも眺めているといったシーンだった。催眠術師がやる動作、繻帯の中で動く口

——文代嬢は一挙一動そのままに動き、X氏の代りに、彼女がものを喋べるのだった。

いきなり、文代嬢はくるりと白無垢の裳裾をまくった。催眠術師のやるしぐさを、その倣真似をしたのだ。

白い紹縮緬の湯文字の下は、何も着けていなかった。それを腰のものと、帯の結び目のあたりまで、羞恥を忘れたまくり方をして見せたのである。

ローソクの炎が螢火のようにちらつく客席では、男たちはどきりとして眼を白黒させ、女たちは、あっけにとられて口を開いているもの、くすくすと忍び笑いをもらすものがある。操り人形と化して、何も知らない文代嬢は、しろい艶々とした両股を中途半端にひらいて、制し切れないあえぎ声をあげて、身悶えした。

男たちは、この臍たけた美しい顔が、ゆびさきに反応してゆがむように、切腹の苦悶にもだえて眉間に深い皺をよせるかと思うと、体じゅうがぞくぞくして、歯の根も合わなくなるほど昂奮した。男たちは、獣性をむき出しにした視線を集中させて見物していた。「もっとよく見えるように、全部脱いで、お見せしますわ」



しばらくして、文代嬢は、もぐもぐ動く催眠術師の口を見つめながら言った。

男たちは、世にもまれなる美女の脱衣シーンに、とろけたような眼付をして、吸いよせられた。

進んで帯しめを解こうとする文代嬢に、X氏の手がかしそうにのびた。文代嬢はつかまれた帯でぐるぐる体をまわされた。ずるずるすべり落ちる帯。細紐の一つ一つが解き



離され、単衣物が、長襦袢が、真っ白な撫で肩から、ひるがえるように舞い落ちた。男たちのねばっこい視線が憑き物のようにならまった最後の腰のものが、パリリと脱ぎ捨てられた。自無垢の衣裳よりなお白い華奢で婀娜っぽい文代嬢の裸身。彼女は、立ち姿を正面に向けて、ハッとするほどしどけなくも艶めかしい足の挙げ方をして、足袋を脱いだ。

文代嬢は、なやましい動作で身をくねらせると、お腹を客席につき出して展示しながら、催眠術師の意志通りに喋り出した。

「いかがでしょ  
うか？ わたくしのお腹、お気にめしまして？  
せっかく、文代がこうやって、奇譚クラブでは見せたことのないところまでお見せしているん

ですもの、どうぞ御遠慮なく、お好きなところを、お好きなように御覧になってくださいませ。いまのうちによく御覧になって置かないと、文代はもう直ぐ、このお腹を十文字に切ってしまうのですよ。二度とは見えなくなってしまうことよ。——ホッホ、文代のお腹、ふっくらとなやましく肉が張って、お臍の形もなやましいって。とくに殿方のお好きな下腹の眺めといい、とろけるような色の白さといい、男の人はたまらなくなって、変な気持を起すんですって——褒められていいますのよ」

男の筋肉をやんわりともみほぐして、骨抜きにしてしまうような甘美でみやびた声が、一瞬途切れた。文代嬢は、鏡をのぞき見るポーズをした。

「わたくし、お湯からあがるといつも、お乳やお腹を鏡に映して、それからお尻をつき出したりして、ひとり愉しんでいますのよ。そうしている、と、文代、うっとりして鏡に見滯れてしまいますのよ。皆さまにお見せしているこのお腹、お湯を浴びると、しっとり薄桃色にそまって、お湯をはじきますのよ。鏡に向ってお腹をなざしていると、お腹の中のはらわたや、子供を生むお道具に、とっても興味

や好奇心を感じますのよ。果してお腹の中まで鏡に写っているように美しいかしら、どんな色や型をしているのかしらって、とっても知りたいの。皆さまだって、文代のお腹の秘密、奥の方まで御覧になりたいとお思いませんか。どう、皆さま、文代の切腹御覧になりたいでしょう。皆さまのために、このお腹を十文字に切ってお見せしますわ。それだけではないのよ。ソラ、あそこにある大鎌——文代、あのキラキラ光っている刃の上にまたがって、お臀からお臍まで切り裂くことまでして、皆さまにお見せするのよ。それから、この体をのどまで縦に切開いて、生皮を剥がれ、五臓六腑を掻き出されて、剥製人間にされるのよ。皆さまのうち、どなたでも、御希望の方は、どうか、文代のお乳からのどまでの間を切り裂いてくださいませね」

そこまで喋ってから、文代嬢は、喉のふちをポーッと紅らめて、羞恥に身もだえする姿勢を見せた。

「どうか皆さま、あふれ出る文代のお腹の中の神秘を御覧になって、いたずらや意地悪をなさらないでくださいませね。お腹の中のものズルズルおひき出しになったり、手にとつてなぶりまわして、これは何、あれは何と

お訊ねになっちゃ厭よ。だって、お腹の中には、お浣腸をされた思い出のはらわたや、殿方から愛されて女の喜びにうれし泣きした文代のみだらな玉手箱があるんですものね。女の玉手箱がお腹の中に隠されているうちは、殿方ったら御覧になりたいくて、愛したくてもう夢中におなりになりますが、文代の体から外につかみ出されたら、果してどうかしら？ グロテスクだと、お嫌になります？ やっぱり愛してくださいさるわね。ほんとうに文代、心配なんです。それが、殿方を失望させないか、と。——文代の五臓六腑、女の秘密の一つ一つに、眼をそむけたいお方は、手でいじくりまわして、オモチャになさりたいお方はどうか文代が死んでからにしてくださいませね」

文代嬢の艶冶なセックス・アピールのある体を眺めるだけでも、男たちは身も心もそろになるのに、あけっぱなしの挑発的な言動をまじえて、何んとも妖奇で煽情的な言葉のサービスまでついているのだ。

——画家は妄想を休め、絵筆を止めて、艶笑本の中から見つけた切腹写真をしげしげと眺めた。いままで文代嬢が喋った言葉を、始めから終りまで、もう一度復誦した。独り言

と思わないで、文代嬢が、画家のためにサヨウナラを言っていると夢想しながら……。  
あやしいムードが画家の全身をつつんだ。

#### 四、木馬のハラキリ

客席のまんなかに、鉄製の三角木馬が運び出されてきた。切腹に、どうしてこんなグロテスクな責め道具が必要なんだろう。

文代嬢は、舞台を下りて木馬の横に佇んでいた。無防備な肌をかくそうとせず、両手をだらりとさげ、顎をこころもちあげて、夢見るような双眸を虚空にさまよわせていた。

「このお乳を、もっと形よく、美しくしてあげようね」

文代は、童女のような素直な顔をしてこっくりと頷いた。催眠術師は、鎖をにぎって、やわらかくふくらんだ胸乳を輪にして二筋ずつ縛り上げた。切腹にどうして乳房縛りが必要なのか、観客は不審そうに、ぎりぎり鎖でしほりあげられる乳房を眺めていたが、やがてこれが、文代嬢の切腹に重要な意味と効果を発揮することになるのを知らなかった。

「——文代嬢、あなたは馬に乗ったことがありますか。ホラ、ここに美しい毛並みをした





馬がいますね。皆さんは、文代嬢のような美人の乗馬姿を見たいとおっしゃっています。馬もあなたのような美人にまたがってもらいたいと、盛んにいなっています。さあ、早く乗って皆さんも馬も喜ばせてあげなさい」

催眠術師に抱きかかえられて、木馬をまたがされた文代嬢。いくら催眠状態といっても赤錆びてザラザラする鋭い稜角を、柔かい肌

にじかに感じて、もじもじ腰を浮かせた。「どうです、乗馬の御感想は？ 貴婦人がこんな跨ぎ方をして裸馬に乗るのは、ちょっと

お行儀が悪いが、馬の背中で、揺られる気分も、また格別でしょう。一鞭あてて走らせてみましょうか」

文代嬢は、ありもしないたづなを握る手つきをして、馬を走らせるポーズをした。木馬上ではずむお尻。文代嬢はくるしそうに呻いて、眼や口をゆがめた。

そのあいだに、催眠術師は長い黒髪を束ねて結び目をつくり、天井から上体をロープで宙吊りにした。両足首には足枷をはめて、両手でやっと持上るほどの鉄球をぶらさげた。

天井からは、

髪が生えきわも  
艶めかしいえり  
あしを見せて、

髪吊りに合い、  
下からは、白い  
ほっそりとした  
両脚を、関節が  
音をたてて脱臼  
するほどのばさ  
れて、文代嬢は  
典型的な木馬責  
めになった。

「あ、あ、あッ

」。馬に乗るってのは、こんなにつらいの。文代、馬乗りは嫌い。スゴク痛くて、苦しいんですもの」

文代嬢には、自分の被虐ポーズは判らないのだから、羞恥の表情も恐怖の表情もなかったが、くいしばった唇から、悲痛な声をもらし、しきりに腰をくねらせて、逃がれようとする身のこなしをした。文代嬢は、急に動かなくなった太ももに手をやったり、錆びついた木馬の背中をさぐるように撫ぜまわした。「馬の背中って、どうして、こんなに固くてザラザラしているの。どうして、さきがこんなにチクチクと尖っているのかしら。あ、あッ、痛くてたまらない。早く、早くおろしてください」

「女性のからだは、敏感だから、始めのうちは少し痛いかも知れないが、慣れれば、乗馬の爽快さが判って、何んともなくなるよ。それに、これくらいのことでは弱根を吐いたんじゃない、これからやるハラキリなどは、とてもできないぜ」

文代嬢は、苦痛に顔をしかめながらも、ぼんやりした眼で訊ねた。

「ハラキリ？」

「そうさ、きみはこれから、この馬の上で、

お腹を切るんだよ。永遠に美しく齡をとらないために切腹して、剥製になる約束だったろう。もう忘れてしまったのかい」

「そうだったかしら？　そういえば、そんなこと言った気もするわ。わたし、切腹するために、ここへ来たんだったわね」

文代嬢の手に一振りの短刀が手渡された。

十糎ほど切先を残して白紙が巻かれた刃物を右逆手に握っても、彼女には恐怖の色はいささかもない。めずらしい好奇の眼で眺めているだけだった。

しかし見物している観客たちは、文代嬢の美しさに溜息をつき、手にしている短刀が、あのとろけるように白い腹を真赤にして、血と脂をたっぷり吸い、プシユプシユ音をたてながら、しなやかにひき締った腹筋を十文字に切り裂くかと思うと、身体中がぞくぞくわくわくして、もう齒がカチカチいうほど昂奮してしまった。

見物人の男女は、息をひそめて、短剣のやわ肌喰い込む一瞬を見のがすまいと、まばたき一つするものではなく、文代嬢の左脇腹を凝視した。

ふっくらとした白い腹壁を、尖った切先が痛々しく凹ませ、にぎった白紙との間で十糎

あまり——これが美人の腹を掻き切らせるかと思うと、ゾーッと背筋に寒気がして、齒の根も合わなくなる恐怖、残酷、それと裏表にある全身がしびれてしまうような甘美で狂暴な快感を覚えさせる——その牙えた蒼白い光芒が、ピカリと閃めいた一瞬、何か物でもひねりつぶしたような凄惨な音をたてて、短剣の刃先は腹中深く呑み込まれていった。

文代嬢は、唸りとも呻きとも、嘔吐ともつかぬ陰惨きわまりない声をほとばしらせた。それは、女体の奥深くで灼熱した鋼鐵の味覚を知った、腹わたのさけび声だった。

カッともき出された白眼。突き刺った瞬間ぱっくり金魚の口のように、のどの奥までひきかれた口唇。白い齒から吐き出された桃色の舌——その表情には、ふるいつきたくなるような美女だけに、ぞっと身震いがくるような妖しい美しさがあった。もっとやれやれとけしかけずにはおられないような、病的な愉悦にみちた眺めだった。

血なまぐさい阿鼻叫喚。苦痛にひきつった顔を、めちやくちやに振りまわしながら、文代嬢は刃物をききませて、臍下を十糎ばかり切り進んだが、そこで手は動かなくなった。

切腹の苦痛で、催眠術が醒めたのだ。

「あつ、ア、三、三角木馬！」

文代嬢は、見せ物にされている自分を知って、悲鳴をあげた。女体の奥深くでつながっている臓器を挟み、切り裂く苦悶は——。いくら齒きしりしようが、いくら泣きわめこうが、死ぬ以外に、助かりようがないものだった。根強い生への執着もあった。

「む、むう。あー、あー。く、くるしい。助けて、助けて、このままでは文代、死んでしまう。早く医者を呼んで、お願い、早く手当をして、この痛みだけでもなんとかして」

文代嬢は、刃を離し、血でねばる両手を合わせて哀願した。

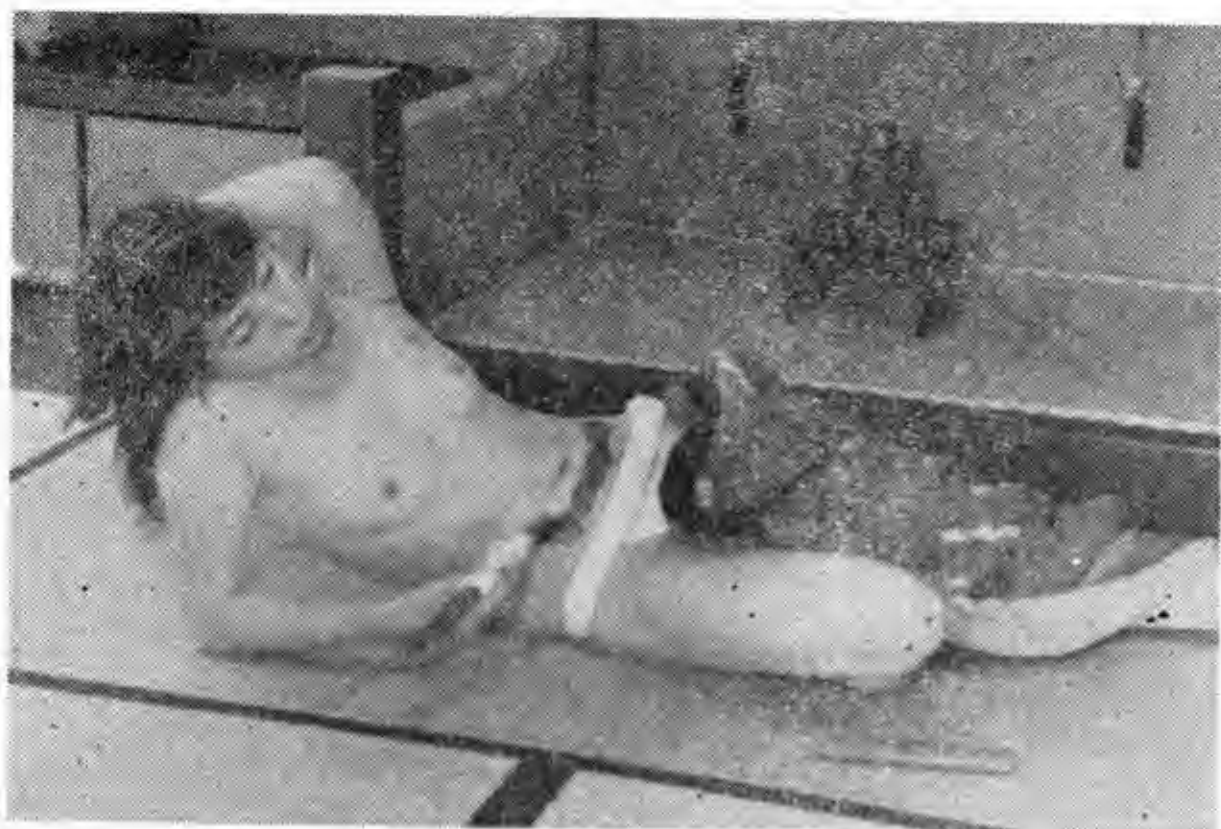
「あんまり暴れると、はらわたがとび出してしまいうぜ」

あつ、ひーいと叫んで、文代嬢はヌルヌル腸管がこぼれ始めた下腹を、両手で必死になって押えた。

「もうハラワタが、そんなにとび出してしまったんじゃ、医者を呼んだって助かりっこないよ。どう、苦しいだろう。そんな怨めしうな眼付をしたって、今更どうなるものでもない。ぐずぐずしていれば、よけいに苦しむだけだ。一思いに切腹してしまえよ」

「いやっ！　いやっ！　文代、死にたくない





い。もういやっ、かんにんして。これ以上、お腹を切るなんて——ああ、く、くるしい。もう許して、麻酔剤か痛み止めの注射でもして、ああ、たまらない。この苦しみをやわら

げて。お願い」

客席では、女たちは血や溢出した内臓を見て卒倒したり、血の気の失せた顔を男の膝に埋めたりしているものもあったが、男たちもだえ狂う美女の切腹図を、膝をがくがく震わせて見物していた。

「早くやらせろ、もっと切れ、切れ」

「十文字に切るまでやらせろ」

血に狂った男たちの無慈悲な声が、盛んにけしかけた。

文代嬢は、泣きわめきながら、首を振り、眼じりを凄絶につり上げて、声のする客席を、憎悪をこめて睨みつけた。見せ物にされるために腹を切らされるなんて、死んでもやるものかと、二度と腹中に没した刃をつかもうとはしなかった。

催眠術師の妖気あふれる眼光が、文代嬢を射すくめ、掌に翡翠玉をのせてぐるぐる回し、片手は乳房縛りにした鎖に手をかけて、暗示をかけ始めた。

「ソラ、鎖がだんだん熱くなる。熱くなる。もう鎖が真赤に燃え出した。肉のこける匂いがしてきた。おまえの真白な玉のような、乳房は、焼けちぎれてしまうぞ。それぞれ、じゅうじゅうと音を立て

煙を上げて、おっぱいがこげ出した」

木馬の上で乳房を火炙りにされる文代嬢。彼女は、胸の白い隆起を輪のように締めあげる鎖が、真赤に燃えて火焰を吹く鎖と信じこんでいるのだ。顎をおどらせ、軀をねじらせ、くねらせて文代嬢は悲鳴をあげた。はらわたを掴んで真赤な手袋をはめたようになつた両手は、波打ってはすむ乳房を抱こうとするが、鎖にちよつとでも指先が触れると、ヒューッとわめいて、あわてて手をひっこめ、火の粉を払う動作をした。

「文代嬢——どうだい。燃える鎖で女のいのちの乳房を焼き切られるのと、どうせ半分まで切っちゃった腹を、命令通りに十文字に切ると、どっちがいい？ そら乳が焼ける、燃える。このやんわりふくらんだ美しいオッパイが根もとから焼けただれて、くずれ落ちてしまふんだよ。それでもいいか」

「や、やめて、あ、熱っ！——文、文代、はらを切ります。どうか、お乳を焼くのは、や、やめてください」

乳房を焚刑されるよりは、どうせ催眠術にたぶらかされて半分まで切ったお腹だもの。文代嬢は何んとも悲痛な顔をして、泣く泣く血ぬられたお腹をふくらませた。真一文字に

切り終った短刃を抜こうとして、文代は床に取り落した。臓物は木馬の上までうねうねとたれ下がり、もう絶対に助かる見込みはなかった。その絶望と耐え難い劇痛に、文代嬢は目がくらんで失神しそうだった。前に倒れかかる上体を髪吊りのロープがささえていた。

床につき刺った短刃を催眠術師が抜き取って、血に濡れそぼってもみくしゃになった和紙の上に、自分のハンカチを巻きつけて、文代嬢に握らせた。

「早くしないと、出血も劇しいし、腹を切る力がなくなってしまうぜ。このまま野良犬のようにほえながら、狂い死しなくちゃならないんだよ」

右手に刃物だけはつかんだが、いくら十文字腹を強要されても、文代嬢は肩でせいぜいくるしい息をしながら、齒をくいしばって、異常な白さに変色した乳房責めの胸を左手でもぎとるようにつかんで、苦しみに耐えるだけがやっとだった。

蠟色になった顔をあげて、文代嬢はかなしげに、弱々しくいやっいやっをした。

「お、お願い。もうこれ以上、わたしをいじめないで。ああ、くるしい。もう、たまらない。文代、早く死にたい、死んで楽になりたい

い。あなた達も、こんなにいっぱい腹わたがとび出すまで切ったんですもの。これだけお見せすれば、満足でしょう。この上まだ十文字腹を切れなんて、もういや、いや。あ、あんまり、むごすぎますわ。文代、もう眼もかすんで、手も動かないのよ。もう勘忍、一文字腹だけで許して下さい。それよりお願い、早くのどか、お乳を突いて、トドメを、トドメを……」

もう切腹の苦悶の前に、怨恨も呪いも憎悪も忘れ果てたようになった文代嬢は、なぶり殺しにした張本人に向って、無念の涙を光らせて、早く殺してくださいと哀願した。

催眠術師は、冷徹な声を出した。

「よろしい。それでは、乳房の火あぶりと一緒に、この三角木馬に火を点けるよ。文代嬢が、からだで知っている通り、木馬は鉄でできている。これが真赤に火を吹いて燃えさかる。そうすれば、どういふことになるか。文代嬢が、まっばだかで跨っている木馬の頂上から燃えるんだぜ。乳房を焼かれ、またそんなことになったら——可哀そうに文代嬢は、御婦人ではなくなってしまうよ。男はもう誰も愛してくれなくなるんだぜ。木馬の上にははらわたまで載っている。この木馬は生身の

美人をバーベキューにする鉄板にもなるんだぜ」

わたしが生恥をさらして責められているこの木馬が真赤に燃える。さきほど乳房を半分ほど、焼き切られそうになった文代嬢は、その恐怖に全身が栗立って、気が狂いそうだった。

「そら木馬が燃え出した。乳も両方とも燃え出した。熱くなる、燃える、燃える」

文代嬢は、金切声をあげて、のたうちまわった。

「アッ、キャーッ。許して、熱っ、熱っ！。あっ、あー、いやっ、文代、どんなことでもいたします。いくらなんでも、こ、こればかりは、あんまりです」

見物人には、普通の木馬なのだが、文代嬢には、女の下半身を内側からバーベキューにする火刑具なのだ。彼女は恐怖のあまり失禁した。

## 五、生体浣腸

文代嬢は、木馬上で絶末魔の悶絶状態にあった。短刃を心臓の上に擬して、トドメを刺そうともがいていた。その短刃を催眠術師の



手が奪い取った。

「まだ死んでもらっちゃ困るんだよ。息のあ  
るうちに、浣腸ごっこのお相手を勤めてもら  
ったり、大鎌にまたがってもらわなくちゃな  
らないんだ」

木馬責めを許された文代嬢は、荒ムシロを  
かぶせられて、寝かされた。ぐったりと伸ば  
した四肢。睡るように薄すらと閉ざした眼。

全身に死相があらわれていたが、文代嬢は生  
きていた。荒筈からのぞいた胸乳は、虫の息  
にひくひく起伏していたし、意識朦朧となり  
ながらも、唇はうわごとのように、苦痛をう  
ったえつづけていた。

どやどやと五、六人の希望者がかけよって  
きて、悶死寸前の文代嬢を取囲んだ。衛生箱  
が持ち出されてきて、液を吸入した太い浣腸  
器が次ぎから次ぎへと観客に手渡された。

血にそまつた荒筈が、はねのけられた。

この狂鬼としか思えない男女は、生きなが  
らあばき出された女の臓器を、手にした浣腸  
器でもてあそばさうというのだ。

「わたしは浣腸責めにあって、もだえ苦しむ  
女を眺めていると、ひくひく動く白いやわら  
かいお腹の中にある、ハラワタがどんな風に  
ゴロゴロ蠕動するのか、一度でいいから眺め

たいと思っていました」

「同感ですな。お尻をばくの方に向けて、尻  
踊りみたいに腰を振って、早く便器を、便器  
をとせがむ女の姿もいいが、お腹の中の有様  
までは、見るわけにはいきませんからね。今  
夜は、それがありのまま、浣腸されて、のた  
うちまわる腸管の姿がつぶさに眺められ、手  
にとってその動きを知ることができるんです  
からね」

赤いマントから、素肌をちらつかせた女ま  
でまじっていた。

「わたくしも、お浣腸は大好きですけど、お  
トイレの中でするのは、ムードがなくて嫌い  
ですの。いつも香水をふりまいたベッドの中  
でひとり便器を抱いて、愉しんでいるんです  
けど……悶々として便意をこらえながら、ゴ  
ロゴロいうお腹をなぜさすって、一体わたし  
のお腹の中が、どんなに苦しんでいるかしら  
と想像すると、ものスゴク昂奮しますの。――  
わたしも一度でいいから、こんな姿にされ  
て、男のひとから、わたしのハラワタを、な  
ぶりものにされながら、お浣腸をされてみた  
いわ」

お腹の中の、女の秘密を全部さらけ出して  
しまった体に、浣腸責めを受けるなんて……

排便中のハラワタまで見せものにされるなん  
て……いくら呪い、叫んでみても、咽喉がヒ  
ューヒュー鳴るだけで、声も出なかった。抵  
抗はおろか、お腹の中をかきまわされるまま  
じっと仰臥しているだけがやっとだった。

文代嬢の軀が、くると俯向きにされた。  
「アッ、いやっ！ もう本当にやめて、もう  
これ以上は、いじめないで」

浣腸の苦痛はなかった。すべての感覚が内  
臓溢出した苦痛の前に麻痺していた。しかし  
ぼんやり薄れていく意識の中にも、女として  
の羞恥も屈辱もあった。

浣腸責めにあって、何んの感覚もない体  
が、文代嬢には口惜しかった。やるせなかつ  
た。まだつき上げてくる便意でもあれば、と  
思った。わたしは苦しみもだえながら、間も  
なく死ぬ。それまでは、かなわぬまでも、こ  
らえられるかも知れないのに。それなのに、  
わたしの知らないうちに、たらい回しに注入  
された浣腸液は、わたしに、排便させるだろ  
う。死ぬまで汚物にまみれて死んでいくなん  
て。

浣腸のお相手が済むと、今度は大鎌をまた  
がされることになった。観客の一人が、椅子  
の上に大鎌を載せ、柄をしっかりとぎって支

〔奇譚雜談〕

夜よるの徒つれ然づれ草ぐさ

中 宮 栄

えた。

「出すものを出して、いくらか軽くなったよ  
うだな」

催眠術師が、もう死んだようになって、ぐ  
にやりとなった文代嬢を抱き上げた。

「約束通り、大鎌でお尻から切るんだぜ」

上向きにされた大鎌の刃渡りは、一メートル  
以上もあって、頸すじがぞうーと凍りつく  
ほど鋭利にとぎすまされていた。

文代嬢が眼を開けて、唇をわななかせて何  
か口走ろうとした一瞬……。

「ギャーッ」

大鎌にまたがされた文代嬢を、催眠術師が  
抑えつけて、力をこめてこすりつけるように  
挽いた。

× × ×

外は雨がやみ、窓辺にバラ色の朝が訪れて  
いた。画家は、ぐったりとした表情で夢から  
覚めた。

屋根裏のこの狭くろしい部屋にも、朝のす  
がすがしい気配がにじみ出てくるようだ。

画家は物うげに身体を起すと、机の上にこ

ろがっているパイプを手にとろうとした。と  
未だ朦朧とした彼の目に、世にも美しい世に  
もたおやかな女の艶姿が触れた。パイプをと  
ろうとした手が、知らず知らずのうちに、そ  
の二葉の写真をとっていた。

憧れの美女の切腹写真、そして、自分の描  
いた美人の裸体画。それらが彼の幻想とダブ  
って、昨夜の夢がまるで現実であるかのよう  
に、彼に錯覚させるのであった。

「絹川文代嬢！」彼はそう叫んで、絵筆を空  
にふりまわしていた。

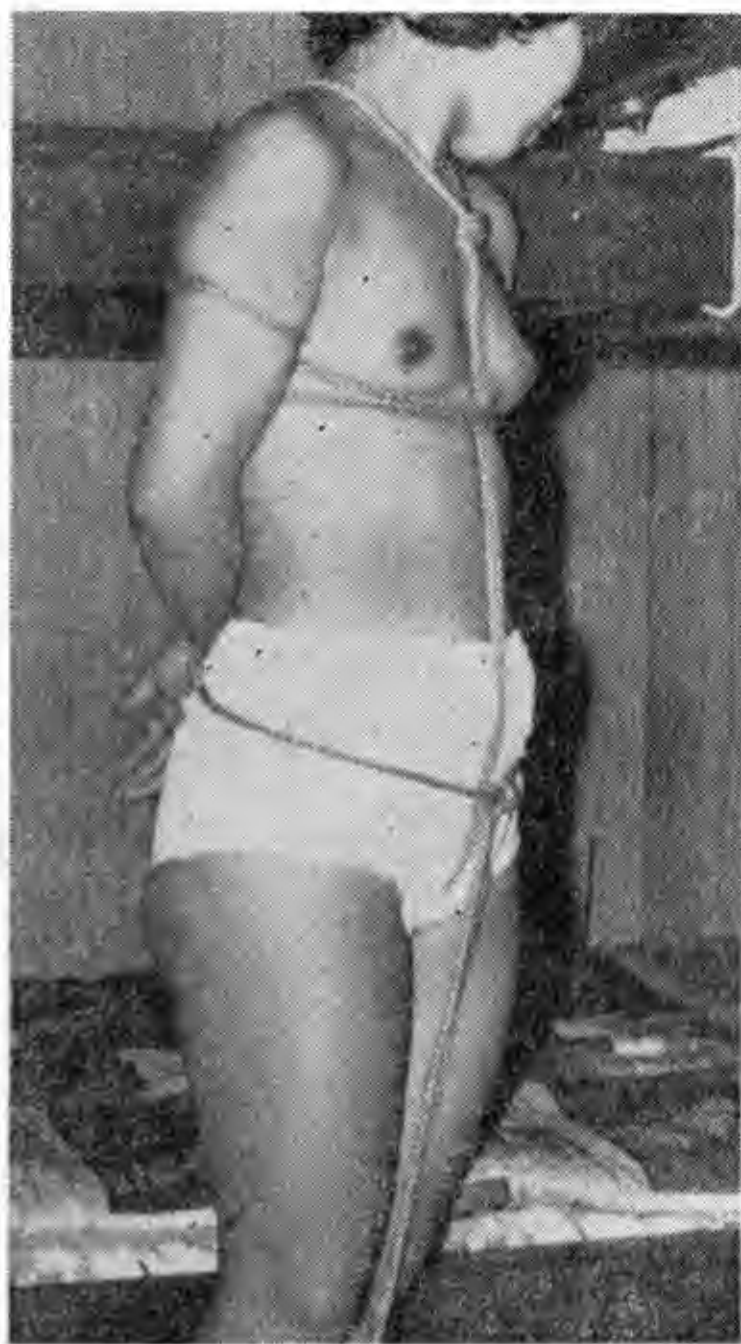
〔縄と乳房〕

昔、新劇のメッカ築地小劇場では芝居を上  
演中、客席で囁きされた戯曲を手で読んでい  
る熱心な？ 愛好者が数多く見られたと聞い  
ている。難解なオペラを聴きに行ったなら兎  
も角として、これは愚行である。しかし、映  
画『縄と乳房』を見に映画館のシートに座っ  
た時の私は、それと似たような行為に耽って  
いたのかもしれない。シナリオを読んでシー  
ン毎に空想や反芻の繰返しをしていたから。  
主演女優の一人榊田くに子については詳し  
く知らないが、日本シネマの『変態』で豊満  
な肉体美を見てから、グラマーな肢体には惹



かれたが、ワザトらしい表情（演技表現）が好きではなく関心も低かった。今回も依然として台詞まわしも下手、くどい顔面の歪む表情作りも改まっておらず失望する。――

映画作りの内幕は「鬼六談義」の後半に詳しく、それを読んでしまえば御尤御尤とならざるを得ないのだが、閨房描写のサワリをパットカラーにしたたりする、艶絵まがいの扱いは、これも失地回復を狙うエロダクの製作上の策として最近の傾向だが実に「無駄遣い」であり、歓迎出来ない。余計な心配かも知れ



ないが、そんな所に黒白ポジより三倍も高価につくカラーフィルムを使うのは損じゃないかと思う。皮肉な事に併映の同じプロ制作の黒白版「ダブル処女」というオカシナ題名の作品の方が、スカッとサワヤかなピンク映画であり楽しめた。

今回の映画「縄と乳房」のように「SM」をテーマにした物に、なまじっかな勧善懲悪の思想や、正義感を添えると通俗的な安物になってしまふ。しかもMSファンの立場にある者までが、捲ぞえ喰ってつんのめるような

被害妄想に脅かされて映画を見た事自体悔恨される。

――指名手配中の情夫をかばう姉が、妹の幸福を念じて身替りになって受ける暴虐と、家継ぎの女主人を心臓発作を起させて謀殺するための協力とはまるで無関係のように扱われている。これは作意的に擬りすぎた結果だろう。伏線を置かず刑事のネタ割りというドンドン返しがミソだと云えばおしまいだ、観客は誰一人として姉と番頭（指名手配中の殺人犯）が内縁関係にあるとは知らずにいて作中の刑事だけが姉を「理由なく」情婦と断定していたのでは飛躍すぎるといわなければならぬ。しかもその眼ツケからホシの隠棲先を割りだし、病弱にして陰険、病的なサジストの妻から逃れたいと思う養子婿の殺人計画まで知ったとなると、警察の諜報活動は大変なものとして描いている事になる。

画面からは市太郎が女房殺しを企んでいた事を知ったのは逮捕したホシと情婦の口から聞いたのでもなく、部屋に入り込み（無断で忍び込んでいる――）襖越しに立聞きした事になっている。このルール違反を平然と描き出す神経が、どうやらエロダク作家連中のレベルではあるまいか。現実の社会生活にはな

はオハナシなんだと云っても……判っていても……この結末は厭味が残った。それが特に私には妙にひっかかり、困惑と失望を『縄と乳房』に感じたのである。

映画作りをいい商売だと思い込み、プライベートな興味からの趣味と実益を兼ねた切り売りプロデューサーとストーリーライターとのコンビでは、『視覚言語』は創造されないのだ。昏迷からの捏造と消費で明け暮れる『成人映画』は矢張り不良文化財の烙印を消す事は出来ない。対社会性のある主体性の確立、ドラマツルギー、そして何よりも観賞に価すべきドラマが、この世界にも必要なのだ。

### 【誌友短信】

——麒麟児久氏へ——

この雑談がお目にとまっていた事を知り、本当に嬉しく思います。共鳴して下さるものが何であり、どういう箇所か等も御示し下されば更に有難く思います。お気に入りの写真——私のささやかな読者へのサービスというようにお考えでしょうが、私としては「ああもしたい、こうもしてみたい」と思いながらも生活の中に定着出来ず、いじいじとして変質的な興味の中でしか奇ク誌を見ていない読者に檄をとばすような意味で提供しているの

です。新しいモラルの確立とか、セックスの開発とか云って飛躍したロジックを弄する気持は毛頭ありませんが、マイ・プライバシーの充実こそ生活の基であり人間理解の緒を開く手段だと思っていますので、実践的なプロセスの一端を記録、且つ報告しているつもりなのです。

私にとっては確かにプレイは歓喜を伴う行為であり、カタルシスです。社会風俗観察の利用です。学者ではありませんから臨床実験や判断のデータまで集積は出来ませんけれども多くの人々と知り、黙殺されがちな人間の裏面の理解を深めたいと思うのです。巷間云われるところの「正・異常」の正しい判別は、理解と批判の信念の確立がなければ成りたぬものと思います。偏向、偏見の打破、既成のものへの反逆がなければ人の暮しはよんだものになるという思想、例え詭弁じゃないか……と云われても私の言動は変らないでしょう。それが私をして魅力ある人間像形成への到達へと向かわしめる事になったなら、この世に生を享けた価値を知る事にもなるのだと考えているのですが。

胸襟を開いての交際は最も素晴らしいものである筈と分っていても、多くの人々は観念的

にしか文字づらの表現を利用しているのに過ぎないのではないのでしょうか。並みの神経からすれば、他人には伏せておくべき己れの性癖、性向（パーソナリティ）を、ベールをかなぐり捨てて語り合える時に真実駢りのない附合いとなるでしょうし、奇ク誌を通じて知り合った人々に撰択さえあやまらなければ文字通りの「胸襟を開いた」交際が出来得る可能性を感じるのです。しかし私の考えるような理想的な知己を得るという事は、その実現の曉、世間一般の風潮としては、却ってそれすらも「変態的」とみなすかもしれません。

「人の噂も四十五日」とかで、事件も弾効も直ぐに忘れ去られて行くのが習いであっても殊外個人的な醜聞は消えません。人が生きて行く限り、今、自分と同一視して認め合える知己は仲々に得られたものではなく、裏切られ離反して行く友は、多いものです。胸襟を開いた事が、意外な事柄につながり恥しめられ、イコールして醜聞となつて残りつきまわれ、人生の骸とならぬ為には、何もせず只黙々と憧憬だけにたよって生きる事が無難であり、賢明な策であると考えらるなら、それも「善」として見るのも正しい事なのでしょう。私には退屈です。もし危惧される将来性



を相互に個人の人格を以て信頼し、疑念を抱かず開放的な附合いが望めるなら理想的なものです。——何も貴殿は格別私との交友を希望しておられた訳でなく、此処での私の意見吐露は甚しく場違いなものです。『夜の徒然草』にも目を通して下さる方もおられたのだなあとという安堵と感激の实感が、尚一層御教示、鞭撻となつてかえつて来る事を希求する期待から、ペンを走らせたのです。御機嫌よくお過し下さい。

——藤村美香嬢へ——

逢えそうでいて仲々逢えない不思議な方だという感一入。二月号誌上ではT茶房での連絡方法まで記しておきましたが、これもどうやらお気に召さなかったようだったと考えています。こう度々貴女に通信すると、私も通信マニアだと思われ「御執心な事だ」と嘲笑を浴びるようにも思うのですが、是非文通なリ面接して、意見の交換を計ってみたいと思つて居ります。「連絡場所を良く御指定の方がございますが、私としましては余り芳しい気持ではございません……云々」と云われた趣旨を汲んだつもりでしたが、「……誠実で紳士的なお方なら、私、いつでもお会いして構いませんが……」との表明とは裏腹に、どう

も出不精な方のように推察してしまいます。

思うに、奇クを手にとるなり読者通信に目が行くといわれる貴女は、読者通信の信憑性を疑つてそちらへ投書する事をあきらめた私の「通信」を逆に見落されているようだ。貴女の期待する素晴らしいお便りというものが、プレイの具体的方法論であり、プロットであつて、読んでいるだけで嗜虐快感を覚える内容のものであろう事は判っていますが、私にはそのような文字の羅列は空虚ですし、第一それ自体Y本的要素を奇クに添加するようでは好ましいものとは思えずに控えているのです——それにインテリの貴女とした事が、それを誌上で期待する事自体無意味だとはお考えになりませんか。

チャンスがあつて、貴女と私とのプレイが実現し、貴女御自身のマゾ性を堪能出来たら、それを記録的報告とか感想とかの形で誌上発表なさつたら如何です。その試みは、奇クの文献価値をどんなにか向上させる事に役立つ筈で、もうそろそろ奇クにはそういったものが出現してもいい頃だと思ふのです。尤も辻村氏のカメラ・ハント、山本氏のカメラ・ルポなどはありますが、貴女のように性の耽溺を消極的な姿勢ながらも希んでおられた

方が、新しい風俗のパイオニアたらんと自覚されたなら、尚一層素晴らしい寄稿者になる筈です。貴女はゲシュレヒトトリブの基礎を「服従欲」と認める位パーソナリティの確立が備わつておられる方なのですから、自我と情熱、理性と欲望のコントロールを様々に試みられて然るべきだとお薦めしたい。そうしてその知的行動を経て得られるレポートによつて、新しい風俗にエポックを劃するようになつて欲しいと思つています。その方が当てずっぽうに見ず知らずの人から贈られる讃辞や追従だけで浮き浮きする『マドモアゼル』の幼い秘め事に終らず、有意義な人間探究や解明の、勇氣ある行動となり、貴女自身が心ゆくまでエロスをエンジョイすることになると思ふのです。

【エゴ、エト・セトラ】

九十九の会の事、水着デザイン会の事を誌上でお知らせ出来なかったが、次回には報告してみよう。暖くなつたら是非おいで下さいと仙台からK氏。四国の友人から招待状が届いた。出かけてみようと思つてゐる。そして欲張り者の私は、読者通信でお名前拝見の岡山・山川均氏、東京・鈴木美津子氏、兵庫石崎達子氏等からのお便りを待ち望んでいる。

## 女体緊縛

## 雑画雑感

野江三郎



見事な絵が、描けるはずもないのに、眼つきや態度だけは大げさなものと、いつも妻のヤツが鼻の先でせせら笑いやる。

なるほど、他の絵なら、ほんの走り書き程度ですぐに飽き、ペンを投げだしてしまうのだが、こと若い女性の緊縛姿態を絵にすると

なると、いくら楽しみだけで描いているとはいえ、一旦机にしがみつくと、まるでスッポソみたいな離れようとはしない。かなりの時間が知らぬ間に経っているのをあとで気づいて、いつものことながら自分に呆れる。いたい、これだけ熱中し得るものが私の日常の他にあるだろうか。なんでも時間を念頭において行動している自分が、こんな絵を描く場合だけは時間はおろか、周囲を無にしてただ机上のケント紙だけの世界に没入して我を忘れるのである。——とまあ、こんな話はどうでもいい。

くそっ腹が立つのは、女房の、あのせせら笑いである。

さアこれから机へ向って、この僅かな自由の時間を楽しみましょうかと、揉み手なんかをしながら坐りかけると、

「あら、また、ヤンの？」

と、こう、きやがる。

まあ皆さん御想像ください。人間意気こんでこれから事に当ろうとする、その充溢した精神時の出鼻に——冷然と突っ立った足の片方を微かに貧乏揺るぎさせながら、チョイと両手を腰にあて、上唇をひんまくりあげて、さも小憎らしげにこのように言われた瞬間の



私の味気なさを！

(畜生っ。黙れ——)

しばし、沈思。

カプッ！ と、その足へかぶりついてやろうか。腋に腕ねじこみ大外刈りに叩きつけてやろうか。いやいやそれとも昨日描いた絵のように、乳房もヘソもあるものか、ぐるぐる巻きに縛りあげて裏のペラシダから吊り下げて水ぶっかけてやろうか！

キリキリと歯が鳴るような経過——

ところが、いつものことながら、この女房粉碎計画はこのあたりまで。私は辛じて思い止どまるのであった。重大な理由があった。

(そんなことしていたら、絵を描く時間が、なくなってしまうから)である。

権力に弾圧された親鸞の苦惱時代もかくやあらん。私は、私の持てるすべての忍耐力でその怒張を押さえつけ、心の片隅へ居候みたいに小さくなってしまった平静心にオイデオイデをして、やり場なき臀部をドタンとおろしてしまふのであった。

ああ女人は——イヤ違った、女房とは度し難きもの。デッサンを済ませてから、次に黒インキで丹念に、縛られた女性画の、特にその容貌の部分を描く段になると我れ知らず涎

——はまさか垂れないが、鼻唄ぐらいはついでてしまふ。ヤツめ、これが気に入らないらしい。

「フン、変な顔」

と、第六感だけは優れているのかどうかは知らないが、その部分を描く頃になると、その時キッチンに居ようが別部屋で掃除をしているようが、どんな場合でも、近くに居るかぎり、フライパンを持ったまま掃除機の首を掴んだまま、まるで黄金パットみたいな調子で姿を現し、机の上をのぞきにきては、その絵の中の女性に向って？ いかにも憎々しげに吐き捨てるのであった。

イヤ、再びこんな話はどうでもよろしい。

——さて、私が好んで描く女性は、洋服を着ている女性である。

今流行のデザインをちよいと参考にして、フレッシュに、なるべくシンプルな服を好んで着せてしまふのである。絵を描くことを楽しみとする以上、こんな服がなければ私の絵はすすまない。

ふと街で見かけたあの女性この女性——。それは、流行の服を誇らしげに鼻高々と着こなし歩いていたし、また、いくらか着こなした頼りなげに我がスタイルを気にしながらバ

スを待っていたし色々と、だが、一樣に若い女性の持つ強さを充分に漲らせていて、見る者にとつてそれは美しく、実に楽しいものである。男性にとって、若い女性の姿を見ることとが、理由の如何、度合の大小はあろうともそれは楽しいものであるはずと思っている。

私は、眼の保養の域を出て、最近この楽しさに、もう一つの楽しみを加えるようになった。本誌御愛読者なら、この私の気持ちはよく理解してくださるだろうと思う。

ああ可愛くてスタイルがよくて、おまけに洋服の好みがとてもいい！ と思った瞬間、(この姿のままの彼女を、荒縄でギリギリと縛りあげてやりたい——)

迸るような願望が、全身を貫いて走るのを覚えるのだった。

勿論、それは願望だけで、彼女にその場で頼みこんだこともなければ、今までに妻以外の女性を縛ったことなんて一度もない。これは私だけの秘かな願ひなのだが、考えてみると、不思議なことにそのような望みを抱かせる女性は、決してシンプルなワンピースを着た人にも限っていた。なにかしらズングリした感じのツーピースを着た女性なんか、いやまた違った服なんか私は見向きもしない。



特に毛布を巻きつけたかの如き襟の服なんか——私は、襟なしで、その優首にまるくぴっちりつままった、絶対背明きの服でなくては駄目だった。

その女性が俯向いたり何かの拍子で、ぴっ

ちりつままった首もとが、まるくくられた服を柔かく喰いこませたとき、それがたまらない襟なしの背あきワンピースの魅力となってくるのだ。辨解めいて申し訳ないが、私は、その喰いこまれた女性の首に魅力を感じるのではなく、喰いこんだ丸くりの洋服に、ぞくぞくするような好みを覚えるのである。

そして後姿から見た場合、中央に僅かに布地をふくらませて臀部近くまで、女性の肉体の、中心の意味を泰然と説明しているかのようなファスナーまたはボタンの羅列に言い様のない欲びを知るのであった。再三言い訳めいて恐れ入るが、そのファスナーなどを開いて服の背を割り、脱がせることに欲びを知るのではなくて、若い女体をぴっちり包みこんで閉じているファスナーまたはボタンの羅列に対してのみ唾をのみこむのである。

私はこのようにして、その女性を幾何的な縦横の連結を生かした縛りかたとか——或は胸部の上下をただ二巻きずつのロープで締め

つけただけという簡単な縛りかたで、その服への願いをすべて縄に託して、上半身を拘束し、一人一人とその肩などを優しく抱いてやりながら街に山路に、旅をしたいと想うのだった。

ひどく洋服に拘るようだが、女性の、襟くりのつままった美しい服のサンプルはまずウエディングドレスであろう。

私は、私の想像にある彼女に、そのウエディングドレスを着せて、黒紐で手首も高々と後手に縛り、新芽吹く草原の彼方に遊ばせ、その幽玄な風景をのんびりとデッサンしてみたい。また、爽やかな日に、真紅のタイツに純白の刺しゅうも美しい背あきブラウスを着せた彼女を革紐で縛りあげ、せせらぎ歌う山辺の小川へ跣足にさせて追いやり、清澄な水にたわむれるその女性美を心ゆくまで画帖に写しとりたい。そうして、たまには田圃の泥の中へ十字杭を突き立て、それへニューモードの彼女を案山子がわりに縛りつけて放置するというのがいいだろうし、亀甲縛りにして涎掛けの赤布を首に結びつけ、初夏の綿雲浮く峠の道端へ、勿体ない話だが地藏尊に似せて据えつけてみるのもいいだろう。

彼女は緊縛の苦悶を浮かべて何ごとかを訴



える。私は聞く耳持たず、その広大にして静謐なる天と地の彼方に視線をやり、沈滞していつてやまなかつた願望の灰汁を、今ここに霧散しつくそうとする。

——ケント紙をひろげて、鉛筆の尻で鼻の穴をほじくりながらする空想は、貪慾に次から次へと果てしがない。自分勝手な、この好みの範囲内に於いての想像は、曳かれ人をたぐり寄せるが如く、抵抗もなく雑美な姿態を脳裡に描きつづけて止めどがない。

画用紙をひろげてそのまま空想だけで終わってしまう時だってあるし、時たまうっかりと空想を忘れて何となく鉛筆を走らせてしまうこともある。前者は「夢」に身を置く心持がし、後者は——「チョコマカとやって来ては人を小馬鹿にしたような眼つきで悪評する妻と諍う、その所為かも知れぬが、絵の中のがれの女性も荒くれて、より無味な描線と終ってしまうのであった。

だから最近、その時、絵が出来上っても上らなくてもいい、机の前へ坐ると必ずすることは空想であった。興至ればペンを汚し、至らざれば鼻の穴ほじくる。唯我独尊、妻の白眼視なんかクソ喰らえ。——ああ、楽しいではないか。

半年程前、一度妻をモデルにして描いたことがあった。

勿論、それ以前から悪口雑言を私の絵へ弄していた彼女であるから、それではお前がモデルになってみると、強引に説き伏せたあげくのことである。わざわざ新調のワンピースに着換えさせ、手拭いで姉さんかぶり手にはゴム手袋、裏から電気洗濯機をゴロゴロ転がして来て日常の点景とする。それからわざと固くなってゐる干し物の綿ロープで手加減なく後手に縛って、その前でいっばしの画家然と片膝立ててのデッサンである。——ところが早々に彼女は手のしびれを訴えはじめるし、凝つと見つめている私の鉛筆持つ手は怪しげになるし、それにともなつて微妙な感情が頭を擡げてくるし——やがて仕様ことなくロープを解き放った。そうして、やおら二人してにらみつけた足許の画用紙には、なんにも描かれていなかったというお粗末。

妻曰く、

「あなた、恰好だけがモノスゴイのね」

けだし名言！——いや感心している場合じゃない。彼女が今日現在でも、机に向つてゐる私さえ見れば、乱発して止まないこの台詞の誕生日は、実にこの日であつたのだ。

せめてあの時、輪郭だけでも描いておけばよかったなと思つても後の祭り、以来どんなにおべんちゃら言つても感受神経をコチョコチョやっても、二度と絵のモデルになつてくれない。

「モデルが欲しかったら、自分で探して来なさいよ」

ああ、幸か不幸か、かくて私はそのモデルを、街行く若き女性へ求めると言う習性とは相成つたのである——ホント。

だが私はここに、当然と言えば当然であるうが、日浅くして見事な壁にオデコをぶちつけてしまったのである。

いくら空想一辺倒に心身を浮遊させて描いているだけとはいえ、遂に、それにも厳然たる限界があつたことに痛感させられたのだ。縦に横に斜めに描いてみても、どうしても、それはいつしか最初の頃の画域に陥ってしまったことに、愕然とさせられたのであった。

——オオ絶望！ ペンを投げるか！

ここ二、三日、ちつとも机へかじりつこうとしない私を見て、妻のヤツ、「あら、もう飽きちゃつたの。フーン、そうなの。ケッケッ」

私はやけくそであった。言っちゃった。  
「本当に絵のうまい人は、乱作しないものさね」

妻はこれを聞いて、サンダース軍曹みたいなツラで、キッチンへと凱旋して行った。

——更けゆく夜に、私は想いを駆せた。

私の錆つきはじめた歯車に、優しく鋭く潤滑油の役を喜んで果たしてくれるモデルさんが、この世に居てくれたらなあ！と。

そうして、活然と新境地を見いだした私は絵の完成をまって、大展覧会？を開催しようか。あの人この人、この道の絵のみを愛す

る人達が意気投合して開催する「緊縛女性への幻想」絵画大展覧会。イヤ、他にもう少しましな命名があるはずだ——。

とたんに私はむっくり起きあがり、ウスぼんやりとテレビを眺めている妻の横顔へ、この絶大な胸の想いを奔流の如く吐きだした。

水滴が水溜りとなり、池になり河になりやがて大海となるようなこの夢。時々怪しく舌がもつれた。

熱気であり膨然たる希望であった。

——すると、ヤツが言ったね。

「まあ、いろいろとおやりよ」

更に、

「展覧会だか乱痴気会だが知らないけど、招待状くれたら、あたしも行ってあげるよ」

と、きたもんだ。

(キッ——！)

誰か私を助けてくれっ。誰か、私に眼もくらむような絵を描かせてくれっ。

——え？

お前じゃ、到底立派な絵ができっこないっで？

はい。それはわかってんですよ！ わかってはいるんですけどもね……

## 告白

# マソ年代記

## 姫島痴人

寒い晩、酒の酔いの勢いを借りて、予め目星をつけておいた女店員ばかりの洋品店を訪

れた。而ももう相当夜おそく、近所の店は締まっている所が多く、あとは住宅になっていて

人通りも殆どなかった。

私は入って行って女店員に、「寒くて仕様がなないのだけれど、下穿きで厚い地の奴はなにかい」と聞いた。女店員は二、三枚、男物の申又を出して見せて呉れた。一寸手にしてみれば、「大して温かそうじゃないな、こっちの方は、みんな女物なの」と尋ねる。

「ええ、そうです」との答え。「女物は上も下もゴムで締めてあって温かそうだけど、男物にはそんなのないの」と聞く。この辺から女店員は妙な顔を始めたが、構わずに紺のズロースを指差して、「女物だって穿けるん



だろ、兎も角冷えて仕方ないんだから、ゴムで締って風が入らない方がいいんだ。これ一枚下さい」と言って、女店員の軽蔑の眼差しを烈しく刺戟的に感じながら、私はそれを買、而かも大胆に、「一寸失礼だけど、ここで穿かせて下さいよ」と言いながらズボンを脱ぎ始めた。

あつげにとられて女店員が何も言わずにいる間に私はズボンを完全に脱ぎ、早くもズロースを穿きにかかっていた。私の異常な行動にあき果てた女店員は今は好奇心を以て而も侮蔑的に私のすることを眺めていた。私はそれを意識して快感の極致に達していた。ズロースを穿き終ると同時に、私はもうどうすることも出来なかった。さすがに、それだけは見破られないようにと、あわててズボンを穿いてしまったのだが、この時の露出行為は完全に計画通りに私の期待を満足させ、最上級の快楽であった。

英子が去って以来、私は空想的マソヒズムにのみ甘んじて雑誌や映画に、そのタネを漁り求めていたのだが、やがて現実の相手を求めながらも、それが叶えられぬ不満から、このように路上や電車の中の女性を対象を求めて破廉恥な行為を続けていた。

幸い最近、私は一人の女子大学生と懇意になった。女子大生といっても、無論昔の所謂「いつまでも勉強をする顔に出来」という類

いではない。女子高校を出たばかりの普段はしとやかな女性なのだが、一面茶目でお転婆で豊富な体格の私好みの愛らしい女性なのである。

私は始めて彼女を見た時、何かこの人ならという直感を持ったのだった。私は彼女の中に潜在するサド的なものを引き出して成長させようと試みた。最初は先ず指角力から始めた。私はよく負けてみせた。その中に彼女の斗争心と、この人になら何をしても勝てるという優越心を植付けけるのに成功した。

次は腕角力。私は事実腕角力の要領が下手なのか、男には勿論、一寸力のある女性には本気でやってもかなわないことが多い。

或る時、「葉子さん、腕角力しようか。僕はとても弱いんだよ。女の子にもよく負けるのだから」と言って挑戦した。初めの中、渋っていた彼女も、漸く承知して相手になって呉れた。彼女とやっても、やはり全力を出して、どうやら互角以上に行けるかどうかという程度で、暫くこらえて力尽きたように彼女に捻じ伏せられても、全然わざとらしいこともなかった。

このようにして彼女の心に男を征服する欲びは急速に養われて行き、近頃では戯れに相撲だとかレスリングだとか言っては、私は彼女に倒され、馬乗りに組み敷かれるのに成功した。英子の折りには一度もしなかった乗馬

遊びも、私は生れて初めて葉子によって、女性の馬にされて這い回る歓喜も味わうことが出来た。中でもレスリング遊びで、紺のズロースにシャツといういでたちの彼女に投げ倒され、寝業に入って彼女の真っ白で豊富な太股に私の首を挟みつけられ、「さあ、どうだ」と口許にイタズラな微笑を浮かべながら、グイグイ締め上げられる時、私はマゾヒストに生れついた幸福の絶頂を極めたように感じるのだった。

私の首にからみつくムッチリした彼女の太股、眼の前の紺のズロース。私を見下ろす彼女のほほ笑み、彼女の体温、体臭、私はこのまま締め殺されたいと思う。この時、私は実感した。男として、最も幸福な死に方は、美しい女性の股倉で締め殺されることだ、と。

幼少より三十年足らずの間の私のマソヒストとしての生い立ちを、長々と書き綴ってみた。これからの私のマソ的生活が、どう発展して行くか、私は兎も角、普通の味わい得ぬこの貴重な欲びを私の人生で満喫して行きたいと熱望する。人は変態という、然し私にはこれが私の性欲であり私の人生なのである。この一文が同好の方々には些かの悦びになり、何等かの参考にもなり得たなら、望外の幸わせである。

(終)

〔本稿の前篇は、一月号及び四月号に掲載しておりますから御参照下さい〕

## 懸賞入選作品

## うごめく妖しい虫

中<sup>なか</sup>河<sup>がわ</sup>恵<sup>けい</sup>子<sup>こ</sup>

うごめく妖しい虫

もう春になったのではないかというようなポカポカとした陽気が続いたかと思っ  
て、北陸方面、山陰方面から雪の便りが届い  
て、私の住む湖南にも、時折り比叡おろしの  
粉雪が舞いおりるようになりました。

東京方面でも何年ぶりかの大雪だと聞くと  
又ぞろ、私の放浪癖、孤独癖、空想癖の妖し  
い虫が、頭をもたげてきて、いても立っても  
おられない気持に襲われるのです。京都への  
行き帰りの道で、サンケイバレーや比良、マ  
キノへ向うスキーバスやルーフにスキーの道  
具を積んだ自家用車を見ると、私の思いは遠

く白銀の世界へ馳せていました。

そんなある日の午後、今度新しく出来たボ  
ーリング場で思いきり、ボールをころがして  
みました。ウィークデーの午後とて、人影は  
まばらで、ひとり冷たいコーラーで汗ばんだ  
肌を沈めていますと、何にかしら、むしろ  
に強い刺激を求めてみたくなったのです。そ  
うなのです。しばらくは忘れていたかに見え  
た、あの八花と蛇V的幻想が、まるで、もや  
もやと湧きあがってくる霧のように、私の胸  
いっぱいひろがってきたのです。

ほんとうに自分ながら、気まぐれだとあき

れ果てました。でもこの奇妙な妖しい虫が、  
私の身体の中で暴れだし始めますと、私自身  
でも、もうどうしようもなくなるのです。私  
の頭の奥底で燃えだした空想が、それに火を  
そそぎだすと、そこに忽ち、春の花園が現出  
するのです。

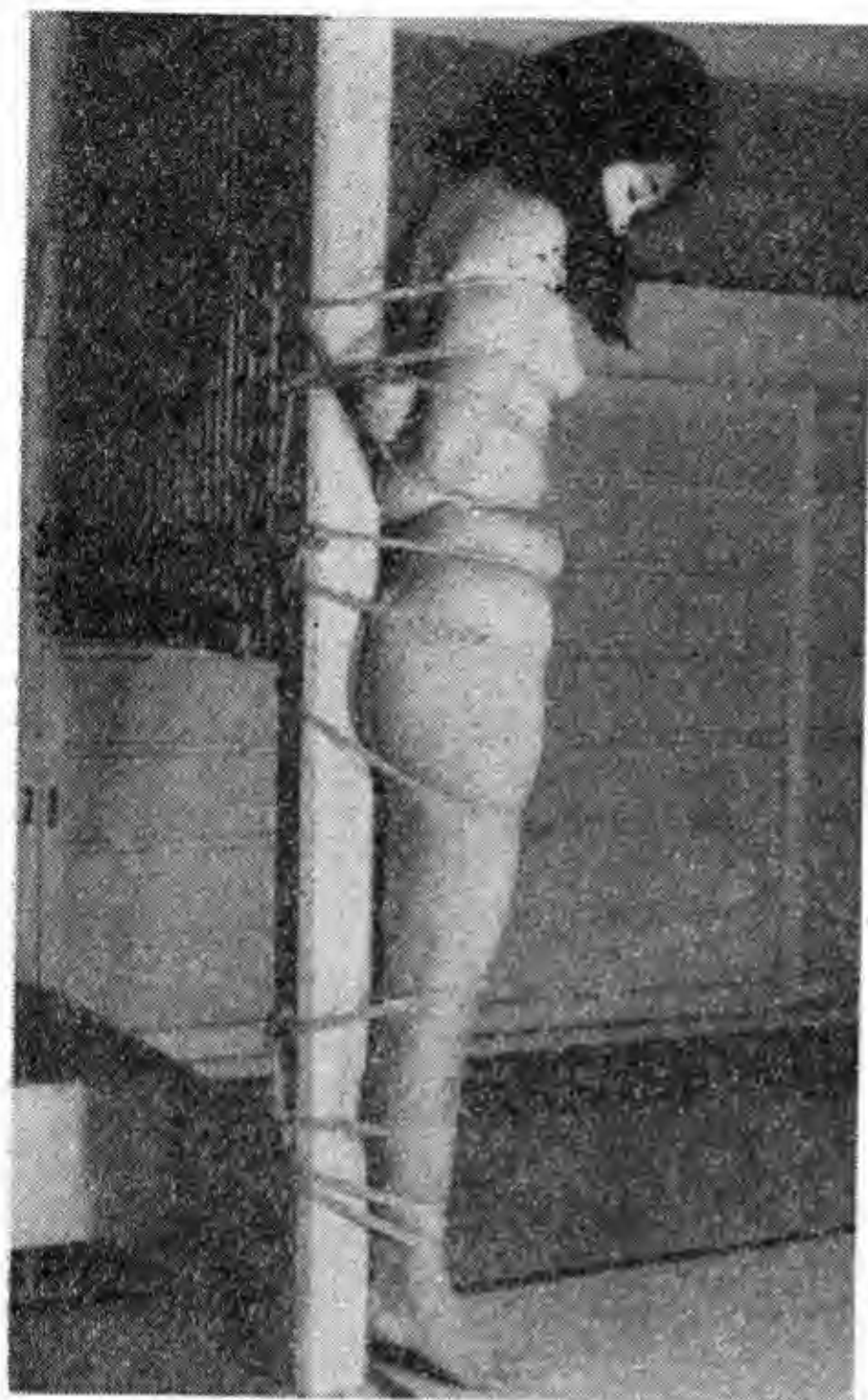
手足がくびれて、ちぎれそうになるきつい  
縛り方も、私はいはいはしません、それ以  
上に、あの静子夫人の受けたような恥かしめ  
がほしいのです。ああ、誰か、この私を静子  
夫人や京子さんのようにして、滅茶苦茶にも  
てあそんでくれないかしら。私はその嗜虐の



巷のなかで、ますます美しくなっていてゆきたいと願うのです。川田のような冷酷な男や鬼源のようなその道のベテラン調教師が、私の前に現われないかしら。

そのとき、ふと、私は先日編集部から回送してもらった読者からの手紙を思い出していました。「私は川田や鬼源になるような資格は持っていませんが、その他大勢のチンピラの役ぐらいは出来ると思いますので、是非私

を、貴女が責められている場面に立ち会わせて下さるようお願いします」と書いてありました。それを読んだときは、丁度私の空想の虫が、頭をもたげていなかったもので、ただ単に読みすごしていたのですが、今になって急にその手紙の文章が私を捉えて放さないのです。もっともっと厳しい責めのプレイがしてほしい、いや、今だったら、きっと自分の希望通りの舞台が手を受けて待ってもらえる。



そう確信するのです。

コーラの瓶を片手に、ぼんやりと物思いに耽って佇んでいる私の姿を眺めた人があったとしたら、何んと思うでしょうか。幸い人影はなく、私の空想は誰に邪魔されることもなく続けることが出来たのです。我にかえると私は電話の受話器をにぎっていました。

この前は、落ち合う場所がいまいだったため、お互いに探しあって三十分ばかり無駄に時間を費してしまった経験があるので、大阪と京都の丁度中間にある国道一号線沿いの寝屋川ハイウエーを指定しました。ここでしたら、少しぐらいの時間だったら、のんびりとコーヒでもすすりながら、モーテルで待っていていられると思ったからです。

プレイともなれば、もう足の爪先から頭までっぺんまで観察され、カメラに納められるのですから、やはり女として、自分の身体は美しく清潔にしておきたいのです。私はそのボーリング場の化粧室へ入ってストッキングを脱ぐと、ハンドバッグから爪切りを出しました。もともと、私はマニキュアもペディキュアもしたことはありません。自然の健康色で輝いている爪先が好きなので、頬べたの脂をつるっと塗って光らせるぐらいが関の山で

す。今日は足の爪が少し伸びていたので、深爪になるくらい切り揃えてヤスリをかけました。甘皮をはがしてコールドクリームをぬり込むと、自分の足ながら、可愛いく見えるのです。もう二時間もしたら、この足首に薄汚れたドス黒い縄が掛って、足指が苦悶にくの字に曲るくらい、情容赦なくいじめられることでしょう。

駐車場の砂利をきしませて、彼の軽快なタウナスがモータールに入ってきたのは、私が寝屋川ハイウエーに着いて二十分ばかりしてからでした。

「突然なので驚いたよ。我儕なお嬢さんなので、この機会をはずしたら、今度は又いつ逢えるかわからんなあ、無理して出てきたんだよ。準備はなにもしないんだが」

そう言いながら開けたトランクには、黒と白のボストンバッグに三脚、一米ばかりのハ・トロン紙に包んだ棒のようなものが、積み込まれてあります。すでに午後四時に近く、弱い冬の日ざしが長く尾を引いたように車の影をつくっています。彼がわざわざトランクを開けて私に何故撮影道具などを見せたのでしようか。或は明敏な彼は、いち早くカメラに弱い私の心を見抜いて、プレイに対する私の

期待をかりたてたのかも知れません。

「面白い場所を見つけてあるので、私の車のあとをつけてきて下さいね」

そう言われて、私は愛車の運転台の人となりました。そして思いはすでに自分が車を運転しているということも忘れて、捕えられた自分が後手に縛り上げられ、口には猿ぐつわを噛まされて後部座席にエビのように身体を曲げさせられて放り込まれているのだという錯覚をしていました。私は操り人形のように前の車について走っています。手足は正確な運動動作をくりかえしてはいますが、心はふわふわと、身体の中を抜けだして、被虐の世界をさまよっているのです。

枚方大橋を渡って高槻市へ、茨木インターから名神高速道路へ、そして目的の空中温泉へ到着するまで寝屋川ハイウエーを出てから小一時間かかりました。地下の駐車場へ車を入れると、エレベーターで五階まで上りました。エレベーターを下りたところが、ふわっとしたカーペットを敷いた廊下で、すぐ目の前に部屋の入口があります。

部屋へ入ってカーテンを開くと、磨ガラスを透して、眼下に大阪の街がすでに暮れてしまった夜のほとりの中に光の渦となって浮か

んできました。

「まあ、素敵！」

私は思わず声に出して叫ぶと、アルミサッシのドアを開けてベランダに出てみました。ひやっとした冷たい風が頬をなぞりましたが、熱気にほてっていた私には、かえって快く感じました。大阪タワーの灯が大海にただよう汽船のように、向うへ向うへと動いているように見えます。道路を走る車のヘッドライトが、美しい光線の綾を描いて、次第次第に濃さを増してゆく闇の中に、明るさを増してゆくように、私は眼の下の街の夜景にうっとり

と心を奪われていました。黒々と陰翳を残していた北摂の山々も、やがて黒一色の中に包み込まれてしまうと、私は、ひしひしとした孤独感にきゅっと胸のひきしまるような気持ちに襲われました。私は今この塔の中にとじ込められているのだ、そして、これから荒くれ男たちの手によって、さんざんに弄ばれるのだ、と自分で自分に言い聞かせるのでした。この塔の窓から外部を見るのは自由です。しかし、如何に私が泣き叫んだところで、騒音に包まれた下界の人達に聞える筈ありません。

完全に密室となった、この部屋の中で、私





は裸に剥かれて、後手にぎりぎりと縛り上げられ、そして、どのような羞しい目にあわされるのでしょうか。私はその期待に胸がふくらむ思いで、目の下の街の屋並みをもう一度

眺めてみました。ネオンサインやイルミネーションがさつきよりは、大分数が増えて、すっかり夜の態勢に入っています。何万、何十万という人達が、この屋並みの下に住んでいる。そう思うと、何か不思議な気持がするのです。私は美しいお姫様でありたい。そして沢山の人達に眺めていられたい。でも、それは、美しく着飾った、私ではなくて、美しい肌をあらわにして、縛り上げられ、いじめられている自分であってほしいのです。

ああ、なんということでしょう。こんな私の希望を普通の人が聞いたとしたら、きっと気狂い扱いをすることでしょう。でも、私の心の奥底に巣くっている妖しい虫は、いつも、こうささやきかけるのです。

——貴女は縛られていじめられれば、いじめられる程美しく見えるのですよ。そして、沢山の人達は、そんな貴女を、可愛いと思いい、可哀そうだと思いい、愛してくれます。もたえなさい。泣きなさい。

い。それがひどければひどい程、貴女は一層美しくなるのです——

「そんなところで寒くはありませんか」

突然、声を掛けられて、私は急に現実の世界にひき戻されました。

「ええ、とっても、きれいで——」

私はあわてて頓珍漢な返事をして、部屋へ戻りました。明るくて暖かい部屋、そこにはすでに運び込まれていた食事がテーブル狭ましと並べられてあります。

「一階に食堂があるのですが、わざわざ行くのも面倒だから運ばせましたよ」

そう言っすすめて呉れました。お昼はトーストだけで簡単にすました私ですので、もう腹ペコです。空想では可憐なお姫様も、現実では食欲旺盛な近代娘です。食事をすませたら、ゆっくりお風呂へでも入って、今日はひとつ、うんといじめられてみようかな、と食べながら身勝手なことを考えました。

でも、突然の私の誘いの電話で、こんなところへ、引っぱり出されてきた彼は、一体どんなことを考えているのでしょうか。と一寸同情してやりたい気持でした。

「ねえ、この前の写真出来た？ 見せてくれるって言ってたでしょう。全部見たいワ」

「そんなに自分の写真を見たいのかい」

「でも、みんな持ってきてくれるって、言っ  
てたじゃない？」

「じゃ、密着にでも焼いてみるか」

至って気のない返事です。私はすぐ自分の縛られている姿の写真を見たいのです。だから、この前別れるとき、次のポーズを研究するための参考として、撮影した写真は全部見せてほしいと頼んでおいたのです。写真に写される以上、やはり少しでも美しく、見よい写真になってほしいと願うのは、やはり女心のあらわれでしょうか。

まだまだ、写真にとられるという経験は浅い私ですが、第一回、第二回るときでさえ、縛られて身動きの出来ないまま転がされていても、今、自分はこういう恰好にされているか、カメラのレンズは今、自分のどこを狙っているか、よくわかるのです。そのとき、自分では精一杯の努力で、動かせるところは足の爪先に力を入れて曲げたり、床から頬を離してみたりするのです。でも足首に縄をかけて引き上げてほしいとか、髪をわしづかみにして引き据えてほしいとか、自分でやれないところは、他人にやってほしいと考えるのですが、口に出して言うのはとても恥しいので

只、心の中でそう思うだけにすぎません。

もし、自分の写真を手にとって眺めることが出来たとしたら、きつと素晴らしいだろうと思います。しかし、今日は突然私の方から誘ったのですから、準備がないのも当然でしょう。だけど自分の縛られた写真を見たいという気持ちの裏には、身を切られるような恥しさがこめられているのですが、そういうことを共通の話題にするだけでも、一面たのしいのです。恥しくて嫌だけど、心の奥底ではなんとなくたのしんでいるといった矛盾した気持ちなのです。

だから、次に写されるときに参考にすることをいうのも、一つの口実であって、実際は自分の縛られた姿の写真を見たいというのが本心かもしれません。

小説『花と蛇』を読んで感激し、静子夫人や京子になりたいと願った私ですが、又反面グラビアにのっていた梨花悠紀子さんや大塚啓子さん、関谷富佐子さんなどの写真を眺めて、自分もあぁなってみたくて、文章と写真の両方から、そして、それがこんがらがって空想と現実の見境いのつかなくなる私なのでした。それが今、その望みがかなえられ実際に自分が、そのヒロインとなって、肌に縄を

かけられようとしているのです。

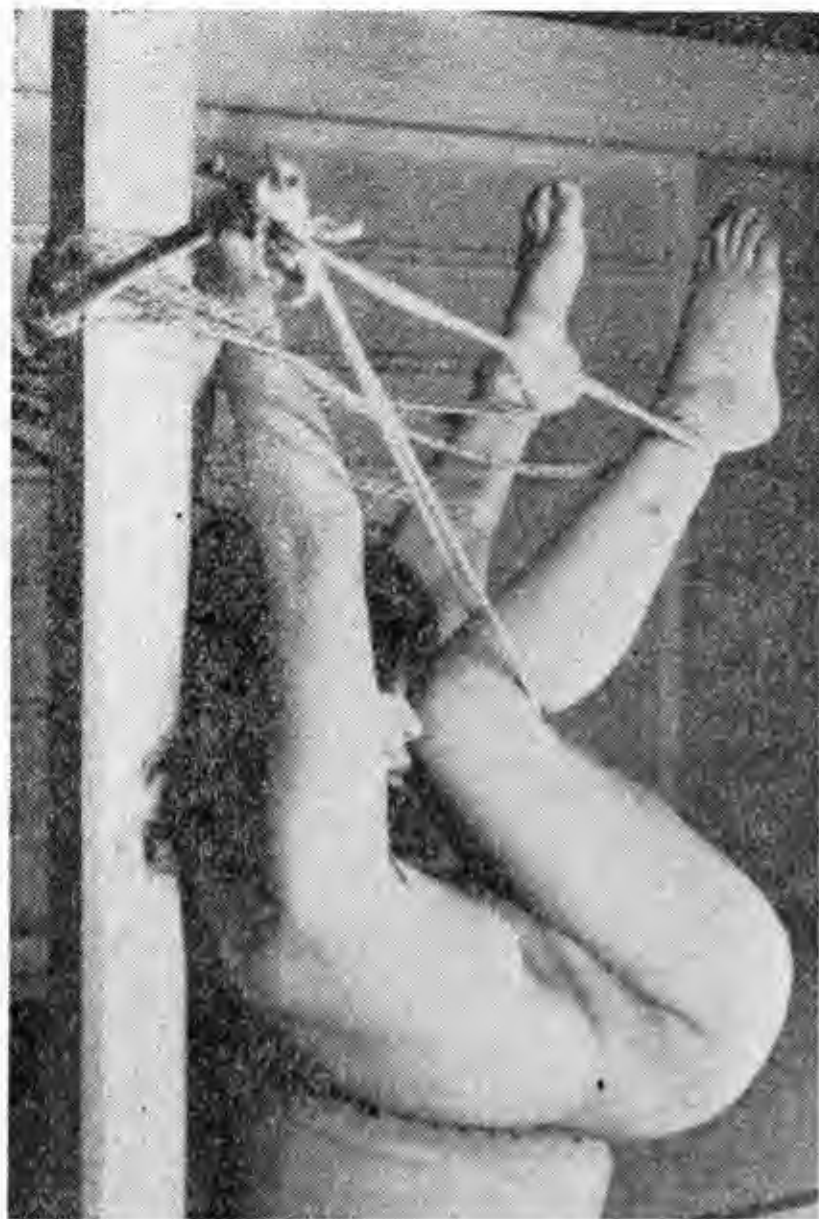
食事を終ってすぐ入浴するのはいけないと思って、私は撮影の準備が出来た間、もう一度ベランダへ出て、夜の街を上から眺めてみました。風はさっきよりは一層冷たく強くなっているようでしたが、満腹した私には、かえって、その寒さは快いくらいでした。

食事をした部屋は洋間になっていて、カーペットを敷いてテーブル、椅子を配し、マントルピースもあるのですが、隣りは杉皮の小さな屋根をつけた数寄屋造りの日本間になっていて、境になっていて戸や障子を取りはずすと、吊りには丁度適当したなげしや柱があらわれてくるのです。さっき行ったトイレが洋式だったことからしても、この空中温泉というのは外人客向けに設計しているのかもしれない。

とび込んだ浴室も洋式のバスです。淡いピンク色の浴槽は、私の頭のとっぺんから足の爪先まで、そっくりそのまま入ってしまいそうになる大きさです。つるつるしていて、両手を縁にかけていないことには、顔までお湯の中に浸ってしまいそうです。

カラスの行水であがると、すでに写す準備が出来ていて、私はまだ湯気のたっている身





体で部屋の中央に立たされました。まだまだ浅い経験ですが、こうして両手をうしろに回して縄で括られるとき、以前にも、いや、もっともっと遠い、私が生れる前のいつか、このようにして縛られた——と思えてくるのです。しかし、今、縛られて写真をとられるという現実を前にして、この前のときのような空想は湧いてきません。現実には、今から縛られるという楽しさや期待が強いからでしょうか、或はこの前の経験が、私を一歩前進させたからでしょうか。

とにかく、湯上りの裸身をライトの中に晒して、両手を背に回して、さあ縛って頂戴と観念したときの気持は、空想の入る余地のない程、充実した愉しさと胸がふくらんでくるのです。両手首を深く交叉したところを十文字に縄が掛って、腕と脇が密着するような気がします。更に縄は二の腕から胸へ、胸の上下を二巻きして背中まで縄止めます。縄が乳首に触れたとき、全身に電流を通されたような戦慄を覚えました。

三面鏡の前にあったスツールが柱の前に置かれ、私はその上に立たされました。爪先立つように言われたのですが、腰掛けるところがくるくる回るようになっていてそのスツールは、きわめて不安定で、上半身の自由を奪われている私には爪先立つことは無理で

す。それに表面はクッションがきいているので、爪先に力を入れて爪先立っても、なかなか踵まで浮いてはこないのです。

そこで更に柱に縛りつけられました。『花と蛇』によく出てくる立縛りというのでしょうか。膝の上と下、足首がきっちり柱と密着して括られ、最後に胸の縄が柱と連結されました。凄く緊縛感です。私の無防備の前面はすべてさらけ出されたことになります。ライトの位置がきまり、三脚に据えられたカメラが向けられました。ここでスツールがとられ私は柱に宙縛りになるところでした。そして私はそのときの凄く縄のしまりぐあいを、ひそかに期待していたのです。さて、スツールがこじられるようにして取られました。だが、宙に浮く筈の私の身体、両足の支えを失って、スーと下まで滑り落ち、両足の爪先が忽ち畳についてしまったのです。

今まで他のモデルの方のときは、うまく宙に浮いたそうですが、私のときは手加減をして緩く縛ったためでしょうか。本当はもっともっと、きつく縛ってくれても辛抱できたのに、この失敗には彼以上に私の方が気落ちしてしまいました。滑るとき肌をこすらなかったかと、気づかって呉れましたが、そんな

ことはありませんでした。折角だからというので、そのままのポーズで数枚シャッターが切られて、すぐ縄が解かれました。

三カ所ばかり最初に柱を縛っておいて、その縄尻りで、私の胸、股下、手首などの要所を括ったら、ずり落ちることはなかったでしょうが、私の身体と柱とを一緒にして括ったので滑り落ちてしまったのでしよう。でも私はしばらくの間でしたが、立縛りにあったのです。すぐに縄を解かれたので、時間的にして極く僅かの間ですが、それでも私はこのような姿で、数人の男女の揶揄の視線を浴びているのだと自分で思い込んでいたのです。その空想の余韻は、縄を解かれてからもややしばらく続いていました。

今度はスツールに腰掛けさせられ、両手を揃えて上へ挙げ、両手首を柱へ縛りつけられました。脇腹の筋肉がすじ張るほど、きつく引きあげられたので、腋の下が垂直に前面へさらけだされました。両手首が柱に固定された箇所から伸びた縄は、両方の膝頭と足首に掛けられました。『花と蛇』にもなかったような大胆なポーズで、私は心の中で気にいっておりました。そのまま、うしろからと側面から数回シャッターが切られました。私は

自分の前にいる筈のない異性を想像して、思わず身体中が燃えるように熱くなってしまった。

ひとわたり撮影が終ると、今度は私のお尻を据えているスツールの取りはずしにかかります。私の全体重をそれで支えているのですから、なかなか簡単にはとれません。ななめに傾けるだけで、両手首をくびるように力がかかり、両足首が思いきり開くのです。

両手首だけでは、とても私の全体重を支えて耐えるのは無理でしょう。もう先程から両手首を縛った部分は麻痺してしまって痛さは感じませんが、腋の下や脇腹が、針で刺されるように痛くなってきました。スツールを傾けるにつれて、両足先は益々開き、体重は膝頭に掛ってききましたので、本当にあられもない恰好になってしまいました。主として、側面、背面からシャッターが切られ、私の顔面の真横で反りかえった足首がアップで狙われました。四方から照らされるライトで、私の肌は真赤にほてっていたことだろうと、自分でもよく感じました。

長い時間のように思い、早く解放してほしいと思い、そして又反面、まだ傾きながら、僅かに体重を支えているスツールを全部とり

去ってしまったら、どうなるだろうかと考えたり、もっともっと、このまま長く放置しておいてほしいと考えたりしました。

私はあらゆる角度から撮影しつくされ、そして大いに満足しました。縄を解かれたときは、ぐったりとして、そのまま伸びたようになっっていました。快い疲労感の中にうっとりとして、夢幻の中を彷徨していました。きびしい緊縛感のあとに訪れた解放感、縛られたことの無い人には味わえないと思います。

私はくすぐったがり屋です。他人の視線が自分の肌のその部分を見つめていると思っただけでも、くすぐったくて堪らないのです。ですから、実際に自分の肌に他人の指がさわったりしたら、びくっと全身に鳥肌が立つほど戦慄を感じるのです。それが縄で縛られるということになると、どうしても、肌の鋭敏な個所に触れられることになります。その都度、私は全身を貫くくすぐったさを辛抱するため鳥肌が立ちます。

ぶるぶると身体をふるわせて鳥肌が立つのですから、寒いのではないかと思われそうですがそうではないのです。縄が解かれるときでも腋の下や乳房がこすられると、二の腕や胸のあたりに、寒いほのような鳥肌がみるみるう





ちに、はっきりと現れてきます。感受性が強いというのでしょうか。そんなとき、私は太股をびたりと合せて、爪先に力を入れ、両腕で胸をかかえて、じっと辛抱するのです。

五分ばかり、そのままにしていると、この発作もやがて納まります。そして、そのあとでは快い弛緩が恍惚として襲ってくるのが常なのです。今の縄からの解放感も、それに似通っています。

うす紅く残った全身の縄のあとを消すために、私は浴室へ入りました。脱衣室には全身

をそっくり映せる姿見がとりつけてあって、裸になると、いやでも、自分を見つめてしまうのです。両手を挙げて首のうしろで組んでポーズを試みました。自分の裸身を、このように、近々と眺めるということは、私にとっても興味のあることです。ところどころに残っている縄のあとが、へんに生々しくて調教の終わった静子夫人が鬼源の監視のもとで、これから、牢舎へ送られて行くのだと、自分の立場を想像してみたりしました。

バスにお湯のたまる間、シャワーで少し熱

い目のお湯を浴びました。頭にタオルをかぶって、首筋から、胸、お腹、太股それから背中へ回ってお尻、怪から足先へ。まんべんなく激しいお湯のしぶきを浴びせてゆくと、水の玉が肌の脂にはじかれて、ころころと

面白いようにころがってゆくのです。お湯によるマッサージが全身の肌に刺激を与えてくれます。シャワーのひとり遊びをもっと続けたいのですが、帰るのが余り晚くなってもと思い、溢れそうになっているバスの中へざぶんと飛び込みました。

エレベーターで地下の駐車場まで降りると今までの天国のような暖かさとは逆に、思わず身ぶるいするような寒さです。車の中も冷えきっていますので、シートに腰をおろすと思わずぶるっとしました。

「次には吊りをやろうね」

別れぎわに、わざわざ私の車の脇まできてそう囁やくと、彼の車は駐車場を出てゆきました。室内に暖気がようやくめぐってきたころ、茨木インターチェンジのランプウェイがフロントガラスの彼方に、ちかちかと吊り提灯が揺れるように見えだしました。

私の身体の中に定期的にうごめきだす空想の妖しい虫の発作は、ようやく欲求不満から解放されて、さっぱりした気持で夜のハイウェイを快走する車の快い振動に身体をゆだねていました。この次に、この妖しい発作の虫が動きだすのは、いつのことでしょうか。





「へへへ、そういつて頂くと、こっちも張り合いがありますよ。だが、津村さんて、見かけによらず、おっかねえ人なんだな」

川田にそういわれて、義雄は片頬を歪めて苦笑しながら、

「さし当って、ニューフェイスの小夜子嬢はこういう調教から始める事になるんだろ」

「そうですね。まず、最初は簡単なものからですよ。鶏のお産ってところでしょかね」

鶏のお産？ と義雄が奇妙な顔を見ると、川田は、ニヤニヤ笑いながら、スタンドの上の皿の中から卵を一つとり、指の輪の中へ押し込んで見せる。

「ポトリと生み落すわけですが、それにしても、あの御令嬢は女になったばかり。初步の芸当だといっても、よほど——を鍛えなきゃこいつにしたらって、なかなか骨の折れる仕事ですよ」

ハハハと義雄は大きく口を開いて笑った。気品のある美しい令嬢が、やくざ連中の見守る中で、卵を産み落して見せる——その場面を想像して、思わず吹き出したのである。その時、ドアが開いて、井上がのっそり入って来た。

「津村さんに逢いたいって人が二人見えまし

たぜ」

井上の後から、ひょこひょこ入って来た奇妙な服装の二人の客を見た義雄は、チェツと舌打ちした。

それは、春太郎、夏次郎という名で通っているシスターボーイであった。義雄は一時、自分をカモフラージュするために容貌まで作り変え、シスターボーイになりきって、あちこちの街を徘徊していた事があったが、その時知り合ったのがこの二人で、彼等は渋谷のゲイバー「ロン」に勤めている。東京へ久しぶりに出て来た義雄は、この昔懐かしい「ロン」で一夜、遊び、酔ったまぎれに「俺はここにいます。一度遊びに来い」といって、田代の屋敷に至るまでの地図を書いて渡したのであった。

「あら、お兄さま」

と叫び、二人のシスターボーイは、義雄に飛びついて、キャッキャッと嬉しそうに飛び跳ねるのだ。

二人とも、どぎついアイシャドウをぬり、毛虫のようなつけ睫毛、大きな金色の耳飾りをぶら下げて、義雄にチャラチャラまといつくのであった。

「どうしたんだよ、お前達」

「あら、どうしたんだよとは御挨拶だわね。お兄様が遊びに来いとおっしゃったから、こうして、遠路はるばるやって来たのじゃないの」

義雄は酸っぱい顔をした。秘密の場所になっっているここをつい口をすべらせて、このシスターボーイにしゃべってしまい、傍にいる川田や吉沢達に対しても何となくバツが悪かった。

「いいか、お前達、ここを他の者に絶体口外するんじゃないぞ。そうでなきゃ、大変な事になるからな」

と、シスターボーイ二人を睨みつける。

「わかってるわよ。でも、ここ、随分と大きなお屋敷ね。たまげちゃったわ」

二人は、キョロキョロ部屋の中を見廻しながら、義雄をはさむようにして、スタンドに坐り、臨時のパーテンをしているチンピラの竹田に、「ねえ、ハイボール頂戴よ」と注文するのであった。

「津村さんも、中々、変った趣味を持ってるですね」

と川田と吉沢は、顔を見合わせてニヤニヤ笑う。義雄も苦笑して

「まあ、趣味というほどのことでもないんだ

が、この二人のシスターボーイには、昔、色々と厄介になったのでね、今でも、こうして時たまつき合ってるんだが」

「つまり、こういう連中は」

吉沢が聞いた。

「全然、女にや興味はなく、野郎の方にだけ興味を——」

「あら、失礼ね」

春太郎が口をとがらせて吉沢の方を見た。

「そういうのはゲイボーイ。つまり、おかまよ。私達はシスターボーイ、女性的男性でわけよ。充分、女性を満足させる能力だってありますわ。並以上よ」

春太郎がすねて見せ、そんな事をいったので、川田も吉沢も笑い出した。

「ね、それより、このお屋敷には、すごい美人が揃ってるといふ事じゃないの。ね、津村さん、そのうちの一人だけでもいいから、一寸紹介して頂けないかしら」

「ハハハ、紹介してくれはよかったな」

義雄は、煙草に火をつけながら笑い出したが、ふと、吉沢に視線を向け、

「あんたが女にした女は、かなりの美人だぞうだね。どうだろう。一寸、この連中に顔だけでも拝ませてやってくれないか」

「ま、津村さんの頼みとあっちゃ聞かねえわけにゃいくめえ」

吉沢は、コップのビールを一息に飲むと立ち上った。

「美人は美人なんだが、仲々のじゃじゃ馬なんだ。亭主の俺をまだ充分に乗せようとしねえ。一つ、皆んなで意見してやってくれよ」

そんな冗談口をたたきながら、吉沢は部屋の外へ出て行く。

数分後、吉沢は、京子を引き立てて部屋へ戻って来た。

「まあ、すごい美人だわ」

春太郎と夏次郎は、吉沢に肩を抱かれるようにして戸口の所に立っている京子の美貌と均整のとれた美しい裸身を見た途端、溜息をつくようにして、スタンドから立ち上った。

見事な盛り上りを見せている胸の隆起の上下は麻縄で締め上げられ、わずかに腰の廻りに手拭を巻きつかせているだけの緊縛された裸身というのにも、シスターボーイは驚いたようである。

「俺の女でも、こいつは商売もんだからな。」

規定として、こういう恰好をさせとかなきゃならねえ。ここだけは、ま、武士の情だ。隠させてやってくれ」

吉沢は、京子が腰に巻いている日本手拭の上を手でたたいて笑うのだった。

背後から、吉沢の大きな手で、肩を支えられるようにして、直立している京子の、屈辱を噛みしめ、眼を閉ざしている美しい横顔を見た義雄は、おや、と小首をかしげた。どこかで見た事のある顔なのだ。

「わあ、なんて美しいおねえ様」

「すばらしい体をしているわ」

春太郎と夏次郎は、何かに憑かれたようにフラフラと京子の傍へ近寄って行く。

「おっと、今いったように、この女は、俺の女であって商売もんだ。そう簡単に触ってもらっちゃ困るぜ」

吉沢は、さっと京子の前へ立ち上がり、近寄って来たシスターボーイを追っ払うようにする。

「これだけの美人のストリップを無料<sup>ただ</sup>で見たんだ。有難く思いねえ。お触りだけはごめんだぜ」

吉沢は、ニヤニヤ笑っている。

「まあ、ずいぶんとケチね」

二人のシスターボーイは、口をとがらして吉沢の顔を見たが、すぐに視線を吉沢の背後に立つ京子の方へ向けた。



スラリとよく伸びた肢体、豊かな乳房、はち切れそうな腰から尻にかけての肉つき、そして、官能味をたっぷり湛えた太腿——スタンドから眺める義雄も思わず生唾をのみこむのである。

「迂闊に近寄ると、この女は、これでも唐手二段の腕前なんだぜ。両手はこうして縛ってあっても、この見事な肢が急に跳ね上って、アッパーを喰わされるかも知れねえぜ」

吉沢が、シスタボーイ二人に、そういった時、義雄はわかった、と口に出して、椅子から立上った。

「その京子っていう女は、山崎の秘書をやっていた女探偵じゃないかね」

えっと吉沢は義雄を見て、

「なんだ、津村さんは、この女を御存知なんですかい」

「ああ、俺の弟が、この女の手にかかって、警察へあげられた事があるんだ」

ええ？ とそれには、川田も驚いた。

二年ばかり前、津村義雄の弟の清次は、不良グループと共に盗んだ車であちこち乗り廻し、時々、若い女性を車中へ引きずり込んでいたずらをするという非行を続けていたが、或る夜、人通りのない道を歩いている女性に

目をつけ、車の中へ引きこもうとしたが、運悪くそれは唐手二段の腕前を持つ京子で、三人の不良は、またたく間にのされてしまい、警察へ突き出されたのである。

義雄に、その話を聞かされた二人のシスタボーイは、

「へえ、こんな美しい顔をした、おねえ様がねえ」

と、眼をパチパチさせ、信じられぬ面持で京子を眺める。

吉沢は、京子の肉づきのいい白い肩に手をかけて、

「今、津村さんのおっしゃった事に間違いはねえのかよ。え、どうなんだ京子」

京子は、ふと顔を上げ、近づいて来た義雄の方へ憎悪のこもった瞳をチラと向けたが、すぐに顔を横へそむけた。

義雄がいう通り、二年ばかり前の或る夜、突然、襲いかかった三人の不良を空手で倒した記憶が京子にあった。その三人の顔も、はつきりと京子は覚えていた。その中の一人がこの津村の弟であったとは。京子は得体の知れぬ恐怖に打たれて、義雄の邪悪な眼から必死に顔をそらせるのである。

「とんでもねえ事をしやがったな。やい、京

子」

吉沢は、義雄に対する追従の意味からか、わざと力んで激しい口調になり、いきなり京子の耳を引っ張るのだった。

このような羞しい捕われの身に対し、二年前のそんな事件を持ち出して、一体、これからどうしようというのか、京子は、口惜しさとも悲しさともつかぬものを、ぐっと呑みこんで、歯を喰いしばっている。

義雄は、しばらく、そんな京子に陰険な眼を向けていたが、ポケットから小さな宝石箱を取り出して吉沢に示した。

「これは五十万はするダイヤだよ」

義雄が箱を開けて見せたダイヤに吉沢は、ごくりと唾を呑みこむ。

「そ、それをどうするんだ」

「この京子さんを二三日、こっちへ譲って欲しいんだ。弟達をここへ呼び寄せて二年前の恨みを返えさせてやりたいと思うんだよ」

「恨みをねえ」

吉沢は、一寸、苦い顔をしたが、義雄のちらつかせるダイヤに眼がくらんでしまったのである。それに、義雄の気嫌を損う事は、岩崎親分の気分を損う事にも通じると計算したのであろう。吉沢は、へへへ、と相好をくず

し、義雄の手より宝石箱を取り上げた。

京子は、それに気づくと、はっとしたように吉沢に身を寄せるようにして、

「吉沢さん、お願い、あれは自分の身を守るためにした事なのよ。この人達に私を引き渡さないで！」

と哀願する。

「おめえともあろう者が、今更うろたえるなんて、みっともねえぜ」

吉沢は、突っ離すようにいい、

「じゃ、津村さん、この女は二三<sup>すけ</sup>日、そっちへお譲りしますぜ。なかなかのじゃじゃ馬ですからね。素直に弟さん達の仕置を受けるかどうかは、こっちも受け負い兼ねますがね」

そういつて、吉沢は身を引いた。

京子は、ドアに背を当てながら、前へ近づいて来た義雄と二人のシスターボーイに必死な眼を向けている。近寄れば、喘みつくようなそのせっぱつまった京子の顔を見た義雄は「なるほど、これは、なかなかかきかん気の鉄火姐さんだな」

と、スタンドに坐った吉沢の方を顧る。

「そうなんですよ。ちょっとやそつとじゃ、自分の亭主だつて乗っけようとした女なんですからね。全く嫌になりますよ」

吉沢がそういつたので、川田も竹田も笑い出した。

美津子を自分の女に出来なかった吉沢に同情して、田代や森田が共謀し、美津子を囮に使得京子を説き伏せ、吉沢の女に仕立て上げたのだったが、夜毎の夫婦関係を京子が円滑に行う筈はなく、裸身を緊縛されていてさえ京子は激しく拒否つづけるので、その度、吉沢は美津子を口実に使い、つまり、美津子を京子の目の前で凌辱するとおどし、やっこのことだと思いを遂げていたのである。それは川田も森田も知っていて、やり切れねえ亭主とは、あの事だと陰で笑っていたのだが、そうした忿懣を京子に対して抱いていた吉沢だけに、京子の身柄を五十万のダイヤと交換に津村義雄に二、三日譲ったというのも、いわば、その復讐であつたのかも知れない。

義雄は、ふと何かに思いついたようニヤリと口元を歪めて、二人のシスターボーイの顔を見た。

「お前達、この鉄火姐さんの腰につけている手拭をここで剥ぎとってみろ。先に剥ぎとった方へ、この姐さんを今夜抱かせてやるよ」  
え、ほんと、と二人は義雄の方へ向いた。  
「ハハハ、ところがこの姐さん、両手は後手

に縛られていても、唐手二段の腕前だ。油断をすると、足技をかけられて素っ飛ばされるかも知れないぞ」

と義雄がいうと、なるほど、そいつは面白いゲームだ、と川田や吉沢は笑い出し、シスターボーイと京子の鬼ごっこをより面白くするためにか、部屋の中央部にあるソファやテーブルなどを隅の方へ押しやるのだった。

次に義雄は、部屋の隅に身を硬くして、青ざめた表情を見せている京子に向かつていう。

「鉄火姐さんとしても、こんな化物みたいな男と寝るのは嫌だろう。それなら、暴れ廻つて、その一枚を守り抜くんだ。シスターボーイ達がキリキリ舞いをして参っちゃったら、勘弁してやるからな」

いくら相手がシスターボーイであっても、緊縛された身で、腰を覆う一枚の布を守り抜ける筈はないが、唐手の心得があるこの鉄火娘が、この女形の男達に対し、どのように抵抗し、逃げ廻るか、それを酒の肴として見物する魂胆であつたのだ。

しかも、京子の腰を覆う薄い安手の日本手拭は、一本の安全ピンと豊かな尻のふくらみとで辛じて支えられているだけ、風吹かば散



らんずといったあぶな絵のような風情を見せている。

「そんな事、赤ん坊のおしめをかえるとい簡単よ。任しといて」

というや二人のシスターボーイは、我先にと争い合うようにして、京子に迫った。

その途端、はっと体を針のように緊張させた京子は、壁に背を押し当てながら、二人に憎悪のこもった視線を投げつつ、横へ横へと逃げていく。

「逃がさないわよ」

夏次郎が妙になよなよした腰つきで追いかけて、春太郎は京子の逃げようとする方向を手を開けてさえぎった。

「ここは地獄の一丁目。身ぐるみ脱いで行きやあがれ」

芝居もどきで春太郎が見栄をきって見せたので、スタンドの見物人達は手をたたいて笑った。

文字通り、赤児の手をねじるようなものさと春太郎も夏次郎も、たかをくくっていたのだが、形勢はにわかに逆転した。

京子のそれを奪い取ろうとして、右と左から同時に二人は襲いかかったが、京子がさつと体をひねって横へ飛んだため、二人は額と

額の正面衝突をしてしまったのである。

「あっ」と夏次郎は、額を押さえてその場にうずくまってしまう。頭を打って、うずくまるにしても、芝居の女形のように、なよなよとしてくずれ落ちるので、見物する川田や吉沢は思わず吹き出してしまった。

「や、やったわね」

仲間がやられたと見て、春太郎は、キツとした表情になり、逃げた京子を追う。

「こう見えてもね。私じゃ店じゃ喧嘩上手のお春って名で通っているんだよ。何にさ、美人面を鼻にかけて。その高慢な鼻柱をたたき折ってやるわよ」

夏次郎が怪我をしたと見て、このようにいきり立つところを見ると、この二人のシスターボーイは一種の同性愛関係にあるようだ。愛すべき女房役のお夏がやられたので、お春は、その仇をとるような意気込みなのであった。

そんな春太郎に対して、京子も、怒りに燃え、燐光のような瞳を注ぎつつ、じわじわ後退して行く。

「何さ、その顔」と春太郎は顎を突き出すようにし、ふと、床の上をすっている京子の縄尻に気づくと、しとめたばかりそれをひった

くろうとした。

それを取られては万事休すと思ったのか、京子は身をかがめようとした春太郎に体当りを喰わせたのである。

あっと春太郎は、床の上へ転倒した。

見物の川田達は手をたたいて笑いこける。

「何にしてるんだよ。相手は両手も使えねえ裸の女じゃねえか。ざまったらねえや」

床の上に這いつくばっていた夏次郎が、今度は愛すべき亭主の危機と感じたのか、よろよろと立ち上り、壁伝いに京子の背後へ廻っていく。そして、京子の油断を見て、いきなり背後から襲いかかった。

「あっ、は、はなして！」

夏次郎に肩を抱きすくめられた京子は逆上して、必死に身を揺すった。

急所を押さえて、京子の死命を制するつもりなのか、夏次郎は、縄に緊め上げられている豊かな美しい二つの乳房を力をこめてつかみあげる。

「お春、早く、早く！」

床に転倒して、したたか腰を打ち、顔を歪めつつづけている春太郎に対して夏次郎は大声をあげるのだった。

春太郎は、ようやく立ち上り、眼をつり上

げて、まず、「口惜しい！」と叫び、京子のそれをいきなり剥ぎ取ろうとしたが、それより早く、京子のスラリとした見事な肢は分銅のように跳ね上って、春太郎の脇腹を蹴り上げたのである。

「ギャー」と春太郎は大仰な声を上げ、もう一度、床の上へ顛倒、そして、今にも死ぬような声をはり上げて、その辺をのたうち廻るのであった。

春太郎を倒したのと同時に京子は背後からしがみついている夏次郎を狂ったように体を揺すって振りほどき、さっと腰をかがめて、夏次郎の鳩尾ひずおちのあたりに肩先をぶつけた。

「うっ」と夏次郎はうめき、そのまま、京子の足下へくずれ落ちる。

緊縛されたままの裸身を柔軟に、そして、敏捷に動かして、二人のシスターボーイを倒してしまった京子をスタンドの義雄は呆然とした面持で眺めている。義雄だけではなく、川田も吉沢も、京子のまるで振りつけられた



殺陣たてでも演じるような見事な技にすぐには声も出ないのだ。

ありとあらゆる羞しめやいたぶりに会いながらも、その美貌と見事な空手の技は損われていない、という事に驚くとともに、吉沢や川田は、このじゃじゃ馬を完全に乗りこなすためには、まだまだ相当な調教が必要だと、うんざりした気持にもなるのである。

「なかなかやるじゃないか。成程、それだけ

の腕を持ってるんだ。弟達のがのされちまったのも無理じゃないよ」

義雄は、そういって、吉沢と川田の耳もとに口を寄せ、何かひそひそささやいた。

「へい、へい、よくわかりました」

と、吉沢は大きくうなずいて、京子の方をニヤリと見て見た。

部屋の一隅に身を寄せ、激しく肩で息づいていた京子は、吉沢と川田が近寄ってくると再び、身を硬直さ

せ、柳眉を逆立てるような表情をした。

「ち、ちか寄らないで！」

今までの乱闘の興奮が覚めやらず、京子は吉沢達に、はっきり敵意を示したのだ。

「おっと、そうこわい顔して睨むなよ。もっとも、おめえは、そうして怒ると一段と美しくなるがね」

吉沢は、そんな事をいいながら京子に近づいた。



「津村さんより、お許しが出たんだよ。津村さんは約束は守る人だからな。おめえのような男勝りの鉄火娘を、シスターボーイなんかの相手をさせるのは可哀そうだと、おっしゃるんだ」

さ、行こうぜ、といって、吉沢は京子の縄尻を拾い上げる。

京子が吉沢と川田に引き立てられ、部屋を出て行くのを義雄はウイスキーをなめながら眼を細めて眺めていたが、三人の姿が消えると、床に這いつくばって、呻きつづけている春太郎と夏次郎の傍へ歩み寄った。

「しっかりしろ。何んだ、今のさまは！」

と大声を上げ、二人の尻を足で蹴った。

春太郎と夏次郎は、互いに助け合うようにして、ようやく立ち上ると、わっと泣きながら義雄に取りすがる。

「津村さん。あんな女にやられちゃって、私じゃ口惜しい」

二人は、義雄の胸と背に顔を埋めて、肩を震わせるのだ。

「口惜しいのはお前達より、こっちの方だ。」

あの女は弟の仇だからな。だが、弟達をここへ呼び寄せるにしても、ああいう鉄火娘ならまた昔の二の舞いになるかも知れない。だが

ら、弟達がここへ来る前に、お前達もう一度あの女と対決するんだ」

それを聞くと、夏次郎は、ブルブルと震えて、

「嫌よ。あんな強い女。それに私、喧嘩なんて得意じゃないもの」

義雄は、鼻で笑いながら、

「お前達が、対決するってのはな、あの女のだよ」

「ええ？」

「お前達がよく俺に教えてくれた三カ所責めとか四カ所責めとかいうやつで、あの女を夕方までに骨抜きにしようんだ。今、京子と出て行った二人の男が、身動きのとれねえよう京子を縛りつけてくれるからな」

それを聞くと、二人のシスターボーイは、顔面に喜色を一瞬漲らせ、

「それなら、任しておいてよ。絶体に自信があるわ。アメリカ兵から教わった方法なんかを取りまぜて、畜生、あの女、絞るだけ絞りとって、ガタガタにしてやる」

ハハハ、と義雄は愉快そうに笑った。

「そうだ。それから、弟と唐手の試合をさせる。弟の奴は、女にのされた口惜しさから、今、唐手の修業中だからな。どうあっても、

昔の復讐戦をさせなきゃなるまい。弟に勝たせるためにお前達一肌脱ぐわけさ。どうだ。そう思えば、いよいよ楽しくなるだろう」

義雄は、なおも笑いつづけ、ウイスキーを口へ運ぶのである。

## 化物の計画

小夜子が、義雄のおぞましい羞恥責めに会い、遂に花を散らせた女中部屋へ、川田と吉沢は京子を引き立てると、天井の梁より垂れ下がっている太いロープに縄尻をつないで、たるんだロープを力一杯引きしぼり、京子の伸びた肢体をピーンと一本の棒のように直立させた。

「こんな所へ私を入れて、一体、どうする気なの」

京子は、冷たい板の間にびったり両肢をそろえて、再び、全身を緊張させ始める。

ただ、一寸、おめえに話があるだけだ、な」といいたが、吉沢と川田は、京子をそのような立縛りにしたのであるが、木槌を使つて、竹ぐいを京子の足下、一米ぐらいの間隔をおいて、コンコン打ちこみ始めたのだ。

それを見ると、京子は、背筋に冷たいもの

が走り、

「ね、それはどういう意味なの。はっきり、おっしゃって」

と、激しい語調になって、川田と吉沢にいうのだった。

仕事を終えた川田は、へへへ、と頬を歪めて立ち上り、

「一寸、さっきは、シスターボーイを痛め過ぎたようだな。そうは思わねえか」

京子は、川田のその言葉に、ぞっとするような戦慄を感じ、思わず、ぴたりと両腿を密着させた。

「ま、まさか、あの男達をこの部屋へ——」

京子は、青ざめた顔つきになり、唇をわなわな慄わせる。

川田や吉沢達は、共謀して、先程の復讐をあのシスターボーイ達の手で行わせるべく、自分をこの部屋へ連れこんだのでは——そう思うと、京子は、知覚の消えそうになる恐怖を感じたのである。

「なかなかいい感だぜ、京子。いくらシスターボーイでも、俺達の見ている前で、ああいう目に会わされちゃ、恰好がつくめえ。それにあいつ等は、大事な客人・津村さんの友達だ。一応、詫びを入れねえと、こっちも立場

上具合が悪いんだ。な、わかるだろ、京子」

吉沢は、煙草を取り出して口にしながら、せせら笑うようにいう。

「嫌っ、嫌です？ それだけは堪忍して」

京子は狂ったように首を振った。

詫びを入れる、という事が、どういう事か京子はこの男達のやり方は大体想像がつく。

あの男が女かわけのわからぬ虫ずの走るような連中の前で生恥をかかされるなど京子は想像するだけで呼吸が止まりそうになった。

「ど、どうして、私が、あの化物達に詫びを入れなきゃならないの。あ、あんまりだわ」

胸をついて溢れ出そうになる慟哭を全身で耐え抜くようにして、京子は、美しい髪を左右に振りながらいうのである。

「化物とはよかったな。仲々、うまい事いうぜ、京子」

吉沢と川田は顔を見合わせて笑う。

「だがよ、何と云ったって、先方は大事な客人だ。それに、詫びを入れると云ったって何時も俺達がやるような、ああいういやらしい事をさせられるとは限らねえ。何んせ、奴等はシスターボーイだからな。二三発、横面をひっぱたかれるか、髪の毛を引っばられるか、それ位の事ですむと思うよ」

「ただし——」

今度は、川田が京子の前へ立った。

「奴等に対し、生意気な態度をとりゃとんだ事になるぜ。心から、奴等に暴力を振った事の詫びをいい、女らしく柔順な態度を示さねえと、美津子に火の粉が掛る事になるんだ。おめえの態度が気に喰わねと奴等はそこにあるブザーを三つ押す事になる。すると、俺達は美津子をここへ、しゅっ引いて来る事になっているのだ」

えっと京子は硬化した顔を上げた。

吉沢が、それ見ろといわんばかり、横からぬーと顔を出して、

「何も驚く事はねえじゃねえか。おめえが奴等のいうまま何んでもハイハイと素直になつてりゃいいんだよ。もし、そうでなきゃ、美津子がおめえの見ている前で、奴等のおもちやになるんだぜ」

それだけではなく、客人に失礼な態度をとったと田代社長に告げ、これからは、美津子と姉妹コンビにして鬼源の調教を受けさせる事も出来るんだぜ、とつけ加えて、吉沢に念を押されるに至って、京子は、観念の眼を閉ざすよりなかった。

「よし、どうやら納得がいったようだから、



俺は奴等をここへ連れてくる」

川田は戸口へ歩き出す。

「川田さん。待って——」

京子は、ドアを開けようとする川田を呼び止め、何かを訴えるような物悲しい色を瞳に浮かべて、

「お願いです。京子、あの人達を、ひどい目に会わせた事はお詫びします。ですから、川田さんから、あの人達に——」

淫らな責めだけはしないように川田より頼んでくれるよう京子は哀願するのであった。

「よし、わかったよ」

川田は、冷笑して、ドアを開け、廊下へ出た。

ホーム酒場へ入ると、義雄は相変わらず、ウイスキーを飲み、春太郎と夏次郎が何やら紙に書いて指で示しながら説明するのをニヤニヤしながら聞き、時々、大声で笑い出したりした。

部屋の中へ入って来た川田に気づいた義雄は、

「今、こいつらを連れて、一寸、調教室をのぞきに行ったんだがね。鬼源さんから、こんなものを借りて来たよ」

スタンドの上には、鷲鳥の羽、浣腸器、ガ

ラス棒、スポンジ棒、ゴム人形、小瓶に入ったぬり薬、チリ紙、脱脂綿、それに例のものが入った桐の箱などが、ずらりと並べられている。

へへえ、と川田は呆れ顔になり、ふと、二人のシスターボーイが盛んに何やら書きこんでいる大きな紙をのぞきこんだが、思わず、吹き出してしまった。

それは、彼等が丹念に書きこんだ女の拡大図であったが、専門家しか知らないような各部分の細かい名称をぎっしりと書きこんでいる。傑作なのは、その紙の上段に大きく横書きで、京子の××××攻略作戦地図と書かれている事であった。

「あれだけの鉄火娘を本当に泣かせるには、容易な事じゃないといい出してね。ここで作戦会議を開いてやがるんだ。まあ、聞いてごらんよ、全く笑わせるぜ」

義雄は、肩を揺すって笑いつづけるのだがシスターボーイ二人は真剣そのもので、最初はどうしが甲側を持ち、どちらが乙側を持つかという事を取りきめにかかっている。

「何でい、その甲側とか乙側ってのは」

川田が奇妙な顔して尋ねると、

「甲側ってのはね、上半身。乙側ってのは下

半身の事よ。女は全身が性感帯だというでしょ。甲側にしたって、まず乳房、乳頭、耳、首筋、脇の下、数えたらきりが無いわよ」

夏次郎は、鼻をピクピク動かしてそういうのだ。

乙側にしたって、刀を抜かない単に指先だけの攻撃方法でも、Aコースから乙コースまで、二十四通りもあると聞かされて、色事師を任じている川田も、へへえ、と驚いてしまった。彼等は、そういう事を店に集まる好色な中年の客に一つ一つ教示し、時にはパン助をモデルにして実地指導をやっているというのだから、たしかに、この道の専門家には違いないが、時折、ゲイ趣味を持つ男客の相手もするという両刀使いでもあるだけに、女体に対するあこがれという事もあるのだろう。そうした技巧にかけては、達人の域に達しているのである。そういえば、なよなよした身のこなしとどぎつい化粧に隠されているものの、仔細に見れば、二人ともかなり年をとっている。春太郎は四十近く、夏次郎は三十に近い年令で、十七八の頃から、あちこちのゲイ酒場やシスターボーイ酒場を転々とし、泥んこ人生を歩んで来た男なのであった。

彼等は、その道の奥儀を極めている、と義

雄は、川田に笑っているのだが、たしかにその通りで、たとえば、そのAコースというのにせよ、彼等の説明によると、アヌーちゃん（彼等はそう呼んだ）に少くとも、十五分はゆっくりと刺戟を与え、それからゆっくりとヴァギー海峡を上昇してクリスちゃんをいじめにかかり、これを何度くり返すというのだが、あっちの方だけを主眼に、そんなに長時間責めるといふ事など、川田には珍らしい話であった。

「Bコースでは、クリスちゃんを主眼に責めるのね。そして、コースはAとは逆に上から下の方へと移向するのよ。不規則に責めるのは駄目。一定の間隔をおいて気長に責めるのがコツよ。本番に入れば、女の方は三分も持たない。つまり、それまでに絶頂附近にたどりつかせるのが、この道の通なのよ。本番を一時間も二時間も続けるってのは、野暮天だわ」

「なるほどね。それじゃ、俺なんかは大野暮天の方だな。ところで、お前さん達も一応本番はやるんだろ」

「そりゃ、私達だってやろうと思えば、お兄さん方より巧いわよ。でもさ、津村さんの弟さん達の前にそんな事すりゃ悪いじゃない。」

弟さん達のお遊びがすんだあとで、頂く事にしたの。だから、今日のところ、仕上げはこれよ」

春太郎は、スタンドの上の桐の箱を手取って、ホホホ、と口に手をあて、しなを作って笑うのだった。

これは、とんだ奴が舞い込みやがった、とさすがの川田も舌を巻いた。

その道にかけてのベテランというより、その道にかけての化物が二人、今いった甲側と乙側に分れて、同時に京子を責めようとしている。あの気性の強い鉄火肌の京子が、これらの化物に責めさいなまれ、どのように懊悩し、狂乱するか、想像すると愉快でもあり、可哀そうな気もする川田であった。

「へへへ、お前さん達が、ここでこういう恐ろしい相談をしてくれるとも知らず、京子も思えば可愛い奴だよ」

と川田は、さっき女中部屋を出る時、京子が哀切極まりない声で、心から詫びる故、淫らな責めだけは許してくれるよう頼んだ事を二人にいつて聞かせると、春太郎の方は眼を向くようにして、

「冗談じゃないわよ。人をこんな目に会わせておきながら随分と図々しい事いうじゃない

の。とにかく津村さんの弟さんが、ここへ来るまでに、少なくとも四回は陥落させちまう予定なのよ」

四回？ と川田は驚くと、義雄が隣から酒くさい息を吐きつつ

「それ位絞りとってグロッキーにしておかないと、何しろあれだけの腕前を持った女だからね。弟と唐手勝負となった場合、気が気じゃないんだ。だからこいつ達に、一回につき一万円という懸賞金を出したんだよ」

さ、行こうか。と義雄は、ようやくグラスを置いて立ち上った。

「うわ、腕がムズムズして来たわ。畜生、京子の奴、さっきの恨み、骨身にこたえる程、はらしてやるから」

春太郎と夏次郎は、いそいそとして立ち上り、スタンドに並べられてある恐しい責め道具を紙袋の中へ無難作に投げこみ、小脇にかかえるのであった。

## 京子の哀泣

ドアが開いて、川田を先頭に津村義雄、春太郎に夏次郎の四人がぞろぞろと入ってくる、立ち縛りにされている京子は、はっと硬



直し、反射的に美しい顔を横へねじめるのだったが、今まで吉沢に彼等がこの部屋へやって来た時の京子のとるべき態度について教示されていたのであろう。顔を正面に戻し、如何にも過ちを犯した女の如く、かすかに頭を前に垂れ、軽い瞑目をつづけるのだった。

その、うすら冷たく、象牙色に澄んだ美しい京子の横顔は、先程、二人の男を相手に奮戦した鉄火肌などはどこにも見出し得ず、冷たい美しさを持った柔順そうな女として義雄の眼にもシスターボーイの眼にも映じたのである。

理智的な冷たい美しさを持つ容貌と、そのセクシーな感じを第一に起させる伸びのある肉づきのいい肢態とのアンバランスが、二人のシスターボーイの好奇心をいよいよ高めたようである。

「いい女ねえ。これが唐手二段のじゃじゃ馬とは一寸信じられないわ」

夏次郎が凝視して、溜息をつくようにいうと、春太郎は、夏次郎の耳に口を当て、

「それより早く見てやりたいわ」

「うん、エッチな人ね」

夏次郎は、春太郎の肘をひねった。

二人のシスターボーイが吉沢に手招ねかれ

て、京子の前へ立つと、京子は、官能味を湛えた、むっちりした大腿をキチンと揃えて立ちながら、

「女だてらに乱暴を働き、本当に悪うございました。心よりお詫び致します」

と、深く頭を下げるのである。

「そう。そういう風におとなしく出られるとこっちとしても強い事はいえないわね。でも随分と痛かったわよ。それ、ここを見てよ、痣になっちゃったじゃないの」

夏次郎は、額を指さして京子の方へぬーと顔を突き出す。

京子は、たまらない嫌悪感に眉を寄せ、のけぞるようにして夏次郎から顔をそむけた。

いやらしいとか気味が悪いとかというものを通りこし、この種の男は京子にとって、陰湿な爬虫類的嫌悪感が先に立つのである。

「あら、失礼ね。人がお話している時、顔をそらせるなんて」

夏次郎は耳飾りや腕環の音をチャラチャラ鳴らしながら、そらせた京子の顔をのぞきこむようにしていうのである。

京子は、全身がうち震えるような屈辱感をキリキリ噛みしめながら

「先程の行為は心よりお詫び致します。どう

か、どうか、もう許して」

と、唇を慄わせるようにしていい、この化物のような人種が眼の前から一秒でも早く消え失せてくれる事を心の中で祈るのである。

「それじゃ——」

義雄がようやく口を開いた。

「ここは、春太郎と夏次郎の二人に任す事にしようじゃないか。京子嬢にひどい目に会わされたのは、この二人だし、許すも許さないも彼等次第というわけだ」

と、川田や吉沢の方を見ていい、次に京子に向かつて、

「ま、一生懸命、この二人に詫びてみるんだな。いっとくけど、もし、この二人を怒らせるような事になると、美津子さんとかいう君の妹さんはここへ連れて来られる事になる。君の眼の前で、おもちゃにされるんだ。その時は僕も一枚加えてもらうがね」

義雄はそう言って、勝ち誇ったように大声で笑うのだった。

ブザーを三つ鳴らせば、すぐに美津子をごこへ連れて来るからな、と川田も二人のシスターボーイに念を押し、打ち揃って引き揚げ始める。

「か、川田さん！ 吉沢さんっ」

京子は、せっぱつまった心境で、思わず大声を出す。

川田や吉沢のような毒虫でもいい。この場合、傍にいて欲しかった。この次元の違う世界からやって来たような得体の知れない男二人を前にして、京子は肌に粟粒が生じるような嫌悪感を覚えるのである。

「じゃ、京子、頼んだよ。へへへ」

川田は、せせら笑って吉沢の肩を抱くようにし、姿を消した。

「もう二度と、あんな事は致しません。どうか、許して」

京子は、何か魂胆ありげに、なめ廻すように全身を見つめている二人に対し、過ちを犯した女学生のような可憐さで、頭を下げ、詫びつづける。それしか為す術がないのだ。

「ちよいと」

川田や吉沢達が部屋から消えると急に春太郎は人が変わったように高姿勢になり出した。

「冗談じゃないよ、全く。子供じゃあるまいし、これが悪うございました、すみませんで解決する問題と思うのかね、お夏の額の痣をござんよ、これじゃ当分、店へは出られないじゃないか、一体、この始末をどうつけてくれる気なのさ」

長年日蔭で生活して来たゲイやシスターボーイなどは、こうして急に居直ったりすると冷酷で残忍なものが表情の底にじわじわにじみ出し、妖怪めいた底意地の悪さを発揮するようである。

「そ、それじゃ、一体、どうすればいいの」京子も、急に憤りが胸元に熱っぽくこみ上り、負けるものかというような凄惨なばかりの冷やかさを表情に現わした。

「フン、そらござらん。何だかんだと謝ったって、ちよいとこっちが強く出りゃ、すぐに眼をつり上げて喰ってかかり出すじゃないか。全く、どうしようもないじゃ馬だわ」

春太郎はそういうと、つかつかと京子の前へ歩み寄り、

「一体、どんな……しているのよ。はっきり見てやるわ」

と、いきなり、手拭を引き剥ごうとしたがあまりにも唐突だったので、かっと頭に血がのぼった京子は、片肢をあげた。

急所に当たったのだろう。春太郎は怪鳥のように叫び声をあげ、再び、転倒する。

「あいてて、よりにもよって、よくも男の」春太郎は、ぴったりと両膝を揃えるようにして、その場にしゃがみ込み、呻きつづけた

が、おろおろして近寄って来、介抱しようとする夏次郎に向かって、

「ブザーを押すのよ、お夏。この女の妹を呼び出して、津村さん達と一緒におもちゃにしてやるんだから」

あいよ、と夏次郎がブザーのある所へ走り出すと、

「待って、待って下さい！」

京子は、肩を揺すり、狂気したように夏次郎に声をかけるのだった。

「ち、誓います。もう、もう決して——」

「駄目よ。もうその手に乗らないわ。お夏、かまわないから早くブザーを」

「御生です！」

と京子は叫ぶと同じに、遂に、こらえにこらえていたものが胸をついて溢れだし、わっと号泣してしまふのだった。

それを見ると、春太郎も夏次郎もげんな面持になって顔を見合す。鉄火娘の激しい号泣が二人に何かの感動を与えたのだろう。

「貴女って、随分と妹思いなのね」

春太郎は、下腹を押さえながら立ち上り、泣きじゃくっている京子を不思議そうに見つめるのだった。

泣き濡れて、キラキラ光る美しい黒眼をチ



ラと前に立つ春太郎に向けた京子は、  
「誓います。もう二度と暴れないわ。肢に縄をかけて下さい」

そういつて再び、美しい横顔を見せ、京子は激しくすすりあげる。

「わかったわ。私こそ、ひどい事いつてごめんね。あんまり貴女が美し過ぎるんで、ヒステリーが起っちゃったのよ。さ、そんなに泣いちゃきれいな顔が台なしだわ。お夏、私のハンドバッグを取って」

春太郎は、大きな手提げバッグの中から、化粧箱を取り出し、頬についた涙をきれいにハンケチでふき取ってから、念入りに化粧し始めるのだった。パフがすむと、薄くアイシヤドウをつけてやり、口紅をひいてやる。

京子は、歯を喰いしぼり、虫ずの走るような男達の手に、自分の頬を預けてしまっている。だが、それも、これからこの男達が京子に対して開始しようとしている事にくらべれば、京子にとって決して、がまんが出来ないものではなかった筈である。

春太郎も夏次郎も、しかし、その事については、故意に一切口にせず、ようやく京子の顔の化粧を終えると、

「まあ、見違えるようにきれいになったじゃ

ない。まぶしい位だわ」

と、しばし、茫然として、二人で美しく化粧された京子の顔に眺め入るのだった。

実際、京子の容貌は、今、丹念に化粧された事によって生気を取り戻したよう輝くような美しさを備え出した。眼といい、鼻といい唇といい、すべてが理智美に輝き、形よく引き緊っている。

春太郎と夏次郎は、京子の美貌に魅了されてしまったよう櫛を取り出して、額の上に二筋、三筋、乱れかかっている艶やかな黒髪をすき上げ、耳の上を房々と覆っている髪の上へときつける。

「これ、このおねえ様に似合うと思うわ」

夏次郎は、自分のバッグの中から、琥珀の首飾りを出して、京子の光沢のある白い首へととりつけるのだった。

「うわ、それで一段と美しさが引き立ったわね」

春太郎はほくほくした顔つきで、京子を見つめていたが、「となると、こんな野暮ったい手拭が何だか不似合いね」といって、腰をかがめ、落下するのをわずかに支えていた一本の安全ピンを外しにかかった。

肉づきのいい、適度に脂肪の乗ったセクシ

ーな京子の太腿がピクと痙攣する。

「待って、そ、それは――」

「あら、今更、待ってはしないでしよう。唐手二段のおねえ様の……きつとすばらしいものだと思うわ。とっくりと拝見させてね」

さっと、それを剥ぎ取った瞬間、二人のシスターボーイは、「まあ」と眼を見はった。

「おっしゃらないで！ 何もいわないで」

首も顔も、火がついたように熱くして、顔を右へそむけたり、左へそむけたり、京子はおかしな位に狼狽を示すのである。

二人のシスターボーイ達は、啞然として、しばらく、それを凝視していたが、急にたまらないおかしさが腹の底からこみ上がってきて、吹き出した。

「ひどい事するわね。誰にこんないたずらをされたの」

夏次郎は立ち上ると、口を手で押さえ、クスクス笑いながら、羞恥の極に身悶える京子に問いかけるのだった。

「――お、お仕置きを受けたのです。京子が暴れ過ぎたので――」

口惜しさと羞恥にやるせないばかりに身をもじつかせつつ、京子は素晴らしい、全身の力をそれにこめたよう、ぴったりと肉の緊まっ

た太腿を密着させる。

「でもさ、さすがに武道の心得があるおねえ様だけあって、立派なものね。クリちゃんだって貫録がありそうだわ」

春太郎は、ちよっぱりのぞかせているそれを………ようとしたが、激烈な悪寒が瞬間、京子の下半身を電流のように貫き、

「やめて！」

と悲鳴に似た叫び声をあげて、狂ったように腰を左右に振り動かし、春太郎の手を払いのけるのであった。足を使って、春太郎を蹴り飛ばさなかったのは、やはり、ブザーを押される事を恐れたからであろう。

「フフフ、ほんとに、おねえ様って、じゃじゃ馬なのね。やっぱ、肢を縛らなきゃ駄目なようだわ」

春太郎は、左右に打ちこまれてある竹ぐいと、その先端にからませてある皮紐を見て、満足げにうなずく。

「じゃ、お夏」と夏次郎をうながして、二人は、屈辱の極にすすりあげている京子の左右に立ち、身を沈めた。

「さ、おねえ様、このままじゃ仕事が一寸、やり難いのよ。縄をかけさせて頂くわ」

「第一、このままじゃ、いつ何時蹴とばされ

るか知れないもの。おっかないわ」

春太郎と夏次郎は、そんな事をいいながら京子の力一杯閉ざしている伸びやかな肢を左右から抱えこもうとする。竹ぐいの打ちつけである所まで割り開かせ、かたく縄止めしようとするのだったが、それだけでも、大して力のないシスターボーイにとっては難事業であった。

京子は、一層身を硬化させ、頑<sup>かたく</sup>なに肢を閉ざして、はっきり拒絶を示しながら、

「あ、あなた達は、一体京子に、何をなさるつもりなのっ。はっきりおっしゃって」

と、ヒステリックな声をはり上げるのだ。

「それはおねえ様の足を縛ってから、説明させて頂くわよ。さ、お開きになって」

「嫌っ、嫌よ！ね、お願い、ぶつなり、なぐるなり、京子を死ぬ程の目に会わせたってかまわないわ。こ、これ以上、羞しい目には会わせないで」

「あら、そんなの駄目よ。鉄火姐さんをなぐったり、蹴ったりしたって効果はないわよ。フフフ、私達はね、今まで、おねえ様のお仕置について作戦を練り合っていたのよ」

「足を縛るなら、このままで縛って」

「駄目、あんまり駄々をこねると、ブザーを

押すわよ」

京子は、ああ、と首を振り、再び、声をあげて泣きじゃくり出す。

反吐が出るほど嫌な男達の眼に、生恥をさらす口惜しさ。——京子は、彼等の責めが、一番恐れていた女の羞恥を狙ったものという事がわかり、彼等に対する憎しみと恐怖が全く一つのものとして、身体の底からふき上げて来たのである。

「フフフ、そりゃ人一倍羞しいでしょうね。全くないんだから。でもさ、私達にしてみれば、鉄火娘の内部構造をくわしく研究するために、その方がかえって都合いいわ」

などと春太郎はいいながら笑い、今度は、少し、強い語気になって、

「さ、早くきめるのよ。開くの？それともブザーなの」

京子は、遂に、抵抗の空しさを覚ったように、がっくり首を落した。そして、必死にこめていた全身の力を抜いたのである。

それと知って、シスターボーイの手は、左右から京子の官能的な美しい腿と脛にからみつく。スルスルと八の字に割られていく京子の肢。

「二度も私を蹴とばすなんて、ほんとに憎い





足だわ」

春太郎は、竹ぐいに引きつけた京子の右足首にキリキリ皮紐をかけながら、口の中でブツブツいい、京子の左足首を縛りつけている夏次郎に、「解けないように、しっかり縛らなきゃ駄目よ」と声をかけるのだった。

京子は、美しい眉を寄せ、琥珀の首飾をかけた白い首筋をはっきり浮きたたせ、のけぞるように顔を後へ倒している。

「うわあ、素ばらしいわ、おねえ様。

美しい芸術品みたい」

足首を縛り終えた春太郎と夏次郎は同時に立ち上り、陶然として、そんな姿にされた京子を見つめる。

上下に数本の麻縄を巻きつかせているが、それらをはじき飛ばすのではないかと思われるような弾力のある見事な乳房、形よく緊まった胴廻り、大きく左右に伸ばされた内腿の筋肉はピーンと張り、尻から太腿あたりの悩ましい、息もつまりそうな官能美は、二人のシスターボーイに息苦しいばかりの感激を与えたようだ。

幾度も溜息をくり返しつつ、京子の美貌と見事な肢態に見とれてしまった春太郎と夏次郎は、視線をやがて、その一点に向ける。

春太郎は、ごくりと生唾を呑みこみ、心の高ぶりを何とか落着かせようと、煙草をとって、口にしながら、身も世もあらず悶え苦しむ京子の横へびったり寄り添って立つのであった。

「ホホホ、唐手二段のおねえ様。敵の眼前にこんなもの突き出して、どうなさるおつもりなの？」

春太郎は、その先端を突ついて笑いこけ、「そりゃそうね。両手も両脚も使えないとなりゃ、それを武器にして戦うより仕様がなないものね」

と、更に突っついて、笑うのだった。

京子は、呼吸も止まるばかりの屈辱に、眼を吊り、齒をかみ鳴らして、がたがた慄え出す。八の字に開いた内腿の筋肉が、その度に幾度もピーンと硬直するのだった。

「な、なにするのよ。身動きのとれない私にあなた達は一体、何をしようっていうの」

「まあ、こわい。さすがは鉄火娘ね。……まだ飛び出させていても、それだけの啖呵が切れるんだから」

春太郎は煙草をうまそうに吸いながら、そんな事をいって冷笑し、

「そうね。何時までもじらしておくのは可哀そうだわ。これから説明してあげる。お夏、まだ、出来ないの」

もう少しよ、と夏次郎の声を足下から聞いた時、京子は、あっと声を出し、苦しげに顔を歪めて、首を激しく振った。

何時の間にか、夏次郎は一枚の画用紙にその……写生を行っていたのだ。自動車の修理工のようにもぐりこみ出し、上向きに寝はらばって夏次郎が鉛筆を動かし始めると、京子は、逆上したように腰を揺すり、かたく皮紐で縛りつけられた足首を悶えさす。

「駄目よ。いくら暴れたって、解けやしないわよ。そんなに羞しがる事はないじゃない。ただ、写生をしてるだけなのよ」

春太郎は、京子が動揺し、身悶えするのが楽しくてたまらないらしい。

はい、出来上り、とようやく夏次郎が京子の肢の間から起き上って来る。

「仲々、うまく書けたじゃない。やっぱり、お夏は絵の才能があるわね」

などといいながら、春太郎は、その夏次郎がスケッチしたものを京子の眼の前へ持って

行くのだ。

「ここまで来て、私達にブザーを鳴らさせる気なの」

京子が狂ったように首を振り、それから必死に眼をそらせると、春太郎は、声を大きくして、ピシヤリと京子の尻を平手打ちするのだった。

「そんな態度ばかりとると、私達本当に怒るわよ。私達はね、貴女を二度と唐手など使ったりしない女らしい女に教育してあげようとしてるんだからね」

こうした春太郎や夏次郎の心理的な責めに京子の心は遂に打ちくだかれた。救われる方法はただ一つ、これから彼等がどのような手段を用いて自分をいたぶるのか想像はつかないけれど、死んだ気になってそれを受けるよりは手はないという事である。たとえ、腸を引き裂かれるような責めを受けるとしても、美津子を、この連中の手でなぶりものにされる事を思えば耐え抜けぬ事はないと、京子は捨鉢めいた気持になったのだ。

弱味を見せれば、この化物達はつけ上るだけだ。京子は、涙を振り切るように、さっと美しい顔を正面に向け直したのである。

そして、わざと不貞くされた調子になって

「わかったわ。貴方達がどんな責めを私に加える気が知らないけれど、私、もう取り乱したりしないわ」

と、羞恥も恐怖も投げ捨てたよう、きっぱりと澄んだ美しい瞳を正面に向けるのである。

「ほんとね。まあ、よかった。さすがは唐手二段のおねえ様だわ。よくいって下さったわね」

と、春太郎と夏次郎は、はしゃぎ出す。

それで、こっちも気が楽になったわ、といながら、二人は、京子の前の床に先程、腰から剥ぎとった手拭を開け、その上に、鬼源から受取った色々な小道具を並べ出すのであった。京子の眼にはつきりと見せて、覚悟を求めるためである。

ちらと、それに眼を向けた京子は、さすがに一瞬、激しい動揺を示したが、冷ややかな表情をつくるため、悲痛な努力をするのである。そうだったのか、やっぱりそうだったのかと、口惜しげに唇を噛みしめつつ、この男達のとうとうとする行為をさげすみ、嘲笑してやろうとするのだが、やはり、恐怖のために頬が硬張り、思うように口がきけない。それでもやっと、



「あ、あなた達のような人でも、やっぱり、そんな事をするのね。最低だわ」

と、ひきつったような冷笑を浮かべて、吐き出すようにいうのであった。

「そうね、たしかに最低ね。だけど、女に対する最高の責めという事になるわけよ。特におねえ様のような気性の強い女にはね」

春太郎はそういって、再び、京子の前へ進み寄り、

「おねえ様の覚悟も決まった事だから、こっちも包まず、これからの予定をお聞かせするわ。まだ、夕方までに四五時間はあるわね。その間に私達、徹底的におねえ様の脂を絞りとうとうというわけ。つまりね」

春太郎は、京子の耳元に口を寄せ、含み笑いしながら、小声で語りかける。

京子は、心臓が凍りつくばかりのショックを覚え、衝動的にブルッと全身を慄わせた。

「ホホホ、何もそんなにびっくりする事はないじゃないの。若いんだし、あれだけの精力がおありなんだから、三度や四度ぐらいは大丈夫よ。私達、腕によりをかけ、一回、一回充分、満足させてあげますわ」

この鉄火娘が一回、一回、その状態に至った時、どのような狼狽ぶりを示し、ペソをか

くか、春太郎はそんな事を想像して、気もそぞろになっている。

京子は、一旦は、春太郎のその恐しい言葉に、電気に感電したよう、したたか打ちのめされたが、持前の気性の強さを發揮して、横へそらせた顔を正面に向けた。必死になって平静を装おうとしたが、その美しい黒眼からは、幾筋もの涙が流れ落ち、ふっくらとした白い頬を濡らしつづける。それでもなお、気を取り直し、負けるものか、といった悲痛な笑顔を京子は作ろうとするのだ。

「馬、馬鹿ね。私は、貴方達がおっしゃる通り、気性の強い女よ。御、御希望には、添えないかも知れないわね」

京子は弱身を最後まで見せまいと、必死になって、侮蔑的な冷笑を口元に浮かべるのだった。

「ホホホ、添えるか添えないか、これから、おねえ様と私達二人との大勝負ってわけね」

夏次郎は、そういって、部屋の隅から、一束の麻縄を見つけ出して来、京子の背後へ廻った。柔軟で、スベスベした背中の中程に、京子の両腕はきびしく縄止めされているが、途中でもし縄が解けたりすれば大変だと更にその上にキリキリ麻縄を巻きつけ、念を入れ

るのである。左右につないだ足首の上にも更に縄をかけ挺子でも動かぬ位に縛りつける。

「ヤレヤレ、こうしておかないと安心出来ないからね。手でも足でも縄が解けたりしたら最後、私達優男は一発でふっ飛ばされてしまわ。さ、お春、始めましょうよ。何時までもおねえ様をじらしておくのは可哀そうよ」

「ま、一寸待ってよ。おねえ様にAコースかBコースか、選ばせてあげようじゃないの」

春太郎は、先程、夏次郎がスケッチした紙を再び京子の眼前に持って行くのだった。

「そらそら、また眼をそらす。約束を破っちゃ駄目じゃない。自分のものを見るのに恥しがる事はないじゃないの」

反射的にそむけた京子の顎に手をかけて、スケッチ画の方へ、ぐいと顔を向かせた春太郎は、ようやく、京子が物悲しげな瞳の焦点をそれへ向けた事に満足して、Aコース、Bコースの説明を始めるのだった。

「Aコースというのはね、そら、おねえ様の拡大図では、クリちゃんの位置は大体、ここのでしょ。アヌーちゃんは一番下にあるこれ、ね、ちよいと、聞いてんの」

耐えられなくなった京子が、顔を横へ伏せてしまうと、春太郎は、酸っぱい顔になって

京子の尻をぶつ。

京子は、さっと春太郎に、忿怒を含めた燐光のように光る美しい視線を向けて、

「AでもBでも、好きな方をやればいいじゃないの。貴方達、それでも男なの。覚悟をした私を、いつまでネチネチいたぶる気なの」

激しい怒りをこめ、それだけいうと、京子は、唇を噛みしめ、かたく眼を閉ざす。悲憤のためか、肉づきのいい白い肩が大きく息づいていた。

「わかったわよ。フン、何にさ、こっちが親切に教えてやろうと思ったのに。こうなりゃこっちだって容赦しないからね」

二人のシスターボーイは、しばらく打合せして、一緒に服を脱ぎ出すのであった。

「ハッスルするために、私達もおねえ様みたいに生まれたまんまの姿になるわ。その方がおねえ様だって嬉しいでしょう」

二人は、顔から受ける印象とは逆に、かなり精悍な体軀をしていた。胸幅も厚く、骨格も逞しかったが、奇妙な事には、春太郎が赤禪をしめ、夏次郎が女物のパンティをはいていたのである。

春太郎と夏次郎は、京子の左右に立ち、各々の腰のものを外しにかかる。

夏次郎は、如何にも女性的になよなよと身をかがめ、それを消え入るような風情で外し始める。春太郎は、立ったまま、くるくるとそれを外し出し、こういう所などは、同じシスターボーイでも、夏次郎とは逆に男性的であった。

チラと眼を開いて、そんな姿になったシスターボーイに気づき、京子は、慄然とする。

夏次郎は、春太郎にいう。

「ねえ、最初は、やっぱりAコースで、このおねえ様をたっぷり楽しませてあげましょうよ。まだ時間は充分ある事だし」

そういつて、夏次郎は、くねくねと京子ににじり寄って、

「じゃ、おねえ様、最初はAコースね。始めは、十五分位もかかって、おねえ様……ばかりマッサージするのよ。やり切れない位にじれったくなるでしょうけど、そのうち、そんな小さなものが大きくなり始めて、十円玉でも呑みこむ位になるの。お尻の——だって馬鹿にならないわよ。その頃にはね、ホホホ、これがひとりでにピクピクダンスをおっ始めるわ」

白い頬を真っ赤に充血させ、毛穴から血でも吹き出しそうな屈辱をキリキリ噛みしめて

いる京子の顔を頼もしげに眺めつつ、夏次郎は身を沈めて、その先端を軽くつつくのだった。

「ああ、羨しいな。出来る事なら、私のものと交換させてやりたいわ。女らしい私がこんなものぶら下げていて、男勝りのおねえ様がこんなものを——ええ、憎いわね」

「な、なにすんの！ 馬鹿！ けだもの！」

夏次郎の指先がそれを……しようとする京子は、どうにもならない体をピンと硬直させて、再び、大声でわめくのだ。一旦は、悲痛な覚悟をしたものの、やはり、男か女かわからぬ化物の指先が、活動し始めると、忽ち、頭に血がのぼり、逆上し出すのである。

「そんなにながなり立てられたら、こっちだって少しも気分が出ないわよ。仕方がないわ。猿轡をはめてやるわよ」

春太郎は、足元に落ちている赤禪を取り上げ、丁寧に二つか三つに折り始める。

そんなもので口を覆われると知った京子は再び新たな衝動にピクと頬を痙攣させ、

「嫌よ、嫌、嫌！ やめてっ、お願い！」と、狂おしく首を振る。そんな京子を春太郎と夏次郎は面白がって左右から襲いかかり「シスターボーイの匂いを嗅ぐのもたまには



いいじゃないの。さ、おとなしくして」

夏次郎が背後から京子の頬を両手ではさむようにし、春太郎は、わめきつづける京子の口から鼻を、折り畳んだ赤褌で押さえつけ、二巻三巻と巻きつけて、きびしい猿轡をほどこしたのである。京子の後頭部で引き絞るように赤い布を縛った春太郎と夏次郎は、ほっとして、京子の前へ廻る。

口も鼻も赤い猿轡で覆われた京子は、怒ったような、また、何かを哀願するような、複雑な視線をチラリと二人に向けたが、すぐに顔を横へそらせ、静かに瞼を閉じ合わせるのであった。

「これで、おねえ様はもう声を出す自由もないわけね。ホホホ、どう、お春の肌の匂いは甘い、酸っぱい？ ねえ、おねえ様ったら」

夏次郎は、顔を伏せている京子にまといつくようにして、笑いこける。

そうした屈辱の猿轡を噛まされる事によって、京子は、今度は、はっきりと覚悟を定めたのか、さして身じろぎもしなかった。

「もうこうなりや、おねえ様としても、私達と戦う武器は……一つというわけね。じゃ、勝負といきましょうか」

夏次郎は、そういうと、春太郎に、最初は

自分を乙側にしてくれ、といい出す。

「お尻の——を責めるなら、私のように華奢な指先の方が効果はあるわよ。先程、痛めつけられたお礼に指の根元まで押しこんでやるわ」

「まあ、嫌ね。匂いがなかなか抜けなくて困るわよ」

「こんな美しいおねえ様のだもの。ちっとも気にならないわ」

京子に対する二人のシスターボーイの陰湿で残忍な復讐は遂に始まった。

甲側を受持つ事になった春太郎が、京子の背後から大手を開けて、京子の胸を抱きかかえる。

うっと美しい眉を曇らせた京子は、しかし何とか、このおぞましい屈辱を踏みこたえ、乗り切ろうとするように、猿轡の中で、歯を噛みしめ、ぞっとするような美しい眼を開いて上の方を見上げています。

「九十糎はあるんじゃない。すばらしいおっぱいだわ」

手のひらは、豊かな白い丘を撫でさすり、指先は山頂の薄紅色のヒュッテをつまみ上げる。見事な、美しいその二つの隆起は、ゆっくりと持上げられるように上下へ揺れたり、

引き離されるように左右へ揺れたりする。

猿轡をかまされた京子の美しい顔は、泣く一歩手前のような気弱な表情に変わり出した。この嫌悪の戦慄が、女の生理の悲しさを惹起する事になるのではないかという恐怖感に、京子は神を念じるよう眼を閉じ合わせた。

それほど、春太郎が技巧に長じていたといえる。京子の熱い頬に鼻をすりつけたり、ウエーブのかかって、房々した黒髪に覆われた耳に軽く接吻したり、自分の……それを偶然の事のように京子のむちりした尻にすりつけたり——。

一方、夏次郎は、汐時を待っているように京子の前に身を沈めたまま、懊惱し、硬直する京子の艶めかしいばかりに肉づきのいい、太腿や内腿あたりに眼を注いでいたが、「じゃ、おねえ様、そろそろ始めるわ。あまり、口惜しがらないでね、ホホホ」  
前の方から、そっと手を差しのべ始めたのである。

(未完)

× × ×

× × ×

## 廣作マゾヒスチック・ストーリー

 男 だん

 中 ちゅう

芳野眉美

三原寛氏のマゾヒスチックストーリー（例えば、三月号の「足拭き」）の連作を私は好きである。ゴチャゴチャのゴツチャ煮を食っているみたいで読んでいてうれしくなってしまう。ドライで簡潔な文体はステキである。

彼がホントのことをずばずば書いていることもあるし（例えば、四十一年九月号の「断続の空間・エミ様に」）ますます楽しくなってしまう。エミちゃんに関しては、彼と私は神酒兄弟だし、エミちゃんに責められている彼のスタイルがよくわかるのである。どちらが兄だか忘れたけれど、エミちゃんはすばらしい女性だった。

では、何故、彼の文体がこうもあっさりしたものになってしまふのかというと、その理由は簡単である。彼は一流のビジネスマンとして、とにかく忙しすぎるのである。彼の話に依ると、すべての作品は、誰もいなくなつた会社の昼休みとか、才色兼備の奥様が美容院に行っているわずかなひまに、それとばかりさっと走り書きするそうである。四月号の奇クサロンで、須渾朔氏が「幾分ふくらみを持たせてくれたら……」と書いていられるのに私も同感なのだが、今の彼にそれを要求するのは、とうてい無理なのである。

要するに、彼には、ユックリ書く時間が無

いのである。しかし、私は彼の走り書きのムードは好きである。石原慎太郎の影響を受けているのかもしれない。

『水中花』を書いていて、いつも、彼のようにドライに簡潔に書けないものかと思っているのである。いつのまにかゴチャゴチャと登場人物がふえて、いったいどういうことになるのか、書いている本人がわからなくなってしまうという無責任なテイタラクなのである。申し訳ないが、五回まで読み返してゆっくり考えている最中なので、今しばらくお待ち下さい。

さてと、これから『男中』だんちゅうの話をしようと



思う。これを、三原寛流に書く。

沖五郎、十九才、一浪の予備校生。入学試験の為に上京して下宿した。両親の紹介で、待遇は家族的という話であった。めんどろみの良い、親切な、やさしいオバサンだから、静かに勉強が出来るでしょうということであった。大学は両親が決めた一流国立大学で、そこにパスするまで何年も浪人をしていいことになっていた。

夜遅く地図をたよりに目的の下宿に着く。

「お前が五郎か」

玄関に突っ立ったまま、五郎の全身を下からじろりと見上げた下宿の女主人は、初対面から五郎と呼び捨てにして、五郎を面くらわせた。あわてて挨拶をすると、小生意気な挨拶は止めなさいときめつけられ、五郎は半分泣きべそになった。

五十に近い水ぶくれしたような太った中年の女であった。ほっそりとしてなよなよと美しく着物のよく似合う婦人を想像していた五郎の夢は無惨にも消し飛んだ。便所に入ったら、自分でオシリがふけるのだろうかと思五郎は思ったが、この第一印象は不幸にもあたっていた。

まるで動物園のカバであった。体重はらく

に二十貫を越えているだろう。五郎はやっと十四貫あるかなきかである。巨大な女主人の臀部が五郎を威圧した。醜女という言葉はこの女のためにあるのかもしれない。手も足もなにもかも大きく分厚かった。

五郎があてがわれた部屋は、便所の隣りの三畳間であった。どう考えても女中部屋である。戦災にもあわず戦前からの古ぼけた家だったが、小さいながらも庭も有り、客間に茶の間・女主人の居間兼寝室・それに台所と風呂場が並び、独立した一軒家であった。

汽車旅のつかれもあって、五郎は女主人が貸してくれたせんべい蒲団にくるまって寝てしまったが、一時間とたたないうちに、女主人のすさまじい放尿の音で五郎は目をさました。隣りが便所だということを、これくらいセツジツに、身に染みて感じたことはなかった。女主人の放尿の音は五郎のこの家での位置を暗示しているようであった。

翌朝、六時に五郎はたたき起こされた。女主人の大根よりブットイ足が五郎の枕をけとばしたのである。

「何時だと思っている」

五郎は洗顔する前に家の掃除をやらされたのである。初日から女主人の夜具をたたまた

れた。故意か偶然か、シーツに黒々とした毛が散乱し、汚れたズロースがまるまって脱いであった。ナイロンパンティなどという優雅なものを穿くような女ではないのである。五郎は指先でつまむと部屋の隅にほうり投げたが、憤怒で身体がこきざみにふるえるのをおさえることが出来なかった。馬鹿にしていやる、クソババア。

家中の雑巾掛けが終ったのは八時頃であった。台所から味噌汁の匂いが五郎の鼻を刺激した。五郎は腹ペコであった。茶の間の食卓に朝食の用意がされてあった。しかし、一人前であった。顔を洗おうと台所に五郎が行くと、

「便所は掃除をしたか」

と女主人がきいた。五郎が首を横に振ると「何をボヤボヤしている。早くしてこい」

とどなられた。どなられるたびに、五郎は女主人の唾液を顔一杯に浴びた。

便所は、古い家にありがちな、簡易水洗であった。溜つぽ式のくみ取り便所をそのまま改良したもので、台所の汚水を流すように工夫され、中は以前のように暗く深く不潔であった。五郎は長い柄のついたブラシで、その穴の中まで洗わされたのである。五郎はすっ

かり食慾を無くしてしまった。

テーブルの上の朝食は女主人一人に用意されたものであった。これでは、五郎は下宿人ではなく、女中、いや、男中であった。まるで水ぶくれのクソババアの奴隷であった。

昼近くになって、やっと食慾を回復した五郎は、台所の板の間に坐り、オボンの上に並べたメザシとタクアンと、大根の味噌汁で麦めしをかきこんだ。茶の間の食卓は、とうにかたづけられていたのである。結局、その日は、五郎は二度しか食事をしなかったことになる。

下宿人は五郎一人であった。驚いたことに女主人は独身で、結婚の経験もなかったのである。若かりし頃、某代議士の女秘書をしていたというのが、女主人の自慢であった。結婚したことがないとすると、この女は処女かなと五郎は思えた。この年になって処女だとしたらオバケだ。相手にしてくれる男性がいなくて結婚できなかったのに違いない。ザマアミヤガレと五郎はわずかに溜飲を下げた。古い家とわずかな遺産で生活をしているのだらう。

上京したら、五郎は予備校に通うはずであった。が、どうしたことか、女主人は許して

くれないのである。女秘書になる前に、高等女学校の先生をしていたこともあるというのである。

「わたしが教えます。質問があったら、えんりよなく聞きなさい」

個人教授を五郎の両親からたのまれていると主張するのである。下宿代だけでは物足らず、予備校に払う学費まで着服しようというコンタンらしかった。四十女に何がわかるかと質問すると、たちまち五郎の頭の上で雷が落ちた。

「そんなことがわからないのか、このウスノロ、アホタレ、バカヤロオ、田舎者。わたしの小便で顔でも洗って来い、少しは利口になるだらう」

とわめきたて、教養をつけてやると、オ〇〇〇がした、とか、セン〇〇をかきたい、などという卑猥な言葉を繰り返して繰り返し復唱させたりした。

一週間たった。

洗顔前に家中の掃除をするので、女主人はとくに朝食をすませてしまい、茶の間の食卓はかたづけられてしまうので、五郎は台所の板の間で朝食をすませるのが当然のようになってしまった。カバが服を着ているような

女主人だから、その食慾も放尿と同様さまざまじく、自然女主人のたべ散らしたあとをかたづけることになる。とにかくき使われて腹がへっているから、残飯整理もそれほど苦にならないのは不思議なことであった。

台所をかたづけ居間の三畳にもどった五郎は、廊下に棒立ちになった。女主人が便所の戸を開けたまましゃがんでいたのである。大きくふくらんだ尻が便所一杯に広がり、入り切らないで戸を押してしまったのかもしれない。とにかく、巨大なぶよぶよした尻が五郎の目の前にデンとあったのである。

「ぼんやりつつ立っていないで、わたしのお尻でもふいてくれたらどうなんだい」

振り返った女主人が五郎を見てどなった。

わざわざ戸を開いて五郎の来るのを待っていたのかもしれない。

「苦しくて、よくふけないんだよ」

これは女主人の本音だらう。五郎は鼻をつまみながら近寄った。五郎が紙を受取っていやいやしゃがんだ瞬間、うむ、と息ばった女主人は、五郎の顔の前でブツトイのを一本落下させた。それはもう見事な代物であった。「お前が来てくれたので助かるよ。これからいつもふいてもらおうかね」



心持ち尻をもたげて五郎にふかせながら、  
 気持良さそうに女主人は五郎に云った。女主人の臭気にあてられては、部屋に戻っても勉強する気がぜんぜん起らない。あきらめてたまっていた、自分の下着の洗濯をしていると、側に寄って来た女主人が、いきなりズロースを脱いで五郎に投げつけた。

「お前がよくふいてくれなかったから、ウ○  
 ○がついてしまったじゃないか」

女主人の汚れたズロースは、五郎の頭にひっかかって顔にたれた。

「洗っておけ」

その夜、五郎は女主人に寝室に呼ばれた。

疲れたから、身体をもんでくれというのである。女主人は五郎の言葉遣いにいちいち文句をつけ、語尾がいけないとか、敬語の使い方知らないとか、くどいほど云い直しをさせるくせに、自分は一度も女らしい言葉を使つたことはなかった。いつでも、

「足をもめ」

命令形であった。

マットレスをきらって女主人は部厚い敷布団を三枚重ね、豪華な絹夜具にふかふかと身体を沈めていた。五郎はかしこまって（早く寝たいから）蒲団の中に手を差し入れた。

すね、ふくらはぎから、足首、足の指、土踏まずと、女主人のブットイ足をまんべんなくもむのだが、よほど力を入れないとこたえない。

「それでもんでいるつもりか、オマンマドロボー、もっと力をだせ」

女主人の罵声を浴びながら、五郎は一生懸命女主人の足をもんだ。そして、五郎の両手でもかかえきれないほどのフトモモへと五郎のマッサージは続く。驚いたことに、今夜の女主人は、寝巻の下に何も着ていなかったのである。五郎の手に汗がにじみでた。

「五郎」

と女主人がやさしく尋ねた。

「お前、童貞かい」

五郎はだまってうなずいた。

その瞬間、カバのような女は掛蒲団をはねのけて起き上ると、五郎をガバツと抱きすくめたのである。五郎は、顔を、眼といわず、鼻といわず、女主人の部厚い舌でベロベロ舐められて絶叫した。

「助けてくれ」

五郎は逃げまわった。廊下をかけ脱け、玄関のカギをあけようとして、女主人にムズと腕をつかまれた。いつ用意したのか、女主人

はうしろから荒縄で五郎をぐるぐる巻きにし、てしまったのである。全身を荒縄でガンジガラメにされて、五郎は玄関の土間の上に長々とのびた。女主人の鬼子母神にもまさるともおとらないおそろしい顔を見ては、五郎は失神したのも同然であった。

「この化物に童貞を奪われるくらいなら死んだほうがましだ」

五郎はそう思った。

五郎を縛り上げると、女主人は五郎の顔の上にまたがり、仁王立ちになってニヤリと笑った。ニヤニヤしながら、女主人は、五郎の顔の上にゆっくりとかがんだのである。

作者としては、神秘的な美しい泉が五郎の口に虹のしたたりをさすけた、と書きたいところだが、黒々とした森林か、灰色のヤブか知らないが、とにかくスゲエ代物が五郎の顔をおおい、こすりつけ、踏んづけ、息を止めたのである。

五郎が完全に失神すると、女主人は、やおら体位をかえて、五郎の童貞を奪ったのである。それから、女主人は五郎を荒縄で縛ったまま、玄関の土間にころがしておいた。そこだけ露出したままほっておいたのは、自然にかわくとも思っただのに違いない。

とてもじゃないが、こんな鬼婆のところにいたのでは、受験する前に殺されてしまう。五郎は長い手紙を書いて両親に訴えたのだが、両親の返事は、どうしたわけか、

「我慢しなさい」

の一点張りで、てんで、本気にしてくれない。鬼婆が手をまわしているのか、それとも両親が鬼婆に何か義理でもあるのか、五郎は家に帰ることも許されなかった。脱出しようとしても、東京は生まれて始めてで右も左もわからないし、もし飛び出せば、それこそ親の意にそむいたのだから勘当だと、鬼婆におどかされれば、その勇氣もなく、五郎はただ水ぶくれの女主人の横暴に忍耐するより外はなかった。

もっとも、サンドバッグみたいな女主人の横つらを、思い切り張り倒してやろうと五郎は思うのだが、女主人のカバヅラを見ると、その元氣も金玉も畏縮してしまつて、とてもとも鬼婆の相手ではなかった。

要するに、女主人は、五郎を男中としてコキ使うために下宿人にしたのである。

一カ月たった。

五郎は女主人に顔を踏んづけられて眼をさました。女主人の平たい大きな足の裏が、五

郎の顔を押しつぶしていた。女主人が五郎を起すのが次第に乱暴になってきている。

六時半であつた。起床時間から三十分も遅刻していた。五郎の枕元に立った女主人は、寝巻代りの浴衣でなく、まっ赤な透明なネグリジェを着ていたのである。そして、ネグリジェの下は何も着ていなかった。五郎の童貞を奪ってから、女主人の氣持に變化が起こつたものであつた。

「早く便所の掃除をおし。わたしが入れないじゃないか」

五郎はあわてて起き上つた。すると、女主人は一箇のタワシを五郎に渡して、

「裸のほうがいいよ」

と云つた。五郎がげんげんな顔を見ると、

「糞壺の中に入つて、タワシでよく洗うんだよ」

女主人は五郎のタオルのブリーフを無理やり脱がすと、すっ裸の五郎を便所の穴の中に押し込んだ。

「こんなことまでして掃除をさせなくても、いいじゃないませんか」

穴の中で五郎は叫んだ。かがめば、やっと一人入れるぐらいの便所の穴である。古い家の簡易水洗のことである。いくら清潔ずきで

も、女主人はひどすぎる。

「おこづかいがほしくないのかい」

女主人は、両親から五郎あてに送られた現金封筒を見せた。

「ほしかったら、丁寧に掃除をおし」

両親からの送金は、すべて女主人に巻き上げられ、いくら空腹でも、ラーメン一杯たべる金も五郎は持っていないのである。ぬれぬれとしめっぽい暗い便所の穴の中を、五郎はしかたなしにタワシで掃除を始めた。女主人がホースで頭から水を流しこんだ。

全身に水を浴びながら、五郎を身をこめて、風通しの悪いくさい便所の穴を洗つた。早く地上に脱出したかった。すべてがぬるぬるしていて氣持が悪かつた。

ホースの水が止つた。

五郎は女主人を見上げた。便器の側に立っていた女主人が、便器をまたいだと思うと、穴の中がまっ暗になつた。女主人は赤いネグリジェの裾をからげて、便器にかがんだのである。

と、なまあたたかいものが、五郎の頭に勢よく浴びせかけられた。五郎はあわてて顔をおおつて穴の中に身体をこめた。五郎の背中に、女主人の尿は、ようしゃなく降りそそ



いだ。しばらくして、

「終わったよ」

という女主人の声が出た。おそろおそろ濡れそぼった顔をあげた五郎に、女主人は、

「おふきよ」

とブッキラボウに命令した。

「お前の舌でふくのよ」

五郎の舌がチリ紙の代用品であった。五郎は女主人の命じるままに舌で、あと始末をした。

## 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、という声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

その日一日、女主人は、五郎を見ると、クサイクサイと顔をしかめた。あっちへ行け、近寄るな。便所の中にいろ。アクタイの限りを尽くして五郎を追いたてた。

五郎は、両親がこんな鬼婆のいるところにわざと下宿させたのは、人生修業のつもりではないのかと、みずからをなぐさめた。そうであれば、忍耐というものを身につけて、両親を見返してやろうと思った。将来社会に出た時、この化物の横暴に耐えしのぶ修行を

したことが、どんなにプラスになるかわからない。

深夜、女主人の偉大なる放屁と脱糞の音で夢を破られた五郎は、蒲団の中でくやし涙を流すのだが、このおそろべき化物から脱出する方法は、とにかく両親が決めた大学に入学することしかないということを知ったのである。

(終)

大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号、天星社宛表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切りの判を捺印致しますから継続お申込み願います。継続のお申込みでも何月号からと御明記願います。○局留にて雑誌をお受けとりにならない方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

S  
M  
カ  
メ  
ラ  
・  
ハ  
ン  
ト………  
／＼ 笹原八千子の巻  
………

## 「縄は知っている」

辻 村 隆

「縄は知っている」

歳が改たまって早々、編集部より私宛の私信が三通回送されて来た。一通は京都の人で夫婦プレー希望の方、一通は岡山市の人で秋山夫妻へのカメラ・ハントを希望の人、そしてもう一通は三重県津市の女性で、カメラ・ハントのモデル志望の簡単な便箋一枚の照会程度のものであった。私はその短かい文にフト心を惹かれた。

(原文の終)

『前文御免下さいませ。かねて数年前より秘かに貴男様のカメラ・ハントを愛読しているものでございます。若し私のようなものでも

よろしければ、一度ハントにお使い下さいませれば有難いと存じます。まだ見ぬ憧れと共に、お返事を心よりお待ちしております。尚同封の写真は昨年夏、津の御殿浜海岸でうつしたものでございます。

(略歴) 高校卒、昭和三十六年結婚、同四十年夫と死別、一児の母、現在独身中。昭和十五年生れ、本籍伊勢市

現住所 三重県津市〇〇〇町一ノ六

笹原八千子

昭和十五年生れというと、数え年で昔風に繰ると二十八才になるが、今流なら満二十六

才の、脂の乗り切った盛りの未亡人である。文面には、身長、体重、容貌など何ひとつ書かれていないが、同封のフォトの、パラソルをさしたワンピースの彼女は、背のすらり高い、稍やせ型の美しい人であった。彼女の足許にしゃがみ込んで、砂いじりをしている男の子は、彼女の残された一粒種でもあるのか。既に奇クの愛読者でもあり、自ら進んで志望して来たのだから、最初からプレイに關して云々する必要もなく、長々と口説く手間も省ける。まったく私にとってはラクなカメラ・ハントの対象であった。



早速折返し承諾の便りを認ため、細々と日時、場所などについて、一応こちらの都合のいい場合を書き送ったのであるが、その返事は旬日を俟たず届いた。(原文の終)

『前文御免下さいませ。嬉しさの余り、とび立つ思いで、早速お返事をしたためました。』

まさか、私のあの様なお願いの手紙に、すぐさまお返事頂こうとは、本当に夢にも思いませんでした。最初には申し上げませんでした。が、私は唯今の処、生命保険の外交のかたわら、自宅で洋裁の内職をし乍ら、何とか母子二人生計を立てて居ります。子供は現在四才でございますが、外出の時はいつも三百メートルばかり離れたところの、夫の両親の家へ預けておりますので、そちらの方にかえってよくなつていくくらいでございます。時間、間の不自由はさしてございません。ただ貴男様のおっしゃる様に、ハントの場所を大阪へ出むくとなりますと少し困ります。私の希望では出来れば、津市の方へお出で下されば、本当に有難いのでございますが。

貴男様のお便りにもございましたが、もし時間をお約束して、お目にかかれないう時、わざわざ遠方まで出向いたあげく、スッポカされたらとの御心配は本当にもっとものことだ

と存じ上げます。けれどこのことは、私にとっても申し上げられることでございます。私が大阪へ出て、万一貴男様にお目にかかれなかった時の事を考えると、やはり出掛けるふんざりが少しつきかねます。

それでどうでございますでしょうか。貴男様が近鉄線にのってお越しの時は、津と大阪の大体中間の伊賀神戸駅あたりで。又は関西線の汽車を御利用なれば亀山駅で。お車でお越し下さるのなら、名阪国道関のインターチェンジを出られまして、関西本線の関駅あたりでお互いに、お待合せすればいかがかと存じます。貴男様の御都合のよい日に、そのどこへでもまいりましてお待ち申し上げます。一月のアンネはもう終わりましたが、二月は順調なれば三十七日頃の予定でございます。

お待合せの時間は、午前十時過からなら、何時でも結構でございます。

貴男様よりお問合せのプレイのことにしましては、お目もじの節くわしくお話し上げますつもりでございますが、主人生前の昭和三十七年頃より、夫によって、ほとんどのプレイは経験したように自分では思っております。

夫とは恋愛結婚でございますが、私より年

令が十四才上でございます。私は初婚でございますが、夫は二度目でございます。

夫は大学生当時よりの愛読者だったそうで結婚後、最初は強要されて読まされたことが、ただ今は直送していただいております。

貴男様のカメラ・ハントからお察しいたしますれば、掲載の写真は、ほんの氷山の一角のようにも思われますが、雑誌にのった過去の写真程度なら全部自信があると存じます。何れおめもじの節、いろいろと私の打明け話をお聞かせ申し上げますが、或いは私の本当の心は、カメラ・ハントには出せない、氷山の海中の秘かに隠された大部分を望んでいるのかもしれない。何卒よろしくお導びき下さいませ。八千子は一、二千秋の想いで、辻村様にお目にかかれる日を、待ち焦れております。何分の色よきお返事を心よりお待ちしております。 笹原八千子

× × ×

電話連絡が出来ず、もどかしかったが、手紙の往来、前後四度、遂に意を決して二月の中旬、関西本線の関駅で出会うことに話が決まった。時間は午後一時。

何しろ過去十指に及ぶ以上に欺かれたり、スッポカされたりした苦い経験があるので、

彼女の場合にしても或いは冷かし程度のことを、津市くんだりまで遙々出掛けて、こっそり待ちぼうけの馬鹿面を見られたりするものも癪だから、大阪の方へ引っ張り出そうとしたが、最後には彼女の提案に負けて、津―大阪間七分三分の処の、関で落付いてしまった。

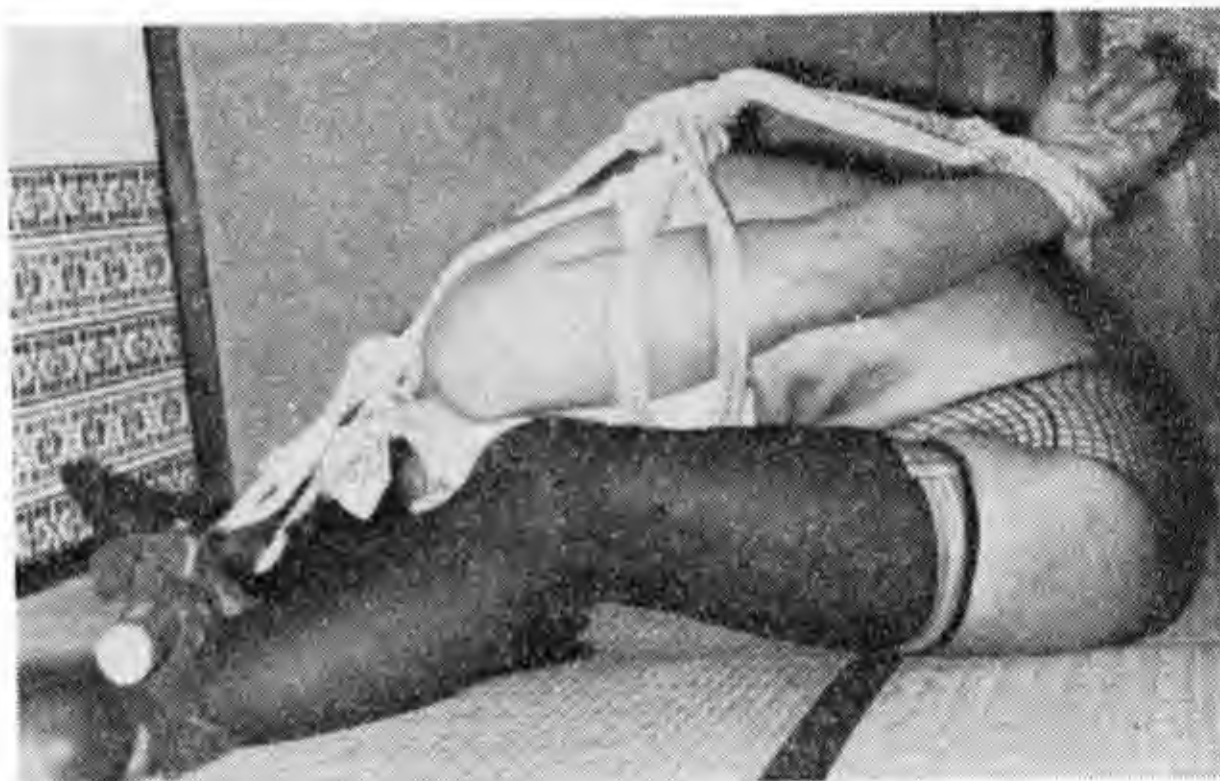
既に夫とは、かなり強烈なプレイの経験ありという便りなので、久し振りに本格的な緊縛をやりたい気もあって、何時になく、支度もものものしく、縄を始め細々したものをすっかり鞆に押し込む。簡単に近くで出会うのと違って、遠出をするという気持が、私をそうさせたのであろうか。車のトランクに放りこめば、鞆の一つや二つもの数でもない。

数日前から、東京地方は十数年振りの大雪で、今日も空ツ風の吹く、芯の冷えるつめた朝であったが、電話で名阪国道の模様をきくと、亀山辺りは鈴鹿山系の影響で、チェイン機行との返事。煩わしいが途中で吹雪に遭遇した場合を考えてガラガラと積み込む。

妻にカメラ・ハントの由をつけて出発。

「気をつけて下さいね。撮るのはいいんだけど、わざわざ遠い所まで出掛けるのが心配ですわ。今夜帰るんでしょう」

「勿論そのつもりだけど、凍結の場合や予定



通りゆかなかったら、ひょっとしたら帰れぬかも知れない。その時は電話するから……」  
「今日の相手の人が、未亡人だから心配ですわ。心を奪われちゃダメよ」

妻の眼にチラリとジェラシーが走ったが、それも束の間、仕事の打合せをして私は車の人となる。停滞を計算に入れて午前九時、家を出た。

国道二十五号線は朝のうちは、比較的車が少なく、横田を真すぐ突切り、狭い田舎道を走って名阪国道へ入る。上野のモーターで小憩、十一時半を少し廻った処。ゆるゆる走っても関へは小一時間で到着するだろう。

関のインターチェンジから関駅までは一キロ、津へは十六キロ。

国道一号線へ出て大津に向って少し戻ると鄙びた駅前の道が左側に折れている。

車を道路わきによせて駐車し、下りると、駅の待合室から、薄鼠色のオーバーをきた洋装の人が、私の方に視線を向け乍ら歩みよってきた。豊かな髪をアップにした、細面での色白な彼女を、私は直感で笹原八千子だと思った。

八千子は私の数米前で立止り、白い手袋の両手を前で組み合せて顔を伏せていた。自分から声を掛けてこぬ慎重さが私には快かった。私は数歩近づく。

「笹原さんでしょうか？」

「ハイ」



「辻村ですよ、お待たせしましたか？」

「ええ、ほんの少し」

私は反射的に腕時計を見た。十二時四十六分。汽車の時間の都合で早くついたらしい。

「どうぞ——」

車へいざないドアを開くと、軽い会釈をして笹原八千子は助手席におさまった。

私は車を再びインターチェンジへ向ける。

ドライブ地図で調べてあるが、津市へはこの関より始まる伊勢別街道を、一直線に十数キロ走ればいいのだった。

笹原八千子は淑やかに、私の傍らで無言の俤前面をみるていた。

「お食事、未だなんでしょう？」

「ハイ」

「私もです。どこかでおひるにしましょう。」

私は全然この土地は精しくないから、ドライブイン・レストランにでもよりますか」

「ハイ」

何を言っても「ハイ」と明確に応えるが、

自分からは意志表示しなかった。変に遠慮をしないところが気に入った。八千子のうなじから匂うのか、微かに香水のソフトな甘い薫りが車内に漂い始めた。

「お子さんは預けて来られたのですね」

「ハイ」

「今日は何時頃までいいのでしょうか」

「私なら、いつ迄でも構いませんが、辻村さんがお帰り、大変でしょう」

前面をみつめた俤、八千子は軽く笑った。

「カメラ・ハント、どう思われますか？」

「とっても面白いですわ、一番に読ませて頂いてますのよ」

「貴女との事だっけ書くかも知れませんよ」

「どうなるか、愉しみですわ。でも本名と顔だけはなるべくかくして下さいね。案外世間は狭いですから、ひょっとして……」

「勿論そのつもりです。でもハントのフォト

にのせない分は顔もうつしますよ。でないと折角の美しい顔がなくちゃ張り応えがない」

「まあ、私なんかもう……」

相手にしないどころではない。プレイの味を知った女性の、しかも未亡人だ。同好の間から、又ぞろやいのやいの言われるに違いない新しい女性なのだ。

伊勢別街道は狭く、大型車ならすれ違いがやっとの個所もかなりあった。煙草がこもったのか、八千子は窓を少し開いた。車内は暖かいが、天気はよくても寒気は厳しいのだろう、冷めたい風が流れ込んで煙が風にまかれ

てゆれて逃げていった。

途中「ドライブイン棕本」とか「ゼニカケモーター」とかあったが、喋り乍ら走っていて、気がついた時は既に行き過ぎていた。いや、戻ろうとすれば戻れたかも知れないが私はその時はしなくも、道路わきに立つ、大きな看板の字に惹きつけられていて、変った興味をそそられていた。

「笹原さん、あの立看板に、地下二十米の楽園、なんとか温泉と書いてありますが、津市にある様ですが、御存知ですか」

「ええ、存じては居りますが、まいったことは御座いませぬ。人づてに聞きますと、何でも地下の磨き砂の洞窟に温泉が湧いているとかの話で、変った料理をたべさせるそうでございますよ」

「面白そうですね。腹の減りついでに一層そこまで飛ばしましょうか。貴女も御存知でないのなら、恰度いい。行きましょうよ」

「ハイ」

八千子はいとも素直にうなずいた。この人はすべてあなた任せの従順なたちなのであるうか。味もそっけもないドライブインレストランで食事するよりも、そうした一風変わった雰囲気の中で、二人ひっそり食事し、気が向

けば湯にひたるのも又愉しからず哉である。

間もなく私の車はこの街道を国道二十三号線に突き当たった。左折すれば四日市から名古屋へ——。右折すればもう津市はすぐそこである。

市内に入ると目抜き通りは広々として、駐車禁止の立札もないノンビリさである。緑地帯を左右に挟んで、車道は四車線あり、歩道に面してかなり広い車の停止道路がつくられてある。

「磨洞温泉は半田山って書いてありましたから、もうすぐ行くと、左側に松菱アパートというのがありますから、その信号を右に折れて下さい」

「おや、御存知だったのですネ」

「行ったことはございませんが、私ここに住んでますのよ。大体の見当はつきますわ」

「そうでした。これはお見せしました」

「ホホ、当り前のことですね」

「笹原さんのお住いは、この辺りですか」

「近くですわ。紀勢本線の阿漕駅の近くなんです」

「じゃあ、ひょっとして、こうして乗っているところを誰かに見られているかも知れませんよ」

「でしようね。でも構いませんわ別に……」

笹原八千子は悠々迫らず、別段顔を伏せるでもなく、小さくもならず、応揚に構えていた。案外これは大した女だ。動ずる気配もなく、津市の目抜きの繁華街を、アベックの車で平然として乗っている。いや、仲々見上げたものです。津新町駅の踏きりを渡り、タバコを買いがてら地底の楽園の所在をきく、

「ああ、それでしたら、ここから三つ目の辻に靴屋と焼芋屋がありますから、そこを折れて真すぐ走り、津工業高校に突き当たって、それを右に折れたら一本道ですわ」

「たばこ屋のおじさんは、気さくに教えてくれた。」

「都合によったら、この磨洞温泉でプレイやるとしますか？」

「ハイ」

答えはひとつ、八千子の返事はいつも「ハイ」である。

× × ×

津市の外れの田舎道を辿って、地底の楽園に到着、もう一軒「美女の里」という素晴らしい名の温泉もここにあるが、タバコ屋のおじさんの話では、このR荘の方が規模が大きいというのでここにきめた。

地底の楽園と称するにしては、余りにも佻しく安っぽい地上の建物であった。丘陵にへばりつけて建てたバラックといった感じで、到底楽園というムードには縁遠かった。

案内も予約もない飛込みのフリの客であったが、冬枯れで旅館も比較的閑散なのか、旅館の女中は愛想がよかった。すっかり私達を夫婦と思っているらしい。でないと察していても夫婦扱いをするのがエチケットであったかも知れないが。

一年中地下で西洋松茸が栽培され、地底の磨洞にふさわしく、料理も山賊料理というのが売りものであった。

午後二時を過ぎていて空腹が先に立ち、とも角も山賊料理を注文した。

「お客さん、座敷になさいますが、それとも地下の洞窟部屋になさいですか。この方は少し冷えますけれど」

野次馬根性の旺盛な私は、はりぼてのベニヤの合板の殺風景な部屋を見てから、洞窟に降り、その一部を囲いた洞窟部屋を見ていっぺんにこの方が気に入った。少々の寒いくらいは辛抱せにやなるまい。

「ここにしますよ。ねえ、いいだろう」一寸女中の手前言葉をかえる。



「ハイ」である。

暫らくすると、寒気がぞくぞくと肌まで泌み通って来た。

「寒いですね、やはり」

「でも、変っていいいですわ」

八千子もオーバーは脱げず、肩をすくめて油で真黒に汚れた粗野なあら木のテーブルを挟んでちぢこまっていた。

女中がカンカンに火のおこったカンテキを持ってくる。

「少し吞みますか？」

「ハイ」

私は日本酒の熱燗を三、四本もってくるように告げる。

「バーバリズムめいて、妖しいムードもありプレイを語るにはふさわしいですね」

無言で彼女は一寸はにかんだ。

「お互いのこと、何も知らなかったのですわネ。私も辻村さんにいろいろとお聞きしたいですわ」

「いいですよ。その代り、私も貴女の旦那さんとの在りし日のプレイのことなど、こまごまとね」

女中が山賊料理なるものを運んで来た。

一、前菜はトーフとコンニャクの味噌かけ。

一、網焼きは、鶏のきも、椎茸、あさり、ピーマン、玉葱などを焼いてその俣、塩をふりかけてたべる。

一、若鳥の丸焼き半分。

一、とりと野菜の水煮き。

一、素焼きの小釜にお茶漬け風にした釜飯。

一、フルーツまでついて、この料理一人前七百円は安い。気をきかせてか、女中はすっかり運び終って、焼き方、たべ方を教え、

「じゃあ奥さん、よろしく願います」

さっさと引揚げていってしまった。

「奥さんに見えるんでしょうかね」

「今日一日、辻村さんの奥さんの気でいますわ。御迷惑？」

じつと見上げた八千子の瞳は、ドキリとする程濡れて光っていた。咄嗟に返事に困る。据膳でむこうがその気でくるのなら、よしこちららも。

「有難いですネ。願ってもないですよ」

「じゃあ、八千子って呼び捨てに呼んで下さいな」

「ウーン、じゃあ八千子」

「ハイ」

八千子はオーバーを脱いだ。紺のアンサンブルが、ぴったりと彼女の肌に合い、体の線

が、心憎いまでにレリーフされていた。

甲斐甲斐しく、彼女は肉や貝をとりわけて網にのせて焼き始める。八千子の酌で立て続けにのんだ数杯が快よく体内に巡り出した。

外に客はないのか、洞窟は魔ものめいてヒッソリと静まりかえっている。この寒い折に洞窟内で食事する客は、恐らく私達二人きりなのであらう。

彼女も私の契めで、注げば拒むことなくその盃を乾していった。ほんのりと赤味が白い顔に浮び上り、それが尚更八千子の心を魔女めかせていった。

「不思議ですわねえ」

「えっ何が——」

「だって、一時間少し前に始めて逢った許りなのに、今こうして二人っ切りで洞窟の中で向い合っているなんて」

「それでいいのさ。私のカメラ・ハントにはよくある話だ。お互いの内面の、人には話せぬ秘密のプレイを知っているということ、親しさはいや増すものだ。もう一時間後には、貴女を全裸にして、ありったけの縄を使って、それこそ雁字搦目にひしひしと、一寸の身動きも出来ぬように縛り上げているかも知れない。或いは腰のバンドを引抜いて、力

任せに貴女を打ちすえ、悲鳴をあげる口に強く深く縄をかませて、みみず腫れの筋の多さをかぞえているかも知れない」

八千子は黙って聞いていた。無言の胸底に被虐の想念が妖しく渦を巻き、在りし日の秘めごとの数々に疼いているのかも知れなかった。無意識の動作で、彼女は自分の盃に、自らの手で酒をつぎ、二杯ばかりのみほしていた。いよいよ切迫しつつあるプレイへの準備運動は既に始まっているとあってよかった。食事の間に、心は急速に燃えつつあった。私も八千子も――。

私が今、衝動的に彼女に唇を近づけたとしても、恐らく八千子は私の唇を拒まぬに違いない。燃えたぎる心は、私をして八千子の傍らへ体をにじり寄らせてしまった。

「いいだろう？」

肩を抱きしめようとして手をかけると、ぐらりと彼女の体はゆれて崩れてきた。

酒の匂う二つの唇が近々とより、その匂いの下から、囁やくように彼女の声が私の耳朶を撃った。

「ねえ、ここでは落付きませんわ。私の家にいらっしやらない。汚なくて狭いけど、私一人なの、誰にも気兼ねいりませんわ。ねえそ



うして下さらない。思いつきり虐められて見たいの。辻村さんの好きなようになさって。いいでしょ……ねえ」

「近所に構わないんだね」

「分ってもいいわ。私独りっきりで淋しいんですもの」

「そうしよう。じゃあ、善は急げだ」

「いけないわ。まだ少し酔っ払っていらっしやるわ。もう少し酔を覚してから行きましよう。おそくなくてもいいんでしょう」

八千子は正に魔女に豹変していた。しなだれかかる肉は柔かく私の胸にのしかかり、熱い吐息が、仄かな酒の香をのせて私の鼻をくすぐった。

「私の旦那様、さあ、たべさせてあげましょネ。アーンと口を開いて」

素手で若鳥のものの肉をもぎとると細い指先で肉をちぎって私の口に押し込んだ。未亡人という世間の虚名の下で、佗しく暮した鬱憤のほむらが今、パツと燃えさかって、すべてをかなぐり捨てた。一個のありのままの赤裸々な女として八千子は行動しているかに見えた。十四才も年上の男を夫として持った彼女にとって、今の私の年令層は、あたかも夫の幻影を私の姿に見出しているのではなからうか。生活の糧の一助としてハントを志望し、若干の報酬を当てにしているのではなからうかという、私の最初の思惑は、ものの見事に外れた。独り寝の淋しさに、悶え、悩



み、苦しみ、その挙句、意を決して、私に書き送ってきた、ハント志望の一枚の便箋に、私は八千子の必死の願いを見抜くことが出来なかったのだ。今こうして幾許かの酒で酔いの力を借り、身悶えて心のたけを綿々と口走る八千子の姿は、性本来の牝が牡を恋うるありの俤の姿に外ならなかったのだ。そして、八千子にとっては、その行為自体が、単なる色恋以上のSMの思想を帯びている対象を求めていたのであったのだ。そこには最早単なるセックスのみでははかり切れぬ、被虐の想念が憂々と渦を巻いていたのである。

「こんなに酔ったこと何年振りかしら、みんな辻村さんのせいよ。本当に憎い人」

爛熟した女の痴態がそこにあった。彼女の指が下に伸びて、私の腿をなで、何かを求めするように喘いでいた。

「お食事お済みでしょうか？ お済みでしたら、もう少ししましたら、洞窟を御案内しますから——」

不粋な女中の声が、ベニヤの粗末な戸の外からかかる。パネ人形のように、八千子はパツと身を離れた。

「ああ、済みましたよ」

「お下げしますよ」

女中が扉を開く、チラリとさりげない視線が私達に走って戻る。二人の心の乱れが、乱気流となって、洞窟のこの狭い部屋に流れていったのかも知れない。

× × ×

地底の楽園と呼称するには余りにも物悲しい陰惨極まる、鬼哭嗷々たる洞窟の景観であった。東西二十キロ、南北八キロに亘って、さながら蜘蛛の巣のように掘り尽された洞窟は、自称魔女と称する若き女中の案内によって、その日の客十四、五人と共に、手に手に懐中電灯をもって、女の先導で磨き砂の洞窟の奥深く分け入っていったのである。

古く徳川時代から、磨き砂を掘り出されたこの磨洞の迷路の奥には暗黒の囚人牢も存在し、戦時体制下では、軍需工場としてこの地下に潜り、若い力が、ひたすらに戦勝を夢見て、軍部の圧政の下で黙々と、青春をすりへらしていたのである。

地下数層に亘り洞窟が、僅か数十センチの厚さの磨き砂によって支えられ、果てしもなく、掘り進んでいたのだ。微かに地底の闇を照らす暗い燭光の灯が、魔女の手で消された時、十四、五人の人々のうちから、声にならぬ嘆息と呻きが洩れた。漆黒の闇とはこのこ

とであろうか。笹原八千子は痛いほど私の手を握りしめ、漆黒と化した瞬間、無言で轟と私に抱きつき、むさぼる様に、私の唇を求め、彼女の唇が私の口辺を這い廻った。彼女は恐怖を悦楽に転換するすべを心得ているのであろうか。

軍需工場の一部の為政者（恐らく軍関係の人間であろう）が、自分達のための身の安全をはかって厚層のコンクリートで洞窟内を蔽いかため、その部屋で起居し、働く者を消耗品の如く考えて、磨き砂の洞窟そのままの個所に放置しておいたが、皮肉というか、神の思惑か、米軍の直撃下で、コンクリートの部屋は直撃弾の衝撃で、ガラガラと崩壊して、多数の犠牲者を出し、放置しておかれた働くものの地下洞は、強力な磨き砂層の力で、ビクともしなかったという説明に、私は陰惨な洞窟内で快哉を叫んだ。

この洞窟の奥に温泉が湧出し、洞窟風呂となっていた。薄着の八千子はガタガタと身を慄わせているのが、オーバーをへだてて、私の肌を感じられた。暗黒の洞窟の案内は一時間足らず続き、その間に私達はすっかり酔いがさめてしまった。

私はいつしか幻想に溺れていた。果てしも

なく続く、洞窟のこの奥深い個所に今も、鈴鹿の山賊が棲息し、旅人の女をかどわかつては次々と責め弄び、飽きれば地底の奥深く埋没して、新たな女を求めては、責めさいなんでいるかも知れないというようなことを――。

案内された洞窟は、ほんの入口数百米だとすれば、地底二十キロの彼方で、どのような事が起っていたとしても、それは誰人も測り知れぬ出来事なのではなからうか。

乱歩のパノラマ島奇談の如き、裸女の群を洞窟の奥深く押し込め、日夜、サドの如く嗜虐にあけくれているものがないとは誰も保障出来ないのだ。果てしもなく続く洞窟の奥へ奥へと、この八千子を全裸にして首縄をつけて引き廻し、その彼方に、忽然とひらける名実共の地底の楽園に、かつて私の手掛けたすべてのモデルが、等しく手鎖でつながれて洞窟内のおちこちに吊り下げられ、この新入りの八千子を、絶望と悲嘆の眼で迎えるそこに、地底の恍惚境に君臨する私は、全裸の女共の組み合せた肌椅子にふんぞり返り、美酒を左手に、鞭を右手にして、この言語に絶した美観をニタリニタリとほくそ笑み乍ら眺めていたとしたら――。



私の迷夢をさますように、魔女の説明は終り、ぞろぞろと一行は日の当る場所に出た。寒空に風は鳴り、陽もかげっていたが、その光すら束の間はまぶしかった。一行のうち女

性は八千子一人であった。私達を除く人々は団体客であるらしく、打揃って大広間の方へ向った。

「お客さま、よろしかったら、上のサウナ風呂と岩風呂がいておりますが、お入りになりますか。団体さんは洞窟風呂の方へ揃ってお入りになりますので」

心得顔の女中の言葉に、八千子を振り返り、「どうする？」

「すっかり体が冷えたから、入らせていただきますわ」

「じゃあ、頼むよ。案内して下さい」

その浴場は、正面玄関のほんのわきにあった。脱衣室の片隅が四角に区切られ、小さな潜り戸がついている。サウナ風呂というものが、覗くとムーンと熱気が頬を撫でた。昔のカラ風呂流のものであろうか。

「お先に入っていただけませんか？」

流石に私の目を憚かって、八千子は脱ぎかねていた。彼女に背を向けて手早く脱いで岩風呂に降り立つ、湯はぬるかった。長い間つかっているが一向に温まらない。湯づらがゆらいで、私の背中越しに、そっと八千子が身を沈めた。

「ぬるいのねえ」



「ウン、風邪を引くよ、これは。ムシ風呂へ行こうよ」

私はしぶきを上げて飛び出すと、一気にサウナ風呂に駆け込む、そのあとを追いつけるようにして八千子が飛び込んで来た。天井が低く、硬い木製の腰掛けに厚い布が敷いてある。それに腰を降すと、じわじわと熱気が私の濡れた皮膚に泌み渡って来た。

「抱いて——」

私は無言で八千子の体を抱く。狭い密室の中で、ヒタと寄り添っていた。

喘ぐような吐息が八千子の喉から洩れた。

私は危ないと思った。ここで痴戯をくり続けられ、私の心臓は熱気に参って異状を来すかも知れない。「サウナ風呂で、男女情死」そんな三面記事が出ないとは、今の状態からすれば保障出来ない。暗く赤い裸電球の下に照らし出された、八千子のひたいに玉の汗がブツブツと吹き出していた。私は目眩みそうになって来た。首に巻きついていてる女の手をもぎとるように必死に離そうと努力した。

「分って——ねえ、分ってくれる？」

「うん、分った。分ったから離してくれ。苦しいんだ——ああ、息がつまりそうだ。頭がガンガンしてきた」

サウナ風呂の、前面の硝子越しに覗ける、

脱衣室の金魚の水槽がチカチカとし、ぼうつとぼやけて見え始めた。これはいけない、心臓麻痺を起しかねない。彼女のすがりつく手を払いのけて、潜り戸を開く。フーッと二度三度、大きく息を吸い込み、ペトペトになった汗の体を、脱衣室の金魚の水槽前の椅子にどっかと落した。どうやら早い鼓動は納まって来た様である。何気なく金魚槽のうしろの鏡で、自分の疲れた顔をうつしていたが、呀っと思った。そうだ、この鏡はマジックミラーなのだ。サウナ風呂の内部からは脱衣室の様子が手にとる様に見えるが、脱衣室からは全然見えない鏡になっている。とすれば、これは何を物語るのだろうか。サウナ風呂の熱温を止めて、内部から旋錠し、閉じ籠った場合、脱衣する人々の姿態が、ありありとサウナ風呂の内部から手にとる様にうかがわれるというものだ。そして脱衣の主が数多の女人の団体であるとすれば——。見渡せば、このマジックミラーの鏡以外に、脱衣室に鏡はなかった。女人の天性で、必らずやここで我が姿をうつすに違いない。歴々とその光景を想像して、私は胸が熱くなった。

岩風呂の水でサッと体を流すと、始めて人

心地がついた。

「弱いね、辻村さんは、フウフウって」振り返ると、私の背後に惜しげなく素肌を曝して、八千子は妖しく笑っていた。

ブツブツ吹き出した肌の汗が、女盛りの白い女体の上を脂にまみれて転がりすべってしまった。落ちていった。

「分ったよ、分ったよ」

何が分ったのか誰も分らない。私だって分らないのだ。そのくせ、さも分ったという台詞が、この場合、一番ピッタリした表現であった。

× × ×

笹原八千子は磨洞温泉から、亡夫の両親に電話していた。

「ええ、お仕事の都合で、少し遅くなりますの。ハイ、多分夜になると思いますが、それまで、お願いします。いつもいつも勝手計りいって、ハイ……」

子供を夜まで預ってもらうらしかった。R荘を出たのは午後五時に近かった。既に暮色がくろくすみ出していた。

八千子に道を訊ね乍ら走らせると、阿漕の駅までは十分も掛らなかつた。この辺りの地図に精しい筈だ。

久居町に向って少し走り、言われる俚に右に折れ、直進し、あなた任せに走っているうち、町中の建物をこわしたあとの凸凹の広場のところで、彼女はここへ車を入れておくように私に言った。

「邪魔にならないし、鍵をかけておけば大丈夫ですわ。私が先に歩きますから、少し離れてついて来て下さいね。まあ、すごく重い袍ね、何が入っていますの？」

「ブレイ道具一切、張り切って相当持ってきたものだから、一寸重いですよ」

「まあ大変。何だか少し怖くなりましたわ」

私は照れて笑った。

スタスタとさりげなく笹原八千子は日暮れの小道を歩く。住宅地らしい家が点在し、その処々に店舗も都合よく割り込んでいる。

二百米近くも歩いただろうか。袍持つ手が少し粘って来た。やはり彼女は彼女なりに充分近所隣りを警戒しての行動であった。私はそれでいいとしても、ここに住む八千子にとって、あとあとまで噂を立てられては困惑するに違いなかった。温泉での、あの碎けた口吻りとは裏はらに、やはり彼女は自宅へ呼びよせるだけの計画を立てていたのだった。

角がパン屋であった。その十字路を曲り

際、八千子はチラリ振り向いて、私の姿を確認し、辺りを窺って手招きした。

角を折れて四軒目の建売住宅めいた入口に立って、八千子はハンドバッグから鍵をとり出し、玄関の戸を開いていた。

わき見もせずずっと消える。数分おくれて私も辺りを窺い、人気のない夕餉時の無人さを幸いに、スルリと滑り込むように開いた俥の扉の中へ入る。あわてて戸を閉める。玄関に立った俥の彼女は、素早く内側から差込錠を落した。

心得きった自宅のスイッチをパチパチ押すと、グローブ球があちこちでまたいたいて、蛍光灯が、八千子の家の中を照らし出す。

無言で私の手を引っ張り、奥の間へ歩を進める。六帖の間は小ざっぱりと片附いて、母子二人の質素乍ら、割合気楽な生活とも見受けられる調度が部屋の隅を占めていた。

「この部屋だけが外に灯りが洩れないのですよ。灯をつけていると又誰か訪れて来ても困りますから、皆消しますわ」

石油ストーブに火をつけ終り、八千子は立上って、スイッチを切りに立った。

居間の左手は障子になっていて、硝子ごしに雨戸が見えた。その雨戸のカーテンは厚手

のカーテン地であったが、雨戸用にしては少し不似合な感じである。

「これ玄関わきの応接間ですよ。昨夜外して、大急ぎでここへとりつけましたの」

「じゃあ、最初から家へ呼ぶ気でいたんですね」

「そうでもないですよ。でも、どんなことでそうなるかも知れないと思って、その時のために準備したんです。津の市内でホテルへでも入るところ見つかったら拙いでしょう。だから……」

「それなら、やはりよその土地にすればよかったのですよ。その方が安全なものなあ」

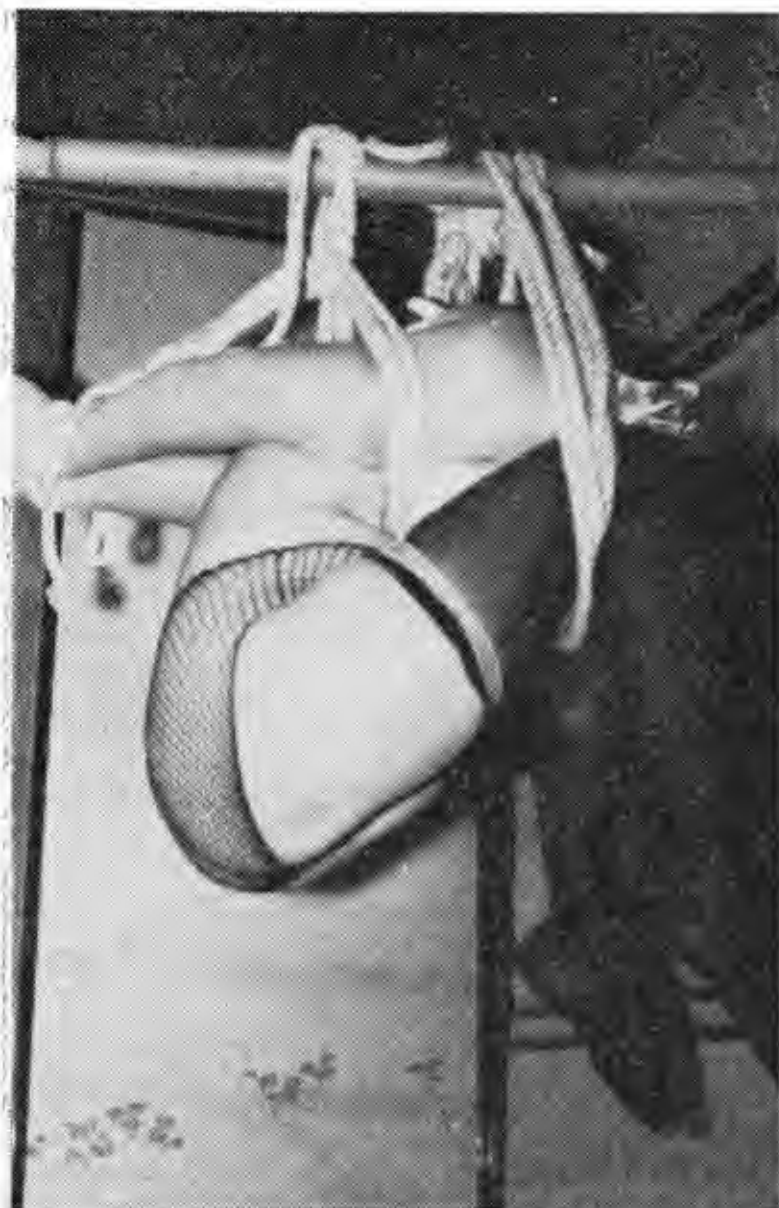
「知らぬ土地へ、始めての人と行くのが怖かったのですもの。こんなことなら、そうすればよかったと思いますが、お顔を見るまで辻村さんのお人柄分らないでしょ。もしヘンな人だったら、津市に入ってから、まいて逃げ帰る腹でいたんですよ」

「ひどい人だ。気に入ってもらったからよかったものの、でないと、知らぬ他国で途方にくれてしまうところだった」

「お夕食どうなさいます。何かつくりますしうか——」

「とてもとても、もう入らないよ。未だたべ





終って二時間も経っていないだろう」

「私もボンボン。まあ、お紅茶でもいれますわ。プレイは、それから……」

ニッと笑って八千子はうす暗い台所へ立った。勝手知ったる我が家の手探りで茶瓶をさげてくると石油ストーブの上にのせた。ふすまをあけて、茶の間から紅茶、砂糖、ポッカレモンを盆にのせて持ち運んでくる。

「お茶が入るころ、部屋も大分温まりましたから、恰度いいでしょう。さあ、何からでも聞いて下さいネ。辻村さんに何でも話して

しまいますから……」

淡々と聞くには惜しい雰囲気であった。S Mのプレイに錦上華を添える意味において、これは責めの過程に白状させるようにして訊問していった方が、プレイも楽しめるというものだった。

「そうね、そのことはいずれ追々きくとしてあなたの方から何か訊ねることはないの？」

「きいていい？」

「ああ、何でもね」

「じゃあ、おききますわネ。今日私とプレイすること、辻

村さんの奥さんは御存知なのかしら？」

「ああ、勿論、

そう言って出て

きたよ」

「それで奥さん何ともないのかしら」

「抵抗はあるだろうね。しかし私は妻を信じているし、真底か

ら愛している。プレイはプレイとしていつも割切っているからね」

「でも割切れない時は、どうなさるの？」

「私の理性の問題だよ。一線を越える時も往々にしてあるさ。でも、私の信条として、アイ・ライクはいいが、アイ・ラブは妻への裏切行為だから、ライクであってもラブにはならない。これは所詮、心の問題だから」

「人を好きになるということは、愛するということに通じないかしら」

「好きになって愛してもいいさ。しかし私の場合、相手を好きになっても愛しては困るのさ。でないと、過去のこれだけの数多いハントの女性をどう処理してゆくのだよ。S Mプレイという通り、プレイは遊び、遊戯、たわむれ、勝負だよ。それで割切っていると思うのさ。人生の表の生活だけを追求する人に裏のこのプレイの味を知らない人は実に多い。だから夫婦のみで汲々として、挙句の果てに倦怠期となって、離婚だの、という騒ぎになるのさ。冷めたい夫婦、真に相手を理解しない夫婦にプレイは介在しない。所詮はうわべだけの、ごくつまらぬ牝と牡との寄合い世帯で終ってしまうのさ。お互いに相手を信じ合ってこそ夫婦のプレイは成立するんだと思う

よ。話は横道へそれたけど……」

「じゃあ、辻村さんの御家庭は、勿論夫婦プレイなさるってわけ？」

「それが二十五年続いた第一の要点かも知れないね。今年で銀婚式、そしていよいよ円満だよ」

「とすると、私が仮によ、仮に辻村さんを好きになった時、どうすればいいの？」

「好きでいいじゃないか。プレイで知合ったのなら、プレイで終始すればいいんだ」

「女はそうはゆかない時もありますわ。まして私のように未亡人という烙印を押されて御覧なさい。どんなに束縛されるものか——」

「プレイに理解ある人と再婚すればいいんですよ。それが貴女のストレス解消には第一番ですよ」

「子供だって、あるんですもの」

「プレイを通じて理解さえしておれば、問題ないと思うね。貴女の御主人との結び付きもプレイじゃないかと想像するんだが、それはまあ、プレイをし乍らきましよう」

八千子は私の言葉に、やや不満気な表情をうかべて紅茶を入れ出した。部屋の温度は徐々に高まりつつある。そして私のプレイへの欲望も又急速に高まりつつあった。

× × ×

八千子の体は驚くほど柔軟であった。黒いストッキングにブラジャーのみというスタイルは、八千子の希望であった。

今彼女は、私の眼前で両脚を一杯に開き、体を二つ折れにして呻き、喘いでいた。

両手を後手に縛り、二の腕を強く締め上げて縛った上、開ききった両脚の膝裏に縄をかけて背から胸に廻し、左右の足を体の脇に固定させて縛ってある。八千子は、ヒタヒタとたみにひたいをすりつけて頭を上げようとしている。私は振り終って、その二つ折れの背に腰を落す。

「ウウツ、く、くるしいわ」

「もうよそうか——」

「いいわ、もっと……」

ぐぐツという悲鳴ともつかぬ呻きが洩れたので、私は腰を上げた。両脚をもち上げて、その尻、うしろの押入れの戸に体を立てる。

八千子は、じっと眼をつぶっていた。

二度目の緊縛がこれであった。かなりのプレイを経験してきた彼女にとって、初歩のオースドックスの緊縛は不必要であったのだ。私も避けたし、そうしたありきたりの後手縛りの胸に縄をかける縛り方など、八千子にと

っても物足りぬものであったに違いない。

フォト抜きのプレイが始まった。私は八千子に眼隠しすると、ズボンを脱いで腰のバンドを引抜いた。

「さあ正直に応えるんだぞ。でないとこのバンドが処嫌わず飛ぶからね。ところで旦那はプレイの時、あんたを何て呼んだのだ」

「ハイ、いつも冗談に呼ぶ時はヤツチン。そしてプレイの時は犬になれっていつて、ハチ公って呼びました。私の名前を仮名読みすると、八千子がハチ公になるのです」

「よろしい、ハチ公とはいいい名だよ。私もハチ公ってよぶからね。ハチ公はどうして十四才も年の違う旦那と一緒にあったのだ？」

「好きになったからです。いいえ、愛し始めたからです」

「旦那は二度目というが、旦那の先の奥さんはどうした？」

「知りません」

「旦那を奥さんより盗ったのだね」

ハチ公は黙って唇を噛んだ。

約束通り、私の一発が、ハチ公の腿の辺りにお見舞いした。呀っと呻いてハチ公は前に倒れそうになる。手で支えて再び押入の戸にもたせかける。



「どうかね、盗ったんだろ？」

「ハイ、盗りました。私は夫が課長当時、その会社の庶務にいまして、人眼を忍ぶ仲間になりました」

「よしよし、それで結婚するまでに勿論一緒にホテルに出掛けただね」

「ハイ」

「何度行った」

「十五回許り行きました」

「妊娠しただろう」

「ハイ、一度」

「それでソーハしたんだね。ウン、仲々罪が重い」

「すごく楽しい雰囲気だった。八千子に眼隠ししてあるので、気分がラクである。それは彼女にとってもいえるかも知れない。」

「それで課長に、結婚してくれと頼んだのだね」

「ハイ」

「ハイ、ハイというが皆その通りなんだネ」

「ハイ、全部その通りです」

「プレイは、いつから始めたんだネ」

「五、六回目ぐらいから、夫は縛り始めました。それが夫の愛をつなぐ唯一の手段だと考えて進んで夫の好きな様にさせました。夫の

前の奥さんは、全然プレイの出来なかった人で、それをアブノーマルと考えて、ひどく嫌っていたそうです」

「よろしい、これで許してやるが、次の縛りはソーハに対するバツとして行なう」

私はすっかり愉しい気分になった。

フォトプレイを離れて、こうしてSMのプレイを味わい出すと、フォトをとるのが面倒くさくさえてくる。

筆筒の側へ引曳って来て、足の縄をとき今度には両脚を立てたポーズにして首縄をかけてタンスの環につなぎ、持参のローソクをハチ公の口に押込んで火を点じた。

数分すると軋涙が溢れてこぼれ、ハチ公の唇から顎へ、頬へと流れ始めた。

ローソクを取置き、バンドを握ったまま、

「もっと続けるがいいかい」

と彼女の耳許でささやくと、大きくうなずいた。柔かい体は珍重であった。一度すっかり縄をときほぐし、改めて両手を後手に縛って、ぐいと体を二つ折りにおり曲げ、腿から背にかけて引きしぼる。半開きの両脚の間に頭を押し込み、首縄を両脚にかけて、股の間に頭を埋没させる荒業をやったのけた。

私は一仕事終って、タバコに火をつけ、こ

の極度に彎曲したハチ公の強烈な緊縛にしばしみとれていた。足蹴にして腕の辺りを押すと、体はゴロリと反転して、苦悶の形相が彼女の両股の間から覗けた。もう一度押し転がせて反転させる。

「これでもか、これでもか——」

私はどのような緊縛にも耐えうる、この女体に、もうこれ以上はないというポーズを求めつつも、そう叫び乍ら尚以上のものを真剣に頭に描いていた。

私は煙草をふかせ乍ら体を休め、ハチ公はウンウン唸り乍ら、それでも控え目な態度で必死に喘いでいた。

強烈な縛りがして見たかった。ハチ公を泣かせてみたい激情が、どす黒く私の体内を駆け巡った。

この腕を思いきり締め上げて高手小手にして胸の縄を股へと通して、双つの丘で分けて腰につなぎ、ぐいぐいと体を足で押しつけていった。二の腕に深々と縄は喰い込み、両手の指先は白く変っていた。

縛られているハチ公より、縛っている、私の方がすっかり草臥れて来た。

「といてやろうか——」

ハチ公は大きく首を振った。じゃあ、まだ

まだ大丈夫らしい。そのポーズに向かって私は又ぞろ呼びかける。

「旦那はどうして死んだのだ？」

「交通事故です。運転していた車に、ダンパがぶつかって来て、頭を打って即死でした」  
「かわいそうだな。旦那の死後、ずっと男は知らないんだな」

「ハイ」

「嘘だろう」

私の鞭は、ハチ公の胸に鳴った。

「何人知っている？」

「一人、いえ二人です」

「その男達とプレイはしたのか」

「いいえ、全然」

「どんな男だ」

「保険に入って貰いたさに、つい誘惑に負けて——」

「それで入ってくれたか」

「ハイ、一人は五十万円、も一人は三百万円です」

「その後つづいているのか？」

「いいえ、どちらも一回きりです」

「よし、信用しよう。次は旦那とのプレイだが、一番苦しかったことは、どんなプレイだった？」

「夫の車でドライブした時、鈴鹿の山中で、逆吊りされた時です。お百姓が遠くから私を見ていました」

「旦那は、どうしたのか？」

「お百姓の方をにらみつけましたら、行ってしまいました」

「第二に苦しかったことは？」

「両脚を開いて逆さに鴨居から吊るされ、浣腸された時です。浣腸液は日本酒でした。おなか煮えくりかえるようになりました」  
「ウン、仲々やるな。旦那は浣腸もやるんだな」

「ハイ、気が向けば、よくやりました」

「一番苦しい浣腸は？」

「逆さ吊りの時と、石油を入れるポンプで温湯をおなかポンプンにふくれるまで注入された時です」

「私の縛りと、旦那の縛りと、どちらが強いと思うか？」

「主人の方が、きつかったと思います。三度許り気を失いました」

「気を失った縛りは、どんなものだった？」

「私の頭のうしろで両脚を縛り、二つ折れの体を、両脚に縄をつけて吊り下げた時と、荷物のように海老縛りにして、麻袋に入れて口

を縄で閉じて吊したときです。もう一度は、

口中一杯にはおぼる大きいまりのような布の球のとりつけた嵌口具をはめられて、おしりにお灸をすえられた時です。窒息しそうになり、熱いので気を失いました」

「よろしい、なかなかよくプレイの状況を覚えてる。では三十分休憩して、いよいよ第二段階の強烈なものに移るとしよう」

内心そのすさまじさに驚嘆しながらも、私の嗜虐心は、彼女の告白によって更にあおられて油紙に火のついた如く燃え上ってきた。

× × ×

トイレに立った彼女は仲々戻ってこなかった。不安がきざした頃、やっと座敷に入ってきた八千子の顔は浮かぬ面持であった。

「どうしたの？」

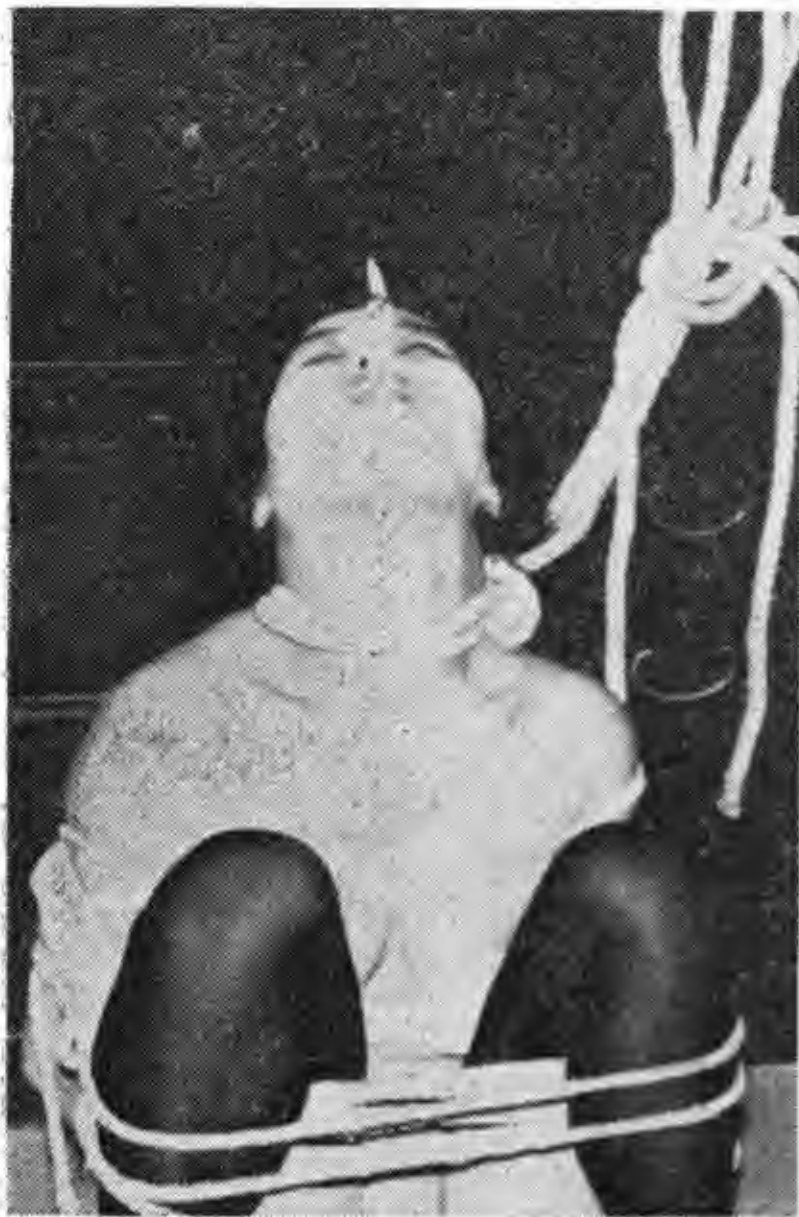
「思いがけないプレイで、急に変調を来したのか、この間終った許りなのに、又あるんです。どうしたのかしら」

「弱ったネ。プレイは続けられないだろう」

「大丈夫ですわ。唯、アンネのパンツをはいてないと、汚しては困りますから。いけないでしょうか、こんな網目のパンツをつけたりして……」

事実、八千子は少し蒼褪めた顔色だった。





折も折、こうした変調を来したのは、八千子にとつては、相当なショックであったに違いなかった。

「なあに、いいんだよ」

とはいったものの、意馬心猿の私の心に、フト水がさされた感がないでもなかった。天の配剤というか、この俤唯では済みそうもなかったこれからの夜のプレイであったとすれば、八千子のこの突然変異は、男である私への赤信号といえなくもなかった。

「辻村さんさえよかったら、私、構いません

のよ。もっと続けて下さって」

哀願するような、泣きべそをかけた八千子の声に私は氣をとり直した。それも亦変っていて面白がる。本人がこれ程までに希望するのなら、もう一息やって見よう。

「何か、竹の棒か、杖でもないの？」

「ありますわ、すぐ持ってきます」

いそいそと彼女は台所へ走り、何の目的でおいてあるのか、二米許りの竹の棒と、丸い木の棒をもち込んできた。

両手を掌を合せて縛り、両脚に丸木棒を縛

りつけて、猿轡をはめ、二つ折れにして、頭を両脚の間へ狭ませて縛って見たが、これは第一段階の縛りと殆んど変らない同巧異曲のものだった。

さらばと、二つ折れの体の膝裏から胸へと縄をかけ、その縛

った縄の隙間に竹の棒を押し込み、押入れの戸を開いて、吊ることにした。八千子の体を抱え上げて、竹棒の一方を押入の中の箱に引っかけ、体を離して、じりじりと竹棒のはしを握り乍ら、タンスの上にぐいと持ち上げてのせる。彼女の体は二つ折れの俤、宙に浮いた。両手首を縛った縄のはしが吊られて持ち上り、彼女の両手は高々と上っていた。

「叩くよ、いいね」

微かにうなずくと見るや、鞭代りに縄を丸めたロープ鞭が、立てつづけに八千子の太腿に、腰に、二の腕にと飛び交うた。ロープ鞭の勢いに押されて、宙に体はユラユラとうごき、押し殺した呻きと悶絶する様な悲鳴が、猿轡の奥から断続して流れた。

異常生理を起したこの女体に、私ははかしかれぬ欲情の恨みをもこめて叩きに叩いた。条々と交錯する赤いすじが、見る見る肉のもしり上りを見せて、白い肌に浮かび上った。

それでも八千子はこらえて呻いていた。その呻きは、私の耳に「殺して、殺して」と聞えた。叩くだけ叩いて激情が鎮まると、白々しい道化た一抹の空気が忍びよってきた。私の持論のプレイとはお互いが愉しむもので苦しみ、責めるものではないという私自身の鉄

則を、私はいつしか、しらずしらず破っていた。この場合、果して八千子は私の行為に対して、愉悦と快楽を覚えたであろうか――。

プレイというひとつのルールを逸脱した、今の行為は、私自身どう説明のしようもないが強いて理由をつければ、突然変異に憤懣やるかたなしといった、はかし切れなかった欲求の不満からではなかったであろうか。

やっとタタミにおろし、縄をといった八千子の体は、見るも無惨にふみにじられていた。白い肌の全身を、くまなく縄目が深々と跡型をつけて蔽い、鞭の飛来した箇所は赤く染まって痛々しかった。裸の腕を、八千子は無言でなでさすり、届かぬ背に手を廻して撫でさすっていた。

「悪かったネ、つい我を忘れちゃって……」

「どうして、あやまったりなんかなさるの」

「でも、つい手荒くし過ぎた様なもの」

「私が満足しているといったら、辻村さん、あきれるかしら？」

「私に気を使わなくてもいい、本当のことをいってくれればいいのだ」

「本当よ。私って、こんな女ですよ。夫に死別して以来、本をよむ程度で、いつも悶々としていましたけど、何だか、一ぺんにパアッ

と気が晴れてしまいましたわ。でもこんなこと辻村さんでなければ出来ないでしょうね。本当はお礼申し上げるのは私の方ですわ」

その言葉に偽わりはない様であった。夫との夜毎のプレイで、被虐に快楽を見出した女は、生ぬるい刺戟では反って寝てる子を起すようなものでしかなかったともいえそうだった。

「お疲れになった？」

「少しネ」

「これ、おのみになるといいわ」

八千子ははずみをつけて立ち上ると、ガウンを引掛けて、茶の間に立ち、アリナミンを持ってきた。心尽しが有難かった。

「もうお帰りになるの？」

「ああ、ぼつぼつ引揚げないと帰れなくなるからね」

時計を見ると八時半を廻っていた。あッという間に数時間が経ったらしい。

「私、体がどうもなかったら、榊原温泉にでも今夜連れて行って戴こうと思っていたんだけど、これじゃダメですわネ」

「榊原温泉は近いの？」

「先程、津新町の踏切をわたったでしょう。あの道をまっすぐゆけば、車なら三、四十分

で行けますわ」

「いっていいよ」

「でもダメ、何も出来やしないでしょう」

榊原八千子は可哀想なほど、突然変異を気にしていた。その気なら、生理の始まったぐらい気にする私ではないが、時が時だけの変異だけに、なまじ妙になっても困ると私はこらえた。心の底のどこかでは、妻に対する夫の貞操を保ち得たことに失望の交錯した奇妙な安堵をも感じていたのであるが。

「浣腸出来るのを知っていたら持ってくるのだった。大体浣腸は皆嫌うのね」

「辻村さん、お好きですよ？」

「プレイに関してなら、何でもこいって所かな」

「鞭で叩く音、外へ聞えなかったかしらネ」

「大丈夫と思うが、雨戸に耳でもよせていれば別だが……」

「もう、こんな私に愛想がつきた？」

「中々出来ない緊縛をさせてくれて有難かったよ。ただ、これから先、どこまで昂進するか、一寸心配だがネ」

「プレイしていて死ねば本望じゃない」

「さあ、それぞれ、あなたのそうした気持がこわいんだよ」



「辻村さんには余り無理なこともお願い出来ないですわね。もっとスタミナのある安心出来る人がいたら紹介して下さいネ」

「ああ、考えとくよ」

私の脳裡に、フト山本章の姿が浮んで消えた。彼なら喜び勇んで千里の道も遠しとせず駆けつけてくることだろう。

物懶いひとときだった。私の精力はすっかり昇華し、消耗していたのかも知れない。

「本当は泊っていったのかもしれないけど、そんなこと、無理でしょうネ。それに私あれだし」

私は服装の乱れを直し、八千子に背を向けて大紙幣を一枚札入れから抜き出した。

「何も手土産なかったんだ。何か子供さんにも買ってよ」

「そんなこと、いけませんわ。うれしい思いをしたのは私なんですもの」

押しつけた紙幣を観察して、彼女は押し返して来た。

「いいんだよ、とっておいてくれよ」

私は手を引込める。これが彼女の生活に幾分でも潤おいをつけてくれれば、私も本望であった。

表戸を誰かがガタガタイわせた。私達はギ

ョツとして顔を見合わせる。留守と見てか、立去る足許が微かに伝わって来た。

「頼まれていた春もののスーツとりに来たのかしら、うっかり今日辺り出来上るといったものだから」

現実に戻っている彼女の、稍困惑げの横顔に、私は勿々に立ち去るべきだと思った。

夜の冷え込みは強かった。私から数米はなれて、八千子は暗い夜道を車置場まで送って来た。トランクに鞆を入れて、ドアの鍵を開くと、見境もなく駆けよってきた。

「又淋しくなるわ。こんな女でもよかったらきつと又来て下さいね。いついつまでも、お待ちしていますわ」

薄明りに浮ぶ、笹原八千子の切れ長の睨みから、何の涙か、すっと一すじ流れ落ちた。

「これを持って下さらない、私を憶い出すやすがにして——」

立ち去りかねる私に、八千子は刺繍の縫いとりのあるハンカチを、握らせてくれた。八千子の甘い香水のかおりが、そのハンカチから立ち籠めていた。

「私の唇のしるしをつけておいたのです。洗っちゃいやよ」

笑い乍ら眼は泣いていた。

正直いって、これから引返すのはウンザリした。

「どこかまで乗っていかないか——」

「乗りたいけど、今度は私が帰れなくなってしまいますわ」

「一人で淋しいな。まあいいや、元気を出して飛ばすとうるか」

「今度若しお会い出来るのなら、津なんて無理いませぬわ。大阪へだってどこへでも参りますわ。だから忘れないで」

「ああ、今日のプレイは強烈すぎて滅多に忘れはしないさ。じゃあ、又の逢う日まで、お元気だね」

夜道をかなりの猛スピードで飛ばしても、三時間以上は優にかかる道のりである。牡丹雪が音もなくフロントグラスにへばりつくように見ると、それが忽ち、白一色となって視界を遮ぎり、霧々と舞い狂う、夜の名阪国道を、私は妻の笑顔を睨に浮べ乍ら、一目散に雪中を走り抜けていった。

(完)

× × ×

× × ×

## 架空特別ルポ

## 秘密クラブ潜入記

町  
陽

大阪も郊外になる豊中市、大きな邸宅が並ぶ古い街並。その一角に目的のクラブはあった。おさわりバー、売春兼営のバー、夫婦交換会、会員組織のセックス・パーティー、色々

のぞいてきた私だが、今度のようなクラブは初めての試みだ。サド、マゾ等の人々が数多く居ると聞いてはいたが、実際に見るのは、これが初めてだ。もっとも会長の話によると

私の心の中にもサド、マゾはひそんでいるという。すべての人の心には多少なりとも異常性があるそう。それは憎しみだけではなく愛情の表現法の一つだ。成程、そう云われてみれば、私も子供の頃、探偵ごっこ称して女の子を縛ったこともあった。サディスト、マゾヒストは人間の文明度が進むにつれてふえてくると云われているが、まだ今の世界では変態者としてしか見られていない。それに犯罪と結びつけて考える者が多く、殺人狂等をサディストと称している。

だが、会長の話によると殺人狂等は精神異常者であって、サド、マゾとは別に考えなければならぬという。相手を苛め、相手に苛められることによって相手の愛情を確かめ、肉体の美しさを見出すことだそう。まあ一度見てごらんさい、と会長は云った。

ここで断っておくが、これは決して公然と見たものではない。この会は会員制度が厳しく、決して部外者には洩らさないことを会則にしている位だ。私がこの会の存在を知ったのは本当に偶然からだが、会長が又よく知っている人物であることも私に幸いした。

会員は男女同数で十人を限度とすること。欠員が出来た時だけ、新会員を認めること。



新会員は現会員の紹介がなければならないこと。女は十七才、男は二十才以上でなければ会員になれないこと。等々、この外にもまだ色々厳重な規則がある。会長の言葉を聞いてみよう。

「会員は夫々社会的に立派な職業を持っています。そりゃ一流会社の社長や部長もいますよ。だけど私は金持だけが楽しんで良いというものじゃないと思っています。だから身分は問いませんし、費用も一回の会合に千円から、高い時でも二千元位です。会合は三カ月に二回位の割合ですから年に八回ですね。会員はこの中、三回迄出れば良いんです。勿論全部でも良いんです。それに男女の数がどうしても釣合わなければ流会にして、この時は全員出席とみなしますから、金額的には、比較的楽なんです。会員の身分調査は厳重です。身分によっちゃ、こんなことが知れると社会的生命を失うって人もいますから、絶対他人に洩らさないという人だけを選びます。ええ、特別の方法で調べる訳ですが、今迄間違っていたことはありませんね。今の会員です、まあそれは実際に見ての話にしましょう。私達のクラブはSMプレイを楽しむだけではなく、SMを研究し、美として認めよ

うというのですから、一種の宗教的なムードがありますね。丁度今日は新入会員が居ますから入会式がありますよ」

私が案内されたのは小さな部屋だったが、三方ガラス張りになっている。その三方にそれぞれ部屋があり正面の部屋が最も大きかった。その正面の部屋には、小さな壇が設けられ、その上には海岸の岩に縛りつけられたアンドロメダの絵が架けられてあった。その前には男三人女二人が、いずれも目の所を大きなマスクで覆っていた。

「このガラスは向うからは鏡にしかみえません。ルール違反がないように私が見張ることがあるのです。もっとも今迄違反はありませんけど」

「どういった人達ですか、会員は」

「一番左の背の高い男性は、名前は皆云わないで頭文字だけにしておきましょう。Iという民放のアナウンサーです。その隣の小肥りの男性が中小企業の社長でK、一人おいても一人のがっしりした男性はNという工員です。それに今日は来ていませんが、もう一人Sという公務員がいます。それから女性の方ですが、左側の少し細いのがテレビ・タレント。名前を云うと貴方も御存知でしょうがH

とだけ云っておきましょう。右側のグラマーはバス・ガールのAです。今日来ていない二人はTというBGと、喫茶店のウェイトレスのOです。一人ステューワーデスがいたのですが、こんど止めたので、その代りに今日新入会員があるのです」

「お互いに素性は知っているのですか」

「知りません。知っているのは私だけです」

「新入会員というのは」

「この近くの家のお手伝いのTですが、Tが二人居るとややこしいので名前の方をとってEと呼ぶことにします」

部屋の中の五人が一寸ざわめいた。

「では始めましょうか」

Kが落着いた声で云った。どうやら彼が今夜のリーダーらしい。

「Iさんは新会員を、NさんとHさんは道具の方を、Aさんは新会員について下さい」

この一言ですべてが判ったらしく、皆それぞれの位置を占めた。Iは視野から消えた。間もなくIが一人の少女(そう少女というにふさわしいような女性だった)を伴って現われた。先程会長からEと教えられたその少女は、すでに両腕を背でしっかりと縛られ、その縄が胸のふくらみの上に一本通っていた。

真新しいその縄は、白い柔肌に非情に喰い込んである。マスクの為表情は判らないが強く締った口元からも彼女が羞恥と苦痛に耐えていることが判る。

「きれいですね」

私の横で会長がつぶやいた。云われなくても私にも美を見る眼が少しはあるつもりだ。Eの体が今迄見ていた女性達とは飛び抜けて美しいことは一目見れば判る。だが、後手に縛しめられた少女の姿が、普通以上の美しさを見せているのだ。

「美を歪めて別の美を見出す、それがこの世界です」

私の心を読んだかのように会長が云った。「元々美しい人は縛られることによって、より美しくなります。見ていてごらんなさい。

あの娘は色々な美しさを見せてくれますよ」

Iに縄尻を取られてEは床に正座した。むちりとした太ももが隙間なくひつつく。

「胴衣！」

Kの声にNとHが少女に近付いた。Nは正座したままの少女の脚を縛り合わせた。Hは傍のAに革胴衣を渡すと、自分はそれについている鎖の操作を始めた。Eの豊かな乳房の下半分から細腰にかけて革胴衣は、しっかり

とまとわれて行った。たおやかな少女の体に胴衣はきついらしくマイクに入る息づかいが段々荒くなつて行った。

「出来ました」

AがKに報告する。

「始めます。新入会員は出来るだけ苦痛をこらえて下さい」

「はい」

小さな苦しげな声だったが、少女は、はっきり答えた。

Kは視線でHに合図を送った。鎖の音が高鳴ると少女のうめき声も高まった。胴衣の後につけられた鎖が緊張すると、少女の体が宙に浮いた。と同時にKは横の砂時計を逆にした。少女の両脚は縛られているので少女は正座のまま吊られた姿になっている。

「ううむ」

顔を紅潮させて少女は懸命に苦痛に耐えている。赤い砂がサラサラと下の壺に落ちる。

「命に別条はないのですか」

「大丈夫ですよ。それに入会式は儀式ですから」

少女の苦痛の汗か脂かと思う液体が床に小さな水溜りを作った。

「よし」

Eの縄は解かれた。だが、すぐに傍の台の上に大の字なりに縛りつけられてしまった。胴衣を外された腰は赤く、痛々しい。白い太ももにも、くっきりと赤い筋。

手足は思い切り上げられ、伸ばされた。白い、ピンクの艶のある……若々しい姿態がすべて露わにされた。若々しい体の何と美しいこと。私は今迄、様々の秘密ショーも見た。ブルー・フィルムも見た。だが、そこには本能しなく美しさはなかった。この少女の体には本能もあり、美しさもあった。それは少女の体によるものか、すべてをさらけ出された姿によるものか、それとも被虐によるものか、それは断定出来ない。恐らく、それらすべてによるものだろう。

Kは開かれた少女の脚の間に立った。いつしか手に太い火のついたろうそくを持っていく。丁度、マイクの可動範囲外になるのか、Kのくちずさんでいる言葉は判らない。信者が敬虔な祈りをささげるように、ろうそくを目の高さに持ち、伏目勝ちにKはつぶやいていた。一区切り終ると、ろうそくが少し傾けられる。たまったろう涙が柔い少女の肌に落ちる。

「ううっ！」



手足の縄を緊張させて少女の体はそった。熱涙は両横に立つ会員の手に渡された。Nが脐を中心に、Hは太ももを、Iは乳房を、そして最後にAが、二の腕に熱涙の洗礼をほどこした。

「ろうは瞬間的な熱さを感じさせるだけで、肌に傷はつけませんからプレイにはよく使われますよ」

「プレイ？」

「ああ、この会で、というよりこういった傾

向の人達が互いに責め合ったりすることをプレイと云っています。つまり、本当に相手が憎くて苛めるのではない。お互いに好意を抱いてするので、その意味でプレイと云うわけですね」

「矢張り体に傷がつくと困りますか」

「人によって違いますね。殆どの人は、傷が残らない程度の跡ならかまわないと云いますね。縄や鞭の跡位は平気ですよ。だけどあのHさんはタレントという仕事柄、それも困る

と云って跡が残らない方法でしていますよ」

「本当に鞭で打つのですか」

私は小説等で表現される血みどろの拷問を思い出し、この世界の異常さを連想した。

「打ちますよ。だけど――」

会長は、私の心を読み取ったかのように云った。

「鞭で打って肌が裂け、血だらけになるなんてことはありませんよ。そんな鞭は使いませんし、そこ迄打つなんて大変ですよ。余程ひどくて、内出血する位ですよ。殆どはその時だけ赤くなるだけです」

「でも痛みは？」

「それは痛いですよ。痛みと音で飲びになるのですから」

「痛さが飲びですか」

「それがマゾですよ。一般の人でも、よく女の人が今迄何とも思わなかった男の人と口喧嘩して、頬を打たれてからその人が好きになったという話があるでしょう。誰でも心の奥底にサドやマゾがひそんでいるのですよ」

「だったら、もっと公然と、このクラブが開かれても良いのではありませんか」

「そうなんです。段々その方向に向って来てはいるのですが、まだもう少しというところ

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

## 手記、体験／原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

ろですね。少し前と違って、この頃は映画や小説でも大分扱われて来ましたからね」

「そういえば、よく見ますね」

「一昔前の暗い、変態性というレッテルははがされ、明かるい遊びとして変って来ているのです。セックスが密室から開放されたようなものです。だけど、セックスがいくら開放されたからと云っても、人前で公然というわけにはいかないでしょう。我々だって一緒ですよ」

「勿論会長もでしょうが、サドの方ですか」

「一応そう云えましょうが、サドとマゾは表裏一体で、この会長は皆どちらにも喜びを感じますよ。恋愛問題でも、愛し愛されるというでしょう？ 同じですよ」

「皆さん独身ですか」

「いや、IさんとKさんは妻帯者です」

「奥さんは、この事を……」

「Kさんの方は知っています。Iさんの方は内緒です」

「この……プレイ……ですか、そのプレイの後でセックスに入るということは」

「ありますよ。自然にね」

「では……」

「浮気とは云えないでしょう。特定の相手で

もないし、よしんば浮気だとしても、家庭に悪影響は与えないのだから、認めても良いと思っっているのです」

室内では何時の間にか儀式が終り、少女の体は自由になった。

「では今夜の研究発表に移りましょうか」

Kの声に全員は、思い思いの姿でくつろいだ。ヌーディスト・クラブであるかのように黄金のりんごを食べる前のアダムとイヴのように誰も自分の姿を恥しがったりはしなかった。唯、今夜が初めてというEだけは、手首についた縄目の跡を撫ぜながら落ち着かないようだった。

「では、今夜は私が」

Nが立った。工員らしいがっしりとした体付きだった。

「古流の捕縄術について、二、三調べてみました。どなたか……」

「私の番です」

大柄なAが進み出た。Nと並ぶと女の方が少し高いようだ。見事に突き出した胸、脹りのある腰、脚も無駄のないたくましさを見せていた。

「座って下さい、届かないや」

Nの言葉に軽い笑いが流れた。Aも笑いな

がら皆に背を向けた。

「決して暗い雰囲気ではないでしょう」

会長は囁いた。

Aは後姿も肉付きが良く美しかった。

「やせている人に、マゾが多いとか云いますか……」

「そうかもしれませんね」

Aは両手を後で組み合わせた。Nは説明を加えながらAの体に縄をかけ出した。

「映画やテレビで縛られるシーンがよく出て来ますが、大半は手を後にまわしているだけです。その証拠に助けがあらわれて胸の縄を切っただけで自由になるでしょう」

「こんな研究発表は、いつもするのですか」

「一応、毎回発表者をきめて何かを発表してもらうことにしていますね。まあ題材も色々で、マゾの心理状態というむずかしいものから、縛られる時の手の組み方なんていうものもありますね」

いつの間にかAは完全に縛られていた。あざやかな、とは云いかねるが丁寧な縛り方だった。二の腕には二筋しか巻きついていなかったが、自由は完全に奪われているらしい。豊かな乳房が縄目で押し上げられ、見る者を圧倒するようだった。



「ほどこいてみて下さい」

Nの言葉にAは体中に力を入れた。腕に胸に力を入れゆるめる。その度に豊かな曲線が様々に変化した。縄目は深く浅く窪みを作って肌に喰い込んだ。

「駄目！」

Aは荒い息をついて微笑んだ。縄目はいささかのゆるみも見せていない。

「これが、この縛り方の特徴です」

Nはいささか得意気に云った。

「何だか全然体が動かないわ、かと云って、それ程痛くもないし」

「理想的だね」

「だけど私達には頼りないでしょう。矢張り縛られてるって、痛みがなくなっちゃ」

「それもそうだ」

Nはもう少し別の縛り方をAに対してやってみせた。最後のは両手を後で縛った挙句、両脚をあぐらを組ませて縛り上体を前に傾けて両膝が肩につく位にして縛り上げた。

小説絵画「花と蛇」特集号

絶賛！ 注文殺到！

売切れぬ中に、お早く

定価一部 五〇〇円

「海老責めと云って拷問の一種です。長い間放っておくと死ぬと云われています」

「苦しいですか」

NはAの顔をのぞき込んだ。

「まだ何ともないわ。だけど恥しい。女にとって、これは大へんな恥辱よ」

Eは少女らしく顔をそむけていた。

「このままでころがしたら、どうだろう」

「テーマから外れるな」

「私の発表は終わりましたよ」

「してみて」

Aは目を閉じて云った。

「私にさせて」

Hが勢い込んで云った。

「良い？」

Aは無言でうなずいた。

HはAの前にまわると両膝に下から手をかけた。不安定なAの体は、小さな悲鳴と共に簡単に後にひっくり返った。それは奇妙な姿だった。隠すべきすべてが、さらけ出された姿は、妙にこっけいであった。だが、それと共にポリウムのあるAの露わな腰が別の魅力を見せ出した。

「これで責めると、どうかな」

Iはそこに視線を止めながら云った。

「一寸ひど過ぎない」

Hはそのポリウムに、いささかコンプレックスを感じたようだ。

「ひど過ぎるだろうね。これだけで充分な責めだ。これでは逃げる術もない」

Kは思慮深げに云った。

「も、もうやめて、くるしい」

Aが自分の体で押しつぶされるようにしてうめいた。縄を解かれたAは苦しげに大きくあえいだ。

「はじめは何ともなかったけど、段々苦しくなって気分が悪くなってきたわ。もう駄目、鞭で打たれた方がずっと良い」

Aは体をのばしたり縄目の跡を撫でながら云った。

「では発表も終わったことだし、くじ引きに移りましょう」

「くじ引きでペアを決めるわけです」

会長は云った。やがて六人は男女各一組となりKとHは正面の部屋に残り、NとAは左の部屋に、IとEは右の部屋へと別れた。

「ここからは会員の自由です。私もここから先は見ないことにしています」

会長の言葉に私は未練を残しながらも部屋を出た。

「特にこのアルバムを、お見せしましょう」  
会長は自室に入ると一冊の分厚いアルバムを出した。

「会員名簿です」

名簿だが、本名はなく、先程会長が紹介してくれたNとかAとかいうイニシャルだけが書かれてあった。生年月日、身長、体重、入会月日、それに女性の場合はB、W、Hも記されている。それに全裸の被縛写真。

「今迄随分会員が居たのですね」

私は今迄見て来たことや、この写真等、興奮の連続でいささか疲労を感じていた。

「そう、二十人位ですか」

「止めた人達は？」

「転勤、結婚等が殆どですね」

「結婚で止めますか」

「女性の場合は殆どですね」

しばらくしてから私は会長を強引にくどいて、EとIとのインタビューに成功した。まず新会員のE。ワンピースに身を包んだ少女は豊かな裸身は想像出来ない可憐さだった。「いつから、こんなことに興味を抱きましたか」

「中学校の……三年生位だったかしら」

「今迄に経験は？」

「ありません」

「では今迄は想像だけだったわけですね。この会の事は誰に聞きましたか」

「Iさんです。私、ファンなんです」

「Iさんとプレイしなかったのですか」

「初めから二人だけだと恐かったので」

「初めて縛られた気持は」

「苦しかったけど、悪くはなかったです」

「裸で恥しくなかった」

「皆、裸ですもの」

「どういう所が良いの」

「どういう所って……まだ判らない」

「又、来ますか」

「来ます」

「友達には、こんな人いますか」

「判りません」

「話したことないの」

「はっきりとは」

「漠然とは？」

「あるけど、反応はなかったもの」  
少女の手首にはまだ赤い筋が残っていた。一瞬、私は先程見た少女の豊かな裸身を思い浮かべた。

「Iさんは何時から」

「そう、もう二年でしようか」

高音の澄んだ声だ。

「この会員はSM両方だと聞きますが」

「表裏一体だと思いますね」

「Iさんなんか商売柄、そういった経験は豊富なんじゃないですか」

「外部の方はそう仰言いますが、中々地味ですよ。経験といっても、縛ったのは三、四人位、その内、裸では二人、本格的には一人だけで、その人にも逃げられましたよ」

Iは淋しそうに笑ってみせた。

「ファンの人だったのですか」

「そうです。この会に入らなければ今でも、悶々の日々を送っていたでしょうね。私はねSMというのはセックスの進んだ方法ではないかとさえ思っています。だけど今はまだ世間に認められていない。私も公言する訳にいかなくて悩んでいたのですよ」

悩める者の避難所、私の頭にこんな言葉が浮かんだ。その避難所が見つかった者は幸せ者。他にも悩める者は多いことだろう。その人々はもうしているのだろう。

避難所は外部からは平凡な平和な家にしか見えない。そして避難所から帰る人々の何と明かるい表情。私は彼等を何となくうらやましくさえ感じ始めていた。

(完)



## 真夜中の雑感

島内晋一郎



奇ク3月号が届き、更に神戸は、新開地の古本屋で臨時増刊「花と蛇」特集号を購入。夜の警備勤務を利用して、一気に読むことができた。

奇ク愛読も昭和二十九年頃から中断して、今回ひさかた振りに接したが、内容も大変充実し全篇どの部分を見ても、これでもかこれでもかのバラエティーに溢れ、然も上品なテク

ニックによる熱い息吹きが、迫力となって全く感服させられると共に、創刊当時から奇クを思えば、目をみはるばかりの飛躍発展には恐れ入ったと申し上げるほかはない。

かかる万人の心の奥底の隅に誰もが持つ、いや持ち得る人間本来の切望がSであろうとMであろうとも、その貴重な記録誌(奇ク)に託し、ほのかな灯びをみつめて、喜びを感

じ、又、許された環境のある人々の活動を通じて、それぞれの道の幸せを持つ全諸君に、心からうらやむ気持は毛頭なく、ただ拍手を御送りしたい。

愛を分か合う人、心して奇クを大切にし、奇クを中心にして永遠にこの道の為に生きることに傾倒しようではないか。

過去十年毎に戦争が起きていると云われていながら、すでに二十二年に亘って続く大平ムードのこのすばらしさ、楽しさをもっともっと大切に、寸暇を惜しんで愛の為、大いに活用しなければ。考えても見給え、なんともったいないではないか。

今回刊行の「花と蛇」を、中篇とするならば、現在要望の高い、前篇(売切分)も、こうなったら、嫌でも応でも再刊せざるを得なくなるように、全ニヤニヤ族共の署名血判嘆願書でもまとめ、強迫手段を講じねばなるまい。どうせ、現在新年号から連載中の分もいづれ刊行されること必定とあらば、なおのこと、御英断を承りたい。

花の薫りにむせかえらせ、蜜の甘さに酔い痴れさせ、かと思えば、キリッとしたレモンの味を示す団氏。

人間であることの醜さや、喜びを示し味あ

わせる団氏。

ねっとりとして、ドロドロにそれは熔け、煮えたげりにたげり、何時冷めるとも知れぬ灼熱の団氏。それ位のことなど、みんなが識り、希うことを実行して止まぬ団氏。

より重く、より広く深く、美醜の探究を続ける団氏よ。長く書き過ぎたと思わないで欲しい。精も根も尽き果てたとは云わないで欲しい。もうこうなったら、ヤブレカブレで、ひとつ観念して欲しい団氏。

若しかすると、氏以上のすばらしい手腕を持って助太刀が出てくる御人もあるかも知れぬ。御安心を乞うの団氏。

ふんどしを締めなおして欲しい団氏。  
力を出して欲しい団氏。

○

話題のイギリスは十八世紀作家ジョン・クレランドの「ファニー・ヒル」を読む。

美しい容貌と肉体の娼婦ヒルの遍歴及び性の喜びは人生すべての目的とするところの美的快楽への道程を、十八世紀の絢爛たる上流社会の風俗をバックにして、そのタッチのなめらかにいとも上品に、きめこまかく書かれてある。そのややもすれば刺戟的内容にかかわらずに野卑、不行儀になることのない文

体で終始一貫して、エレガントに全くおおらかに、優雅に又、力強く、ロレンスの「チャタレー夫人」をヒルがみればおじ気をふるうであろう——の文句通りである。

上品なオブラートに、やんわりと包み込んであるが、しかし、その微に入り細にわたる描写はやわらかく、細かく、「チャタレー夫人」をバラとすれば、ヒルは菊と云えるだろうか。

始めての男を初恋として大事に持ち続け、ヒルを取巻く周囲の底抜けに善良な人々の中であって、めぐまれた日を送ることはあっても、ヒルにとって、メランコリーを味うことはひとつもないのである。

興味本位と、それに恐いもの見たさで、この書の終り頃にヒルはSになりMになることを強いられる場面が出てくる。先ずヒルに男は用意された巾広い木台に俯伏せで両手足を四脚に縛らせ、岩丈な樺の枝数本合せて特別に作った鞭を持たせて打たせるので、一鞭毎に血が出、みみず腫れになり、生木の鞭の破片が突き刺さるに至り、ヒルは仰天するが、ひるめば男に一層強要され、後悔しながらも打ち続けるのである。

耐えている男を考えると、ヒルは不思議に

勇気が出て力を入れて行くのである。臆病者ほど突進するのに似ていて、今度は男の状態にヒルが代り、下半身から噴き出る数条の血に接吻し、傷を吸い、傷だらけの魂り、切り傷の血だらけになりながら、一言も逆らわず呻き声一つ上げぬヒルに、男はただ狂喜するのである。気絶しそうな痛みばかりで、もう二度と、こんなことと誓うヒルなのだが、後日、この驚天地獄の強烈な経験が、忘れられず、不愉快どころか、もう積極的な行動と変化して行くのである。のち初恋の男と再会、舞台のロンドンをあとにして帰郷、幸せな家庭を結ぶことで、遍歴は終わっている。

引用、転載まかりならぬのお達しがあるため、細かく御紹介出来ないが、いやもう、ひたすら、おおらかで上品なその文体の絶妙さに感心させられたのである。

発表と共に、忽ち不謹慎の科で裁判沙汰を受けるが、赤貧の故に、かかる本を書かねばならぬグラランドは同情されて、生涯百ポンドの年金支給と云う心憎い味な判決を受けて幸いしている。ともあれ、初版刊行以来、二四年ぶりに全無削除のまま再刊されるに至りリアリスト、グラランドの英米各裁判所の愉快な判決、各ジャーナリストの激賞と共に、小



生も御同慶の至りと云わねばならない。

吉田健一訳、東郷青児挿画、河出書房発行。

○

# 恵子の道

——中河恵子嬢に寄す——

よくぞ叫んだとは思わぬ。

おお、見栄の叫びだとも思わぬ。

それは恵子を信じるからだ。

恵子の情熱ぐらい誰も持っているものだ。

思いを希いを内に秘めて、じっと大事にし

ている恵子は、他にいくらでもいると思え。

恵子以上の恵子が居ると思え。

だから恵子は、

うぬぼれてはいまいし、お高くとまったり

はすまい。有頂天な竜頭蛇尾に終ることはよ

もあるまい。

それは、恵子の叫びに謙虚なまじめさをみ

たからだ。

数知れぬファンタジーからのろしを上げて

躍り出た恵子だ。すでに道は決まっていはいよ

うが、気をつける。恵子の智と理でもって、

道ある道を歩まず、レベルの高い驚くべき長

い道を、ゆっくりと一步一步、心から味わっ

て歩け、しっかりと見極めて歩け。

これ位の信条でもって。

——奇クなんぞ、くそ喰らえと思え——

——「道」のオーソリティなんかには媚びへつ

らうことをせず。——

甘ったれるな。

恵子の果し状など、珍らしくはないぞ。

だからこそ、

恵子は恵子しか歩けぬ道を創るのだ。恵子

の足跡は消して歩け。第二の恵子を創るな。

何んの為に、何んの得の為に——。

そんなことは思うな、考えるな。

なまはんかな、ありきたりなキザな道など

創る恵子とは思っていない。

「無」の為に「有」の為に、変度の急な抽象

作品の熱い創造に向ってすべてを抛出せよ。

恵子の

「個展」が、

内と外からほとばしり出るエネルギーと、

たぎる血潮により高く高く舞い上る時、

否定に否定を重ねて無限に続く第三次元の

かなたに肯定をみた時、

始めて帰化され、浄化されたバラ色に輝く

生命をみることが出来るのだ。

新しいことの、新しい試みが、

せっかく上げた叫び声だ。せっかくの大切

な先革者の血潮のたぎりだ。

時も恵子も、再びはこない。

有効に生かせ、

無駄にするな。

無駄にするな。

いいか、

つまらぬ道をたどる時は止せ。

他の追隨を許すな。

みるということ。

それは、

「死」ぬことと知れ。

恵子、

目をつぶれ、

「死」ね——。

恵子は挑むという。

「有る」ものへの極限へ。

門出、

といって大袈裟にすると恵子はつけ上る。

ほんの、ちよっぴり

拍手を送っておこう。

(おわり)

舟田コンサルタント事件簿  
NO. 1

秘

## 東京情報報

(前篇)

夜乃探郎

## 前書

発端

これは従来の観念的なSM小説ではない。勿論、サジストもマゾヒストも登場しない。

ありきたりの人間が、異常な空間と時間の中で、どのような反応を示すか、ほくろに書いてみた。だから、現実にはあり得ないような拷問部屋や責め道具などは一切登場しない。その点ではマニアの方には申しわけないと思っている。

これは映画の惹句<sup>じやく</sup>ではないが、スリルとサスペンスに、ちょっぴりSM的な場面をサービスしたアクション・ドラマである。

白日——まさにそう形容したい程、陽光がサンサンと降りそそぐ、東京麹町の午後である。八月の猛暑のためか、いつもなら外出着にきかざった婦人や御用聞き自転車などが行きかう、この道もいまは人の影もない。それはものものしい石塀と大理石の門柱にかざられたこの建物の所在地として、うってつけの光景でもあった。門をとざした鉄扉は近頃ぬり変えたばかりか、カッ色に光りその奥へのびている砂利を敷きつめた道には、これまた人影一つなく、何かすべてのものが、そこを通過して、道のむこうにある白壁の建物の中

にすいこまれてしまったのではないかと、そんな錯覚を誘っていた。

霊元教本部——それはここ数年来、一部の有閑人士達の間でつちかわれ、いまやジャーナリズムにも喧伝されている一新興宗教のメッカであった。

さて、この白壁の建物は一見、高級病院か文化施設のような近代的な三階建のビルで、およそ宗教などという雰囲気からは縁が遠いと思われたが、しかし、その静けさはどうだろう。松や楓などの、うっそうと茂る庭もビルの窓もひっそりとして、どこにも人影は無いかと思われたが——いや、玄関前に佇む二つの人影があった。



「なんだか気味が悪いわ」

総ガラスのドアを押しながら振り返って言ったのは、みゆき。

「ホント、怖いわ」

首をすくめたのは由里子。——二人は、京橋にある舟田企業コンサルタントのO・Lというよりもお嬢さんであった。勿論、彼女らは、およそ宗教などとは縁の遠い現代っ子のチャキチャキである。背の高いセシル・カットのすらりとした方が中田みゆき。美貌というほどではないが、黒い眼とちんまりした鼻がどこなくあどけない。そんなボーイッシュな感じのみゆきにくらべて、さっきから彼女の背中にすがりついているようないささかたよりない、これはまた典型的な美少女、川辺由里子。まるで宗教心など持ちあわせないが、夢を見ることに於ては人後におちない娘たちが、こともあろうに霊元教本部に姿を現わしたのは、単なる好奇心や勿論ひやかしではなかった。

舟田コンサルタントは、その名称からも推察されるように近代産業の尖兵であると同時に、時にはスリリングな産業スパイ戦の花形として業界では有名な存在であった。もっともかつて警視庁の敏腕刑事として鳴らした舟

田秀彦が百八十度の転回をして創業しただけあって、業界では珍しい正義の味方的なコンサルタントとして評判はよかった。

さて、舟田コンサルタントの有能な調査部員、由里子とみゆき——といっても有能を自負しているのは彼女ら自身だけだったが——二人の与えられた今回の仕事が多少場違いな霊元教本部の調査なのであった。

企業コンサルタントとして多くの後援者や知己を持つ舟田秀彦が大同鉄工の専務黒田重三に招かれて黒田邸におもむいたのは昨日の午後であった。そこで舟田は黒田の一人娘、マリ子の失踪について調査を依頼されたのである。もとよりそういった仕事は舟田の事業とは大した関係のない事だが、そこは昔とったきねづか、警視庁捜査一課出身の彼であったし、それを黒田もみこんだのであろう。

——その結果がみゆきと由里子の霊元教本部探訪となったのである。というのはマリ子の失踪について聞き込み調査などを総合的に判断すると、彼女の足取りが霊元教本部からパツタリ消えていることがあきらかになったからだ。勿論、黒田家としては早速、関係者を霊元教におもむかせたが、その返事は「まったく関知しない」という無責任なものであ

った。

来春早々、愛娘マリ子と西急コンツェルンの御曹子との結婚を控えてるだけに、なるべく内密に調査したい黒田家としては警察に捜索願いを出すことなどは思いも及ばぬ事であった。このような事件調査にうら若い女性ふたりが動員されるということは、いささか常識はずれとも思えるが、反面、常識はずれだからこそ教団側も心を許すのではないかという調査部の苦肉の策、それに三十そこそこの行動派男性として女の子たちにあこがれのマトでもある舟田所長の前で、ちよっぴり成績を上げたいという二人の乙女の女心。

——といっても、彼女たちの行動は所長には内緒である。「わたしたちにやらせて」という二人の希望に調査主任である平山が承認を与えたにすぎない。平山にしても彼女たちにしても、これが危険きわまりないアパンチユールの発端になろうとは夢にも考えていなかった。

## 二人の娘

病院の受付を思わせる窓口でみゆきは所定の用紙に名前住所などを書き込んで差出した。用紙の上ではみゆきの名前は、桑田雪

子、丸の内のO・L。由里子は付添いといふかっこうである。点数をかせぐぜつこのチャンスとばかり、白いスラックスのスポーティーな服装をしたみゆきは、頬を紅潮させているばかりか、よくみると身体をきざみにふるわせていた。かたわらの由里子は、いつも行動派のみゆきに付合されて、はらはらする役目の通りひざの上に合せた手をもじもじさせながら、そわそわと落着かない。

「ねエ、大丈夫？」

「大丈夫、まかしとき」

みゆきは自信満々というよりも、冒険への緊張と期待に、むねをわくわくさせるばかりである。

「桑田さん」

——みゆきには、そのよぶ声がまるで天来の妙音のようにきこえたのも無理はない。

「由里ちゃん、行ってくるわよ」

「がんばって」

——手はずはととのっているのだ。もし、みゆきが三十分たっても、この待合室にもどってこない時は由里子が塀の外に待機している腕ききの男の調査員に報告することになっている。みゆきの身に危険の起る筈はないのである。

そこは教会堂の一室を思わせた高い天井から豪華なシャンデリアの下に木彫をほどした黒檀こくたんのテーブルがあり、その前にこれはまたなんの飾りもない小さな丸椅子がある。五十畳じゅうじょうもあろうかと思われるその大会堂には窓ひとつ無く真昼だというのに夕暮のように暗い。シャンデリアに灯のともるのは、いつだろうか——。みゆきは、ふと、そんなことを考えながら、そろそろと中央へ進み出た。

彼女の形のいい鼻をかすめるジャスミンの香り。——みゆきは思わず、きよろきよると四囲を見廻した。どこからか莊重な音楽に乗って、低い、しかし、ふくよかな女の声が流れてきたのである。

「よくいらっしやいました、桑田雪子さん。」

——さあ、その椅子に腰をおろしましょう」その声に、どんな魔力があったのか、みゆきは知らない。ただ、その瞬間、彼女は今までの不安、昂奮などをさっぱりと忘れて、なんとなくなごやかな気持ちになり、云われるままに中央の丸椅子にチョコンと腰を下したのである。

「——悩める者は来り、悩み消ゆる者は去る……靈元教は貴女の救い、貴女の味方です。さあ、静かに眼をとじましょう。そして、雑

念を貴女の胸の中から消しましょう」

——眼を閉じると、みゆきは、いつのまにか、うつらうつらはじめた自分に気付き愕然とした。

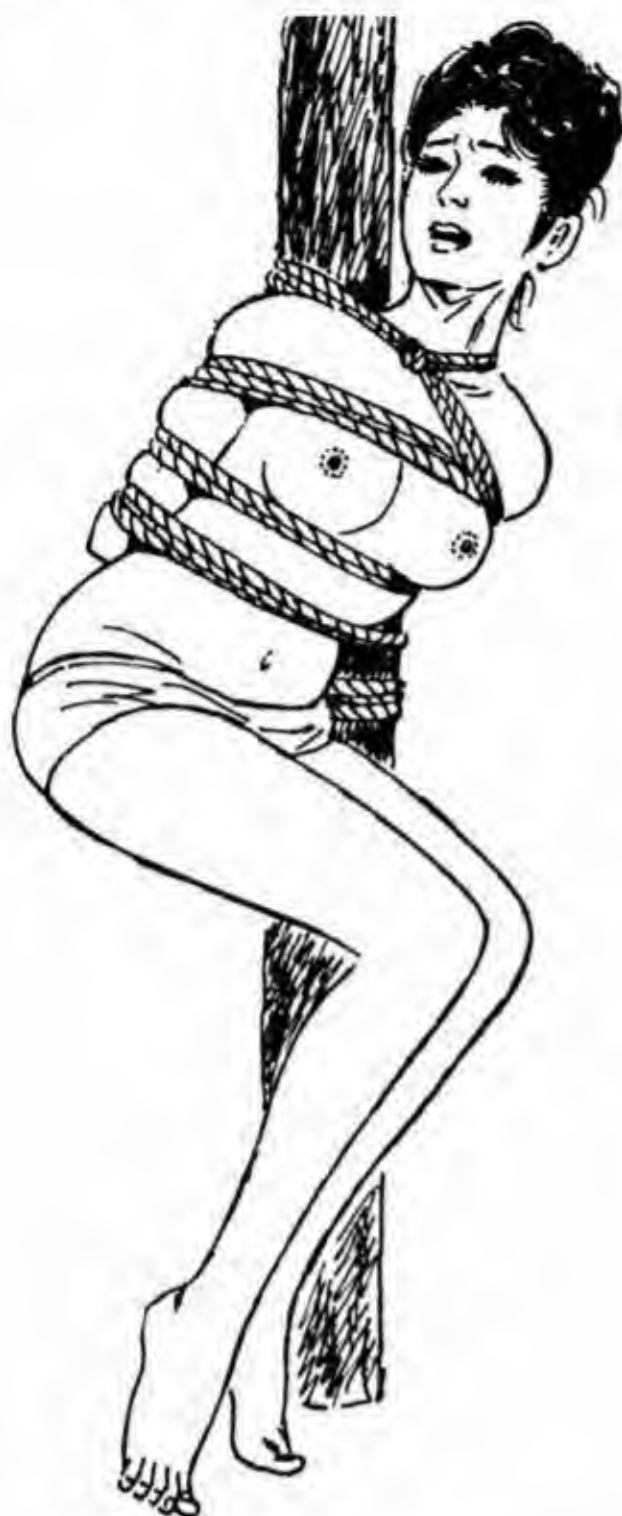
その声は催眠術の一種なのだろうか、それとも、あのジャスミンの香に催眠作用でもあるのか。——みゆきは、ともすれば眠くなりそうな気だるさを振り払うように、心に云い聞かせる。——いけない、いけない、こんなことじゃ、センセに叱られちゃうわ！ しかし……

モーローとした意識のなかから、よみがえったみゆきは、その瞬間、彼女が現在おかれている空間とか時間をのみ込むことが出来なかった。

ピンク色に統一された壁、天井、そして、彼女がくるまっている羽根のような布団、ベッド。——なんということだ！ 彼女はいつものまにか、肌色の惱ましいベッドにぬくぬくと寝ていたのだ。

——彼女はハッとした。彼女の体から一切のものがはぎ取られ、彼女は生れたままの姿になっているではないか。いったい、なぜ？ どうして？——と考えつつも、みゆきは、自分の体から身を覆うものが一枚一枚はぎとら





れてゆく過程を思い、われしらず頬を紅潮させた。——そうだ。わたしは、靈元教本部にいるんだわ。——意識が明瞭になると、なおさら彼女は不審の念にかられた。

靈元教と、この桃色の部屋。それがどうしても結びつかないのだ。——それにしても、いったい今、何時かしら。しかし、みゆきの周囲には、彼女の身につけていたものは何もなかった。

つづらな瞳をめぐらせながら、彼女はもう一度、仔細に部屋の中を見た。そして、頬をいや体全体を朱に染めた。

壁にかけられてある額は、泰西名画と思ひ

きや、なんと、なまなましい男女秘戯画ではないか。もちろん、二十才の近代娘であるみゆきには、大人の世界のなにもかも、云わば観念的には知りつくしていたつもりである。

だが、現実はこの種の絵画を見たのは始めてだし、何しろ、男性の裸体などは、生理の教科書あたりの断面図か、幼い弟の裸ぐらいしか生れてこのかた見た事がない。——彼女がわけもわからずに昂奮してしまったのは無理もないのである。

みゆきは、布団の中で思い切り、股をすぼめて体を固くした。それでも羞恥と驚きで、胸の動悸は収まらない。

——いやだわ、なんていやらしいノと彼女は眼を閉じ、心を静めようとした。そんな、うら若い処女の耳に、ひそやかな、奇妙な声がしのび込んできた——。

その声は、声というよりもうめきであり、しのび泣きであり、吐息であった。その熱っぽい調子が徐々に大きくひろがり、部屋全体を圧しはじめると、みゆきも意味はわからないが、その悩ましい雰囲気、乗り移ったのか、彼女の肌はじっとり汗ばみ、それどころか、不覚にも彼女の白魚のようにすんなり伸びた指が、無意識にわが乳房を固く掴んでいたのである。

——みゆきが、おそらく処女としては最高に悩ましいムードにひきずりこまれた頃合いを見計らったように、一瞬、右手の壁がパツと明るくなった。そしてそこだけ額もなく、一面に鏡が張ってあった空間に灯がともり、その灯のなかに極彩色の絵巻物が現出したのである。それは単なる鏡ではなかったのだ。そして、そこに描き出された妖しい絵巻物——。それが、泰西の名画と違うところは、こちらには、動きのたうつ、生身の男女の凄じいばかりのシーンだった。

——見まいとしても、すでに妖しいムード

にひたり始めているみゆきである。しかも未経験の処女とはいえ、人一倍の好奇心と、なによりもはち切れんばかりの健康体の持ち主だ。彼女が心をかき乱され、若い裸身をふるわせなかったといったら嘘になる。

初めて見る男と女の動物的な姿態——それは普段の彼女なら見るも汚らわしいものだったに違いないが、今の彼女は、無意識のうちにその若い肉体にひそむ欲情をかきたてられているのだ。みゆきはそれでも、わずかに残る若い潔癖さから、一旦は眼を閉じ、見まいとして唇を噛んだが、彼女の肉体が今は云うことをきかなかった。——体中をかけめぐる熱い血が、彼女の全身を切なくもだえさせ、荒々しい呼吸が、どうにもならない激情を呼んだ。

ベッドを反転しながら、いつか食い入るように壁面をみつめるみゆきは、もういつもの明るく、あどけない清潔な、処女ではなかった。毛布がずり落ちて、しどけなく露出したお椀型の可愛い乳房をかくすどころか、たまらないようにギョッと握りしめ、体を弓のように反らせ腰をくねらせた。

## 霊元教の秘密

すべてが筋書通りに運んだ。みゆきが計画した筋書きとは、ほど遠いものであったが、これが霊元教の嘘いつわりのない筋書きであった。若い女性、または、美貌の人妻など、これはと思う女性が入信すると、嫌になしにセックスと麻薬の囚人にして、彼女等のあらゆる財産を貢がせ、そればかりか、彼女等のあらゆる欲情のシーンを好色紳士の見せ物として提供し、やがては、使いものにならない女達を一個の商品として香港かマカオの魔窟に売り飛ばす——、善男善女の聖域が実は大がかりな秘密クラブであり、麻薬と女体密輸のメッカだったのだ。しかし、この魔窟に、みゆきという若い女が飛び込んだことによって筋書とはいささか違ってくる。——たしかに、みゆきがまるで淫獣のような取乱し方をしたまでは、霊元教の思うツボだったが、さて、たとえミイラ取りがミイラになったとしても、みゆきに理性がある限り、彼女は舟田コンサルタントの忠実な一員として目覚めるだろうし、またもし、彼女がうら若い処女の青春を、このまま滅ぼすようなことになっても舟田コンサルタントは、あくまで霊元教を追及せずにはおかないだろう。

——みゆきの身の上にかかるべき霊元教の書

いたストーリーは、たちまち変わった様相を帯びてきた。それは、恍惚の瞬間の後、どうにも身動きのとれない気だるさに、全身に浮んだ汗をぬぐおうとせず、みゆきが痴呆のような一刻を過している時、早くも現れた。甘酸っぱい栗の花のような匂いがたちこめる室内の空気は、突如として一変した。

——ドアが荒々しく開かれ、白衣の巫女スタイルの女を先頭に男が二人、それも、待合室でみゆきを待っている筈の由里子の腕を逆手にとり、しょっぱくような形で現われたのだ。

思わず現実にはき戻され、露わになった胸をかくそうと毛布をたぐり上げるみゆきの紅らんだ顔の前へ、白衣の女は、みゆきの体からはぎ取ったブラウスや下着をつきつけた。「娘さん、これは何さ——返事次第じゃ、こわいわよ」

女は凄艶ともいえるきびしい表情で、静かに云う。——みゆきのブラウスの裏にぬいつけられた精巧なトランシーバーやベルトの金具にはめられた超小型のかくしカメラが、彼女の手に握られているではないか。

「あつ、——あの、それは……」

みゆきは思わず絶句した。



「あんた、いったい、何しに來たのよ。まさかサツの犬じゃないだろうね」

女は次第にズベ公のような口調になって、みゆきを問いつめる。

「さあ、早いとこ、正直に云っちまいな、——ここはね、善男善女には天国だけど、ヘンなことをする奴には、こんなひどい地獄はななんだよ」

「わたし、知りません、——いえ、それはなんでもありません」

みゆきは動テンしてしまつて、しどろもどろの返事をくり返すばかりだ。

「おふさでないよ」

——バシッと、みゆきの頬に女の平手打ちが飛ぶ。

「お前が云わなきゃ、こっちのお嬢さんに聞くだけでよ。ちいっとばかり恥かしい目に会わせてね」

見ると由里子は、もう失神してしまつたのか、男の腕の中にぐったりと身をもたせかけている。

「さあ、気をもませないで早く白状しておしまい。——そうすりゃ、さっきみたいに、いくらでも楽しませてあげるよ。なにさ——」

女は不意にみゆきの体を覆っている毛布を

ひきはがした。

「ヘン、さっきは人一倍楽しんでたくせに」

みゆきはハツとして、今はあますところなく露出された桃色の肌を、出来るだけ男達の視線からそむけようと、脚を抱くようにちこまった。

「ふふ、バカだな、このスケは。なおさら大事なところが丸見えだぜ」

男達の好色の視線が、彼女の肉づきのいい肌をなめるように這う。

「いやっ、許して！」

みゆきは羞恥と絶望に悲鳴を上げ、びくんと体を伸ばした。胸と下腹部を両手で隠しているが、見事に発達した処女の肉体は小さな掌でかくしきれるものではなかった。彼女の可愛らしい顔はペソをかいたようにくしゃくしゃにゆがんだ。——彼女は心の中で大声で叫んだ。

「助けて、センセ、助けて！ 舟田センセー……」

## 受難の開始

——すべてが終つたわけではない。

「ま、しゃべりたくなければ、それでいいわ。もうあんた達は、ここからは帰れやしな

いんだからネ。——そのうちに、いやでも白状したくなるからさ」

三人の男女が捨てぜりふを残し、失神した由里子の体をベッドの上に投げ出すようにして、室を出ていった後、ようやく普段のみゆきに戻った彼女。毛布を素肌にまきつけて、ベッドの上に坐りこんで、冷静な情況判断をしていた。

——靈元教が、宗教の仮面をかぶった邪教であることは間違いない。舟田コンサルタンが調査を依頼された黒田マリ子の行方も、彼女の自発的な意志か、それとも教団の強制によるかは判別し難いが、——そうだ、なんとか逃げ出さなくちゃ。

みゆきは、失神した身をぐったりと横たえている由里子の肩を揺すった。

「由里ちゃん、しっかり！」

小さな唇を開けた由里子の顔は、睨みから頬にかけて、涙の跡がくっきりついてはいたが、美しく、痛々しかった。みゆきは小ささみに由里子の肩をゆすぶりながら、ふと、思った。——可哀そうに、由里ちゃんまでこんな怖ろしい目に合わせちゃって。

みゆきはそのみずみずしい姿態とはうらはらに、ボーイッシュな感じを与える娘だが、

それは彼女の性格によるのだろう。夢見勝ちな女の子にしては強いぐらいの正義感と冒険心。——しかし、彼女が映画やテレビから連想していたロマンチズムとは程遠い淫らで、恥かしいアバンチュールが始まったのだ。

——その時、意識を取戻した由里子はハッと身を起して、キョロキョロと周囲を見廻したが、すぐにみゆきの手にすがりつく、シクシクと泣き出した。

「どうしよう、みゆきちゃん……わたしたち、どうなるの？」

「しっかりするのよ、由里ちゃん。まだ何もかも終わったわけじゃないのよ。ネ、ここから逃げ出せば、みんなオーケーよ。わたしたちの勝ちなのよ！」

純情でおぼこで、女というよりも美しい少女とでも云いたい由里子の背中をやさしくさすりながら、みゆきは、由里子を同行した迂<sup>う</sup>闊<sup>くわ</sup>さを悔いた。——由里ちゃんには、こんな役目は、最初から無理だったのだわ。これから後、この可弱いお嬢さんを連れて、どうして逃げ出せばいいのかしら？

みゆきは自分も可弱い女であることを忘れて、どんなことをしてでも、由里子を守りとおさねばならないと心に誓った。

「さあ、しっかりしてよ、由里ちゃん。なんとかして、ここを逃げ出さなくちゃ。——落着いてネ」

由里子はうるんだ瞳をみゆきに向けて、こっくりとうなずいた。

彼女達が携行した外部との連絡器具はいっさい取上げられ、それどころか、みゆきは下着まではぎ取られてしまった姿で、いったいどうして脱出できるだろうか。勝気なみゆきもいささか心細くなって、思わず由里子に抱きついた。それがはずみになったように、二人は肩をふるわせ、せきを切ったように泣き出した。

精一杯声を出して泣きながらも、心の隅で彼女達は真剣にこのピンチをどう切り抜けたらよいか、思いをめぐらせた。みゆきは涙でぐっしり濡れた顔を毛布で拭いた。——しっかりしなくちゃ！

「由里ちゃん」

みゆきの思いつめたようなきつい口調に、嗚咽<sup>おえつ</sup>していた由里子もハッと顔を上げた。

「いい？ 由里ちゃん。どんな時でも希望を失っては駄目よ。わたし達はどんな目にあっても、必らずここから逃げ出して、このインチキ宗教を暴露してやるわ。そのためには、

いくら辛くても頑張らしよう。それに、わたしたちが帰らなければ、すぐにも先生が来てくれる筈だわ。だから、それまで、なんとか時間をかせぐのよ。わかる？」

「ええ、頑張るわ。——何時間でも、何日も。そして、最後の時がきたら、わたし舌を噛んで死ぬわ」

「そうよ、その決心よ。由里ちゃん、頑張らしよう！」

そう誓って二人はひしと抱き合った。そのはずみにみゆきの胸を覆っていた毛布がパラリと落ちて盛り上った乳房が露出したが、彼女はそれにも気づかず、上半身を由里子の腕に委ねていた……。それからどのくらい時が経ったのだろうか。彼女たちが、調べたこの部屋は、完全な密室であった。だから、当然のようにカギのかかったドア以外に、彼女らが脱出できる道はなかった。チャンスはそのドアが開かれて、誰かが部屋に入ってきた時以外はない。もちろん、一步部屋の外へ出たところで、外部がどんな状態になっているか知る由もなかったが、たとえ一度や二度失敗したところで、もともとである。どんなチャンスでも逃さないで——というのが二人の決意である。



——そして、今、ドアは開かれた。思わず緊張に体をこわばらせる二人。

「どうだい、もう何もかもしゃべってみる気になったかい？」

入ってきたのは、さっきの男二人である。いずれも二十五六才位、手入れの行きとどいた背広を着ているが、その物腰にはどこことなく崩れた感じがある。

「さっきは主任さんが、あんなことを云ったが、あんたらが正直にしゃべってさえくれれば、なに、このまますぐ帰えしてやってもいいんだよ」

「そうだ、お前さんたちの目的、そして誰の命令か、それさえわかればね」

みゆきは思わず叩きつけるように答えた。

「なんにも知りません！ 目的なんて何もありません、わたしたちは、ただこの評判を聞いたので、興味を持って……」

「それにしちゃ、トランシーバーやかくしカメラとは、随分妙なものを持っているじゃねえか」

「あれは、わたしの趣味よ。今、わたしたちの間で、ああいうのが流行っているのよ。007なのよ」

「ふふ、随分要領のいい返事をするぜ」

男たちの口調は、いつの間にか愚連隊まがいのものになってきている。

「そんな返事を報告してたんじゃ、俺たちがお目玉くらっちゃうのさ——そっちが正直に云わなきゃ考えがあるぜ、なア、裸の可愛い子ちゃんよお」

男は好色そうな視線でみゆきの全身をなめ廻した。彼女は思わずぶるっと体をふるわせて、身をちぢめた。毛布で胸から腰を覆い、ベッドに横坐りになった彼女の、露わになった形のいい肩や肉付きのいい太腿が小さきみにふるえている。

「どうせお前たちは近々高いお値段で金持の爺さんに買われちゃうんだ。正真正銘の処女ってふれこみでな」

「ところでほんとに処女なんだろうな、え？」

——今のスケはマセてやがるからな、もうとつくに蜂の巣みたいに突っつかれちゃってるんじゃないか

「よしして！」

みゆきは羞恥と侮辱にたまらず絶叫した。

「そんなことをしたら、死んじゃうから！」

「ふん、死ぬなら死んだって構わねえよ。その方が面倒がなくていいさ。——だが、今日はお前たちの穴ぼこにゃ手をつけねえから安

心しな。そこは売物だからな、やっちゃいけねえことになってるんだ。そのかわり、それ以外なら、なんでもいいから、早いとこ白状させちまいなというのが主任さんの云いつけなんだ。覚悟しな」

男たちはズカズカとみゆきに近付いた。思わず彼女は由里子にしがみついたが、その彼女の肩を男の一人がぐっと掴んだ。

「あっ」

小さな悲鳴とともに、彼女は仰向けに引っくり返った。恐怖と恥かしさに気も動転したみゆきは、手当り次第に引っかけ、脚をバタつかせた。今はもう、胸の前で合せてあった布もはがれて、彼女は見るも無惨な姿となつて、盛り上った乳房や腹の凹みまでもさらして、懸命に暴れまわった。しかし、しよせんは可弱い女の抵抗に過ぎなかった。

みゆきのはだか踊りは終わった。彼女は細引きで後ろ手に縛られ、再びベッドに投げ出された。——絶望の吐息とともに、彼女はそれでも、男たちの視線から少しでも体をかくそうと背をこごめ、脚を海老のように曲げた。だが、そんな努力もただの気休めにしか過ぎなかった。

彼女の白い背中、むっちりとした腰、さら



に豊かな曲線を描いた双丘と——それらは、覆うすべもなく、哀れなうごめきが続けていた。

「いや、いや、やめて！」

——みゆきは、そんな由里子の悲鳴を背中に聞いたが、どうすることも出来ない。ただ胸の中で「助けて、センセ」と叫び続けた。しかし、由里子の受難は、みゆきのそれよりなお残酷だった。

「なんだい、このスケは？」

に覗きこんだ。

——純白のパンティの下に、由里子は黒い網パンティを着けていたのだ。彼女はそれをはがれまいと、必死に男の手を払おうとするが、もちろん彼女の優婉では拒むべくもなかった。すると太腿のあたりまで下げられたパンティ。そして腰部をびっちり包んだあみのパンティ——。

「これはパンネットって、やつじゃねえか」「すると、このスケはあってわけだな」

暴れる彼女の体を抑えて一枚一枚はぎ取って行きながら、一人が頓狂な声を出した。

彼女は、今はもう、パンティ一つの姿にむかわれていたが、その最後の一枚にかけた男の手が、ハタと止った。「なんだ、こりゃ？」と、もう一人も珍らしそう

男たちの間に、下劣な好奇心が芽生えた。

彼等は泣きじゃくる由里子の両腕を乱暴にねじ上げ、細紐で縛った。——彼女は女として最も恥かしいものを着用した姿でベッドの上に横たわった。みゆきに比べて未发育のような固い乳房だが、流石に腰にかけての線は、むっちりとした娘ざかりの色っぽさがむんむんしている。男たちの眼は期せずして、こんもり盛り上った部分に集中した。アミを通してひそやかなげりと、厚ぼったい脱脂綿が見えた。

「どうだい、脱がせちゃうか？」

一人が同意を求めるように相手を見た。

「やめて！ お願い、それだけは、かんにんして！」

由里子は全身の力をふりしぼるような叫びを上げ、激しく慟哭した。

「まあ、待てよ、素っ裸もいいが、そこら中、血だらけにされても困るぜ」

「それもそうだな」

彼等は浅ましい好奇心の虜であった。パンティを太腿のツケ根のあたりまでずり下げると、ぴったりとさむように当ててあるそれをはがしにかかった。生ぐさい匂いが立ちのぼった。



「ちえっ、よせよ汚ねえ」

男は今までの好奇心を忘れたかのように離れた。もちろん、そこを元のように直す親切心などあろう筈がない。由里子は誰にも見せたことのない女の秘密を無惨にもさらけ出したまま、嗚咽している。

「どうだ、恥かしいか、お嬢さん。ここらで白状しちゃいな、そうすりゃ、こんな恰好しなくてでもいいんだ。パンティもはかせてやるし、服も着せてやるぜ」

「だって、わたし何も知らないんです。ただ面白そうだから行ってみようということになって……」

「面白そうってのは、何のことだ？ お前たち、そんな可愛い顔をしながら、男と寝たくなっただけなのかい」

「いや、そんなこと……」

「まあいいや、云いたくなきゃ、そっちのおケツを丸出しにしたお嬢さんに聞くな」

——由里子の身の安全を念じながら、体を固くしていたみゆきは、その声を聞くと、びくんと体を反らせ、すぐ俯向きになった。

肩から背、むっちりと盛り上った尻、すんなり伸びた脚に至る曲線は、女の柔らかなさと豊かさを、みなぎらせた一個の芸術品を思わ

せたが……。

「やっぱりメンスの匂いをぶんぶんさせている女より、この方がいいや。どうだい、このカッコのよさ」

男の一人は鼻唄でも歌うような調子で、びしゃっとみゆきの尻を叩いた。

「どうだい、今のうちに吐いちゃいな、さかねえと、これからいろいろと、いたずらをされるってわけだがね」

「だって——知らないんです。わたしたち、何でもありません」

「どうだかね。そら、これでもか？」

男は淫らな眼付きを、みゆきのひそやかにふるえる肩の辺に走らせながら、彼女の尻をぐっと掴んだ。

「あっ」と腰をびくつかせるみゆき。しかし彼は、情容赦なく、その双丘を掴んだまま放さない。

「あ、あ、あ。ごめんなさい！ やめて！」

「じゃ、白状するか」

「でも……、何にもわからないのよ、目的なんてないのよ！」

「じゃあ、もっといじめてやるぜ」

男の節くれ立った指先は、彼女の火のように熱くなった太腿に這い廻った。みゆきは

必死になって足をバタつかせたが、それも、

男の次の一言で温和しくなってしまった。「なんだ、お前、痔だな。可愛い顔して痔もちとは艶消しだな。どうだ、痛いかな？」

「痛い！ やめて頂戴……」

苦痛と羞恥に、みゆきは、とうとう嗚咽し始めた。

「それならハッキリしゃべっちゃえばいいんだ。——いいか、俺たちはな、お前たちを白状させるためにや、どんなことをしてもいいと許可されてるんだぜ。どうだい！」

みゆきの体は男の力で軽々と仰向けにされた。

「このスケ、男性ホルモンが多いな」

男はゲラゲラと笑った。

「吉村、無駄なことをいってないで、もっと徹底的に責めて早く白状させよ」

「よっしゃ」

吉村と呼ばれた男は、みゆきの両足首を掴んだ。

「あ、あ、ああ……」

無惨にもひろげられて行く、牝鹿のような脚。やがて脚はまるで一本の棒のように極端に押し開かれた。

「北見さん、俺がこうしてるから、あんた、

滅茶苦茶に責めてやりなよ」

「よし」

北見は蛇のような視線を、みゆきの全身に走らせた。

「どうだ、こいつがちょっと、多いようだから、抜いてやるか」

「いやいや」

「それじゃいうか？」

「だって、知らないわ」

みゆきは顔をのけぞらせ、あえぐばかりである。

「吉村、お前、万年筆持ってるか」

「へえ、——だけど北見さん、そこは主任さんに……」

「バカ野郎。穴は前だけじゃねえや。それにな、このスケだって、発育がいい方だから、結構てめえで楽しんでたかもしれねえぜ」

——みゆきはあえぎ、わずかに自由な上半身をのたうつばかりである。ただ、彼女の心の片隅に、彼等の言葉から、純潔だけは失わないで済むらしいという、ひそかな慰めが、強烈な願いとなって燃えていた。——

「このスケ、なかなか強情だな」

「北見さん、俺、面白いこと考えた」

「どうするんだ？」

「そっちの女よ、あれをよ——」

「メンスの女か、きたねえぞ」

「その汚ねえのが、こっちのつけ目さ」

二人はやっと、みゆきの体から、手を離した。さまざまないたぶりに疲れ切ったみゆきは、押しひろげられた脚を、ちょっとすぼめたが、びったり腿を合せるほどの気力もなかった。

「女なんてものは、一応見せたり、させたりしてしまえば、あとは恥かしくもねえもんですよ」

吉村は知った風をして、みゆきの脚のツケ根のあたりを見やった。

「どうする？」

二人は、すすり泣いている由里子の方を見た。彼女は背を向けて横になり、両脚をすぼめていた。尻の下で刃までずらされたアミパソティが妙に生々しかった。吉村はぐいと彼女の体を仰向けに倒した。

「やめて！」

さっきと同じまま、アミの間から覗いている白いものを、彼は容赦なくはぎ取った。

「しかし、そんなものを取って、その辺を血だらけにしないか？」

「さあね、その方は、俺もよく知らねえが。」

——そうだ、ビニールの風呂敷を持ってくるよ」

吉村があわただしくドアの外に消えると、部屋には北見一人が残った。しかし、たとえ相手が一人とはいえ、後ろ手に縛られた女達二人に何が出来ようか。みゆきは由里子のすすり泣きを耳にしながら、次のチャンスを待とうと思った。——さまざま恥かしめを受けた身には、初めはあれほど羞恥にもだえた裸の身も、それほど気にはならなくなっていた。とにかく汚されなければいいのだ。

乱暴に……に万年筆を………れた部分に妙な違和感が残っていたが、みゆきはそんなことにくよくよしてはいられないと思った。由里子は、生理的に汚されるような状態ではない。すくなくとも三、四日は大丈夫である。とすればみゆきは彼女自身の身を守ることに専心すればいいのだ。そう考えるとみゆきは少し安心した。

ドアがボタンと開かれて、吉村が戻ってきた。彼は弁当でも包んであったらしい緑色のビニールの風呂敷を敷いた肘掛椅子を運びこんだ。

「なんだ、それは？」

「細工は隆々、仕上げをごろうじろ。——ま



かしときな！」

由里子は本能的にわが身の危険を感じて、思わずごろごろと転って、みゆきの方へ近づいた。しかし、小柄で四〇キロしかない女としては、吉村に強引に抱き上げられた時、わずかに脚をバタつかせ抵抗するのがやっとだった。

吉村は由里子を椅子に浅く腰掛けさせ、上半身をぐるぐると椅子の背中に縛りつけた。胸を締められてピョコンと突き出た乳房のゆがみが痛々しい。彼女は歯を喰いしばってこらえた。

「北見さん、そっちの脚を——」

「あつ、何するの！」

由里子は小さな悲鳴を上げたが、その時は既に、彼女の両脚は思い切り左右に開かれ、抵抗するいとまもなく、白いすねのあたりをそれぞれの肘掛けにつながれていた。

「なるほど、こいつは絶景だ」

北見は感心したように吉村を見た。吉村の顔は男の欲情をそのままみなぎらせたかのよう、眼をギラギラさせている。

「吉村、あんまり本気になるなよ、我慢できなくなるぜ」

「いやあ、大丈夫、——これだけ眼の保養を

すれば、少しはおかしくもなるさ」

吉村は照れたように笑ったが、その顔は妙にゆがんでいた。若い女へのいたづりが昂じて、彼自身の奥にひそんでいた嗜好が急激に目ざめたのかもしれない。

吉村はさっきみゆきを責めたばかりの万年筆を手を取った。

「どうだ、これでも白状しねえか」

「知らない、知らないのよ」

絶え入りそうな由里子を責める彼の表情は異常な輝きを呈している。

「じゃあ、こっちはどうだ！」

「ああ、痛いわ、かんにんして……」

「何をいってやがる。——どうだ、手前の血でもなめてみるか」

吉村は由里子の唇を強引にひろげ、万年筆を突っ込んだ。それは、まるで美しいものを汚すことに執念を燃やす男の悪鬼のような行為だった。

「どうだ、このアマ。——手前なんて人間じゃねえぞ！」

「おい、もうやめろよ」

北見が呆れたように声を掛けたが、吉村は耳をかそうともしない。

「どうだ、このアマ！」

彼は同じことを繰り返しながら惨酷な責めを続行する——彼はさっき、由里子の体から外した赤黒い脱脂綿を彼女の口につめ込んでやっとな椅子の側から離れた。

「あ、あつ、ああ——」

由里子は、反射的にそれを吐き出したが、幾度かのどをふるわせ、もだえ続けた。

「どうだ、そっちの——」

吉村は遂に本性を表した如く、聞くに耐えない女性器の俗称で、みゆきに呼びかけた。「手前も仲のいいダチ公のメンスでもなめて見るか」

「や、やめてよ！」

必死に反抗するみゆきも男の力に敵すべくもなかった。彼女は縛られている由里子の前に無理やり引き据えられてしまった。——みゆきの顔は蒼白になった。体をガタガタふるわせて、彼の強いる行為から逃れようとするが、そんな彼女の黒髪をむんずと掴んだ非情の手はビクともしない。

「いいか、言う通りにしねえと、生かしちゃおかねえぞ」

「ああ、センセー、助けて！」

彼女の悲鳴は次の瞬間、なまぐさいものでふさがれた。

(次号完結)

痴

ち

人

じん

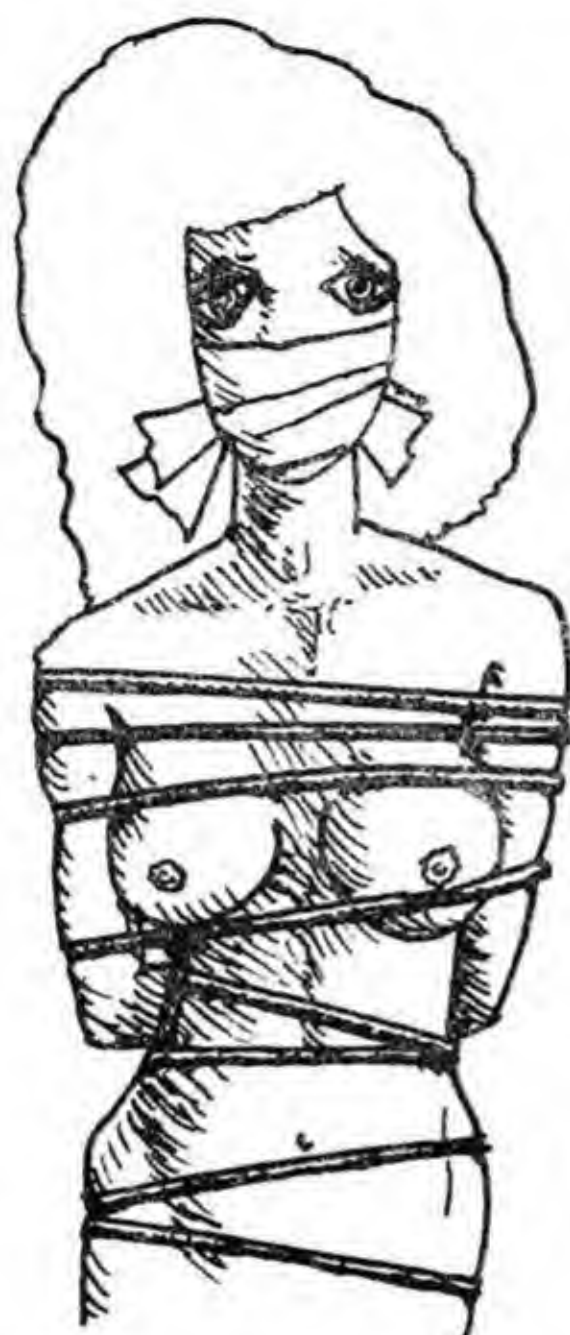
の

糧

かて

△雪国への旅(2)▽

山本一章



鉛色の空から湧き出るように雪が落ちてくる。厚い雲が空を埋めて太陽の位置さえわから

らない。すべての生物が、その限らない雪の威力を避けて、ひっそりと息をひそめている

ようだ。雪国の佻しく厳しい情景である。その中を山に向って歩む黒い人影があった。白い雪の上に印された足跡さえも忽ち降りしきる白いベールに覆われて行くようである。

「先生、大丈夫なの？ 帰れなくなるわよ」

最後尾を歩く女の声に先頭に行く男が振り返る。

「心配すんなよ。晩までには雪は止むってことだからな」

「そうかしら」

二人の間を歩いているのがアケミである。オーバーのフードを、すっぱりと頭からかぶり、ゴム長をはいている。しかし、そのオーバーの袖にもその下の毛糸のセーターにも腕は通っていない。縛られた後手は自分の素肌に触れ、その縄尻は体の前面に廻わって首に繋がっている。スラックスをはいてはいるものの、下着のない体は寒い。そして歩くことは、一筋の縄の刺戟から逃がれることを許してはくれない。アケミは振り返った男の顔を悲しげな目で見つめた。ベッタリと唇の上から貼りつけられた絆創膏が、発言を封じている。

「さあ急ごう。寒いなあ」

男の声にアケミの腰を看護婦が押す。アケ



ミはよろよろと雪を蹴る。三人の列は再び雪のペールの中を進んで行った。

昨日からのむごい凌辱と睡眠不足でアケミは疲れ果てていた。縛られ鞭打たれ晒され汚された体は、もう彼女の意志に従おうとはしないかのようによろめき踊いた。しかし、彼女の心は、冷え切った手足の辛さよりも、大山への思慕に悲しんでいた。大山さんがいてくれたら——幾度か繰返したその願いは、彼女の心をみじめにするだけだった。汽車の中に残された彼はどうしただろうか、わたしを探してしてくれるのだろうか、それとも、もうわたしの失踪を諦めてしまったのではないだろうか——きりきりと胸が痛んだ。アケミの足は、刑場へ向う囚われ人のように重かった。

○

谷間の深い雪の中に小さな小屋が半ば埋もれるように取り残されて立っていた。樵か炭焼の小屋のようだった。中は三坪程の土間だけで真中に炉が切られ、まわりに箆が敷かれてあった。炉には薪が焚かれて赤い焰が、鍋の底をなめている。煙が薄く小屋の中に立竈め、脂の臭いがした。その箆の上にアケミが転がされていた。小屋に着くやいなやオーバ

ーやセーターを脱がされて、そのまま横たえられたのである。

「先生、どうするの？」

「叩いてみるか」

「このまま？」

看護婦が尋ねる。彼女も昨夜来からの責めと雪山登りに疲れてはいたが、目の前に投げ出されている若々しい裸身を見つめているうちに、この女を滅茶苦茶にしてやりたい気持ちを抱き始めていた。その底に同性としての嫉妬があったことは否めない。

「首の縄は解いてやれよ。括つとくのは、手だけでいいから」

「暴れるわよ」

「面白いじゃないか」

看護婦が荒縄を束ねて手に持つ。一メートル位の長さである。横になっているアケミの体を足で倒して俯伏せにする。むっくりと盛上った臀部が、炉の焰に赤く照らされてなまめかしい。

バーンノ

女体がその打撃に震える。

「ゆるいなあ。そんな手つきじゃ駄目だよ。

縄の先を当てるようにしなげちゃ」

「だって初めてなんだもの、そううまく行か

ないわ」

バーンノ　バーンノ　バーンノ

俯伏せになった裸身が横を向き、くの字型に腰を曲げる。ささくれ立った藁縄の打撃が忽ち、滑らかな肌に、不規則な鞭跡を刻み始めた。荒縄による打撃が続く。アケミの体は伸びたり縮んだり転がったりして、その打撃を避けようとする。所詮は無駄な悶えでしかないのだが、生きている肌は、それを繰返さずにはおれないのである。その無言の屈伸運動は加虐者に陶醉を呼ぶ。陶醉は更に行動を大胆にする。打撃が強く烈しいものになって行くのである。特に看護婦から男に縄の鞭が移ってからは、正に処きらわすの滅多打ちと云ってよかった。口を絆創膏で塞がれたままの女体は、或いはひざまづき、或いは転がって悶え続けなければならなかった。白い肌は乳房といわず腹部といわず、全身に赤い縞模様を浮び上らせ、それに薬くずや土が附着して汚れてしまった。古びた山小屋の中という背景にあって、その汗と土にまみれてのたうつ女体は、拷問という言葉から連想される、そのままの凄惨さを、表現しているようであった。

バーンノ　バーンノ　ビチッノ

男は狂ったように打ち続ける。恰もその哀れな裸身に憎しみを持っているかのよう。

今までに何回となく打たれた経験を持つアケミではあったが、こんなに烈しく非情な打たれ方をしたのは初めてであった。それに後手以外に自由があるということも反って苦しいように思えた。苦痛の前に羞恥心は全く無力となって、彼女はその打撃から少しでも逃れようと裸身をくねらせ足掻いた。しかし、そのみじめな動作もやがて静止し、僅かな瘡れんと喘ぎに移って行くのであった。意識が遠去かろうする。

（ああ、わたしはこのまま死んでしまう。死んでしまう。死んでしまうのだわ）

大山の顔がちらつく。

「先生！ もう止して！ あんまりだわ」

看護婦が見かねてヒステリックに叫ぶ。

「大丈夫だよ」

「死んだら、どうするのよ」

血走って濁ったような男の目の中に、看護婦は男の残忍な執念のようなものを見出して恐ろしくなった。

「遊びなら遊びらしくやったらどう？」

「遊びじゃないよ」

医者はそう云いながらも、ぐったりと横た

わった女体の傍に腰をかがめて脈をとった。

「じゃ何なの？」

「実験だよ。僕は前から一度女を死ぬ程責めてみたいと思っていたんだ。この娘なら、それができるじゃないか。もし死んでも死体さえうまく隠せばわからないだろう」

「そんなの厭だわ。先生って恐ろしい人ね」

口ではそう云いながらも、男の態度から狂気の嵐が過ぎ去ったのを見てとった看護婦はおだやかな口調になっていた。

「遊びにしときましようよ。殺したりしたら後が大変よ。わたしも巻きぞえになるのはごめんだわ」

「それもそうだな」

医者は鞆から注射器を取り出すと、アケミの腕に注射した。

「大丈夫？」

「ああ、どうってことないよ。まあ念のためだよ」

注射の跡を揉みほぐしながら男は看護婦の顔を見て笑った。

「どうや、お前も一緒に縛ってやろうか？」

「ううっ、今日はごめんだわ。今日の先生なら殺されるかもしれないから」

看護婦はそう云いながらも男の肩に頬を寄

せて甘える素振りをした。

「キスして！」

男は顔を横に向けて女の唇に当てがう。

「こんなところで先生と二人だけで暮してみたいわ」

「じゃ今夜はここで泊るか？」

「でも、夜は冷えるでしょう。それにこの人もいるし」

「構わんじゃないか。どんどん火を焚けばいいから」

二人の会話を夢うつつの中で聞きながら、アケミは自分がすべての人から取り残されてしまったようなみじめな気持ちになって涙をこぼしていた。

「まだ早いでしょう？ だから今夜は帰りましょうよ。暖くなってから二人で来たらいいから」

「兎に角裸になれよ」

「縛っちゃいやよ」

「ああいいとも」

看護婦が服を脱ぎ下着を外すのを横目で見ながら、医者の手はアケミの胸をもてあそんでいた。

「その娘に目かくしてよ。そうでないと落着かないから」



「全部塞いじゃおうか。見ざる、言わざる、聞かざるっていうように」

「手伝うわ」

裸になった看護婦がアケミの頭のところへうずくまる。

「先生は下の方がいいでしょう。しっかり詰めてよ」

「下もか？」

「勿論よ。先生が浮気しないようにね」

女は笑いながら脱脂綿をまるめて唾液で濡らし、アケミの耳の孔に押し込んだ。絆創膏が両眼の上から貼りつけられる。その間に男の手も動いていた。アケミはぐったりとなすがままに体を委ねていた。

「綺麗な体をしてるな、この娘は」

「いやねえ、先生見慣れていくくせに」

「しかし、こんな娘はそう多くないよ。大抵はねえ……。君のは」

「意地悪」

看護婦の手が土間の粘土をまるめ、耳の綿の上から押し当てる。そしてその上から短い絆創膏が貼りつけられると、アケミからすべの音が去ってしまった。

後手の縄が解かれると、両手首を前にして紐のようなもので縛り直された。両足音も揃

えて括られる。そして、その二つが寄せられて結ばれた。アケミの体は、二つ折れになった、四肢を一つにした紐に縄が通されると、男がアケミを抱き上げた。そのまま台の上に立つと、看護婦が縄を小屋の梁木に廻わして引いた。

「先生は、この吊りが好きなのねえ」

「そうだな。女は動物だからな。それに、この恰好は何をするにしても便利だからな」

「助平」

アケミは高々と吊り下げられた。男が手を放した時、梁がミシリツと無気味な音を立てた。しかしアケミには、二人の会話もその木のきしむ音も聞えなかった。男の手が無防備な体をつくのだけを感じてはいたが。

けものように四肢を束ねて吊り下げられたアケミは、それから下で行われた男女の痴態を知る由もなかった。頭が重く、腕がだるかった。時々、男の手が女の手が彼女の体に触れるのを無抵抗に受けるだけで、無音の暗闇の中で時間の経過を待ち続けていた。

十分経ったのか、一時間経ったのかわからなかった。梁の縄が解かれアケミの体が抱き止められた。そのまま壁の上に横たえられると目かくしの絆創膏がはがされ、耳を塞いで

いた詰めものが取り除かれた。

「さあ目を開いて」

男の声にアケミは目を開く。急に明るい外気がまぶしかった。

「ほれ、そこを見てしろよ」

看護婦が足を開いて坐っている。その体には先刻アケミを鞭打った荒縄が、がんにがらめに巻きつけられているのである。両膝を開いて両肩に寄せつけられた後手縛りは苦しきうだった。

「先生、見せたら、いや」

女は自由になる頭を振って叫ぶ。

「さあ、ゆっくり見てやれ。女が女を見ても興味がないかもしれんがな」

医者は看護婦の肩を左腕で抱くと後に倒した。アケミの視界に女体が入る。

「ひどいわ。早くかくして」

男はニヤニヤ笑いながら、殊更にかくそうとはしない。

「どうや、もっと可愛がってやろうか？ それとも交替するか？」

「うううっ、腕が痛いわ。もうほめて」

「駄目だなあ。まあ、ゆっくりそうしてるんだな。いい恰好よ」

男は看護婦の体を、そのまま仰向けに転が

してしまった。女は開いた足先をバタバタさせて空を叩く。

「先生、ひどい！」

医者は返事をせずに炉端に坐って薪を追加する。煙が再び立ち籠める。その燃え木で煙草に火を点けた男は大きく煙を吐いた。

「あああー、疲れたな。もう年かな。弱くなつたもんだ。据え膳の二つ位がこなせないんだからな」

「先生、苦しいから、もう許して！」

看護婦がぶざまな恰好のまま嘆願した。

「まあそう慌てるなよ。あんまりやかましいと口を括るよ」

男の目がアケミの体をじっと見つめる。そしてその手が円めた背中を撫でおろす。アケミは目を閉じたまま男の暴虐を観念した。

「ひどいわ、先生！ わたしの前でなんて、

ひどい人」

看護婦の泣くような叫びを耳にしながら、アケミは自分の女が、その男を嫌悪してはいないのを否定できなかった。

外では雪が一段と烈しくなり、吹き荒れる風がこの小さな小屋の窓を叩き続けていた。

○

三人が山を下ったのは、雪も小止みになつ

た夕方であつた。三人共疲れ果てて殆んど言葉も交わさずに雪の中を家まで辿りついた。

入浴を済ませた三人は鱧のように眠った。

アケミは勿論檻の中でである。風邪をひいたのか頭が痛み、全身がけだるかつた。夜中に何度か目が覚めたが、その度にアケミは大山の家にいる錯覚にとらわれた。手を伸ばす。しかし、そこには固い檻の壁が彼女を囲んでいるのである。

翌朝は昨日の雪が嘘のような晴天だつた。

しかし積つた雪は深く、山麓の家々はそのぶ厚い衣の下で喘いでいた。アケミへの執拗な責めは昼過ぎに再開された。十字架のある丘陵の斜面に引き出されたアケミは、そこで真紅のナイトガウンを、剥ぎ取られて裸にされた。医者と若宮と呼ばれている運転手の二人が責め手である。看護婦の姿はなかった。

「先生のタフには参つたなあ。昨日は山へ入つたんでしょう？」

「ああそうだよ。若いもんがモタモタしてたら駄目だな。僕なんか君位の時には打つても打つても大砲は、びくともしなかったもんだよ。もっとも兵隊で明日の命もわからなかったせいもあるかもしれないがね。やけ糞になつて慰安婦を抱き続けていたら、骨を折つち

やうわよつて云われたこともあつたな。あそこに骨はあるんかねえ」

医者は笑いながらアケミの裸身に縄を掛けた。藁縄で後手に、雁字がらめに縛り上げると、その縄尻を口に噛まして引き絞つた。乳房の上下、二の腕、腹部そして肩の肉に荒縄が食い込んで痛々しかった。上半身を縛り終えると医者は、縄の締め具合を見ながら云つた。

「この縄を使うと凄さが出るな。このまま吊つてみるか」

「この縄じゃ痛いでしょうな。吊るつてどこへですか？」

「あの木がいいじゃないか。滑車がないからうまく吊れるかどうかかわらないがな」

「どういう風にやるんです？ この縄で吊つたら皮膚が破れるんじゃないですか。何か手首に布でも巻かないと」

「このまま手首では吊れるわけがないじゃないか。逆さ吊りだよ」

「ふうう」

運転手はおどけたように口を突き出した。裸になった銀杏の枝は、雪の表面から二メートル近くの所にあつた。医者はその枝の下を雪を踏みならして踏台を置く。そして立つて



いるアケミの足から長靴を抜き取ると、足首を揃えさせて綿ロープで縛った。直接雪を踏んでいる素足は忽ち痛いような冷たさを感じた。足を縛った縄尻が枝に掛けられる。

「若宮君、その娘を逆さに抱いて台の上へ上ってくれ。できるだけ高くなるようにな」

運転手は云われたようにアケミを抱き上げると頭を下にする。腕の中の柔らかい女の肌が彼の官能を刺激したのか、彼はニヤッと笑いながら云った。

「先生、案外重いもんですな。それに人間の胴の長さってそう違わないようですね。これが真正銘のシックスティナインっていう恰好ですよ」

「早くせんと吊れなくなるぞ。楽しむのは後にしろ」

運転手はアケミを逆さに抱いたまま台の上に上ると、医者が縄を手繰る。女の曲った足が伸び、やがて運転手の腕にかかった重みが半減する。

「よし、放してみろ」

逆吊りの裸身が揺れ銀杏の枝から雪がパラパラとこぼれ落ちる。完全な逆吊りである。縄を中心に体がゆっくり回転する。

「雪合戦と行くか」

医者は足許の雪を円めると、いきなりそれを生きた標的目がけて投げつけた。雪の球がアケミの体に当たって砕ける。運転手も直ぐそれに加勢した。

「余り固く握るなよ。固く握ると氷と同じようになるからな」

雪の球は逆吊りの女体に所かまわず当たって砕けた。乳房も腹部も腕も足も、そして顔さえも、その射撃から逃れることができなかった。砕け散った雪の破片は、その素肌に附着して体温を奪う。

「君、どこに当たったら一番こたえるか、わかるか？」

「体の真中ですか？」

「そんなところは、どうもないよ。オッパイだよ。女の急所だからな」

雪の射撃はその急所に集中する。命中する度に、逆吊りの女体はそり返って震える。それは糸でぶら下った毛虫の運動に似ていた。

アケミは口の裏縄を強く噛んだ。頭に血が下って苦しい。それに雪の射撃は時々息を止めるような苦痛を呼ぶ。男の云うように急所に命中した時である。体にふりかかった雪が冷たい。それに全体重のかかっている足首が縄で凄く痛む。もうこれ以上の苦しみはない

とさえ思えた。

(大山さん、早く助けて！)

アケミは心の中で叫んだ。

(早く来て！ 早く助けて！ わたしは死んでしまう)

○

大山は汽車を降りると雪を掻き分けられたホームを急いで歩いた。明け方の突然の電報で起された彼は、とるものもとあえずに汽車に飛び乗ったのである。

(モノカエス、ケファサノキシヤニノレ、カナザワデマツ)

その電文に差出人の名はなかったが、勿論大山には不用だった。それはアケミの返還を意味することが、はっきりしていたからである。改札を出た大山は暫らく立ってあたりを見廻わした。この北陸随一の都会の駅は、深い積雪の中にあっても相当の賑わいを見せている。駅の中を行き交う人も多い。大山はちよっと不安になった。誰も彼を迎えに来る者がいないようだったからである。しかし改札を離れることは余計に自分の所在を相手に分らなくすると思つて佇んでいた。二本目の煙草が短くなった頃であった。

「大山さんじゃございません？」

女の声が背後からかかった。彼は振り返える。黒いオーバーを着た中年の女が彼の顔を見て微笑する。

「アケミは、どこにいるんです？」

「今、御一緒しますわ。どうぞ」

駅前からタクシーに乗った二人は、しばらく後のシートに並んだまま沈黙を保った。その息苦しいような空気を振り払うように女が口を開いた。

「あの方、無事ですから心配いりませんわ。

綺麗な方ね。それにとても可愛い」

女の微笑につられて大山も顔をほころばした。

「殺生ですよ。いきなりおいてきぼりにするんだから。よっぽど警察へ言おうかと思ったんですがね」

「愛してらっしゃるのね」

女は小声でつぶやいた。その横顔に寂しいかげを見た大山は、ちょっと云い過ぎたように思っ言葉足した。

「まあ信用はしていましたがね。あなたは、どんな御関係？」

「関係？ いやですわ。無関係ってとこね。みんな先生の指図なんです」

「先生？」

女は答えなかった。女は腕の時計を見る。

その時、大山は女の白い手首に縄の跡がかすかに残っているのを見逃さなかった。彼はそっと女の手を握って云った。

「あなたも……」

女はさっと顔を赤らめると、あわてて手を引っ込めた。

「アケミと一緒に……？」

運転手のいる手前、直接の質問ができずに

大山は言葉を探した。

「もう経験は長いの？」

「……」

「一度神戸へ来ませんか？ 歓待しますよ。

家には今三人、女の子がいますから面白いですよ」

「三人？ 一緒に暮らしていらっしゃるの？」

「ああ、みんな仲がいいですよ」

大山はほっそりしたその中年女の体がよく撓うのではないかと想像すると、無性に縛ってみたいくなった。それは一面アケミを無条件で奪った男への復讐のような気持を伴っていたことを否定できなかった。大山は再び女の手をとると引き寄せて両手を握った。女はそれを拒もうとはしなかった。

自動車は一面、白雪に蔽われた山沿いを、

ガチガチ派手な音を立てながら走り続けた。

一時間も走っただろうか。タクシーが停る。

車を降りた二人は雪の中を山へ向って歩く。

「長靴を履いてらっしゃれば良かったのに」

大山は短靴のままなので、深い雪は膝近くまで包んでしまう。ズボンも靴も濡れ始めると足が痛いように冷えた。

「遠いの？」

「直ぐですわ」

人家を離れるといよいよ雪は深くなった。サングラスをかけてはいたが、晴天の太陽に反射する白い絨氈はまぶしかった。小さな丘を廻る。

「あそこですわ。わたし、ここで失礼しますわ」

丘の反対斜面の林の中にアケミらしい女の姿が見えた。木の幹を背負うようにして後手に縛られて立っているその女体は、頭をうなだれて全身に太陽の光を浴びていた。

「一緒に来て下さい！」

大山は女の手首を掴むと引張りながらアケミの傍へ駆け寄った。中年女は逆いもせずについて来た。立木の幹に縛りつけられたアケミの体には、縄の跡や鞭跡が無残に残って、折檻の烈しさを如実に物語っているようであ



った。

「アケミ、大丈夫か？」

彼女は縄の狼轡で歪んだ顔を上げて大山を見た。その目から突然涙がキラキラ光りながらこぼれ落ちた。大山は急いで縄を解く。中年女も黙ってアケミの足の縄を解いた。アケミの手足は冷たかった。足の下には木の箱が置かれて直接雪に触れないようにはされていたが、冷氣と縄の圧迫が手足の体温を奪っていたのである。縄を解くとアケミは大山にその体を預けてきた。

「大丈夫かい？」

アケミがかすかに頷くのを見て、大山はアケミの体を力一ぱい抱き締めた。彼女の顔に微笑が浮ぶ。

「わたし、もう失礼しますわ」

後から中年女が声を掛ける。

「おいおい、ちょっと待ってくれよ。この娘に着せるものは、どうするの？」

その時、アケミの足の間からバサッと音を立てて封筒が落ちた。彼女が挟んでいたのかそれはなま温く、そして濡れていた。大山が

急いで封を切る。中にはぶ厚い札束と鉛筆書きの手紙が入っていた。

(約束のお礼と一緒に素晴らしかった女性をお返しします。当地での詳細は彼女からお聞き下さい。最後まで見事に類する演出を使ったことを容赦下さい。いずれ春にでもなれば、鄭氏に連絡して貴兄とお逢いしたく思っています。

なお裸のままお返ししたので爾後の行動にお困りのことと存じます。衣類は案内のものを御使用下さって結構です。お返しには及びません)

大山は思わず顔をほころばした。一分の間もないやり方に兜を脱ぐ思いだった。そして逢ったことのないその男に、魅力さえ感じ始めていた。

彼はアケミの体を放すと、中年女の傍に近寄った。

「脱いで下さい！」

「ええっ？」

「裸になってもらいましょう」

「わたしが？」

「この手紙に書いてあるんですから」

女は困惑した表情をした。

「本当ですか？」

## 現在発売中／限定版グラビア写真集／在庫案内

女体緊縛グラフィック集「豊満と清楚」

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「限二」

緊縛美女八十態「美しき縛しめ」第四集

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美4」

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美7」

二女緊縛「女斗緊縛競艶写真持集」

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美9」

緊縛写真集「責められる美女百態」

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美10」

M写真集「女王様に飼育される日々」

一部 一〇五〇円 (送共) 略号「M特」

緊縛美態代表作品一二〇葉写真集

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美11」

◎一般書店にては一切販売いたしておりませんから、直接発行所へお申込み下さい。

大山は手紙を渡す。彼女はそれにさっと目を通すと眉をひそめてつぶやいた。

「ひどいわ」

大山が手を掛けようとした時、女はそれを振り払いながら云った。

「自分で脱ぎますわ」

長靴を脱ぎ下着のすべてを取り去った中年女の体は、大山が想像していたよりは肉づきが良かった。

「ううっ、寒いわ」

大山は胸を抱いて肩をすくめている中年女を無視して、うずくまっているアケミに近寄ると、手に抱えた衣類を渡した。

「これを着ない。自分で着れる？」

アケミが肯ずく、大山は無数に責め跡のついた彼女の肌を見ているうちに、強い嫉妬のようなものを感じ始めていた。そして、その感情は目の前に立っている中年女への憎しみに転嫁して行くのだった。

「手を前に！」

大山の怒ったような語調に、中年女は胸を抱えたまま情なさそうな顔で彼を見た。

「縛りになるの？」

「早くして！」

彼は荒々しく女の手首を合わせると、アケ

ミを縛っていた荒縄で強く縛った。

「痛いっ！ きついわ」

大山は、その言葉にかまわず女を木の下の方の上に押し上げた。縄尻を枝に掛けて引き上げる。女の両腕が頭上に伸び、やがて爪先立つ。

「痛いわ。もっと、ゆるくして！」

半吊りになった女が嘆願する。大山はその両眼の上を荒縄でぐるぐる巻きにして目かくしにする。とげとげの縄が顔を締めつけた時、女は激しい悲鳴を上げた。

「痛いっ！ やめて！ お願いだから、顔だけは、ほどいて！」

大山はわざと猿轡は噛まずに、その悲鳴をあげている裸身を眺めていた。成熟して脂ののった女体の線は、未だ崩れてはいなかったし、子を産んだ経験がないらしく腹部にもたるみがなかった。伸び切った胸と腹部が喘ぐように動く。その姿に雌を感じた大山は、滅茶苦茶に騒がれてやりたい気持ちになった。左腕で胸を引き寄せた大山は、その乳房に掌を押し当てた。

「ウウウッ！ くすぐったいわ」

女は胸を左右に揺らせるが、大山はびったりと握ったまま放さない。

「ムムムッ！ ウウッ！」

その呻きは苦痛のそれではなくて、歓喜の響きを持っていた。

「大山さん、そんなの止して！」

後からアケミの泣くような声が聞こえた。服を全部つけ終った彼女は、うずくまったまま大山の所作を見ていたのであった。

「いいよ。アケミのかたきを取ってやるんだから、見てたらいいい。このまま帰るのは癪だからな」

突然、大山の手が止まる。

「ああ——、止めないで！」

大山は、にやっと笑うと足許の枯枝を手にした。

ピシッ！

彼の手にした枯枝が女の臀部で炸裂する。

「イタイッ！」

ピシッ！ ピシッ！ ピシッ！

一定の間隔を置いた打撃が、力一ぱいその皮下脂肪を震わせた。欲情から苦悶への転落——それは残酷な責め方だった。

「さあ、帰ろう」

大山の声にアケミは立ち上った。

「ひどいわ。お願いだから、ほどいて」

中年女の哀れな嘆願を聞き流して大山はア



ケミの手をとった。

「疲れたらどう？」

「ええ、でも嬉しいわ。もう来て下さらないのかと思ってたの」

アケミはよろけながら、大山の胸に顔をうずめた。疲れ切ったアケミを、彼はしっかりと抱き止めると、その白い首筋に唇を押し当てた。

「許してくれる？」

## ◎懸賞△原稿募集▽

### ▽内容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェッティッシュ一般、女性切腹、男性切腹、男女性輝美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文獻紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱っていない分野の傑作をお待ちします。

一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構ですし、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、

アケミの頭が傾く。そして仰向いたその顔が彼の愛のしるしを求めて目を閉じる。

唇に唇が――。

腰に腕を廻わした大山は、凭れかかったアケミの体重を支えながら雪の中を歩いた。事実アケミは一人では歩けない程疲労の極にあったのである。このまま汽車に乗って帰るのは、とても無理だった。

「今夜は温泉に一泊しよう」

## 新発足記念

シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最もお得意のものを選び下さい。

### ▽規定△

一、賞金、入選作品、優、一篇五万円 10篇  
入選作品、秀、一篇三万円 10篇  
入選作品、佳、一篇一万円 10篇  
選外佳作、一篇五千円 若干

一、作品はすべて未発表の自作作品に限り、引用部分の出処は明記願います。

一、枚数は四百字詰原稿用紙にて三十枚以上百枚まで。必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙をご使用願います。

一、締切日は毎月十五日。入選の分は次号の誌上に掲載発表いたします。

一、懸賞応募原稿は他の原稿と区別するため第一頁に「懸賞△」とお書き下さい。

一、御投稿の原稿で返戻の必要のあるものは返信料同封の上、その旨添記して下さい。

一、宛先は天星社内奇巧編集部宛。

「うれしい！」

大山は疼くような後悔を感じていた。彼の意志のまま汚辱の淵に投げ込まれながら、尚彼を恨まずに愛情を持ち続けているアケミの純粹さの前に、彼は自分の心の非情さを恥じていたのである。

（俺はこの女を本当に愛しているんだ。汚されてしまった女だが、俺の女なんだ）

青空に浮んだ白い雲が、時々まぶしい太陽を遮った。その下に広がる白い自然の舗装の上に、二人の黒い影が小さい足跡を残しながら歩んでいった。それは大きな自然の中では余りにもちっぽけな存在に過ぎない。恐らくはその二人の人生すらも自然の流れの中では果敢ないうたかたに過ぎないのであろう。

（おわり）

―御挨拶―

甚だ勝手ながら本篇を以って一応休ませていただくことにしました。

長い間御愛読下さいました諸兄弟並びに貴重な誌面を拙稿のためお割き下さいました編集部に対して厚く御礼申し上げます。

いずれ機会がありましたら、稿を新たにしたい続篇を以ってお目にかかることもあろうかと思ひます。その節には宜しく。

# オメデトウみゆきさん

— 観賞用妊婦ご苦労さま —

瀬 沼 四 郎

三月号の臨月、カラー作品の分譲をもって増田みゆき夫人の妊婦フォトが一応出そろったようである。もちろん「みゆきの妊婦シリーズ」の八臨月Vがまだ書かれていないことや、二月号同シリーズの八妊婦九カ月V（辻村氏執筆）を見ると、まだ発表されていない妊婦フォトが今後分譲されるだろうことなどは、妊婦マニアとして大いに関心のあるところ、非常に期待しているのだが、三月号二〇ページの「編集部だより」が、

「『妊婦フォト』について、長らく一方ならぬ協力を頂いた増田みゆき夫人は、十二月下旬、予定日より若干早く、二人の女兒を無事出産された由知らせを受けた。初産の双生児

というので心配されていたが、母子共極めて健全とのことなので先ず先ず安心である。心よりお祝い申し上げる。

妊娠五カ月から始めて臨月に至る妊婦腹の撮影記録は、それ自体貴重な記録であるが、はからずも双胎という予期せぬ場面に逢着して一層文献的価値を増したことと思う。増田夫妻に感謝したい」

と報じているのを読んで、小生も何はとりあえず、およろこびと感謝の気持ちを述べたいと思ひ、筆を執った次第である。

長い間待望に待望を重ねてきた、編集部撮影による本格的な妊婦ヌードフォトが、しかも僥倖にも、願ってもない双胎妊婦モデル出

現という形で実現されることになったのは大変なよろこびであった。さらにもし、分娩ギリギリ前のフォトが撮られているようだったら、自家用のものであっても二、三分譲していただきたいものである。辻村氏撮影の妊婦九カ月はもちろんのことである。腹囲、母体の健康状態、新生児の体重などの詳しいデータも是非発表していただきたいと思う。

昨年十一月号で初の分譲作品、妊婦七カ月のものが発表された後、

「詳しい批評……は、いずれ次々に、分譲されるものを見て、まとめてします」（十二月号読者通信）

と予約した小生としては、また、



「これでどうやら、瀬沼四郎氏等にもお約束が果せそうである」(十一月号楽我記)

と辻村氏に言っていたいたでいた手前からも、何も言わないでいることが悪いような気がしていた。しかし、以前のときと違って、増田氏と辻村氏の「みゆきの妊婦シリーズ」が連載された外、高野原美氏の紹介記事、「孕んだヌードのヴィナス群像」(二月号)「鑑賞用妊婦みゆき夫人」(三月号サロン)などもすでに書かれていることであるし、今回は簡単にお礼とおよろこびのことばを述べるだけにとどめようと思う。

十二月号「妊婦シリーズ」辻村氏の八いのちふくらむVの中で、増田氏は、「私は正直いって妊婦フォトに、さして興味はないんです」

と言っておられる。そうだとすれば、大胆にも、初産で双胎の見事に腹の膨らんでいる若い奥さんの赤裸々な裸体を「鑑賞用妊婦」としてレンズの前にさらされ、妊婦マニアの観覧に提供せられたことに感謝感激せざるを得ない。何というご好意だろうか。

さらに、みゆき夫人のご理解とご協力にもまったく心から感謝、言うべきことばを知らない。完全にマルマルと、すごく大きく膨れ

上った腹をすっかり剥き出しにして、孕みモデルとして立つ裸婦が、みゆき夫人である。

これまでのどのモデルよりも、その臨月の腹は、はるかに大きく膨満している。双胎のため、体も苦しく、身動きも不自由であろうのに、すすんで、妊娠中、しかも分娩間近い、今にも爆発せんばかりの、マルマルと、はち切れそうに膨らみ切った、すごい腹をすっかり裸出して、分譲品として一部の妊婦マニアだけにたいしてではあるが、腹が大きい裸婦のモデルとなられた勇氣には、感嘆の外はない。「腹がマルマルと大きく膨れ上っている裸婦」の写真は、まったくすばらしいものである。妊婦マニアはもとより、かならずしもそうでない人も、是非観賞されるよう、おすすめしないではいられない。

一月号辻村氏によれば、

「ザ・ピーナッツ内蔵の妊婦フォトなんで、そうそうザラにあるものではない。又と得難い貴重なフォトの資料ではなからうか」(サロン楽我記)

ということであるが、分娩の結果、みゆき夫人のあの巨大な腹の中に、女兒の双生児が入っていたことが分った。まさに「ザ・ピーナッツ」だったわけだ。かわいい女の双生児

がすくすくと成長して、増田さんご家族がいよいよ幸福になられることを望むわけである。それにしても、そのピーナッツを腹に入っていたころの、妊娠中のみゆき夫人の裸の腹は、何という大きさだろう。妊娠中の裸婦の乳房と腹部の、何という膨満ぶりだろう。まったく驚歎に値する。読者の諸兄姉は、是非分譲品を求めて、十分観覧していただきたいものである。

普通の妊婦の臨月くらいの腹を見るつもりなら、むしろ妊娠八カ月のものがよいと思うが、臨月のものはさらに、双胎妊婦の超膨満腹部という、めったに見られない珍しい女体を目のあたりに観覧させてくれる。妊娠八カ月の方は、むしろ美しい。腹の丸い線がキレイに出ていて、異様ではあっても、バランスのとれた女体の美しさがある。臨月の方は、あきらかに、大きくなり過ぎた、膨満し過ぎた異常美の腹である。乳房にも腹部にも、ナマナマしい妊娠線が一面に模様のようにハッキリ出て、見ようによっては、ひどくグロテスクな感じさえ与える。カラーの写真はとくにそうである。これがまた、妊婦マニアにはこたえられない魅力なのであるが……。

事実、腹囲から言っても、一月号「妊婦シ

リーズ」(増田氏)によれば、妊娠八カ月フ  
ォト撮影のときのみゆき夫人の腹廻りは九七  
センチだったということだから、日本人女性  
の妊娠時最大腹囲が普通せいぜい九〇センチ  
どまりであるのと比較して、みゆき夫人の妊  
娠八カ月の腹部は、普通の妊婦のまさに臨月  
以上——言ってみれば妊娠第十一カ月(?)

——と考えてよいのである。だからみゆき夫  
人の臨月の腹は、妊娠八カ月の写真より、小  
生の推定によれば約七週間経って撮影された  
として、一見して分るように、はるかにその  
後大きくなっているの、一メートルを軽く  
突破していることは間違いない。さらにその  
後三週間経って分娩しているのだから、分娩  
直前の大きさは想像に余りがある。繰り返す  
が、もし自家用に撮られたものがあるなら、  
二、三枚——もちろん多いにこしたことはな  
いが——でもよいから、是非分譲用に提供し  
ていただけないものだろうか。双胎妊娠の場  
合、普通の妊娠にくらべて、平均して約三週  
間早く分娩すると言われている。みゆき夫人  
の場合は——発表されたデータにもとずき小  
生が試算してみたところでは——予定日より  
約一週間早く産まれたとして、双胎児の平均  
より約二週間長く腹の中にいたことになる。

産まれた子どもの体重などとともに、妊娠ご  
く末期の腹のフォトを是非見たいと思う理由  
である。

以上、今後さらに詳しいデータが出るにし  
たがって、修正したり、書き加えることもあ  
ろうと思うので、一、二の点だけにふれるに  
とどめた。これまで、妊婦フォトが出るたび  
に、いちいち批評や感想を書いていた小生が  
今度は沈黙していたので、不審に思われる読  
者もあつたかも知れない。そのためにも一度  
何か書かねば、と思っていた気持ち、これ  
で一応果たしたわけである。この文が誌上にあ  
らわれるのは多分五月号(三月末発行)だろ  
うと思われるので、すでに出産から三カ月も  
経っていることになる。時機を失したよう  
で、はなはだ申しわけないけれども、雑誌発  
行の都合上やむを得ない。遅ればせながら、  
増田ご夫妻に心からオメデトウノを申し上げ  
る次第である。

一九六六年は六十年に一度の丙午(ひのえ  
うま)の年で、史上最低の出産率などと言わ  
れている。小生は、増田ご夫妻のような若く  
てモノを気にしない方々が、丙午の迷信にこ  
だわって妊娠を避けられるなど、かねて物足  
りなく思っていた。ところが幸か不幸か、双

胎妊娠という思いがけない事態が発生したた  
め、同時に二人の女兒を年内にもうけられる  
という結果になった。しかし、お二人に申し  
上げますが、丙午なんて、本当に何の根拠も  
ない、くだらない迷信ですよ。もし二十年後  
になって、丙午だからどうこうと言うような  
男があつたら、そんなのはこちらから願ひ下  
げにしてやりなさい。そんなつまらない男と  
結婚することはありません。馬鹿々々しくっ  
て、お話になりませんよ。——とにかく、か  
わいい増田ピーナッツちゃんが、すこやかに  
大きくなられて、幸福な人生を歩まれること  
を、心からお祈りしています。

増田ピーナッツちゃん万歳!

× × × × × × × × × ×

最後に、もう少し書きたいことがある。

一九六六年の丙午を受けて、六七年は、こ  
れまた空前のベビー・ブームになりそうだと  
のことである。奇ク誌としては、いわばこの  
ブームの前景気であるかのように、双胎妊婦  
モデルみゆき夫人の出現という、まったく幸  
運な「千載一遇のチャンス」(二月号編集部  
だよりのことば)に恵まれた。今年の春から  
秋にかけて、大変な出産ブームとなる見込み  
で、産院はベッド数が足らず、またデパート



ではマタニティ（妊婦服）コーナーを設けるなど——とにかくちょっとした大さわぎらしい。出産ブームはもちろんそのまま妊婦ブームになるわけだから、奇巧誌にあっても、大いにハッスルしてほしいものである。ここで強く要望しておく次第である。

さて、その妊婦ブームであるが、先日デパートに行って婦人子供服部を通った。見るとズラズラブラッと、妊婦ばかりが並んでいるではないか。と見たのは小生の錯覚で、これが近ごろはやりの「マタニティ・コーナー」だったわけだ。腹が大きい（もちろん着衣のだが）マネキン人形が十体以上もだろろうか、いずれも膨れた腹をゆるい洋服の中で突き出して、誘うようにこちらを向いて立っている

のである。そこら辺にいるお客も、若い腹の突き出た妊婦ばかり。思わぬ目の保養をしたが、もちろんそれ以上、どうこうするわけには行かない。何ともムズムズしたような気分を味わった。

ところでこの妊婦（人形の方）たち、スマートに見せるためか、臨月などというのではなくて、七、八カ月位の妊娠状態と見えた。お客の本物の妊婦の方が、概して言えば、ずっと腹が大きい。まるで小山のように膨れた腹をデンと突き出して、ゆうゆうと歩いてくることがある。それはそれとして、小生はこのマネキン人形に興味をそそられた。以前何かで、読んだことがあるが、中味は普通の人形で、洋服の下に布地など丸めて入れ、妊娠し

ているように見せかけるのだそうである。妊婦のマネキン人形なるものは、作っていない由。しかし——と小生は考えたのだが——それは昔の話で、近ごろではそういう人形も製造しているのかも知れぬ。一瞬、妊婦人形の膨れた腹に手をあてておさえてみたい衝動にかられたが、さすがにそれもなしえず、疑問のままに通り過ぎてしまった次第。どなたかもし、腹が膨れた妊娠マネキン人形が実際存在するかどうか、知っている方があったら教えてほしい。もし実在するとすれば、妊娠マネキン人形の裸の形は、どんな風なものであるか、見てみたいところである。

以上が書き加えたいことの一つ。もう一つは、次の週刊誌の切りぬきである。

「週刊現代」去年九月十五日号「異常セックスただいま激増中、同性愛からサディズムまでの緊急報告」という、センセーショナルな記事を見ると、異常性愛を「対象の異常」と「手段の異常」とに分けた上で、後者にはさらに「部分性愛」と「環境的性愛」があると述べて、それぞれのケースを列挙している。非常に網羅的なもので、異常性愛のカatalogueの感がある。もちろんここでは、そのごく一部を引用するにとどめる。

## 限定版写真集 グラビア印刷

## 美しき縛しめ

### 第四集

一〇〇〇円（送共）

略号/A美4

◎縛られた美女ばかりのフォト八十態◎

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)

鉄扇に緊縛して晒し責め (玉田美佐子)

ブロックの石抱き責め (木村洋子)

箱子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)

両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)

古墳から後手宙吊り組写真 (木村洋子)

両手吊りに悶える刺青女体 (山原清子)

逆さ吊りに揺れる女体 (木村洋子)

猿ぐつわ百態組写真集

革拘束典による女体拘束

柱縛りの庭園羞恥晒し

セーラー服にて縛り上げる

野外に於ける緊縛組写真

刺青女体の柱立縛り責め

捕獲された裸女の悶え

入墨に映える緊縛絵模様

両足吊りの表と裏と

(大塚啓子)

(大塚啓子)

(玉田美佐子)

(大塚啓子)

(玉田・木村)

(山原清子)

(大塚啓子)

(山原清子)

(山原清子)

「これらの部分性愛に対して、環境的性愛というのがある。二人だけでは興奮せず、異常な環境にだけ満足するタイプで、女性にむかって、自分の「持ち物」を公開したい衝動にかられる露出症がその好例。……」

次に多いのが、自分の妻や、恋人を裸体にし、他人の目にさらして満足をおぼえる配偶者裸体公開狂。酒の席で、妻の体つきや性的態度を、ビに入りサイにわたって説明しエツに入る男性をよくみかけるが、彼らもみなこの公開狂」

「配偶者裸体公開狂」などという、ドギツイ表現をつかうと、いかにも異様な感じがするが、ある程度、だれにでもある、妻の裸体を他人に見られるときのスリルのこうじたものと思えばよい。こういう鬼面人をおどろかすようなことばで言うと、嫌な感じを持たれるかも知れないので、あらかじめ重々お許しをお願いしておきたいと思うが、大胆かつ勇敢にも、初産で双胎の妊娠中のみゆき夫人の腹がマルマルとものすごく大きく膨れ上っている裸の女体を、辻村氏や箕田氏の観覧に進んで供されたばかりでなく、空前の腹が大きい裸婦モデルとして、主として奇ク誌上ではなく、分譲品として限られた妊婦マニア相手ではあるが、衣服を剥かれて、はち切れんばかりにグロテスクに、膨れ上った臨月妊婦の腹を、膨脹して黒く色づいた大きな両の乳房とともに、ナマナマしくすっかり裸出して、マニアの観覧にさらすべく提供された、増田氏などは、たしかに、このタイプに属すると言っている。みゆき夫人の協力があつたればこそ、と言えるが、夫人も、ご主人ともども、ひそかに満足を、感じておられるのではなからうか。失礼をもちえりみず、お礼のことばとともに、書きそえておきたいと思うのである。奇クが、どこの本屋の店頭にもあるわけではないという、いささか淋しい事情が、かえってご夫妻のこの冒険を可能にしたと言えなくもないとすれば、皮肉であるが。

他人のことばかり、言うのも気がひけるので、小生自身の反省のためにも、もう一つ別の切りぬきを引用しておこう。おことわりしておくが「黒皮カバンを持った四十歳くらいの男」というのは、もちろん小生ではない。偶然小生と同じ趣好をもち、軽卒にもそれを行動に移した男が、あるということを知り、心にうなずくとともに、自分のいましめにしたいたいのである。出所は「週刊平凡パンチ」昨年十二月五日号「パンチジャーナル」

からである。

「妊婦に魅せられた男？」

このほど埼玉県川口市芝、A子さん（二三歳）方に黒皮カバンを持った四十歳くらいの男がおとずれ、「保健所の職員だが、分娩二、三カ月前の人を調査している」といって十五分ほどA子さんを検診して帰った。その動作がもの静かで、普通の医師と変わりなく、帰りぎわに「お大事に」とまでいわれ、A子さんはすっかり感激。ところが翌日かかりつけの医師にこのことを話して、そんな調査を保健所はやっていないことがわかった。

保健所が調べてみると、ほかにも何件か、おなじケースがあり、「妊婦の戸別検診は保健婦と助産婦しかしていないから、被害？にあつたら届け出るよう」あわてて注意をだした。

それにしても、くだんの男、金をとるでもなし、危害を加えることもなく、いったいどういうわけでそんな戸別検診をして歩くのだろうという推測は、とうぶんつづきそうだ（追記）四月号を見て、すこし追加したい。「奇クサロン」に、ひきつづいて、愛知葉子氏の「妊娠八カ月の表情」と、綾研二氏の妊婦写真撮影の記「晩秋のフォト」、それぞれ



二葉ずつの妊婦ヌード・フォトが載っているのは楽しい。妊婦マニアとして、子を孕んでムックリ膨らんだ妊婦の腹をすすんで提供された両氏にお礼を申し上げる。さらに、辻村氏のSMカメラ・ハント「燃ゆる想いにあげるを」の水野香代夫人、妊婦ではないが、中年肥りなのだろう、一六六ページと一七一ページの写真は、まるで妊娠しているように腹が出ている。ことに一六六ページの吊りはそのように見える。

読者通信でも、先月にひきつづいて、一二

みゆき夫人の臨月腹妊婦フォト礼讃が見られるが、やはり記事では、高野氏が書いておられる「臨月腹を裂く」が、双児を孕んでマルマルとハチ切れんばかりに膨れ上った臨月妊婦のハラにたいする甘いアコガレのようなものをただよわせている点で楽しい。双胎臨月妊婦のかくされた超膨満腹部を、衣服を剥いで、すっかりマル出しにして、見せるのだから、妊婦マニアたるもの、驚倒してよろこぶのは無理もない。辻村氏の「楽我記」によると、どちらも七二〇又の赤ちゃんだったとい

## 女性写真モデル募集

本誌の内容充実のため

奮て御応募下さい

○本誌では、更に内容の充実を計るため、広く写真撮影に応ずることの出来る女性のモデルを募集いたします。

○本誌愛読の女性の方でしたら、年令、遠近は問いません。誌上発表の可否については十分御希望を考慮いたします。又、助手介添え或はプレイのみの出演御希望の方も一応御照会して下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令、略歴記載の上、編集部宛お申込み下さい、報酬そ

の他詳細につき、お返事いたします。

○出演並に参加報酬については、十分期待に添うよう考慮いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下さいれば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用して

の御参加も大いに歓迎いたします。  
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人とS的傾向を持ち、サジスチンとして活躍頂ける女性を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報願います。

△奇ク編集部△

う。つまり、二・七キロの二倍、五・四キロだったわけだ。二・七キロといえば、標準の三キロより小さいが、未熟児（二・五キロ以下）ではない。それが二人であるから、非常に大きいわけだ。惜しむらくは、臨月腹の撮影から分娩まで、何日経っているかが正確に分らないことと、小柄だといわれるみゆき夫人の身長が分らないことだ。そのときどきの妊婦の腹の腹囲とともに、正確なデータが是非とも知りたいところである。同時に、分娩前ギリギリのフォト、妊娠九カ月のものなど追加分譲してほしい。四月号を見て、もう一度くりかえしてお願いしておく。

ここでちょっと話題を変えよう。

週刊誌などを見ると、アメリカでワイフ・スワッピングなどという夫婦交換のパーティが、最近日本でも一部に行なわれているように書いてある。おそらく中年夫婦の倦怠による性力減退から、異常な刺激によって回復しようとする風潮が生んだものなのだろう。だとすれば、秘密さえ完全に保たれるならば、奥さんが妊娠中の若い夫婦を仲間に入れたらどうだろうか。妻の妊娠中はとかく欲求不満になり勝ちな若い男性を、中年婦人の熟達したテクニックは十分満足させるだろう。逆に

中年婦人もまた、若い男性の激しいエネルギーに満足するのではないだろうか。一方、年配の減退は、彼等の精神を若がえらせはしないだろうか。妊娠中のからだに害のない方法で老人たちを満足させることもできるだろうから、どちらの側にとっても有利な解決方法ではないだろうか。金銭的にも、持っているものが持っていないものに支払うのは合理的である。年老いて社会的地位も高く、仕事に没頭して若い妻（もちろん二号でもよい）を十分に満足させられない男が、その機会に、ふだん家で精力を持てあましていた妻（または二号）を思い切り満足させ、自分は若い妊婦の裸体を見ることによって異常な刺激を受ける。そのあとで自分の本来の相手ともうまく行く、というわけにいかないだろうか。妊婦を孕ませた若い夫も、もちろん十分満足するだろう。

若いサラリーマンが、親子ほども年のちがう部長クラスの上役から、

「キミの奥さん、たしか今、妊娠中だったね……ところでキミ、不自由しないかね」と何気なく持ちかけられる。

「いいことを教えよう。ただし絶対秘密だね。それにちょっと、キミの奥さんの協力も

いるんだ。キミたち夫婦なら大丈夫だと思っ  
て打ち合えるんだが……」

と言われては、つい断りにくい。

その結果、上役への義理と、最近十分満足させられない、夫へのすまなさ、浮気への心配、さらに報酬への誘惑もあって、妊娠中の妻を何とか承諾させてしまう。いよいよ当日になる。高級マンションの一室でくりひろげられるワイフ・スワッピング・パーティということにならないものか。妊婦マニアでなければの空想である。

「奥さんって色っぽいなあ。うちの女房など及びもつかないですよ。すごい性的魅力を感じちゃうなあ」と、これは若い妊婦の夫。

「あら、部長さん、こんな……腹が大きいのがいいなんて……変ってらっしゃるわ」と、これは大きな腹をかかえた若い妊婦。

「どえらい大ききだな。久しぶりで見るよ。どうしてこうなったか、考えると、すごく感じちゃうな。一種のマザー・コンプレックスかな。何かで読んだことがある。この年をしてマザー・コンプレックスはおかしいかな」部長氏にほめられて、まんざらでもなさそうな妊婦は、だんだん大胆になって行く。

「キミのからだをすみずみまでよく見せてくれないか。もう臨月だそうだから、からだに悪いようなことはしないよ。どう、いや？」若い妊婦は決心する。この風変わりなプレイ（？）に興味をもちはじめている。

「いいですわ……でも、こんな腹ポテ……しかも臨月なのに……おかしいわね」二人は顔を見合わせて笑う。

若い夫が、部長夫人の中年女の魅力が忘れられないようになるか、中年婦人の方が若い青年の味に夢中になってしまふかの危険はあろう。しかし、その場かぎり、公認であってみれば、そうも行くまい。いやむしろ、妊婦マニアの部長にとっては、その危険をおかしても、つぎつぎに妊婦ハントができる口実があろうというもの。細君もそれをよろこんでいるのであれば、言うことはない。

「××さんの奥さん、また出来たらしいわ」と待つようになるかも知れない。

「妊娠七カ月ぐにいらなかったら、また話してみよう。あれはすばらしかった。今度は前より大きくなるだろう。たのしみだな」

こうして夫婦円満になれば、メダシ、メダシということになる。

（おわり）



# 続・その声かなし

切腹研究夜話 中康 弘通



## 六

終戦のころ、女子でも軍の情報、特務に従っていた者は少くなかったであろう。それらの人々については、その終焉を詳らかにしないものが多いと思われるが、ここに一投書あ

って、従容屠腹せる女丈夫の最期を録している。

宗子は天涯孤独なことで、戦争責任を痛感したことから敗戦と同時に自決を決意した。上官にばかり、「祖先伝来の短刀で切腹するから、検分、介錯してほしい」と申し出た。

八月十六日未明、彼女の発意で二人は、関東北部の人里はなれた神社の社殿に入った。敷ものを延べた宗子は、いさぎよく服をぬぎ、腰のものだけで端座、はるかに東都を拝したのち、

「では、お願いします」

尋常に挨拶した。用意のハンケチで刃わた五寸の短刀を包み、声も立てず左脇から切り進んだ宗子は、臍のすぐ右まで来てはじめて叫んだが、一気に体をねじって右脇まで引き切った。

やがて左手で探るように切先をつかみ、鳩尾におしあて左刃で縦に切り下げ、介錯を左乳下を受けて絶命した。享年二十才。

## 七

翌十七日の未明には、中部地方でも、とある山村で十七才の少女とき子が自決した。

北陸から疎開して来た少女で、両親とは生さぬ仲で、懐々としてたのしまず、敗戦にまします世を厭う心が起ったものと見え、やはり疎開仲間の少年に、

「いっそ今のうちに、仲の好いあなたに見届けてもらって、立派に死にたい。見届けて……」

涙と共に頼んだのである。

打ち合わせどおり、未明に山林に入る途で彼女は

「あたし、切腹するの、どんなに苦しんでも手を出さないでね、きつと立派に死ぬから」と、くり返し頼むのであった。

やがて林の中で正座して、農衣を脱ぎ腹をくつろげると、用意した刃わたり五寸、細身の出刃包丁を袖で包み、三度び突き損じたが四度目に一寸足らず突き立て、真一文字に声も立てず切腹した。右脇腹で刀をとめ、

「まだ浅い」

呟いたとき子は、刃を元に戻し、斜めに突き入れた。もう刃はことごとく腹中に没している。そのままキリキリと引き戻し、半ばまで来て、大きく呻き、とき子は倒れ伏した。

しかし、「まだ浅い」という呟きは十七才の少女と思えぬ壮烈さで、そのころの大和撫子ならではの、と思わせられる。

## 八

同じころ、九州でも十七才の女学生あつ子が自決している。東京で家族が爆死し、ただ一人の兄も特放隊で戦死した上に敗戦で、絶望したと見える。

彼女も、敗戦の日、東京から疎開の医学生に会い、

「高山彦九郎が腹十文字に切腹したというけれど、お芝居のとどちらが本式ですか？」と尋ねた。医学生は彼女の決心を知らず、

「人手を借りずに死ぬには、彦九郎のように深く切らないと死ねないだろう」と答えた。

あつ子は、

「あたしも腹十文字に切って死にたい」と云い張って、その夜、村はずれの神社で決行しようとしたが、折が折だけに村人が集会を開いている。やむなく十七日未明を待ち社の裏手、雑木林へ行った。

「どの辺を切るのですか？」

と医学生に教えを乞い、

「苦しかったら一文字でやめなさい。介錯しあげる」

せめてもの言葉にも、清くほほえんで、

「あまり苦しんで大声を立てるようでしたらお願いします。でも、なるべく手を出さないで下さい。刀の深さは？」

平静に訊ねるのだった。

教えられたとおり切先二寸残して、あいくち比首を持参の手拭いで、キリキリ巻くと、草原に正

座。

ややしばし眼をとじていたが、力を左脇腹にあて、スツと切り込んだ。

医学生が、「違う」という暇もなく、刀を次第に立てながら、あつ子は、一気に右へ一尺近く引廻した。さすがに真ッ青になりながら、医学生の方をチラと見、あつ子は前かがみになる。それでも、

「早く鳩尾へ……苦しくなるよ」

と注意されると、うなずいて見ごとに十文字の割腹をとげた。

これもまた、年齒も行かぬ少女が、教えられたとおり、男子も及ばぬ十文字腹の凄烈さは、神州の精氣ここに凝ると云ってもよいのではなからうか。

## 九

きぬ子(二十一才) おや子(十四才)の姉妹は、開拓団で満鉄沿線に行動中、八月末、襲われてしばらくは抵抗したが、遂に力及ばず自決した。

その最期たるや、逃げ廻りながらあや子が息も切れに、

「姉さん、もうだめだ、ここで死のう」と叫ぶと、きぬ子も



「うん、捕まらぬうちに早く」

ズボンの紐にしばりつけていた短刀を引抜き、ふりかぶりながら木にもたれて、半裸の脇腹へ振りおろしざま深々と突立てた。

左手は垂れかかる上衣の衿を押しひらき、右腕に力こぶを入れてキリキリ引廻し、傷口を左腕で抑えながら、抜いた刀で喉を突いて果てた。

姉もまた、短刀に双手をかけて腹一文字。

次いで十文字に切ろうとして、鳩尾へ立てたとき力つきて倒れた。

女ふたり、それも年少の処女たちが互いに「死のう」「うん早く」と呼び合う声は、落陽の林に訝して、哀傷悲憤の余韻を、今も伝えていのように思われる。

# 一〇

大陸某地で八月二十四日の夜、十八才の娘弘子は親弟妹と共に拉致された。やがて彼女一人呼び出され、いきなり問われた。

「おい、貴さま、親きようだいを助けたいとは思わないか？」

意外の言葉に応えようもない彼女へ、

「日本人は腹を切るといふ。お前が、ここではらわたの出るほど腹を切って見せれば、他

の者は帰してやるがどうだ？」

弘子は真ッ蒼になり、震えながら、

「お願いです。ちよっと考えさせて下さい」

泣いて哀願する。彼女は一室に閉じこめられ、一時間ばかり打つ伏して泣いたのち、

「どれくらい刀を突っ込めばいいでしょう」

と見張りの男に訊ねた。見張りの男も哀れに思つて

「切腹だけは許してくれと頼んでみる」

すすめてみたが、

「今更そんな恥さらしなことは出来ません」

と拒み、

「本当に切腹すれば、家族は帰してくれますか？」

念を押すのだった。必ず帰すという返事を

聞くなり、

「それではすぐ切腹します」

弘子は悪びれず云いきった。

ほどなく、軍刀を横たえた部屋に呼び入れられた彼女は、刀の前に正座、震える手に軍刀を執り、無念の齒をくいしばって見ごと腹真一文字にかき切った。

いかに家族の生命を救うためとはいえ、切

腹はむごいと思えるのに、許しを乞えとすすめられて、「今更そんな恥さらしな」と毅然

たる言葉は、さすがに大和撫子と嗟嘆するほかはない。

# 一一

終戦の秋、大陸から復員の部隊で一人の女子軍属が残された。彼女は明日部隊が出発という夜、上官の命で自決することになった。

信子（十九才）である。

懐剣で古式どおりの切腹、それも介添え腹をと、検分の下士官に頼んだ彼女は、思い出の女学生時代のセーラー服とひだスカートを素肌につけ、居室中央に正坐した。

介錯人の持つ刃が、左脇腹に刺さったとき思わず「いたいかな？」と彼が口にしたとき、彼女は冷静に

「少しも痛くないわ、一気に思い切りかき切って下さい」

健気にも答えたのだった。痛くないはずはない。しかし殉国の決意だけが、十九才の少女にかくも健気な言葉を叫ばせたのである。

# 一二

こうした神州不滅の精気は、もはや昭和二十年を以て消え去ったものか、又は時あらば機を得て再度花開くのであろうか。

<p>ゴム衣とゴム猿轡 大手札三枚一組 略号△なと▽ 四〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>ゴム衣緊縛悶悦姿 大手札五枚一組 略号△なへ▽ 六〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>黒ゴム衣後手縛り 大手札三枚一組 略号△なほ▽ 四〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>首枷手枷に泣く女 大手札三枚一組 略号△みき▽ 四〇〇円</p> <p>美木乃々子</p> <p>六尺襪のはじらい 大手札五枚一組 略号△ふけ▽ 六〇〇円</p> <p>横屋 峯子</p> <p>双臂に喰い込む襪 大手札五枚一組 略号△ふく▽ 六〇〇円</p> <p>横屋 峯子</p> <p>前袋をさらす羞恥 大手札五枚一組 略号△ふか▽ 六〇〇円</p> <p>横屋 峯子</p> <p>可憐な牝犬の調教 大手札四枚一組 略号△めあ▽ 五〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>足舐めをたのしむ 大手札四枚一組 略号△めく▽ 五〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>足舐めを強要する 大手札四枚一組 略号△めゆ▽ 五〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>足舐め訓練の牝犬 大手札四枚一組 略号△めや▽ 五〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>愛玩用牝犬の生態 大手札四枚一組 略号△めえ▽ 五〇〇円</p>	<p>木村 洋子</p> <p>足首縛りの表情美 大手札三枚一組 略号△あひ▽ 四〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>美しき足首の縛り 大手札三枚一組 略号△あは▽ 四〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>足を縛られる快味 大手札三枚一組 略号△あふ▽ 四〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>生ゴムの猿ぐつわ 大手札四枚一組 略号△むこ▽ 五〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>白晒フンドシ着用 大手札四枚一組 略号△やに▽ 五〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>相撲マワシ着用 大手札四枚一組 略号△やめ▽ 五〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>自刃血まみれ屍体 大手札十枚一組 略号△えみ▽ 一五〇〇円</p> <p>東浦ひかる</p> <p>血まみれ女斗場面 大手札十二枚一組 略号△えみ▽ 一五〇〇円</p> <p>山原 東浦</p> <p>浣腸とオシメ装着 大手札四枚一組 略号△ひそ▽ 五〇〇円</p> <p>大塚 啓子</p> <p>股間縛り恍惚表情集 大手札五枚一組 略号△るね▽ 六〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>鼻責めいたふられ集 大手札四枚一組 略号△るえ▽ 五〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>首縄股間膝頭縛り 大手札五枚一組 略号△るそ▽ 六〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>逆エビ責め強烈縛り 大手札四枚一組 略号△るれ▽ 五〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>変型後手縛り麗美裸身 大手札七枚一組 略号△るた▽ 七〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>柔肌に喰い込む股間縛り 大手札五枚一組 略号△るよ▽ 六〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>股間縛り苦悶表情集 大手札五枚一組 略号△るる▽ 六〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>緊縛による悦虐表情集 大手札三枚一組 略号△るこ▽ 四〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>開股強烈股間縛り 大手札三枚一組 略号△るぬ▽ 四〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>緊縛感放心表情集 大手札五枚一組 略号△るわ▽ 五〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>マゾ夫人の悦虐表情 大手札三枚一組 略号△せや▽ 三〇〇円</p> <p>関谷富佐子</p> <p>後手吊り足挙げ縛り 大手札五枚一組 略号△うら▽ 五〇〇円</p> <p>東浦ひかる</p> <p>二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号△うり▽ 五〇〇円</p> <p>東浦ひかる</p> <p>足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号△うる▽ 五〇〇円</p> <p>東浦ひかる</p>	<p>生理帯着用の責め 大手札五枚一組 略号△はん▽ 五〇〇円</p> <p>東浦ひかる</p> <p>両手吊りにもかく女 大手札二枚一組 略号△むさ▽ 三〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>後手吊りのもたえ 大手札四枚一組 略号△むれ▽ 五〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>強烈縛りにうめく女 大手札五枚一組 略号△むそ▽ 六〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>顔を凌辱される女 大手札四枚一組 略号△むよ▽ 五〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>後手柱宙浮き縛り 大手札二枚一組 略号△むか▽ 三〇〇円</p> <p>木村 洋子</p> <p>大の字縛り逆さ吊り 大手札二枚一組 略号△むの▽ 三〇〇円</p> <p>増田みゆき</p> <p>エビ責めに泣く女 大手札四枚一組 略号△やこ▽ 五〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>股間首縄縦縛り 大手札三枚一組 略号△やひ▽ 四〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>後手首足首連結縛り 大手札三枚一組 略号△やせ▽ 四〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>淫らなる開股縛り 大手札三枚一組 略号△やく▽ 四〇〇円</p> <p>一宮百合子</p> <p>縄目に悶える裸身 大手札三枚一組 略号△やく▽ 四〇〇円</p> <p>一宮百合子</p>
--	---	--



## 〔最近撮影新趣向分譲品〕

極鮮明印画紙焼付写真

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
美木乃々子 略号 (ぬに)

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組 略号 五〇〇円  
美木乃々子 略号 (ぬへ)

真紅腰巻着用縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
美木乃々子 略号 (ぬち)

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 略号 三〇〇円  
大塚 啓子 略号 (つめ)

柱縛り全裸晒し

大手札五枚一組 略号 五〇〇円  
大塚 啓子 略号 (つま)

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
大塚 啓子 略号 (つも)

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組 略号 三〇〇円  
東浦ひかる 略号 (さは)

柱抱擁全身厳重縛り

大手札二枚一組 略号 三〇〇円  
東浦ひかる 略号 (さけ)

足挙げ全裸正面縛り

大手札二枚一組 略号 三〇〇円  
東浦ひかる 略号 (さこ)

柱縛り臀部晒し

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
東浦ひかる 略号 (さく)

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
東浦ひかる 略号 (さき)

鼻腔煙草挿し責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
美木乃々子 略号 (ぬと)

鼻責めのアップ

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
美木乃々子 略号 (ぬは)

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組 略号 八〇〇円  
美木乃々子 略号 (ぬほ)

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組 略号 三〇〇円  
木村 洋子 略号 (つほ)

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組 略号 三〇〇円  
木村 洋子 略号 (つふ)

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
木村 洋子 略号 (さひ)

全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
木村 洋子 略号 (さふ)

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
山原 清子 略号 (いら)

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
山原 清子 略号 (いさ)

凄艶乳房責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
四方 清美 略号 (きよ)

哀婉美貌女囚独居

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
柳 初子 略号 (はつ)

両手吊りの美女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
絹川 文代 略号 (けい)

一本棒宙縛り晒し

大手札五枚一組 略号 五〇〇円  
東浦ひかる 略号 (らま)

猿轡豊満をくびる

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
東浦ひかる 略号 (らむ)

全裸の立柱しぼり

大手三枚一組 略号 三〇〇円  
東浦ひかる 略号 (らめ)

縄股くぐり綱渡り

大手札五枚一組 略号 五〇〇円  
木村 洋子 略号 (らち)

首縄つなぎ引直し

大手札五枚一組 略号 五〇〇円  
大村 洋子 略号 (らぬ)

股間縛り引直し

大手札五枚一組 略号 五〇〇円  
木村 洋子 略号 (らる)

雁字搦目吊り上げ

大手札二枚一組 略号 三〇〇円  
木村 洋子 略号 (らお)

全裸椅子開股責め

大手札五枚一組 略号 五〇〇円  
山原 清子 略号 (けな)

全裸後手強烈縛り

大手札五枚一組 略号 五〇〇円  
山原 清子 略号 (けの)

強烈縛り悶悦姿態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
刑部 典子 略号 (けそ)

黒禪着用猿ぐつわ縛り

大手札五枚一組 略号 五〇〇円  
刑部 典子 略号 (けた)

強烈海老縛りの苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚 啓子 略号 (えふ)

乳枷貞操帯着用

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
山原 清子 略号 (もや)

落ちた下着と後手吊り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
東浦ひかる 略号 (ろよ)

浴槽内荒縄強烈縛り折檻

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
山原 清子 略号 (ろる)

二女をいじめる啓子

大手札十枚一組 略号 一二〇〇円  
東浦、木村、大塚 略号 (きい)

股裂きと逆さ吊り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚、東浦、木村 略号 (きう)

膨大な臀部責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円  
東浦ひかる 略号 (なに)

口中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚、東浦、木村 略号 (きお)

猿ぐつわのいたふり

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚、東浦、木村 略号 (きさ)

天然色写真最近作

〔新人モデル新版分譲品〕

双胎臨月蛙腹写真

大手札六枚一組 略号「れや」  
増田みゆき

双胎臨月腹強烈縛

大手札六枚一組 略号「れゆ」  
増田みゆき

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号「れえ」  
増田みゆき

股間縛り開股姿態

大手札三枚一組 略号「れよ」  
中河 恵子

羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 略号「れに」  
中河 恵子

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号「れぬ」  
中河 恵子

立縛りにあう裸女

大手札三枚一組 略号「れね」  
木村 洋子

開股された股間縛

大手札三枚一組 略号「れの」  
木村 洋子

豆絞りの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号「れむ」  
木村 洋子

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」  
大島 照代

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」  
大島 照代

縄目にもだえる女

大手札四枚一組 略号「そあ」  
大島 照代

強烈後手縛の狂態

大手札四枚一組 略号「そき」  
大島 照代

牝犬と奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」  
大島 照代

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」  
中河 恵子

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 略号「そな」  
中河 恵子

八の字開股羞恥責

大手札四枚一組 略号「そか」  
中河 恵子

菱縄の全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」  
中河 恵子

〔今月の新版分譲品案内〕

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号「ねる」  
中河 恵子

逆エビ責手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」  
中河 恵子

竹棒開股強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねく」  
中河 恵子

鼻責めと鼻孔大写真

大手札三枚一組 略号「ねけ」  
中河 恵子

首縄後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」  
中河 恵子

逆エビに痛める手

大手札三枚一組 略号「ねそ」  
大島 照代

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」  
中河 恵子

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」  
中河 恵子

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」  
大島 照代

いやが上にも両手首は挙がる。

全裸開股膝頭縛り

中河 恵子 略号「ねさ」  
高小手に縛った後手の縄を思

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」  
中河 恵子

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」  
大島 照代

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」  
大島 照代

逆エビに痛める手

大手札三枚一組 略号「ねそ」  
大島 照代

逆エビに痛める手

大手札三枚一組 略号「ねそ」  
大島 照代

逆エビに痛める手

大手札三枚一組 略号「ねそ」  
大島 照代

逆エビに痛める手

大手札三枚一組 略号「ねそ」  
大島 照代

逆エビに痛める手

大手札三枚一組 略号「ねそ」  
大島 照代



サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

## 増刊 花と蛇

《小説・絵画》

## 特集号

直接お申込みを 定価五〇〇円 略号〔花と蛇〕

四馬孝画 「花と蛇」 テーマ画集 十六葉

1、2、3、4、5、6、7、8、  
 逆エビ曲げられて弄ばれる女体  
 水を顔面に浴びせかける男  
 汚水と薬品の洗禮を受ける女  
 いちじく浣腸を施される女  
 浣腸とオシメカバの羞恥  
 ガラス製イルリガーの浣腸器  
 強烈なイルリガーの浣腸器

9、10、11、12、13、14、15、16、  
 尻打ちの痛さに泣き喚く女体  
 片足吊りに狂いまわる女体  
 女体滑車吊りの準備万端完了  
 お灸責めに汗を流す女体  
 トイレで排泄の強要をされる女  
 後手縛りで宙ぶらりんの女体  
 美女の背の中を黒い管  
 グリセリン浣腸液を注ぐ女体

## 団鬼六作 長篇小説 花と蛇 内容見出し一覧

第一章 密室の秘密ショー  
 狼の批評会  
 洗面器  
 第二章 脱走の失敗  
 美津子の脱走  
 望み破れて  
 絶望の涙  
 第三章 悪魔と鬼女の饗宴  
 悪魔の二次会  
 狂魔の静子夫人  
 第四章 鬼女の計画  
 鬼女の計画  
 第五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十一章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十二章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十三章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十四章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第十九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十一章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十二章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十三章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十四章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第二十九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十一章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十二章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十三章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十四章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第三十九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十一章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十二章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十三章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十四章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第四十九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十一章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十二章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十三章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十四章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第五十九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十一章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十二章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十三章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十四章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第六十九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十一章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十二章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十三章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十四章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第七十九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十一章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十二章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十三章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十四章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第八十九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十一章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十二章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十三章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十四章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十五章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十六章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十七章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十八章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第九十九章 美津子の脱走  
 美津子の脱走  
 第一百章 美津子の脱走  
 美津子の脱走

第十六章 落花無残の修羅場  
 白いコンビ  
 バラの肥料  
 開幕準備  
 第十七章 淫らな美女の調教  
 嵐のあと  
 二人の花形  
 美女合戦  
 第十八章 すさまじいショー  
 変身  
 密談  
 舌と唇  
 第十九章 汚水にまみれた宝石  
 流血  
 猿の檻  
 舞台衣裳  
 スターの心得  
 バラ夫人  
 第二十章 華々しき美女の屈伏  
 一難去って  
 酔態  
 身体検査  
 第二十一章 対峙する  
 美女と美女  
 嵐に立つ令嬢  
 美女対峙  
 悲しき説得  
 調教開始  
 第二十二章 あくどい陥穽  
 修羅図  
 失心する小夜子  
 悪の部屋  
 第二十三章 羞恥図絵の展開  
 復讐の生贄  
 汚辱に泣く令嬢  
 小夜子の屈辱

女体の悲しさ  
 美しいニューフェイス  
 第八章 涙の宣誓文  
 美女と木馬  
 毒婦の恋  
 嵐に立つ小夜子  
 第九章 恐怖の逆転劇  
 悪魔の相談  
 恐ろしい計画  
 千代夫人と悪徳弁護士  
 静子夫人の慟哭  
 第十章 奇妙な三々九度  
 鬼女の嬌声  
 地獄の花嫁  
 第十一章 飼育される白い動物  
 美しき敗北者  
 プレイ開始  
 白指  
 第十二章 悪魔と悪女の悪業  
 恐ろしい仕事  
 全身美容  
 悪魔の寝室  
 第十三章 屈辱の地獄図絵  
 猫とねずみ  
 強迫  
 侵入者  
 第十四章 逃走の恐怖と失敗  
 風前の灯  
 再教育  
 京子の号泣  
 勝利に酔う悪魔  
 第十五章 悪魔の残忍な所業  
 朝の酒  
 白い酒樽  
 ガラスの尻尾



貴誌愈々御隆昌の段お慶び申し上げます。本誌を手にするや、本誌の、好きな作者のもの「痴人の糧」「カメラ・ルポ」「カメラ・ハント」等を一気に読み次に新しい分譲品案内を見ますのが私の奇クを扱う方法です。天然色のフォトの分譲を始められて始めて待望の股間縛りがやっと出ましたね。中河恵子さんという美人のモデルが一枚加ったことは私達ファンにとって、又楽しみが一つふえたというものです。今後も、カラー作品

で美女の羞恥責めの極致「股間縛り」(猿ぐつわは不可欠)を製作して下さい。三月号の読者通信欄に私の一文が活字になったのに驚きました。折角の御好意ですから今後貴誌の発展に微力をつくしたいと思います。(冬木雄三)

何んと素晴らしい、奇クの三月号の表紙だろうか。全く面目を一新したといつてよい。落ちついた色の調和、配色のうまさ、品のある淡いグリーンのパック、銀粉の題字、黒色で描かれた四馬孝先生独壇上の美女縛り、悪魔のような男の鼻責めしている場面。黄色の色刷りで年号を引き立たせて、まるでシネスコのカラー版を見ているような感じを受ける。映画マニヤは絵までシネマスコープをみてるように感じるから困ったものだ。印刷技術はホントに素晴らしい。四馬孝先生の美女の鼻責めを見ていると、私の方まで鼻が痛くなってくるような錯覚をおこす。今後共一層の御活躍が望まれる。

(神奈川・春風春太郎)

愛読者の皆様お元気ですか。私様と同じように奇クの発展を心より祈るものであります。奇クを愛

読するようになってから三年になります。毎月二回は、書店に足を運び雑誌の発行を待ちわびています。夜ともなれば、奇クの読書に自分の悩みを解消してくれる思いで、思いきり空想の世界へと羽を伸べてくれます。真に私の英気を養ってくれます。私の欲求不満を一番に満足させてくれるのは女性への縛りです。四月号に載っておりました大阪の神崎文子さん、お便りを差し上げる失礼をお許し下さい。僕も貴女と同じ愛読者の一人です。貴女と同じように話をすることも下手です。美男子ではありません。奇クを毎月見るようになってから、貴女のような人にお会いしたいと、常々考えていました。もし貴女と交際できますれば、縛りいじめてみたいし、貴女の心ゆくまで、責めてさしあげます。私は徳島で母の経営する食堂の手伝いをしております。

(徳島市・白井勝)

中河恵子様、貴女の読者通信を楽しく拝見しまして或る種の共感をおぼえ早速ペンをとりました。小生は、奇クの愛読者になりました。六年になる三十才の男性です。「花と蛇」のヒロイン静子のように

な女性にひかれ、そういう弱々しい女性を思いきり弄び羞かしめてみたいと思います。貴女と一度お会いしたいと思っております。失礼とは存じますが、生田区元町局止で御一報下さいます様お願い致します。

(神戸・山田英二)

貴誌を読み初めて半年になりました。もう今では毎号が待ち遠しくなりました。さて今度手紙を出しましたのは、僕の願いをきいてほしいのです。願いたいのは、私はMの男性だと思っていますので、毎夜キクを読むたびに思うのです。女性が一人或いは二人と集まって、僕をいきなり縛り上げ、さるぐつわをし、口にはバンティを無理矢理押し込むのです。又僕は衣服をはぎとられ、はずかしめられるのです。そして今度は足を八の字に開かせられて浣腸を施されるのです。そして女性は、そんな僕の姿をじっと眺めているのです。以上の様なことを実現してくれればと思います。筆をとった次第です。どうか僕を責めたいと思う婦人又はキクの編集者(女性)の方でも結構です。紹介して下さい。不真面目な事ではありません。本当



の僕の心を包みかくさず言っているのです。なお僕は当年二十三才です。  
(東京・小橋進)

私は名古屋に住む二十九才になる独身の男子です。四月号の奇クサロンに花原竜子様の奴隷募集の記事が載っているのを拝見し是非応募したく存じます。学生時代には或る上流夫人から色々とSMプレイを教えられました。今では相手もなく淋しく過しているところ。雑誌に月ギメ奴隷規約が出ていました。この件厳守致します。故、諸事についてご連絡下さい。  
(名古屋・紐野隆)

初めてお便り致します。私は三十七才になる農夫です。毎年冬になると、東京に出稼ぎに来ています。五、六年前に本屋で貴誌を見つけてからファンとなり、貴誌を読めるのが出稼ぎの一つのたのしみにもなりました。(田舎の本屋には売っておりませんから) 私はMなのです。グラマーな美人の奴隷として、あらゆる奉仕をさせられ、又ムチ以外のお仕置をしてくれる女王様がこの世におられたらと、いつも思っております。私はこれといった特技もなにもありませんが、若し女王様に飼ってもらえるのでしたら、便所掃除でも庭の手入れでも汚ないことや重労働でしたら何んでもやります。夜は物置きの間か犬小屋にでも寝かせて下さい。時々女王様からいじめたいただけで私は満足して一冬働きます。田舎には女房がおりますが田の仕事をしていますので食うには困りません。どうかこんな私を一度飼育してみてくださいませんか。  
(東京・沼沢春夫)

大阪府の神崎文子様。本誌四月号にて、貴女のお便り拝見致しました。そして貴女の文に共感を覚え、筆を取らせて頂きました。小生奇クを愛読してからまだ三年たらずでございしますが、私は出来る限り貴女を縛り、責め、喜ばせてあげたく存じます。私も話しはへ

たですが出来る限り相談しあってプレイをやってみませんか。勇気を出してお出下さい。小生は奇クを読みいろいろと想像する機会はありませんが、自己を満足することが出来ずに終ってしまいました。やっと良い機会にめぐまれたと喜んでおります。私は兄の会社を手伝っていますので、いつでも暇を作れます。小生、一六七センチ(身長)体重五七、年令二三才です。五月十日(水)午前十一時、ユーゴー書店(天王寺)の前に来て下さいませんか。目印に週刊誌を右手に丸めて持ってきて下さい。ぜひ、お出下さいますようお願いいたします。もし、お出で下されば、これに過ぎる幸福はないと思います。(大阪・中川義行)

奇ク41年11月号に掲載されたマニヤメモ「映画その他雑感」黒井珍平氏の記事で紹介された鬼才、若松監督の「裏切りの季節」が、先日、市内の某館で上映されたので、兼ねてより、手ぐすねひいていた私は早速、馳けつけてみました。結果は聞きしに勝る傑作で、私は冒頭から終末までそれこそ固唾をのむ思いで堪能しました。即ち全篇これSMシーンの連続で、

谷口朱里扮する売春婦が全裸にむかれ鞭打たれ絶叫し、挙句に豊満な裸身を両手吊りにされるといったシーンが次々と展開し、私は近來にないほどの満足感と、激しいエクスタシーを全身に感じたことでした。尚、同記事によれば、若松監督の別作に「胎児が密猟する時」という正に決定版ともいうべき、SM映画があり、批評家よりは絶賛を博しているそうですが、未だに一般には陽の目を見ないとか。垂涎おく能わざるとは、このことでしょうか。なんとしても私はこの「胎児……」の一作を見たいものと切に念願しています。皆さんはどうお考えですか。  
(仙台市・SM映画生)

神崎文子様。貴女様の御希望を四月号の読者通信にて拝見致し、早速ペンを取った次第でご座居ます。私は当誌が発行された旧刊時代からの読者にして分譲品も今では百八十五枚も購入保存致し、常に貴の研究を、致して居る者ですが、実際には二回程度女性を裸体にして、縛り責めた経験は有りませんが、大変彼女達も満足して居りましたが、既に此の世には居りません。其の後此の様な趣味のある女

## ◎代理部分譲品総目録◎ 予約受付

分譲品満載の豪華な目録を只今の上、御予約下されば、完成次第作成中ですので、切手五十円同封直ちにお送りします。

性をさがして居りましたが丁度貴女の御申出があり大変嬉しく思います。私は貴女の云われる器量とか化粧下手とかは問題でなく、ただ貴女のご希望をかなえられ満足して戴き、今後御交際願えれば幸いです。互に秘密は固く守りプレイをしようでは有りませんか。私も四十才をすぎまして今は、重要な地位に居る者ですから御信用下さい。では来る三月三十日午前十時に国鉄天王寺駅南出口の地下鉄入口前にてダブル服に手にはスポーツ紙風呂敷を持って居りますからきつとお越し下さい。今より貴女とのプレイを楽しみにして待つて居ります。出来れば貴女も手にスポーツ紙を持っていて下ればすぐわかるのですが、では会う日を楽しみに。尚晴雨にかかわらず待つて居ります。(大阪府・山本生)

○ 小生極度のマゾアアンにて奇くは既に昭和二十六、七年頃の古いものより昭和三十年頃の白い表紙時代から現在迄ずっと愛読して参りました。もっとも以前は書店にて直接買うのがはずかしく古本屋のかたすみで二三時間位ねばって立ち読みにふけたものでした。サジスチン春日ルミ嬢の御活躍の

頃であり又、長瀬昭子様、三隅千恵子様、たか野めぐみ様等の体験記等が、誌上をにぎわした頃でした。又同志沼正三氏、姫島痴人氏等懐しいです。当時はまだ分譲Mフォト等はあまりなく、ただ誌上にて春日ルミ嬢のフォトとか、長瀬、三隅両嬢の体験記等をみたり読んだりして春日嬢に責められていたり、長瀬、三隅両嬢に股責めされて空想にふけたものでした。今や奇くの発展には当時とは格段の飛躍を遂げられ今でこそグラビヤは廃止にはなりましたが、小生等の目を見張らせる様なサジスチン絹川文代嬢、大塚啓子嬢を加えて刺青姿もあでやかな名実共にナンバーワン山原清子嬢、又最近メキメキと台頭されました花田沙登子嬢等の出現により小生等日夜空想にあふけていた長い間の夢を現実ただ最上の喜びとするところであります。加えて往年の滝れい子先生の麗筆にとつて代りマゾ画の鬼才春川ナミオ先生の常に豊満な女性の両太股に顔をほさまれたいと云う見はてぬ夢を画面に托された傑作等思わず窒息しそうな我々マ

増田みゆき双胎臨月蛙腹

大手札印画紙極鮮明焼付

- |                                   |                                    |                                   |                                   |                                    |                                   |                                   |                                   |                                   |                                    |                                    |                                   |                                     |                                     |                                   |                                    |                                    |                                       |                                   |
|-----------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------|
| 〔双胎臨月蛙腹鑑賞〕<br>増田みゆき 略号ハリけ<br>五〇〇円 | 〔明瞭な臨月の妊娠線〕<br>増田みゆき 略号ハリき<br>五〇〇円 | 〔全裸の臨月腹鑑賞〕<br>増田みゆき 略号ハリス<br>五〇〇円 | 〔双胎臨月腹の威容〕<br>増田みゆき 略号ハリて<br>五〇〇円 | 〔垂れた太鼓腹の陳列〕<br>増田みゆき 略号ハリな<br>五〇〇円 | 〔臨月蛙腹のアップ〕<br>増田みゆき 略号ハリに<br>五〇〇円 | 〔便々たる臨月蛙腹〕<br>増田みゆき 略号ハリに<br>五〇〇円 | 〔蛙腹に腹帯をする〕<br>増田みゆき 略号ハリに<br>五〇〇円 | 〔誇示する双生児腹〕<br>増田みゆき 略号ハリま<br>五〇〇円 | 〔仰臥する臨月の蛙腹〕<br>増田みゆき 略号ハリね<br>五〇〇円 | 〔臨月腹の股間しばり〕<br>増田みゆき 略号ハリぬ<br>五〇〇円 | 〔亀甲縛りの妊孕美〕<br>増田みゆき 略号ハリた<br>五〇〇円 | 〔臨月後手縛り引き直し〕<br>増田みゆき 略号ハリし<br>五〇〇円 | 〔臨月の乳房縛りて弄る〕<br>増田みゆき 略号ハリさ<br>五〇〇円 | 〔乳房緊縛の臨月腹〕<br>増田みゆき 略号ハリち<br>五〇〇円 | 〔浣腸される臨月妊婦〕<br>増田みゆき 略号ハリひ<br>四〇〇円 | 〔双胎の臨月剥玉子腹〕<br>増田みゆき 略号ハリふ<br>五〇〇円 | 〔臨月妊婦豆絞りの猿ぐつわ〕<br>増田みゆき 略号ハリの<br>五〇〇円 | 〔臨月腹に革具装着〕<br>増田みゆき 略号ハリむ<br>五〇〇円 |
|-----------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------|

ニア待望の素晴らしい面集が出るに及んで遂に奇くは小生にとつてはなくてはならないものとなりました。小生現在股責フォトを集めて

おりますが何れも女王様に馬乗り組敷かれ両太股の間に顔をほさまれているもの、首の股責め、お尻の臭いがかがされているもの等



ですが、この外尻敷フォトも持つていますがこれ等は小生のみはてぬ夢のイメージとはほど遠いものであります。小生等マゾ最高の夢は豊満な女性のふくよかな両太股に顔をはさまれて股の下に埋もりたいのであります。仰向けにころがされたM男の首から口もとのあたりでドッカと馬乗りに跨り真白いパンティにつつまれたやわ肌にてピッタリとさるぐつわをかませM男の両ほほをそのムッチリとしたふくよかな両太股にてギョッとほさみ込み「さあどうだ、うれしか」とばかり心地よげに見下し

### 〔最新撮影Mフォト〕

パンプスの下にあえぐ

大手札十枚一組 二〇〇〇円

新版Mフォト 略号ハわそV

首の股責め十態

大手札十枚一組 二〇〇〇円

新版Mフォト 略号ハわよV

緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 二〇〇〇円

新版Mフォト 略号ハわたV

臀部の下にうごめく

大手札十枚一組 二〇〇〇円

新版Mフォト 略号ハわれV

ておられる女王様。女王様の両太股の間から眼だけを白黒させ口をパクパクさせ乍らも、うっとりとして見上げているM男。……本年こそは絹川女王様、大塚女王様、小原女王様、花田女王様等により是非共小生等見はてぬ最高の夢を実現させて下さい。又春川ナミオ先生におかれましては従来の「豊満な女性の尻の下に埋れて法悦に泣く」から「豊満な女性の両太股にほさまれ股の下に埋れて法悦に泣く」に発展していただきます様お願い致します。奇クの今後のMフォトの企画並に春川先生のM画に期待致しております。

(米子のマゾ男・野坂義孝)

読者通信に始めてお便りする一読者です。三月号、東京・鈴木美津子様御夫婦に今日はお願いがありました。ペンを握りました。文面を拝見しプレイには相当のベテラン(?)と推察しました。私、女性の縛りにはひどく興味を持って居りますが未だ不幸にして一度もプレイのけいけんがありません。ほんとの初心者ですがもしよろしければ御指導願えたらと厚顔しいお願いをする訳です。写真は少しばかりやりました。現在のカメラ

はペンタックスとペンFを持っています。引伸も自分でやれます。勤務先は国電お茶の水駅に近い所です。から御連絡下されば、平日でも指定された場所にお伺い出来ます。どこかでお逢いし、面接試験(?)でも受けさせて戴けないでしょうか?、何卒よろしく願います。

(埼玉・中一美)

毎月楽しく貴誌を拝見して居ります。私は以前、一、二度此の通信欄に寄稿させて頂きました。紅かほるでござります。当年四十二才になる未亡人です。実は以前当方に居りましたお手伝いの方、もちろん奇クで知り合ったやはり私と同じ未亡人の方でした。都合で田舎へ帰郷されて困って居ります。そこで勝手なお願ひなのですが、あなたが、私の御手伝いして下さい。方がいられたいらせひお願い致したく、でも次に記した条件に合った方でない……もうお分りと思ひますが奇ク愛読者でマニアの方です。私の希望は、その条件です。第一は浣腸マニアである事と申しますのは、私がおはすかしいけど大のマニアです。第二、鼻責め、股間責め、下着マニアである事なのです。今迄は、お秀さんと

云うお手伝いの方と行った一日のスケジュールは、朝起るとまず食事前の浣腸を行いました。もちろんお互いにガラス三〇CCで二本ずつ注入のまま朝食、そしてオムツによる排泄(紙オシメ使用)常に特殊ショーツ着用。時に鼻せめ洗たくバサミ、ダッシュメン素手によるコスリ上げ、下から上へ手の平でこすり上げる。夜は、ショーツ検査「汚れぐわいの臭い」「ショーツ交換」ショーツマスクの研究、奇クの水の中花の様にお互いにプレイを行う。こんな私に協力して下さいる方は、ぜひ共御連絡下さい。云い遅れましたが、お給金は三食付で四〇、〇〇〇円位です。私は同性しか興味がないので私の希望では四十五才と五十二才位までの未亡人の方が出来れば、又住込です。身寄りのない方で永く御一緒に生活が出来れば幸せです。仕事は私の経営するアパート一〇室のそうじ位です。簡単です。下が一部タバコ店をして居りまして私は店番をしながら貴女と色々話をしている程です。又文通だけでも女性の方御願ひ致します。それに下着交換もせひ、当方には現在使用済、汚れたままの特製ショーツが十二、三枚用意してあります。

中河恵子さん、デートしませんか。私は血統正しいSです？、と申しますのは、父もやはりSでKの読者であつたらしく、私は中学の頃から父の隠していたKKをひそかに読むチャンスにめぐまれておりました。ですから約十年、KKの休刊時をのぞいて毎月読んでおります。私も貴女と同様（失礼）手のつけられぬイジッパリのワンパクで今も両親の反対を押し

鈴木美津子様。私も永年の奇ク  
の愛読者ですが、未だ複数のプレ  
ーの経験はありませんので、貴女  
の通信を拝見して、大いに心動か  
されました。よろしかったら是非  
プレーに加えていただきたくお便  
り申上げます。目で見えるSMとい  
う言葉がありました。が、一時のグ

一宮百合子 略号△るや▽



ラビア全盛時代は、大いに楽しませてもらいました。最近、私の好みの緊縛写真の素晴らしいのが載り、毎号、楽しく見ております。特に二月号の「カメラハント」や

「この女」とは素晴らしく、益々奇巧を手離すことが出来ない気持ちです。私の好みは、エビ縛りや、空気浣腸等で自由を失った女性のポーズは最高の魅力です。私の妻はSMに関心がなく、御夫婦でプレーを、楽しまれていたのは、実にうらやましい限りです。もし、私のみでも加えていただければ、あらゆる協力をさせていただきます。プレーは秘密を絶体を守らなければなりません。幸いにして、お目に掛かれるるならば身分証明書等で信用していただけたらと思います。

(東京都千代田区・吉井作一郎)

始めてお便り致します。いつも貴誌を楽しく愛読させて頂いて居りますが、編集部の皆様始め読者通信の諸兄姉、お元気でお過しの事と存じます。扱私は浣腸に非常に興味があり毎月奇巧が発売されますとむさぼる様に浣腸記事を読み、どなたかと浣腸プレイをするのを空想して居ります。大変厚か

ましいお願いですがどなたか女性の方で母親又は姉の様に私を幼年のころの様に浣腸して下さい方いらっしやらないでしょうか？そうして頂ければどんなに素晴らしいかと思ひます。こんな私の希望をかなえて下さる方は是非お便りを願ひ上げます。相手になつて下さる方がお望みならば浣腸でも乳房責、ムチ打ちでも何でも御希望にそう様に致します。又浣腸に興味の有る方、是非お便り下さい。又東京の鈴木美津子様、こんな私でもいかがでしょうか。切に先輩諸兄の御指導の程願ひます。

(東京・岡田利明)

「水中花」(芳野眉美氏) 11月号に次のような部分が有りました。

「……あわててかくした。そうではなくても次郎の年頃は年上の女性に弱いのである」なぜこの年頃が年上の女性に弱いのか、SMを通じて考えてみました。たいていの場合、彼らの年上の人は何かにつけ先輩です。女性にしる先輩は先輩なのです。いわゆる女性とても社会的に優位に位する場合があります。ですが一旦プレイとなると形勢は逆転します。もっとも女性がMの場合だけです。その尊敬さ

れるべき先輩の女性は青二才の彼らの奴隷となるのです。奴隷です。から辱かしい事でも何でも彼の言う通りにせねばなりません。普通社会で彼に仕事を教えてやったり、アドバイスしていた威厳ある彼女は、首に犬の首輪、鎖をつけられ、両手は前か後でくくられ、体毛をブロンドに染められ、命令に少しでも反抗の気配があると、色の辱しいおしおきを御主人様の気のすむまで受けなければならぬのです。そこにはプレイ以前の社会の先輩後輩はないのです。そこには汗、涙、涎にまみれて、ただひたすらに御主人様のオモチャとして、扱われる奴隷が居るのであります。そこで彼は尊敬すべき先輩を完全に征服する事になるのです。SMプレイは双方が対等で行われるのだと思いますが、プレイの中の形式にせよ、彼が御主人様で、優位に立った事には変りないのであります。彼は優位の入れかわりの満足感も味うのです。我流で二郎の年代の年上の女性に対する感じを書いたわけですが、これは私のみのひとりよがりだと思ひます。御批判下さい。それから熊本の高村初子様お手紙下さい。お友達になりました。

(広島市・竹井正)

熊本の高森初子さん。貴女の短歌を毎号興味深く拝見させて頂いて居ります。縛られた女の微妙な心理を実にうまく表現して居られるようで、もしかしたら経験が有りではないかと思う程です。今後もしどし新作を発表なさって下さい。私は女を縛ることに興味を持つようになってから約十五年になります。未だに実際に女を縛る機会には恵まれず、ただ本誌だけがその間の唯一の友だったわけだけ。しかし最近では奇巧を読むだけという一方通行だけでは、あきたらなくなって参りました。もし貴女と文通願えますならば幸甚です。私は三十六才、ある自家営業をやっております。高森さん以外の方でも、文通を御希望の方がございましたら、お便り下さい。お待ちしております。

(福岡県前原町高須・矢木周介)

私は貴誌の愛読者で毎月楽しみにして居ります。私は名古屋市内に住んでおりますが、オシメ、オシメカバー、浣腸などのファンが少なくないと思つておりました所、昨年八月号の上城由紀子様。又今年の三月号の水野しのぶ様が本誌に

お便りなさっていますので私も思い切って発表したい気持ちになりました。私は二年前、市内の丸栄デパートの特売場で赤ちゃんのゴムのオシメカバーを探し当て二枚買いました。そのオシメカバーと云うのは、かわいらしい花柄のついた布地にアメゴムを縫い合せたもので昔の古い赤ちゃんのオシメカバーです。赤ちゃんのオシメカバーですから、私にはとても合いませんので、何んとかして作り直すとして、二枚をまえと、うしろにして、またに当る部分を合せ切り取りミシンで縫いゴムのりではり合せて一枚続きするのです。横の所のホックが合わないで片側のホックを取り位置を変えようと、どうどホックが合うのです。そして前側に当るオシメカバーの紐を切りとると、とてもかわいらしい大きな赤ちゃんのゴムのオシメカバーが出来上ります。私はそれを愛用しておりました。古くなりましたが、ゴムのにおいが強く色もアメ色が強くなりピカピカしていて、そのにおいがとてもすてきです。赤ちゃんのゴムのオシメカバーを下にして、雪花模様のおシメをのせ、私のおしりに当てがいおシメを当て、そしてかわいらしいゴム

のオシメカバーを当て、そのむちっとした肌ざわり、冷い感じのゴムにふれ、ゴムのにおいをかぐと、とてもわくわく、ぞくぞくするのです。そして横のホックをポチン、ポチンとめ紐を結んでしまふと、昔私が母親にオシメやオシメカバーを当てがわれた赤ちゃんの頃を思い出し、うっとりとした最高の気持ちになります。しばらくすると、尿意をもよおして来るのをがましていくうちに、こらえ切れなくなつて、いつも私はオシメの中にもらしてしまふのです。私の恥しいこの切ない気持はわかってもらえなくて私は自分一人で遊びをしているのですが、上城由紀子様、水野しのぶ様、貴女達とお話したいと思ひますが浣腸についてはまだ一度も経験した事がありません、その他いろいろ、オシメカバー、浣腸、メンスバンドにつきまして、お話やらお気持ちを、お聞かせ下さい。

(名古屋市・牧和昭)

待ちに待った映画、「縄と乳房」を拝見しました。団先生の脚本によると、貴めの場面で、鼻をつまんだり耳を引っ張ったりと云うくだりがあるので「花と蛇」同

様大いに期待。鼻マニアの小生、耳に伝わる胸の鼓動もさとりれまじと、ギラギラした気持で画面に對したものでありますが、生憎、猿ぐつわに半面覆われている関係で被虐の全貌に接するを得ず些さかガッカリ致しました。矢張り恐いおじさんのプレッスもあつての事でしょう。然し他の映画の為し能わざる鼻責陶酔の世界を些さかでも、のぞかせて頂いた御努力(吾々には慈悲心とも思われる)には心から感謝致して居ります。「骨まで縛れ」と云う映画には鼻つまみの数分間がありまして、之も今の世の中では、至極満足と云わざるを得ませんでした。それにしてもKK誌に鼻責として載せられる記事はまことに寂しい。もっともっと記事なり写真なりが豊富に望ましい。但しマゾ的の男性の鼻責めは申訳ないが小生には醜怪としか写らないのです。美の破壊にジーンと痺れる恍惚の世界があるんです。キャリヤア三十年、職業を問はず、年令十八才より二十五才迄の標準美の婦人を手の届く範囲に於て、手掛けて参りました。顔面翻弄(鼻責めも勿論入ります)が)に関する記録も相当数コレクトしましたが、其の上に貴社の分

# 「新版Mフオト分譲」

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号 〇〇〇〇  
花田沙登子 略号 〇〇〇〇

兩足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号 八〇〇〇  
花田佐沙子 略号 〇〇〇〇

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 八〇〇〇  
花田沙登子 略号 〇〇〇〇

女の臀臭をかかす

大手札二枚一組 略号 六〇〇〇  
花田沙登子 略号 〇〇〇〇

足舐めの強制

大手札三枚一組 略号 八〇〇〇  
花田沙登子 略号 〇〇〇〇

女王様の牝犬調教

大手札八枚一組 略号 一五〇〇  
花田沙登子 略号 〇〇〇〇

譲写真も、殆んど参加して居ります。まだまだこの遍歴は続く事でしょう。そして因果な事には、之で満足と云う限界がなく、記録を収める為には常に其機会を狙っていると言ふ始末。殊に御誌と違ひ次から次に云う風に仲々好餌が得られない。ましてや縛りには余り興味なく、唯ひたすら華鼻、華眼華唇等の玩弄に目的があると云うのだから始末が悪い。其の点御誌の鼻責を、美を誇る相手に納得させる御苦心の程が偲ばれます。



どうぞせいぜい鼻責め其他の美貌  
玩弄の記事、又は写真を御発表下  
される事を御願ひします。尚同好  
の諸氏もどしどし心境を御洩し下  
され度い。被虐を楽しむ美女もあ  
りやなきや、之も伺いたいと思ひ  
ます。  
(東京・墨堤生)

一月号にヤコベッティと小森白  
と題して映画通信を書かれた南方  
純様。イタリヤと日本の残酷監督  
の比較を大変面白く拝見いたしま

### ☆傑作迫力Mフォト☆

二人の女性からの責め

山原清子外一名出演

男が屈伏するまで

大手札十二枚一組 三〇〇〇円  
略号(ふそ)

腎の下に呻吟する

大手札十二枚一組 三〇〇〇円  
略号(ふた)

二女の股責地獄にあえぐ

大手札十二枚一組 三〇〇〇円  
略号(ふぬ)

逆エビとムチ打ち

大手札十二枚一組 三〇〇〇円  
略号(ふち)

ムチで仕込むズベ公

大手札十枚一組 二五〇〇円  
略号(ふよ)

略号(ふよ)

した。本誌の読者にも此の方面の  
愛好家は割合少くて、記事に成る  
事もめづらしいので、今後共御投  
稿をお待ちいたします。名和弓雄  
著、拷問刑罰史のさしえに付いて  
の疑問を書いて居られました。が、  
映画の拷問刑罰史について名和氏  
自身が、今は無き雑誌裏窓誌昭和  
四十年一月号に名和氏の著書を原  
本として同名の映画が製作された  
いきさつを細々と書いて居られま  
す。その内容は要するに、名和氏

口中の汚水処理器

大手札九枚一組 二二〇〇円  
略号(ふり)

顔を玩弄する

大手札八枚一組 二〇〇〇円  
略号(ふわ)

豊満な二人の馬になる

大手札七枚一組 一八〇〇円  
略号(ふる)

腎臭をかがされる

大手札六枚一組 一六〇〇円  
略号(ふお)

口中に汚れた布を押し込む

大手札六枚一組 一六〇〇円  
略号(ふね)

縛り人形を踏みつける

大手札五枚一組 一四〇〇円  
略号(ふつ)

顔を素足で踏みつける

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
略号(ふな)

略号(ふな)

の拷問刑罰史を読んだ新東宝映画  
配給の並木社長が、小森白氏に同  
書の映画化を依頼し、小森氏が名  
和氏に面会して打合せをして、名  
和氏の協力を受けて撮影製作され  
たものです。ですから画面はさし  
えをそっくり忠実に再現したわけ  
です。又同書のさしえは大部分名  
和氏の構図を画家が画いたもので  
原典も名和家の伝書や明治以前の  
ものですから、著作権法上は、出  
典を書く必要は無いと思います。  
(東京・おもだか・しの)

○

中河恵子嬢へ。奇ク三月号にて  
始めて貴女の麗姿を拝見すると共  
に「春の花園に遊ぶ」を楽しく読  
ませて頂きました。団鬼六先生の  
「花と蛇」に魅せられて其の小説の  
中のヒロインに自分を置き換えて  
ストーリーの静子夫人か亦是京子  
嬢の如く多くのS男性に弄り差し  
められ骨の髄まで凌辱されるプレ  
イを実行してみたいと言われる勇  
気には全く感心しました。奇ク大  
分の愛読者は貴女の大胆な告白に  
驚き且つ熱狂的ファンとなられる  
事でしよう。私も亦御多聞にもれ  
ず貴女の信奉者としての名乗りを  
上げるにやぶさかでありません。  
だが一言申上げるならば其れはあ

く迄貴女の空想の中でのみ愉悦に  
したり得るものであって現実に移  
せば折角のすばらしい夢を打ちこ  
わしてしまうのではないでしょう  
か。仮に貴女の望まれる通り多数  
の自称S男性に暴虐の末凌辱され  
るとして其の人々がすべて演技を  
解しストーリー通りに鬼源であり  
川田、吉沢等になりきれれるもの  
ではありません。よし成り得るとし  
ても実際のプレイには相互の理解  
と自ら限定されたルールがあり其  
れ等を無視しての行動は単に雌雄  
の交尾でしかなくなるものです。  
そこには貴女のもともめるSMプレ  
イの愉びよりその何倍もの生臭い  
嫌悪と後悔が残るだけに止まるで  
しょう。然しながら私自身やはり  
鬼源なり吉沢の演技を行って見た  
い欲望は十二分にありますし亦、  
過去に於てそれに似た演出をやっ  
た経験もあります。貴女程の勇氣  
はなく一対一で、色々のアイデア  
をおりませてプレイを楽しんで見  
ました。だがやはりルールの限界  
だけは、自分流に守って居たつも  
りです。今私の体験より言える事  
は欲望には限界がなくどの様にす  
ばらしいプレイでも次の時点に於  
てはマンネリ化して色あせると共  
に、より強いプレイを望むと言う

きりのない事実です。中河恵子嬢の勇氣ある告白に敬意を表すると同時に最後にファンとして一言。世の男性(奇ク愛読者も含め)が女性にたまらない魅力を感じる瞬間は素っ裸の臍物迄さらした女体ではなくその過程に至る迄の女性らしい羞恥の瞬間である事をつけ加えておきます。今後の誌上での御活躍を祈ると共に読者通信を借りての文通を待つて居ます。

(鳥取県倉吉市・加茂幸夫)

神崎文子様。本誌四月号誌上に、貴女のお便りを拝見し勇氣をふるって、ペンをとりました。私は、今年24才の春を迎える独身の青年です。貴女の文章を読んで、私は、深い共感を覚えました。私も大阪に出て九年目、その間、夜間の高校も卒業致しましたが、故郷を遠く離れた者にとって、孤独な寮生活は、体験した者のみが知る味気なさではないでしょうか? 幸い私は、先輩や、良き師に恵まれ、どうやら道はずさずに、生きて来ることが出来ました。現在はせまい乍ら家を借り、田舎から出て来た母と二人で、元気にくらしております。そんな過ぎし日の数々を忘れ得ないだけに、本日、

貴女のお便りに接したことは、大きな喜びでした。まして、そんな貴女が、アブの世界に興味を持つ方だとは……。私も、本誌は、数年来の読者です。やはり貴女と同じく、出発点は、古本屋でした。当時フロアに、チョイとのぞいた店頭で、パラパと立ち読みしたのが、コトの始まりでした。それがよかったのか、悪かったのか? 以来、毎月待ちかねて、買っておりました。が昨年母が上阪してから、それも不可能になりました。貴女は、御自分の容姿のことを必要以上に、気になさっているようですが、そんなことは、問題ではありません。もし、貴女が、私より年長の方だったら、お許し下さい。大変生意気なようですが、私はお便りの文面から、貴女は、現在の環境のなかでも、せいっぱい、マジメに生きようと努力している、マシメに生きようと努力している、マシメに生きようと思えまして。キットそうでしょう。そんな貴女にとって容姿など、全然問題には、ならないと思います。その日、その日を真剣に生きて、マジメに努力している女性は、何にもまして美しいと、私は強く信じています。どうか、以後そのようなことに心をうばわれず、御自分

身の人生を生きていって下さるよう、貴女の文章に対して、きつと数多くの呼びかけが、殺到するでしょう。その中で、私の文章に目をとめられた時、きつと、貴女は24才という年令と、独身ということに、不要な、警戒をなさると思っています。それは、よくわかるし、当然だと思えます。しかし、そのことについて、ここで何を書いて、も、何の役にも立ちますまい。私は、ある会社に(大阪市北区)勤めていますが、それ以上は、公表できません。カンペンして下さい。許されれば、貴女宛の私信に、くわしく記したいと思えます。私は貴女と、同じ体験を経てきた若者の一人です。願わくば、あの日、あの頃のことを、方言に悩んだことや、母のにぎり飯が恋しくて、夜遅く、冷飯を手に、握った夜のことなど、語り合いませんか? もし、お返事がいただけるなら、手間を省く意味で、貴女に、郵便の届く様にして下されば幸いです。現在のお勤めはどうですか? 楽しいこともあるでしょう? どんな仕事だ? 楽しい面を見つけて、働かなきゃ勤まりませんからね。辛いことも、悲しいことも、吹き飛ばしてがんばって下さい。最後

に、貴女に、私が大切にしている言葉を送ります。朝の来ない夜はない。"それでは、希望に輝く朝を信じて、力いっぱいがんばって下さい。私がんばります。"

(兵庫県・谷口義行)

下着マニアの中でも日本古来のお腰を愛する読者も多いと思う。本誌にはよくお腰をあつかった小説やコントを見るが、いいものがある。小説で富士春波氏の毒婦のお腰、読物で牧高志氏のもの、その他通信欄でも度々見て楽しいものである。お腰党のどなたか、古い洗いざらしのものでいい、赤のお腰をゆずってほしい、それも一度でも女性の肌にあふれたものが価値がある、なければ何でもよろしく、ゆずって下さる方は適宜な連絡方法で至急、本欄でお知らせを乞う。

(東京・志津三郎)

奇クファンの皆様、お元気ですか? 私は、奇クを愛読するようになって、八年目をむかえますが、今回始めて、皆様方にお便りします。私は、本誌を愛読しているうちに、知らず知らず、私の心の中に、マゾが芽生えてきて、どうにもならず、サドの女性の方にお呼



びかけ致します。神戸近辺にお住まいのお方で、三十才位までの奥様、お嬢様、私が完全な奴隷になりきるまで、私の御主人になり飼育していただけないでしょうか？

申しおくれましたが、私は四十才で、五尺足らずの小男です。私の性格は内気で、おとなしく、女性に飼育されるには好条件かと思えます。無論私の御主人には、女王

様と仰ぎ奉り足下に、ひれ伏します。如何なる御命令にも服従致します。私は、サラリーマンです。から、毎週土曜日、日曜日が都合です。土曜日であれば午後八時以

後、日曜日の午後八時まで、此の時間でしたら何時でも結構です。私を役役に、雑役に、お使い下さい。どんな事でも致します。女王様の退屈なされた時には、私を玩具にして弄んで下さい。私を犬にして芸仕込みもして下さい。又、道具としては、踏み台、椅子代りの人間便器、座布団代りに、又女王様の美容体操の一助として、人間馬に跨がり、部屋中を走らせ、馬が、くたばれば、お仕置きとして、顔面踏みつけ、股責め、其の他、女王様のお好みの方法で、私を責めて、責めて、責めぬき料理して下さい。どんな汚物でも、有難く御馳走になります。どんな残酷な行為、屈辱でも甘んじてお受け致しますが、身体に傷痕を残すようなムチ責めは、御かんべん下さい。お一人で奴隷を飼育なさる勇気のない人は、グループで私を、苛めて下さい。又、御夫婦で、私を責めて下さっても結構です。

(神戸・奴隷志願者、妹尾孝一)

### 増田みゆき双胎八力月腹

八力月妊孕腹鑑賞

大手札四枚一組 略号(ほち) 五〇〇円

懐胎八力月の大写真

大手札四枚一組 略号(ほり) 五〇〇円

受胎女腹の妊娠線

大手札四枚一組 略号(ほめ) 五〇〇円

妊婦の乳房と腹部

大手札四枚一組 略号(ほる) 五〇〇円

後手縛りの妊孕婦

大手札四枚一組 略号(ほか) 五〇〇円

八力月の菱縄縛り

大手札四枚一組 略号(ほわ) 五〇〇円

妊婦の猿轡と緊縛

大手札四枚一組 略号(ほよ) 五〇〇円

岩田帯をする妊婦

大手札四枚一組 略号(ほた) 五〇〇円

懐妊の生態を探る

大手札四枚一組 略号(ほれ) 五〇〇円

### 全裸の妊婦鑑賞

大手札四枚一組 略号(ほそ) 五〇〇円

股間縛に喘ぐ妊婦

大手札四枚一組 略号(ほつ) 五〇〇円

八力月腹を誇張す

大手札四枚一組 略号(ほろ) 五〇〇円

便々たる初産婦腹

大手札四枚一組 略号(ほま) 五〇〇円

羞らしいの妊婦媚態

大手札四枚一組 略号(ほこ) 五〇〇円

初産妊婦開股縛り

大手札四枚一組 略号(ほえ) 五〇〇円

浣腸地獄の妊産婦

大手札四枚一組 略号(ほな) 五〇〇円

増田みゆき

### 増田みゆき双胎七力月腹

膨隆七力月腹鑑賞

大手札五枚一組 略号(にひ) 六〇〇円

七力月腹の妊娠線

大手札五枚一組 略号(にほ) 六〇〇円

### 豊かな乳房と腹部

大手札四枚一組 略号(にま) 五〇〇円

後手縛りの妊婦

大手札四枚一組 略号(にさ) 五〇〇円

全裸身妊娠腹鑑賞

大手札二枚一組 略号(にえ) 三〇〇円

首枷手枷の妊婦

大手札三枚一組 略号(にゆ) 四〇〇円

七力妊娠腹大写真

大手札四枚一組 略号(にめ) 五〇〇円

乳房強調菱縄縛り

大手札四枚一組 略号(にめ) 五〇〇円

膨満腹部強調縛り

大手札四枚一組 略号(にく) 五〇〇円

緊縛猿轡妊婦虐待

大手札五枚一組 略号(にけ) 六〇〇円

妊婦腹誇張しぱり

大手札四枚一組 略号(にき) 五〇〇円

動物的妊婦の生態

大手札四枚一組 略号(にな) 五〇〇円

毎日限らない御努力を続けて居られます編集部の皆様方に衷心より敬意を表します。小生事人生五十年の太刀に入った者ですが、肉体も精神も三十代の壮年を自負致

して居ります。読者通信は初めてですが奇クとのご縁は、昭和二十七年より十五年間毎月愛読して居り私の秘蔵書庫には百数十冊の奇クが整然と並んで居ります。定価九十円時代から一〇〇円時代を経て一四〇円の特別号時代のお素晴らしさ。そして教育亡者共の圧迫(?)から僅かな期間ながら悲しい休刊時代、復刊第一号は三十年十月号でした。白表紙時代も今は懐かしい思い出、又華やかな表紙になり、その後グラビヤや口絵の廃止、挿絵の削減等々、時代の変遷に伴い、幾度かの衣替えも——その根底を流れる風俗文藝誌としての自負が常に誌面に脈打っている事を心から嬉しく思っています。と同時に編集にたずさわる皆様方の御努力に頭が下がる思いです。これからの一層の御健闘を御祈り致します。貴重な文獻誌として奇クがいかに大切なものかは本誌の旧号が数百円出しても仲々入手出来ぬ由、私もいつか二十八年度発行の臨時増刊アリスの人生学校(定価一〇〇円)を、一〇〇〇円では非議ってくれと言われましたが、とんでもないとお断りました。又二十八年頃ありましたKK通信を古き良き時代の思い出

に今も時々出して懐かしく読んで居りますが、もうあの様な企画は出来ないものでしょうか、是非御一考を、お願い致します。諸而最近夫婦プレーが誌上を賑わして同好者として、私を大いに喜ばせて呉れて居ますが、私も十年来、妻を相手にプレーを楽しんで居ります。私の好むプレーは、緊縛を伴う乳房責め、吊し責め(特に逆吊り)Anus責めであります。写真も自分で現像から引伸までやって居りますが、妻が写真を他人に見せます事を極度に嫌がりますので同封出来ないのが残念です。浦和市の中野主弥さん、四月号の貴兄の通信を読みまして、こんな近い処に同好の志が居られたのかと意を強くすると共に御交際が出来たらとペンを採った次第です。貴兄も奥様の反応がなく残念との事、御同様私の妻もそうなのです。S気もM気もほとんど無い様で主人の命令だから仕方なく応じていると言った調子で、いくらこちらがハッスルしても反応が無くいつも一人角力です。どうも私の飼育法が間違っていた様ですがもう遅い様ですが貴兄は着々成功に向って居られます御様子、御同慶に堪えません。大いに頑張って夫婦共々楽

しめるプレーに御精進下さい。浦和と川口なれば隣同志、その気ならいつでも御会い出来ます。御差支えなかったら、御交際を御願致します。同好者として何かと今後のプレーに役立つ事も多からうと思ひますれば、是非一度御手紙でも下さい。(住所は編集部御問合せ下さい)では皆様方の御多幸を祈ります。(川口・沼尻生)

しばらく御無沙汰しておりました。前川様がすばらしいナマクビ絵を書かれた上、私の如きものの作品にまで、腕をふるっていただき有難うございます。女斗彦様、そんなに喜んでいただき感謝の至り。時々、仙台にこられるのと。私も仕事もちのため自由がききませんが、何とかお会いしたいものです。仕事と云えば、ようやく一段落しました。昨年まで書きためておいたものが、幸い次々と採用になっていきましたが、酷連物語は現在第一作女斗篇以外、殆ど材料がなく当分延期です。そのかわり木曾義仲の女軍や、会津の娘子軍をモデルに何かものにす予定。採用のアカツキはお笑ひください。今さら新年の挨拶でもありませんが、今年は生首マニヤ

木村洋子強烈緊縛写真	奴隸捨札開股縛り	菱縄強烈開股縛り	竹柱立縛り晒し者	柱宙縛り苦痛表情	猿轡股間縛り歩き
大手札三枚一組 四〇〇円 木村 洋子 略号△きむV	大手札三枚一組 四〇〇円 木村 洋子 略号△きむV	大手札三枚一組 四〇〇円 木村 洋子 略号△きむV	大手札三枚一組 四〇〇円 木村 洋子 略号△きむV	大手札三枚一組 四〇〇円 木村 洋子 略号△きむV	大手札三枚一組 四〇〇円 木村 洋子 略号△きむV

にとつて最良の年でありますように祈ります。(黒田寿)

神崎文子様。私はK誌の古くからのファンの一人として、先月号に寄せられた貴女の通信を拝見致しました。貴女は中学校を卒業して大阪に出、職場を二、三変られて、現在、飲屋で働いて居るとの事、少々苦勞なさった様子が、う



かがえます。でも今の貴女は飲屋で陽気に明るく働いて居る御様子で、なによりと思います。所でそんな明るい貴女が通信文の中で、自分は魅力に乏しく化粧も下手だと、書いておられるのは、あまりカンシンした事じゃないと思います。人間は皆平等に神より与えられた生命と肉体を有し、その肉体や容姿の美醜と言うものは、それぞれの人の心の中で、はぐくみ育てられて行くものであって外面的に、いくら磨き飾られて居ても、その人の心が、汚れたものであれば、その作られた美しさは、明るい太陽の下では輝きを失なってしまうものなのです。むしろ心清く美しい人であれば、たとえ身にまとう衣が何であろうと、魅力乏しい器量であろうとも、暗夜に光り輝く星の如く、巧まざる女の美しさや魅力が、そなわって来るもので、明るく自信を持つ事こそ大切だと思えます。話にしても、相手によつては、舌の方が勝手に調子よく動いてくれて、思いもよらぬ快調な話方が出来るもので、かりに、調子づかずとも、そんな事は気にしないで良いのじゃないでしょうか？ さて、文子さん、貴女は、過去に他人から、いじめられ

たという精神的体験を味わった頃から、自分のマゾ性を自覚された由、同じ、SMに願望を寄せる私達も何かのきっかけで自分の性向を知るものです。そうして、そのような性向は他人に、ぜったい知られまいと極力隠したがるのが、普通一般人の人情と言うものでは、ないでしょうか。K誌と言う雑誌は、そんな悩みを持つ人達にとっては、オーバーか知りませんが、天の福音みたいな気がするのには、あながち私だけでは、ないでしょう。こうして先月号にて文子さんの通信文に接し、同じ大阪に居住する一人の縛りマニヤとして読者通信を通じて話が出来、又貴女の望みと私の願望とが、共通の時点で、交わる事が可能となれば、このK誌が福音であると言う一つの事実が証明されるのであります。如何がでしょう、文子さん。貴女は、宜しくこの事です、私の方からこそ、御願ひしたいと思ひます。そうして貴女も私も日頃思ひ悩むSMの願望を健康的に解消させようではありませんか。其の折に、貴女の希望なり私の話など語り合つて、おたがいが理解したる上、SMプレイを心ゆく迄楽しもうと思ひます。ただし先に書きま

したように、このような性向は同じ悩みを持つ者だけの秘密である事は言うまでもありません。(申しおくれましたが私は結婚して妻も家庭もある三十六才の平凡なサラリーマンですが、私の性向は妻にも隠しております)所で貴女は何日にてもこの事です、私は会社務めの身、出来れば日曜日がよいと思ひますので、来る四月二日の日曜日、国鉄天王寺駅の阪和線改札口前の言伝板の所へ午前十時にぜひお越し下さい。私も必ず行きます。その折貴女は、サンデー毎日と白いハンケチを一緒に右手で持っていて下さい。私の方から声をかけます。では四月二日に貴女と御逢ひ出来るのをたのしみにペンを止めます。

(大阪・田中利一)

四月号秋根登志雄さんの「狭き門」誠に感服致しました。しかしもっと飼ひならして下さい。もうひよっとしたら私の想像して居る事も実行なさつて居るかも知れません。花と蛇についても言える事です。貴女が女子鶏の無い事です。世間一般の人は、或は経験が無いかも知れませんが、乳液・コールドクリーム等で充分間に合います。

秋根登志雄さん、未経験でしたら、一度試して下さい。立川令子さんの「浣腸実験要員誕生」も非常に面白く読ませて戴きました。只残念な事に施術者が同性であると言う事です、それも最初から異性にしますと、創作に成ってしまひますものね。案外同性で良かったのかも知れませんが、何んでしたら、私がとも思ひますが、教育の有りそうな、貴女にそれは無理と、自分の採集した浣腸器具の数々を、只ぼんやりと眺めて居ります。現在私は失業者の群の中に居りますが、路行くB・Gの立派なお尻を征服するにも金が無い悲しい立場です。(神戸・石井毛生)

私が奇クを読むようになったのは、浣腸というものを知つてから間もない頃でした。浣腸の不思議な、魅力の様なものにとりつかれて、自分でもその不思議なものが何であるか、まだハッキリと分らぬ気持でした。そんな頃本屋でフツと手にした奇クの中に「浣腸」という文字を、見た時のショックは、むしろ喜びにちかいものでした。何度となく浣腸のところを読み返えし、自分なりに浣腸場面を空想しては、その場面をへたな絵

## 次号(六月号)は、四月二十五日に発売します。

でかいてみたりしました。そのた  
びに私は何か新鮮なものを感じま  
した。こうして私の浣腸に対する  
関心は二十四才の今になるまで、  
深まっていく一方でした。しかし  
それも、一人で極く限られた場所  
でのものでした。それも浣腸とい  
うものを、まだ実際の社会的な生  
活の中で考えることが、出来なか  
ったからかもしれません。しかし  
奇クや又その他のマニア雑誌や浣  
腸について書かれた医学書などを  
読んでいる内に、浣腸というもの  
も、少しは理解できたように思ひ  
ます。しかし、理解していくにつ  
れ、時には自分の置かれていた立  
場を完全に忘れて、本来の人間の  
カラに返えりたく感ずるときもあ  
ります。全てを忘れて浣腸につい  
て自分の思っていることや、人の  
考えを話したり聞いたり、又プレ  
イを心ゆくまで、楽しむ事が出来  
たら、どんなに素晴らしい事でしょ  
う。女性の方の中にも浣腸に興味  
をお持ちの方がいらっしゃるのだ  
はないかと思ひます。奇クを読ん  
でるといろいろな女性が、いろい  
ろな浣腸についてのご意見を書か

れています。私はそういった浣腸  
に興味をお持ちの女性の方と文通  
や、又出来れば逢って、浣腸につ  
いて話し合い、プレイへと育てて  
行きたいと思っております。私は  
女性の浣腸に対してのデリケート  
な気持は分りません。女学生の浣  
腸マニアの貴女、OLの浣腸マニ  
アの貴女、そのほか浣腸に興味を  
お持ちの貴女と話したいと思ひ  
います。  
(東京都・塩谷博)

三月号の「花と蛇」を読んで、  
つくづく責められる女の哀れさ、  
悲しさを感じた。ぎりぎりの極限  
に追いこめられて、岩崎親分のい  
たふりを受ける、静子夫人の描写  
は、いつもの無理矢理に責めを加  
えられる情況とは、ちょっと異つ  
て、いわば自ら進んで責めを受け  
ざるを得ない情況の中で、出来る  
限り能動的に振る舞っているだけ  
に、その哀れさは一入深い。湯文  
字を大きく割って、親分の膝の上  
に跨って行く夫人の緊縛姿は、想  
像するだけでもゾツとするほど艶  
っぱいに違ひない。大体、縛られ  
て責められる女には、側々と迫る

哀愁が望ましい。私たちは夫婦で  
あるから、私と慶子との責め時間  
プレイには、どうしてもこの点で  
物足りない点のあることは否めな  
い。慶子が、一糸纏わない姿にな  
ることも、余韻のないという点で  
は、その通りだと思ひ、きびし  
い菱縄股間縛りも、何か余裕がな  
くて、哀愁を生む余地がないよう  
だが、夫婦としてのプレイとして  
は、こうなっていくのは仕方がな  
い。余韻を楽んだり、責めの哀愁  
を味あうより、知りつくした肉体  
の色々な部分に、様々な責め攻撃  
を加えて、改めてお互いの愛情を  
確かめ合うという要素の方が強い  
のは、夫婦であれば仕方がないと思  
う。責めというのは、お互いに嬉  
々として、行うというものではな  
い。何か知らず意志に反して、心  
も体にも抵抗を感じながら、行つ  
たり受けたりするものである。そ  
こにこそ、女体の哀れさや悲しさ  
が強調されて、ある種の美しさも  
生れて、来ようというものだ。私  
は「花と蛇」の上記の件りを讀ん  
で、慶子にも熟読するようにすす  
めた。彼女も感に堪えぬような顔  
で読んでいたが、恐らく彼女も私  
たちの慣れ合いのプレイには、こ  
んな哀愁が生れてくることのない

のに、気づいた風であった。そん  
な静子夫人のような肢態は、彼女  
も再三経験していることだが、情  
況がまるっきり違うのだから、情  
感的には全然異なっている。夫婦プ  
レイの限界であろうか。慣れ切つ  
た妻を緊縛して、責め拷問するこ  
との出来るのも、私にとっては、  
私だけが享受出来る特権として、  
十分に、味わいつくしているのだ  
が、時としては、慣れ切った情況  
から来る限界を感じるのである。  
時として何かもどかしさを感じて  
仕方がないのである。そんな時に  
讀んだので、この場合の静子夫人  
の責めの情況に、やるせない位の  
哀れさを覚えて、私たちのプレイ  
に欠けている魅力を発見したと思  
ひがしたのだ。然し、そうはいつ  
ても、情況は違うのだから、それで  
私たちのプレイの評価を変える訳  
にも行かない。私たちは私たちが  
なりに、踏み込んだこの道に徹する  
より仕方はない。慶子も納得した  
ようだ。「きょうは湯文字でもの  
けましようか」と笑っている彼女  
の顔は、もう何時ものように、私  
たちだけの楽しみを待ち受ける喜  
びに輝やいていた。(早木夢二)

大分春めいてまいりました。昨



今のような何かとやり難い時代にあつて、二十数年の刊行を続けられる箕田編集長の並々な御苦労、客員辻村氏の御努力に深く敬意を表すると共に益々の御隆昌を心からお喜び申し上げます。さて、小生二十何年間の愛読者であります。この間殆ど毎月の発行を待ち一喜一憂の時もありましたし、最も不運の白表紙の発行など本当に御苦労様でした。小生は黙々として千葉県の片隅より見守っていました。今、更に厳しき世相にあつて一層価値を高めた二百余冊の奇譚クラブは書棚の一番良い場所を占めて一貫せる営業と共に初心を

続けるの小生の頑固なまでの歴史であります。戦死した兄の残した妻子を引受けての二十年、この間には七才も上の妻との間にも何度かの危機がありました。奇譚クラブに依つて昇華せしめたことも何十回か？その故に女遊びもとうとうしないので済まし、或る人は不幸なりと謂いましたが、結局大切な青年時代を生真面目で通した信用は非常なものでありました。現在在仲は二十三才となり小生の片腕として作業を督励しております。そして日頃「親父は長い間苦労してくれたのだから、うんと遊んでくれ」と言うのです。これも貴誌

のお蔭と喜んでおります。箕田さんらの日頃の苦勞も、こんな小さな所に報ゆる場合もあるのだと感無量であります。そういえば辻村隆氏は写真に現われた範囲では随分年を取られたなあと、思い、成程自分も左様であつたかと改めて鏡を見直しました。（昔座談会に載った事があり、細面の苦み走った好い男であつたことを思い出しました）最近事業も順調で妾を持つでもない小生のこと、これからは写真でもコレクションしようかと思っております。

（千葉・伊豆昇）

貴誌を知り一年半程にしかたらない一安サラリーマンです。緊縛には興味をもって読ませて頂いています。小説は中々面白く告白体験もいろいろですが未だに一人の恋人もなく馬鹿みたいにつまらない男です。あまり女性と話したこともなく私自身SMの体験は全くなありませんが現在Mの女性を求めているのです。こんな男ですがSMを通して交際して頂ける近に住む女性の方のみの便りを待っています。小生二十九才。どこまで実行出来るか不安ながらペンを走らせました。（川崎市・T生）

## 本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少なものとありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送

申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

昭和38年12月号	(送共二七〇円)
昭和39年3月号	(送共二七〇円)
昭和39年6月号	(送共二七〇円)
昭和39年7月号	(送共三二〇円)
昭和39年8月号	(送共三二〇円)
昭和39年9月号	(送共三二〇円)
昭和39年10月号	(送共三二〇円)
昭和39年11月号	(送共三二〇円)

昭和39年12月号	(送共三二〇円)
昭和40年1月号	(送共三二〇円)
昭和40年2月号	(送共三二〇円)
昭和40年3月号	(送共三二〇円)
昭和40年4月号	(送共三二〇円)
昭和40年5月号	(送共三二〇円)
昭和40年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)
昭和41年1月号	(送共三二〇円)

昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)
昭和41年5月号	(送共三二〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇円)
昭和42年3月号	(送共三二〇円)
昭和42年4月号	(送共三二〇円)

# ◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語▽

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものでも自作に限ります。若し引用する部分がありますら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンにまとめて下さい。採用篇

には賞金二千円以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三ヶ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真を御希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

# ☆編集後記☆

○身体の不調のため好評の「水中花」を休んでいた芳野眉美氏が「男中」なる佳篇を寄せられた。珠玉の文章を味読されたい。  
○久しく筆を絶っていた夜乃探郎氏が「(秘)東京情報」なる力作でカムバック、未だ筆硯の衰えざるところを見せている。  
○お目当ての連載「花と蛇」は、今回は続篇第三十回記念ということで、平月の倍近い七十枚を頂いた。ファン某氏の進言により新展開の場面が出てきて一入興味が増えた。  
○異色のインテリ女性中河恵子嬢の告白「うごめく妖しい虫」新人稗蕩也氏の「妖紅記」と二つの懸賞入選作品を掲載した。懸賞告白の「陰花植物の雌蕊」と共に、今後は入選作

品を大幅に採用したいと考える。  
○山本一章氏のカメラ・ルポは、大塚啓子にスポットライトを当てて、新しい美の発見に成功している。氏の手腕を高く買いたい。  
○次々とハントして倦まない辻村隆氏は遠く津市まで遠征し佳人の取材に、その熱情を傾け溢れるロマンの記録を本号に残された。  
○詩情溢れる千草忠夫氏の「縄のある蜜月」文獻味豊かな斎藤夜居氏の「稿談性風俗資料入門戦後篇」と麒麟児久氏の「文代嬢夢魔」は読みごたえある真価を味って頂きたい。  
○辻村、山本両氏の対談は本誌ならではのザックパランな特集記事、山本一章氏の「痴人の糧」は本号で一応完結、次作を期待された。女相撲のベテラン海野三津男氏の才筆は文画に亘ってマニアを沸かせることと思う。

# ☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽  
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽  
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

五月号 【第二十一巻第五号】  
【通刊第二二七号】

昭和四十二年四月二十日 印刷  
昭和四十二年五月一日 発行

福集人  
発行人 箕田 京二  
印刷人 北村 俊夫  
大阪阿倍野郵便局私書函第十四号  
発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(国鉄大局特別取扱承認雑誌第一二二二号)

# ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうえ、充分に注意して編集いたしました。おりますが、本来成人向として発行を企図しておきながら、未成年の方には絶対販売下し上げます。特にくれぐれも、お願い申